

眞珠夫人

菊池寛

青空文庫

奇禍

一

汽車が大船を離れた頃から、信一郎の心は、段々烈はげしくなつて行く焦燥もどかしきで、満たされていた。国府津迄こうづまでの、まだ五つも六つもある駅毎ぎいに、汽車が小刻みに、停車せねばならぬことが、彼の心持を可なり、いら立たせていたのであつた。

彼は、一刻も早く静子に、会いたかつた。そして彼の愛撫あいぶに、渴かつえている彼女を、思うさま、いたわつてやりたかつた。

時は六月の初はじめであつた。汽車の線路に添うて、潮のように起伏している山や森の緑は、少年のような若々しさを失つて、むつとするようなあくどきで車窓に迫つて来ていた。たゞ、所々植付けられたばかりの早苗さなえが、軽いほのぼのとした緑を、初夏の風の下に、漂わせているのであつた。

常ならば、箱根から伊豆半島の温泉へ、志ざす人々で、一杯になつてゐる筈の二等室も、春と夏との間の、湯治には半端な時節であるのと、一週間ばかり雨が、降り続いた揚句である為^{ため}とで、それらしい乗客の影さえ見えなかつた。たゞ仏蘭西人らしい老年の夫婦が、一人息子らしい十五六の少年を連れて、車室の一隅を占めてゐるのが、信一郎の注意を、最初から惹^ひいてゐるだけである。彼は、若い男鹿の四肢のように、スラリと娜^{しなやか}な少年の姿を、飽かず眺めたり、父と母とに迷^{かた}みに話しかける簡単な会話に、耳を傾けたりしてゐた。此の一行の外には、洋服を着た会社員らしい二人連と、田舎娘とその母親らしい女連が、乗り合^こわしてゐるだけである。

が、あの湯治階級と云つたような、男も女も、大島の揃^{そろい}か何かを着て、金や白金や寶石の装身具を身体^{からだ}のあらゆる部分に、燦^{きらめ}かしてゐるような人達が、乗り合^こわしてゐないことは信一郎にとって結局氣楽だつた。彼等は、屹^{きつと}度声高に、喋^{しゃべ}り散らしたり、何かを食べ散らしたり、無作法に振舞つたりすることに依^よつて、現在以上に信一郎の心持をいらくさせたに違ひなかつたから。

日は、深く翳^{かげ}つてゐた。汽車の進むに従つて、隠見する相模灘はすくけた銀の如く、底光を帯^{おび}たまゝ、激^{よじ}んでゐた。先刻^{さつき}まで、見えてゐた天城山も、何時^{いつ}の間にか、灰色に塗り

隠されて了^{しま}つていた。相模灘を圧している水平線の腰の辺りには、雨をでも含んでいそうな、暗鬱^{あんうつ}な雲が低迷していた。もう、午後四時を廻っていた。

『静子が待ちあぐんでいるに違いない。』と思う毎に、汽車の廻転が殊^{ことさら}更遅くなるように思われた。信一郎は、いらいらしくなつて来る心を、じつと抑え付けて、湯河原の湯宿に、自分を待つてゐる若き愛妻の面影を、空^{くう}に描いて見た。何よりも先^まず、その石竹色に湿^{うる}んでいる頬に、微笑の先駆として浮かんで来る、笑靨^{えくぼ}が現われた。それに続いて、慎^{つづ}ましい脣^{くちびる}、高くないけれども穏やかな品のいゝ鼻。が、そんな目鼻立よりも、顔全体に現われている処女らしい含羞^{シャイネス}性、それを思い出す毎に、信一郎自身の表情が、たるんで来て、其^{そこ}処には居合わさぬ妻に対する愛撫の微笑が、何時の間にか、浮かんでいた。彼は、それを誰かに、気付かれはしないかと、恥しげに車内を見廻わした。が、例の仏蘭西の少年が、その時、

「お母親^{ママ}さん！」と声高に呼びかけた外には、乗合の人々は、銘々に何かを考えているらしかった。

汽車は、海近い松林の間を、轟^{ごうごう}々と駆け過ぎていたのであった。

二

湯の宿の欄干に身を^{もた}靠せて、自分を待ちあぐんでいる愛妻の面影が、汽車の車輪の廻転に連れて消えたりかつ浮かんだりした。それほど、信一郎は新しく婚した静子に、心も身も与えていたのである。

つい三月ほど前に、田舎で挙げた結婚式のことを考えても、上京の途^{みち}すがら奈良や京都に足を止めた蜜月^{ホネムーン}旅行らしい幾日かの事を考えても、彼は静子を獲^えたことが、どんなに幸福を意味しているかをしみ／＼と悟ることが出来た。

結婚の式場で示した彼女の、処女らしい羞^{はづか}しさと、浄^{きよ}らかさ、それに続いた同棲^{どうせい}生活に於^{おい}て、自分に投げて来た全身的な信頼、日が経^たつに連れて、埋もれていた宝玉のように、だん／＼現れて来る彼女のいろ／＼な美質、そうしたことを、取とめもなく考えていると、信一郎は一刻も早く、目的地に着いて初^{ういうい}々しい静子の透き通るようなく／＼顎^{あご}あたり^{あたり}、軽く撫^{パット}してやりたくて、仕様がなくなつて来た。

『僅^{わず}か一週間、離れていると、もうそんなに逢^あいたくて、堪^{たま}らないのか。』と自分自身心の中で、そう反問すると、信一郎は駄々っ子か何かのように、じれ切っている自分が気恥

しくないこともなかった。

が、新婚後、まだ幾日にもならない信一郎に取つては、僅わずか一週間ばかりの短い月日が、どんなにか長く、三月も四月もに相当するように思われた事だろう。静子が、急性肺炎の病後のために、医者から温泉行を、勧められた時にも、信一郎は自分の手許てもとから、妻を半日でも一日でも、手放して置くことが、不安な淋さびしい事のように思われて、仕方がなかった。それかと云いつて、結婚のため、半月以上も、勤先を欠勤している彼には休暇を貰もらう口実などは、何も残つていなかった。彼は止やむなく先週の日曜日に妻と女中とを、湯河原へ伴すうと、直すぐその日に東京へ歸つて来たのである。

今朝着いた手紙から見ると、もうスツカリ好よくなっているに違いない。明日の日曜に、自分と一緒に歸つてもいゝと、云い出すかも知れない。軽便鉄道の駅までは、迎えに来てゐるかも知れない。いや、静子は、そんなことに氣の利きく女じゃない。あれは、おとなしく慎しく待つてゐる女だ、屹きつと度、あの湯の新築の二階の欄干にもたれて、藤木川に懸かつてゐる木橋をじつと見詰めてゐるに違いない。そして、馬車や自動車が、あの橋板をとゞろかす毎ごとに、静子も自分が来たのではないかと、彼女の小さい胸を轟とどろかしているに違いない。信一郎の、こうした愛妻を中心とした、いろ／＼な想像は、重く垂下がつた夕方の雲を

劈くような、鋭い汽笛の声で破られた。窓から首を出して見ると、一帯の松林の樹の間から、国府津に特有な、あの凄味を帯びた真蒼な海が、暮れ方の光を暗く照り返していた。秋の末か何かのように、見渡すかぎり、陸や海は、蕭条たる色を帯びていた。が、信一郎は国府津だと知ると、蘇つたように、座席を蹴つて立ち上った。

三

汽車がプラットホームに、横付けになると、多くもなかった乗客は、我先きにと降りてしまった。此の駅が止まりである列車は、見る／＼裡に、洗われたように、虚しくなってしまうた。

が、停車場は少しも混雑しなかった。五十人ばかりの乗客が、改札口のところで、暫らく斑にたゆたった丈であった。

信一郎は、身支度をしていたために、誰よりも遅れて車室を出た。改札口を出て見ると、駅前の広場に湯本行きの電車が発車するばかりの氣勢を見せていた。が、その電車も、此の前の日曜の日の混雑とは丸切り違って、まだ腰をかける余地さえ残っていた。が、信一

郎はその電車を見たときにガタリガタリと停留場毎に止まる、のろ／＼した途中の事が、直ぐ頭に浮かんだ。その上、小田原で乗り換えるに行く手にはもっと難物が控えている。それは、右は山左は海の、狭い崖端を、蜈蚣か何かのようにのたくって行く軽便鉄道である。それを考えると、彼は電車に乗りうとした足を、思わず踏み止めた。湯河原まで、何うしても三時間かゝる。湯河原で降りてから、あの田舎道をガタ馬車で三十分、どうしても十時近くなってしまう。彼は汽車の中で感じたその十倍も二十倍も、いらいらしさが自分を待っているのだと思うと、何うしても電車に乗る勇気がなかった。彼は、少しも予期しなかった困難にでも逢ったように急に悄氣でしまった。丁度その時であった。つか／＼と彼を追いかけて来た大男があつた。

「もし／＼如何です。自動車にお召しになつては。」と、彼に呼びかけた。

見ると、その男は富士屋自動車と云う帽子を被つていた。信一郎は、急に援け舟にでも逢つたように救われたような氣持で、立ち止つた。が、彼は賃錢の上の掛引のことを考えたので、そうした感情を、顔へは少しも出さなかつた。

「そうだねえ。乗つてもいゝね。安ければ。」と彼は可なり余裕を以て、答えた。

「何処までいらつしやいます。」

「湯河原まで。」

「湯河原までじゃ、十五円で参りましょう。本当なれば、もう少し頂くのでございますけれども、此方こつちからお勧めするのですから。」

十五円と云う金額を聞くと、信一郎は自動車に乘ろうと云う心持を、スツカリ無くしてしまつた。と云つて、彼は貧しくはなかつた。一昨年法科を出て、三菱みつびしへ入つてから、今まで相当な給料を貰もらつてゐる。その上、郷国くににある財産からの収入を合わすれば、月額五百円近い収入を持つてゐる。が十五円と云う金額を、湯河原へ行く時間を、わずか二三時間縮める為に払うことは余りに贅ぜいたく沢過ぎた。たとい愛妻の静子が、いかに待ちあぐんでゐるにしても。

「まあ、よそう。電車で行けば訳はないのだから。」と、彼は心の裡で考えてゐる事とは、全く反対な理由を云いながら、洋服を着た大男を振り捨て、電車に乘ろうとした。が、大男は執念しゅうねんく彼を放さなかつた。

「まあ、一寸ちよつとお待ちなさい。御相談があります。実は、熱海あたみまで行こうと云う方があるのですが、その方と合あひのり乗して下さつたら、如何でしょう、それならば大変格安になるのです。それならば、七円丈だけ出して下されば。」

信一郎の心は可なり動かされた。彼は、電車の踏み段の棒にやろうとした手を、引つ込めながら云った。「一体、そのお客とはどんな人なのだい？」

四

洋服を着た大男は、信一郎と同乗すべき客を、迎えて来る為ために、駅の真向いにある待合所の方へ行つた。

信一郎は、大男の後姿を見ながら思つた。どうせ、旅行中のことだから、どんな人間との合乗でもたかが三四十分の辛抱だから、介意かまわないが、それでも感じのいゝ、道伴みちづれであつて呉くれゝばいゝと思つた。傲然ごうぜんとふんぞり返るような、成金風の湯治階級の男なぞであつたら、堪たまらないと思つた。彼はでつぷりと肥ふとつた男が、実印を刻んだ金指環ゆびわをでも、光らせながら、大男に連れられて、やつて来るのではないかしらと思つた。それとも、意外に美しい女か何かじゃないかしらと思つた。が、まさか相当な位置の婦人が、合乗を承諾することもあるまいと、思い返した。

彼は一寸ちよつとした好奇心を唆そそられながら、暫しばらくの伴侶はんりよたるべき人の出て来るのを、待

つていた。

三分ばかり待った後だったろう。やっと、交渉が纏つたと見え、大男はニコ／＼笑いながら、先きに立つて待合所から立ち現れた。その刹那に、信一郎は大男の肩越に、チラリと角帽を被つた学生姿を見たのである。彼は同乗者が学生であることを欣んだ。殊に、自分の母校——と云う程の親しみは持っていなかったが——の学生であることを欣んだ。

「お待ちせしました。此の方です。」

そう云いながら、大男は学生を、信一郎に紹介した。

「御迷惑でしょうが。」と、信一郎は快活に、挨拶した。学生は頭を下げた。が、何にも物は云わなかった。信一郎は、学生の顔を、一目見て、その高貴な容貌に打たれざるを得なかった。恐らく貴族か、でなければ名門の子弟なのだろう。品のよい鼻と、黒く澄み渡った眸とが、争われない生れのけ高さを示していた。殊に、け高く人懐きそうな眸が、此の青年を見る人に、いゝ感じを与えずにはいなかった。クレイヴネットの外套を着て、一寸した手提鞆を持った姿は、又なく瀟洒に打ち上つて見えた。

「それで貴君様の方を、湯河原のお宿までお送りして、それから引き返して熱海へ行くことに、此方の御承諾を得ましたから。」と、大男は信一郎に云った。

「そうですか。それは大変御迷惑ですな。」と、信一郎は改めて学生に挨拶した。やがて、二人は大男の指し示す自動車上の人となった。信一郎は左側に、学生は右側に席を占めた。「湯河原までは、四十分、熱海までは、五十分で参りますから。」と、大男が云った。

運転手の手は、ハンドルにかゝった。信一郎と学生とを、乗せた自動車は、今発車したばかりの電車を追いかけるように、^{すさま}凄じい爆音を立てたかと思うと、まっしぐらに国府津の町を疾駆した。

信一郎は、もう四十分の後には、愛妻の許^{もと}に行けるかと思うと、汽車中で感じた焦燥^{もどか}しさや、いらだたしさは、後なく晴れてしまった。自動車の軽動^{ジャン}に連れて身体^{からだ}が躍るように、心も軽く楽しい期待に躍った。が、信一郎の同乗者たるかの青年は、自動車に乗っているような意識は、少しもないように身を縮めて一隅に寄せたまゝ、その秀^{ひい}でた眉^{まゆ}を心持ひそめて、何かに思い耽^{ふけ}つているようだった。車窓に移り変る情景にさえ、一瞥^{いちべつ}をも与えようとはしなかった。

五

小田原の街に、入る迄、二人は黙々として相並んでいた。信一郎は、心の中では、此青年に一種の親しみをさえ感じていたので、何うにかして、話しかけたいと思っていたが、深い憂愁にでも、囚^{とら}われているらしい青年の容子^{ようす}は、信一郎にそうした機会をさえ与えなかつた。

殆ど^{ほとん}、一尺にも足りない距離で見る青年の顔付は、愈々^{いよいよ}そのけ高さを加えているようであつた。が、その顔は何うした原因であるかは知らないが、蒼白^{そうはく}な血色を帯びている。二つの眸^{ひとみ}は、何かの悲しみのため力なく湿^{うる}んでいるようにさえ思われた。

信一郎はなるべく相手の心持を擾^{みだ}すまいと思つた。が、一方から考えると、同じ、自動車に二人切りで乗り合^あわしている以上、黙つたまゝ相對していることは、何だか窮屈で、かつは不自然であるようにも思われた。

「失礼ですが、今の汽車で来られたのですか。」

と、信一郎は漸^{ようや}く口を切つた。会話のための会話として、判^{わか}り切つたことを尋ねて見たのである。

「いや、此の前の上りで来たのです。」と、青年の答えは、少し意外だった。

「じゃ、東京からいらつしたんじゃないんですか。」

「そうです。三保の方へ行っていたのです。」

話しかけて見ると、青年は割合ハキ／＼と、然し事務的な受け答をした。

「三保と云えば、三保の松原ですか。」

「そうです。彼処に一週間ばかりいましたが、飽きましたから。」

「やっぱり、御保養ですか。」

「いや保養と云う訳ではありませんが、どうも頭がわるくつて。」と云いながら、青年の表情は暗い陰鬱な調子を帯びていた。

「神経衰弱ですか。」

「いやそれでもありません。」そう云いながら、青年は力無さそうに口を緘んだ。簡単に言葉では、現わされない原因が、存在することを暗示するかのように。

「学校の方は、ズーツとお休みですね。」

「そうです、もう一月ばかり。」

「尤も文科じや出席してもしなくつても、同じでしょうから。」と、信一郎は、先刻青年の襟に、しと云う字を見たことを思い出しながら云った。

青年は、立入つて、いろ／＼訊かれることに、一寸不快を感じたのであろう、又黙り

込もうとしたが、法科を出たものの、少年時代からずっと文芸の方に親しんで来た信一郎は、此の青年とそうした方面の話をも、して見たいと思った。

「失礼ですが、高等学校は。」暫らくして、信一郎はまたこう口を切った。

「東京です。」青年は振り向きもしないで答えた。

「じゃ私と同じですが、お顔に少しも見覚えがないようですが、何年にお出になりました。」

青年の心に、急に信一郎に対する一脈の親しみが湧いたようであつた。華やかな青春の時代を、同じ向^{むこう}陵^{がおか}の寄宿寮に過ごした者のみが、感じ合う特殊の親しみが、青年の心を湿^{うる}おしたようであつた。

「そうですか、それは失礼しました。僕は一昨年高等学校を出ました。貴君^{あなた}は。」

青年は初めて微笑を洩^{もら}した。淋^{さび}しい微笑だったけれども微笑には違いなかった。

「じゃ、高等学校は丁度僕と入れ換わりです。お顔を覚えていないのも無理はありません。

。」そう云いながら、信一郎はポケットから紙入を出して、名刺を相手に手交した。

「あゝ渥美^{あつみ}さんと仰^{おつ}しやいますか。僕は生^{あいに}憎名刺を持っています。青木淳^{じゅん}と云います。

。」と、云いながら青年は信一郎の名刺をじつと見詰めた。

六

名乗り合つてからの二人は、前の二人とは別人同士であるような親しみを、お互に感じ合つていた。

青年は羞^{はにか}み家であるが、その癖人一倍、人懐^{ひとなつこ}い性格を持つているらしかった。単なる同乗者であつた信一郎には、冷めたい横顔を見せていたのが、一旦^{いったん}同じ学校の出身であると知ると、直^すぐ先輩に対する親しみて、懐^{なつ}いて来るような初心^{うぶ}な優しい性格を、持つてゐるらしかった。

「五月の十日に、東京を出て、もう一月ばかり、当^{あて}もなく宿^{とま}り歩いてゐるのですが、何処^{どこ}へ行つても落着かないのです。」と、青年は訴えるような口調で云つた。

信一郎は、青年のそうした心の動揺が、屹^{きつと}度青年時代に有^{ありが}勝^ちな、人生観の上の疑惑か、でなければ恋の悶^{もた}えか何かであるに違いないと思つた。が、何^どう云つて、それに答えてよいか分らなかつた。

「一層^{いっそう}のこと、東京へお帰りになつたら何^どうでしょう。僕なども精神上の動揺のため、海

へなり山へなり安息を求めて、旅をしたことも度々ありますが、一人になると、却^{かえ}つて孤独から来る淋^{さび}しさ迄^{まで}が加わつて、愈^{いよ}堪^いえられなくなつて、又都会へ追い返されたものです。僕の考えでは、何かを紛^{まぎ}らすには、東京生活の混乱と騷^{そう}擾^{じょう}とが、何よりの薬ではないかと思うのです。」と、信一郎は自分の過去の二三の経験を思い浮べながらそう云つた。

「が、僕の場合は少し違うのです。東京にすることが何うにも堪^たまないのです。当分東京へ帰る勇氣は、トテもありません。」

青年は、又黙つてしまつた。心の中の何処かに、可なり大きい傷を受けているらしい青年の容子は信一郎の眼にもいたましく見えた。

自動車は、もうとつくに小田原を離れていた。氣が付いて見ると、暮れかゝる太平洋の波が、白く砕けている高い崖^{がけ}の上を軽便鉄道の線路に添うて、疾駆しているのであつた。

道は、可なり狭かつた。右手には、青葉の層々と茂つた山が、往來を圧するように迫つていた。左は、急な傾斜を作つて、直ぐ真下には、海が見えていた。崖^{こうば}がやゝ滑かな勾配^{こうばい}になつてゐる所は蜜柑畑^{みかん}になつていた。しら／＼と咲いてゐる蜜柑の花から湧^わく、

高い匂^{におい}が、自動車の疾駆するまゝに、車上の人の面^{おもて}を打つた。

「日暮^{あたま}までに、熱海に着くといふですな。」と、信一郎は暫^{しば}らくしてから、沈黙を破つた。

「いや、若し遅くなれば、僕も湯河原で一泊しようと思います。熱海へ行かなければならぬと云う訳もないのですから。」

「それじゃ、是非湯河原へお泊りなさい。折角お知己になったのですから、ゆっくりお話ししたいと思います。」

「貴方は永く御滞在ですか。」と、青年が訊いた。

「いゝえ、実は妻が行っているのを迎えに行くのです。」と、信一郎は答えた。

「奥さんが！」そう云った青年の顔は、何故だか、一寸淋しそうに見えた。青年は又黙つてしまつた。

自動車は、風を捲いて走つた。可なり危険な道路ではあつたけれども、日に幾回となく往返しているらしい運転手は、東京の大路を走るよりも、邪魔物のないのを、結句氣楽そうに、奔放自在にハンドルを廻した。その大胆な操縦が、信一郎達をして、時々ハツと息を吞ませることさえあつた。

「軽便かしら。」と、青年が独語のように云つた。いかにも、自動車の爆音にもまぎれない轟々と云う響が、山と海とに反響して、段々近づいて来るのであつた。

七

轟々とどろく軽便鉄道の汽車の音は、段々近づいて来た。自動車がある山鼻を廻ると、眼の前にもう真黒な車体が、見えていた。絶えず吐く黒い煙と、喘いでいるような恰あえつこう好とは、何かのろ臭い生き物のような感じを、見る人に与えた。信一郎の乗っている自動車うさぎの運転手は、此この時代遅れの交通機関を見ると、丁度お伽とぎばなし噺はなしの中で、亀かめに對した兔うさぎのように、いかにも相手を馬鹿ばかにし切ったような態度を示した。彼は擦れ違うために、少しでも速力を加減することを、肯がえんじなかつた。彼は速力を少しも緩めないで、軽便の軌道と、右側の崖がいへき壁の間とを、すばやく通り抜けようと、ハンドルを廻しかけたが、それは、彼として、明かな違算であつた。其処そこは道幅が、殊ことさら更狭くなっているために、軽便の軌道は、山の崖近く敷かれてあつて、軌道と岩壁との間には、車体を容いれる間隔は存在あしていないのだった。運転手が、此の事に気が付いた時、汽車は三間と離れない間近に迫つていた。

「馬鹿！ 危い！ 気を付けろ！」と、汽車の機関士の烈はげしい罵声ののしりが、狼狽ろうばいした運転手の耳じ朵だを打った。彼は周章あわてた。が、追さすが、追さに間髪を容れない瞬間に、ハンドルを反對に急転

した。自動車は辛く衝突を免れて、道の左へ外れた。信一郎はホツとした。が、それはまたゝく暇もない瞬間だった。左へ躲かわした自動車は、躲し方が余りに急であつた為ため、機はすみを打つてそのまゝ、左手の岩崖を墜落しそうな勢いを示した。道の左には、半間ばかりの熊く笹まざさが繁しげつていて、その端はずれからは十丈に近い断崖だんがが、海へ急な角度を成していた。

最初の危機には、冷静であつた運転手も、第二の危険には度を失ってしまった。彼は、狂人のように意味のない言葉を発したかと思うと、運転手台で身をもがいた。が、運転手の死物狂いの努力は間に合つた。三人の生命を託した車台は、急廻転をして、海へ陥おちるところから免れた。が、その反動で五間ばかり走つたかと思うと、今度は右手の山の岩壁に、凄すさましくぶつ突つかつたのである。

信一郎は、恐ろしい音を耳にした。それと同時に、烈しい力で、狭い車内を、二三回左右に叩たたき付けられた。眼が眩くらんだ。しばらくは、たゞ嵐あらしのような混沌こんとんたる意識の外、何も存在しなかつた。

信一郎が、漸ようやく気が付いた時、彼は狭い車内で、海老えびのように折り曲げられて、一方へ叩き付けられている自分を見出みだした。彼はやつと身を起した。頭から胸のあたりを、ボンヤリ撫なで廻まわした彼は自分が少しも、傷付いていないのを知ると、まだフラ／＼する眼を

定めて、自分の横にいる筈の、青年の姿を見ようとした。

青年の身体は、直ぐ其処にあつた。が、彼の上半身は、半分開かれた扉から、外へはみ出しているのであつた。

「もしく、君！ 君！」と、信一郎は青年を車内に引き入れようとした。その時に、彼は異様な苦悶の声を耳にしたのである。信一郎は水を浴びたように、ゾツとした。

「君！ 君！」彼は、必死に呼んだ。が、青年は何とも答えなかつた。たゞ、人の心を掻きむしるような低いうめき声が続いている丈であつた。

信一郎は、懸命の力で、青年を車内に抱き入れた。見ると、彼の美しい顔の半面は、薄気味の悪い紫赤色を呈している。それよりも、信一郎の心を、脅やかしたものは、唇の右の端から、顎にかけて流れる一筋の血であつた。而もその血は、唇から出る血とは違つて、内臓から迸つたに違いない赤黒い血であつた。

返すべき時計

一

信一郎が、青年の身体をやつと車内に引き入れたとき、運転手席から路上へ、投げ出されていた運転手は、漸く身を起した。額の所へ擦り傷の出来た彼の顔色は、凡ての血の色を無くしていた。彼はオズ／＼車内をのぞき込んだ。

「何処もお負傷はありませんか。お負傷はありませんか。」

「馬鹿！ 負傷どころじゃない。大変だぞ。」と、信一郎は怒鳴りつけずにはいられなかった。彼は運転手の放胆な操縦が、此の惨禍の主なる原因であることを、信じたからであつた。

「はつはつ。」と運転手は恐れ入つたような声を出しながら、窓にかけている両手をブル／＼顫わせていた。

「君！ 君！ 気を確にしたまえ。」

信一郎は懸命な声で青年の意識を呼び返そうとした。が、彼は低い、ともすれば、絶えはてそうなうめき声を続けている丈であつた。

口から流れている血の筋は、何時の間にか、段々太くなっていた。右の頬が見る間に脹

れふくらんで来るのだった。信一郎は、ボンヤリつつ立っている運転手を、再び叱り付けた。

「おい！ 早く小田原へ引返すのだ。全速力で、早く手当をしないと助からないのだぞ。」
運転手は、夢から醒めたように、運転手席に着いた。が、発動機の壊れている上に、前方の車軸までが曲っているらしい自動車は、一寸だつて動かなかつた。

「駄目です。とても動きません。」と、運転手は罪を待つ人のように顫え声で云った。

「じゃ、一番近くの医者を呼んで来るのだ。真鶴なら、遠くはないだろう。医者と、そうだ、警察とへ届けて来るのだ。又小田原へ電話が通ずるのなら、直ぐ自動車を寄越すように頼むのだ。」

運転手は、気の抜けた人間のように、命ぜらるゝ儘に、フラ／＼と駈け出した。

青年の苦悶は、続いている。半眼に開いている眼は、上ずった白眼を見せているだけであるが、信一郎は、たゞ青年の上半身を抱き起しているだけで、何うにも手の付けようがなかつた。もう、臨終に間もないかも知れない青年の顔かたちを、たゞ茫然と見詰めているだけであつた。

信一郎は青年の奇禍を傷むのと同時に、あわよく免れた自身の幸福を、欣ばずにはいら

れなかった。それにしても、何うして扉が、開いたのだらう。其処から身体が出たのだらう。上半身が、半分出たために、衝突の時に、扉と車体との間で、強く胸部を押し潰されたのに違いなかった。

信一郎は、ふと思いついた。最初、車台が海に面する断崖へ、顛落しようとしたとき、青年は車から飛び降りるべく、咄嗟に右の窓を開けたに違いなかった。もし、そうだとすると、車体が最初怖れられたように、海中に墜落したとすれば、死ぬ者は信一郎と運転手とで、助かる者は此青年であつたかも知れなかった。

車体が、急転したとき、信一郎と青年の運命も咄嗟に転換したのだった。自動車の苟めの合乗に青年と信一郎とは、恐ろしい生死の活劇に好運悪運の両極に立ったわけだった。信一郎は、そう考えると、結果の上からは、自分が助かるための犠牲になったような、青年のいたましい姿を、一層あわれまずにはいられなかった。

彼は、ふとウイスキーの小壘がトランクの中にあることを思い出した。それを、飲まずことが、こうした重傷者に何う云う結果を及ぼすかは、ハッキリと判らなかつた。が、彼としては此の場合に為し得る唯一の手当であつた。彼は青年の頭を座席の上に、ソツと下すとトランクを開けて、ウイスキーの壘を取り出した。

二

口中に注ぎ込まれた数滴のウイスキーが、利いたのか、それとも偶然そうだったのか、青年の白く湿^{うる}んでいた眸^{ひとみ}が、だん／＼意識の光を帯び始めた。それと共に、意味のなかつたうめき声が切れ切れではあるが、言葉の形を採り始めた。

「氣を確^{たしか}にしたまえ！ 氣を！ 君！ 君！ 青木君！」信一郎は、力一杯に今覺えたばかりの青年の名を呼び続けた。

青年は、じつと眸を凝^{こら}すようであつた。劇^{はげ}しい苦痛の爲^{ため}に、ともすれば飛び散りそうになる意識を懸命に取り蒐^{あつ}めようとするようだった。彼は、じいっと、信一郎の顔を、見詰めた。やつと自分を襲^{わさ}つた禍^{わざわい}の前後を思い出したようであつた。

「何うです。氣が付きましたか。青木君！ 氣を確にしたまえ！ 直^すぐ医者が来るから。」青年は意識が帰つて来ると、此^この苟^{かり}の旅^{そめ}の道^{みち}連^{づれ}の親切を、しみ／＼と感じたのだらう。

「あり——ありがとう。」と、苦しそうに云いながら、感謝の微笑^{たた}を湛^たえようとしたが、

それは劃なく襲うて来る苦痛の為に、跡なく崩れてしまった。腸をよじるような、苦悶の聲が、続いた。

「少しの辛抱です。直ぐ医者が来ます。」

信一郎は、相手の苦悶のいたくしきに、狼狽しながら答えた。

青年は、それに答えようとでもするように、身体を心持起しかけた。その途端だった。苦しうに咳き込んだかと思うと、顎から洋服の胸へかけて、流れるような多量の血を吐いた。それと同時に、今迄充血していた顔が、サツと蒼ざめてしまった。

青年の顔には、既に死相が読まれた。内臓が、外部からの劇しい衝動の為に、内出血をしたことが余りに明かだった。

医学の心得の少しもない信一郎にも、もう青年の死が、単に時の問題であることが分かった。青年の顔に血色がなかった如く、信一郎の面にも、血の色がなかった。彼は、彼と偶然知己になって、直ぐ死に去って行く、ホンの瞬間の友達の運命を、じつと見詰めている外はなかった。

太平洋を圧している、密雲に閉ざされたまゝ、日は落ちてしまった。夕闇の迫っている崖端の道には、人の影さえ見えなかった。瀕死の負傷者を見守る信一郎は、ヒシ／＼

と、身に迫る物凄^{ものすこ}い寂寥^{せきりよう}を感じた。負傷者のうめき声の絶間には、崖下の岩を洗う浪^{なみ}の音が淋^{さび}しく聞えて来た。

吐血をしたまゝ、仰向けに倒れていた青年は、ふと頭を擡^{もた}げて何かを求めるような容子^{ようす}をした。

「何です！ 何です！」信一郎は、掩^{おお}いかぶさるようにして訊^きいた。

「僕の——僕の——鞆^{トラシク}！」

口中の血に咽^むせるのであろう、青年は喘^{あえ}ぎ喘^{あえ}ぎ絶え入るような声で云った。信一郎は、車中を見廻した。青年が、携^{たずさ}えていた旅行用の小形の鞆^{トラシク}は座席の下に横倒しになっているのだった。信一郎は、それを取り上げてやった。青年は、それを受け取ろうとして、両手を出そうとしたが、彼の手はもう彼の思うようには、動きそうにもなかった。

「一体、此の鞆^{トラシク}を何うするのです。」

青年は、何か答えようとして、口を動かした。が、言葉の代りに出たものは、先刻^{さつき}の吐血の名残りらしい少量の血であつた。

「開けるのですか。開けるのですか。」

青年は肯^{うなず}こうとした。が、それも肯^{うなず}こうとする意志だけを示したのに、過ぎなかった。

信一郎は鞆トラנקを開けにかゝった。が、それには鍵かぎがかゝっていると見え、容易には開かなかった。が、此場合瀕死の重傷者に、鍵あきの在処あきを尋ねるなどは、余りに心ないことだった。信一郎は、満身の力を振って、捻ねじ開けた。金物に付いて、革がベリ／＼と、二三寸引き裂かれた。

三

「何を出すのです。何を出すのです。」

信一郎は、薬品をでも、取り出すのであらうと思つて訊きいた。が、青年の答は意外だった。

「雑記帳ノートブックを。」青年の声は、かすかに咽喉のどを洩もれると、云う程度に過ぎなかった。

「ノート？」信一郎は、不審いぶかりながら、鞆トラנקを搔かき廻した。いかにも鞆トラנקの底に、三帖綴じょうずりの大學ノートを入れてあるのを見出みいだした。

青年は、眼うなずで肯うなずいた。彼は手を出して、それを取った。彼は、それを破ろうとするらしかった。が、彼の手は、たゞノートの表紙を滑べり廻だける丈で、一枚の紙さえ破れなかった。

「捨てゝ——捨てゝ下さい！ 海へ、海へ。」

彼は、懸命に苦しげな声を、振りしぼった。そして、哀願的な眸で、じいっと、信一郎を見詰めた。

信一郎は、大きく肯いた。

「承知しました。何か、外に用がありませんか。」

信一郎は、大声で、而も可^{しか}なりの感激を以て、青年の耳^{みみもと}許で叫んだ。本当は、何か遺^{いじん}言はありませんかと、云いたい所であつた。が、そう云い出すことは、此^このうら若い負傷者^{いじん}に取つて、余りに氣の毒に思われた。が、そう云つてもよいほど青年の呼吸は、迫つていた。

信一郎の言葉が、青年に通じたのだらう。彼は、それに応ずるように、右の手首を、高く差し上げようとするらしかつた。信一郎は、不思議に思いながら、差し上げようとする右の手首に手を触れて見た。其^{そこ}処に、冷めたく堅い何かを感じたのである。夕暮の光に透^{すか}して見ると、青年は腕時計をはめていたのであつた。

「時計ですか。此時計を何^どうするのです。」

烈^{はげ}しい苦痛に、歪^{ゆが}んでいる青年の面に、又別な苦悶^{くもん}が現われていた。それは肉体的な苦

悶とは、又別な——肉体の苦痛にも劣らないほどの——心の、魂の苦痛であるらしかった。彼の蒼白まつさおだった面は微弱ながら、俄にわかに興奮の色を示したようであった。

「時計を——時計を——返して下さい。」

「誰にです、誰にです。」信一郎も、懸命になつて訊き返した。

「お願い——お願い——お願いです。返して下さい。返して下さい。」

もう、断末魔らしい苦悶の裡うちに、青年は此世に於おける、最後の力を振りしぼつて叫んだ。

「一体、誰にです？ 誰にです。」

信一郎は縋すがり付くように、訊いた。が、青年の意識は、再び彼を離れようとしているらしかった。たゞ、低い切れ切れのうなり声が、それに答えただけだった。信一郎は、今此の答えを得て置おかなければ永劫えいこに得られないことを知った。

「時計を誰に返すのです。誰に返すのです。」

青年の四肢が、ピクリ／＼と痙攣けいれんし始めた。もう、死期の目もくし 睫しょうの間に迫っていることが判わかつた。

「時計を誰に返すのです。青木君！ 青木君！ しっかりし給たまえ。誰に返すのです。」
死の苦しみに、青年は身体からだを、左右にもだえた。信一郎の言葉は、もう瀕死ひんしの耳に通じ

ないように見えた。

「時計を誰に返すのです。名前を云つて下さい。名前を云つて下さい。名前を！」

信一郎の声も、狂人のように上ずつてしまった。その時に、青年の口が、何かを云おうとして、モグ／＼と動いた。

「青木君、誰に返すのです？」

永久に、消え去ろうとする青年の意識が、ホンの瞬間、此世に呼び返されたのか。それとも死際しにぎわの無意味な囁語うわごとであつたのだろうか。青年は、

「瑠璃子！　瑠璃子！」と、子供の片言のように、口走ると、それを世に残した最後の言葉として、劇しい痙攣が来たかと思うと、それがサツと潮の引くように、衰えてしまつてガクリとなつたかと思うと、もう、ピクリともしなかつた。死が、遂ついに來たのである。

四

信一郎は、ハンカチーフを取り出して、死者の顎あごから咽喉のどにかけての、血を拭ぬぐつてやつた。

だんく／＼蠟色に、白んで行く、不幸な青年の面をじっと見詰めていると、信一郎の心も、青年の不慮の横死を悼む心で一杯になつて、ほた／＼と、涙が流れて止まらなかつた。五年も十年も、親しんで来た友達の死顔を見ている心と、少しも変らなかつた。何と云う、不思議な運命であらうと、信一郎は思った。親しい友達は、元より、親兄弟、いとしき妻夫、愛児の臨終にさえ、いろ／＼な事情や境遇のために、居合わさぬ事もあれば、間に合わぬ事もあるのに、ホンの三十分か四十分の知己、ホンの暫時の友人、云わば路傍の人に過ぎない、苟の旅の道伴でありながら、その死床に侍して、介抱をしたり、遺言を聞いてやると云うことは、何と云う不思議な機縁であらうと、信一郎は思った。

が、青年の身になつて、考えて見ると、一寸した小旅行の途中で思いがけない奇禍に逢つて、淋しい海辺の一角で、親兄弟は勿論親しい友達さえも居合わさず、他人に外ならない信一郎に、死水を——それは水でなく、数滴のウイスキーだった——取られて、望み多い未来を、不当に予告なしに、切り取られてしまった情なさ、淋しさは、どんなであつただろう。彼は、息を引き取るとき、親兄弟の優しい慰藉の言葉に、どんなに渴えたことだろう。殊に、母か姉妹か、或は恋人かの女性としての優しい愛の言葉を、どんなに欲しただろう。彼が、口走つた瑠璃子と云う言葉は、屹度、そうした女性の名前に違ひな

いと思つた。

その裡に、信一郎の心に、青年の遺した言葉が考えられ始めた。彼は、最初にこう疑つて見た。他人同然の彼に、何うして時計のことを云つたのだろう。若し、時計が誰かに返さるべきものなら名乗り合つたばかりの信一郎などに頼まないでも、遺族の人の手で、当然返さるべきものではなからうか。が、信一郎は、直ぐこう思い返した。青年はノートの内容も、時計を返すことも、遺族の人々には知られたくなかつたのだろう。親兄弟には、飽くまでも、秘密にして置きたかつたのである。而も秘密に時計を返すには、信一郎に頼む外には、何の手段もなかつたのだ。人間が人間を信じることが一つの美德であるように、此青年も必死の場合に、心から信一郎を信頼したのだろう。いや、信頼する外には、何の手段もなかつたのだ。

信一郎は、青年の死際の懸命の信頼を、心に深く受け入れずにはおられなかつた。名乗り合つたばかりの自分に、心からの信頼を置いている。人間として、男として、此の信頼に背く訳には、行かないと思つた。

人が、臨終の時に為す信頼は、基督正教の信徒が、死際の懺悔と同じように、神聖な重大なものに違いないと思つた。縦令、三十分四十分の交際であらうとも、頼まれた以上、

忠実に、その信頼に酬いねばならぬと思つた。

そう思いながら、信一郎は死者の右の手首から、恐る恐る時計を脱して見た。時計も、それを腕に捲く腕輪も、銀か白銅らしい金属で出来ていた。ガラスは、その持主の悲惨な最期に似て、微塵に砕け散つていた。夕暮の光の中で、透して見ると、腕輪に附いてゐる止め金が、衝突のとき、皮肉を切つたのだらう。軽い出血があつたと見え、その白っぽい時計の胴に、所々真赤な血が浸んでいた。今までは、興奮のために夢中になつていた信一郎も、それを見ると、今更ながら、青年の最期の、むごたらしさに、思わず戦慄を禁じ得なかつた。

五

が、時計を返すとして、一体誰に返したらいいのだらうかと、信一郎は思った。青年が、死際に口走つた瑠璃子と云う名前の女性に返せばいいのかしら。が、瑠璃子と云つたのは、時計を返すべき相手の名前を、云つたのだろうか。時計などとは何の関係もない、青年の恋人か姉か妹かの名ではないのかしら。

『時計を返して呉れ。』と云つたとき、青年の意識は、可なり確たしかだった。が、息を引き取る時には、青年の意識は、もう正気を失つていた。

『瑠璃子！』と、叫んだのは、たゞ狂つた心の最後の、偶然な囁うわごと語で、あつたかも知れなかつた。が、瑠璃子と云う名前は、青年の心に死の刹那に深く喰い入つた名前に違いなかつた。丁度、腕時計が、死の刹那に彼の手首の肉に、喰い入つていたように。

信一郎は、再度その小形な腕時計を、手許てもとに迫る夕闇ゆうやみの中で、透して見た。じつと、

見詰めていると最初銀かニツケルと思つた金属は、銀ほどは光が無くニツケルほど薄ブラチつぺらでないのに、気が付いた。彼は指先で、二三度撫なでて見た。それは、紛まぎれもなく白ナ金だった。しかも撫でている指先が、何かツブツブした物に触れたので、眸ひとみを凝すと、

鋭い光を放つ一顆かの寶石が、鏤ちりばめられていた。而もそれは金で象眼された小さい短剣の柄つかに当つていた。それは希臘ギリシヤふう風の短剣の形だった。復讐ふくしゅうの女神ネメシスが、逆手さかてに握つかんでいるような、短剣の形だった。信一郎は、その特異な、不思議な象眼に、劇はげしい好奇心を、唆そそられずにはいられなかつた。時計の元来の所有者は、女性に違いなかつた。が、その象眼は、何と云う女らしからぬ、鋭い意匠いしょうだろう。

日は、もうとつぷりと、暮れてしまった。海上にのみ、一脈の薄明が、漂うているばか

りだった。運転手は、なか／＼帰って来なかった。淋しい海岸の一角に、まだ生あたくさい死屍を、たゞ一人で見守っていることは、無気味な事に違いなかった。が、先刻から興奮し続けている信一郎には、それが左程、厭わしい事にも気味の悪い事にも思われなかった。彼はある感激をさえ感じた。人として立派な義務を尽しているように思った。

信一郎は、ふとこう云う事に気が付いた。たとい、青年からあつた依託を受けたとしても、たゞ黙つて、此の高価な白金の時計を、死屍から持ち去つてもいゝだろう。もし、臨検の巡査にでも、咎められたら、何と返事をしたらいゝだろう。死人に口なく、死に去つた青年が、自分のために、弁解して呉れる筈はない。自分は、人の死屍から、高貴な物品を、剥ぎ取る恐ろしい卑しい盗人と思われても、何の云い訳もないではないか。青年の遺言を受けたと抗弁しても、果して信じられるだろうか。

そう考えると、信一郎の心は、だん／＼迷ひ始めた。妙ないきがかりから、他人の秘密にまで立ち入つて、返すべき人の名前さえ、判然とはしない時計などを預つて、つまらぬ心配や気苦労をするよりも、たゞ乗り合わせた一個の旅の道伴として、遺言も何も、聴かなかつたことにしようかしら。

が、こう考えたとき、信一郎の心の耳に、『お願いで———お願いです。時計を返して下

さい。』と云う青年の、血に咽^{むせ}ぶ断末魔の悲壮な声が、再び鳴り響いた。それに応ずるように、信一郎の良心が、『貴様は卑怯^{ひきよう}だぞ。貴様は卑怯^{ひきよう}だぞ。』と、低く然^{しか}しながら、力強く囁^{ささや}いた。

『そうだ。そうだ。兎^とに角^{かく}、瑠璃子と云う女性を探して見よう。たとい、それが時計を返すべき人でないにしろ、その人は屹度^{きつと}、此の青年に一番親しい人に違いない。その人が、屹度時計を返すべき本当の人を、教えて呉れるのに違いない。又、自分が時計を盗んだと云うような、不当な疑いを受けたとき、此人が屹度弁解して呉れるのに違いない。』

信一郎は、『瑠璃子』と云う三字を頼りにして、自分の物でない時計を、ポケット深く、藏^{おさ}めようとした。

その時に、急に近よつて来る人声がした。彼は、悪い事でもしていたように、ハッと驚いて振り返った。警察の提灯^{ちようちん}を囲んで、四五人の人が、足早に駈^かけ付けて来るようだった。

六

駈け付けて来たのは、オド／＼している運転手を先頭にして、年若い巡査と、医者らしい袴はかまをつけた男と、警察の小使らしい老人との四人であつた。

信一郎は、彼等を迎えるべく扉を開けて、路上へ降りた。

巡査は提灯を車内に差し入れるようにしながら、

「何どうです。負傷者は？」と、訊きいた。

「先刻さつき、息を引き取つたばかりです。何分胸部をひどく、やられたものですから、助からなかつたのです。」と、信一郎は答えた。

暫らくは、誰もが口を利きかなかつた。運転手が、ブル／＼顫ふるえ出したのが、ほの暗い提灯の光の中でも、それと判わかつた。

「兎とも角かく、一応診みて下さい。」と、巡査は医者らしい男に云つた。運転手は顫えながら、車体に取り付けてある洋燈ランプに、点火した。周囲が、急に明るくなった。

「お伴つれじゃないのですね。」医者が検視をするのを見ながら、巡査は信一郎に訊いた。

「そうです。たゞ国府津こうづから乗合わしたばかりなのです。が、名前は判つて居ます。先刻名乗り合いましたから。」

「何いと云う名です。」巡査は手帳を開いた。

「青木淳しゅんと云う文科大学生です。宿所は訊かなかつたけれど、どうも名前と顔付から考えると、青木淳三と云う貴族院議員のお子さんに違いないと思うのです。無論斷言は出来ませんが、持物でも調べれば直ぐ判るでしょう。」

巡査は、信一郎の云う事を、一々肯うなずいて聴いていたが、

「遭難の事情は、運転手から一通り、聴きましたが、貴君あなたからもお話を願いたいです。運転手の云うことばかりも信ぜられませんから。」

信一郎は言下に「運転手の過失です。」と云い切りたかつた。過失と云うよりも、無責任だと云い切りたかつた。が、戦おのきながら、信一郎と巡査との問答を、身の一大事とばかり、聞耳を澄ましている運転手の、罪を知つた容子ようすを見ると、そう強くも云えなかつた。その上、運転手の罪を、幾何声高いくわに叫んでも、青年の甦よみがえる筈はずもなかつた。

「運転手の過失もありますが、どうも此方このかたが自分で扉を、開けたような形跡もあります。扉さえ開ひらかなかつたら、死ぬようなことはなかつたと思います。」

「なるほど。」と、巡査は何やら手帳に、書き付けてから云つた。「いずれ、遺族の方から起訴にでもなると、貴君にも証人になつて戴いたくかも知れません。御名刺を一枚戴きたいと思います。」

信一郎は乞^こわるゝまゝに、一枚の名刺を与えた。

丁度その時に、医者は血に塗^まみれた手を気にしながら、車内から出て来た。

「ひどく血を吐きましたね。あれじや負傷後、幾^{いく}何も生きていなかったでしょう。」と、信一郎に云った。

「そうです。三十分も生きていたでしょうか。」

「あれじや助かりっこはありません。」と、医者は投げるように云った。

「貴^{あなた}君もとんだ災難でした。」と、巡査は信一郎に云った。「が、死んだ方^{くら}に比ぶれば、むしろ命拾いをしたと云つてもいいでしょう。湯河原へ行らっしゃるそうですね。それじや小使に御案内させますから真^{まなづる}鶴までお歩きなさい。死体の方は、引受けましたから、御自由にお引き取り下さい。」

信一郎は、兎に角当座の責任と義務とから、放たれたように思った。が、ポケットの底にある時計の事を考えれば、信一郎の責任は何^い時果されるとも分らなかった。

信一郎は車台に近寄つて、黙礼した。不幸な青年に最後の別れを告げたのである。

巡査達に挨^{あい}拶^{さつ}して、二三間行つた時、彼はふと海に捨つるべく、青年から頼まれたノートの事を思い出した。彼は驚いて、取つて歸した。

「忘れ物をしました。」彼は、やゝ狼狽しながら云った。

「何です。」車内を覗き込んでいた巡査が振り顧った。

「ノートです。」信一郎は、やゝ上ずった声で答えた。

「これですか。」先刻から、それに気の付いていたらしい巡査は、座席の上から取り上げて呉れた。信一郎は、そのノートの表紙に、ペンで青木淳とかいてあるらしいのを見ると、ハツと思つた。が、光は暗かつた。その上、巡査の心にそうした疑は微塵も存在しないらしかつた。彼は、やつと安心して、自分の物でない物を、自分の物にした。

七

真鶴から湯河原迄の軽便の汽車の中でも、駅から湯の宿までの、田舎馬車の中でも、信一郎の頭は混乱と興奮とで、一杯になつていた。その上、衝突のときに、受けた打撃が現われて来たのだらう、頭がズキ／＼と痛み始めた。

青年のうめき声や、吐血の刹那や、蒼白んで行つた死顔などが、ともすれば幻覚となつて、耳や目を襲つて来た。

静子に久し振に逢^あえると云ったような楽しい平和な期待は、偶然な血^{ちなまぐさ}腥^{しん}い出来事のために、滅^め茶^{ちやく}苦^く茶^{ちやく}になつてしまつたのである。静子の初^う々^うしい面影を、描^えこうとすると、それが何時^{いつ}の間にか、青年の死顔になつてゐる。「静子！ 静子！」と、口の中で呼んで、愛妻に對する意識を、ハッキリさせようとすると、その声が何時の間にか「瑠璃子！ 瑠璃子！」と、云う悲痛な断末魔の声を、想^{おも}い浮^うべさせたりした。馬車が、暗い田の中の道を、左へ曲つたと思うと、眼の前に、山^{やま}懷^{ふところ}にほのめく、湯の街の灯影^{ほかげ}が見え始めた。

信一郎は、愛妻に逢^あう前に、何^どうかして、乱^{みだ}れてゐる自分の心持を、整えようとした。なるべく、穏やかな平静な顔になつて、自分の激^{シヨック}動^{ドウ}を妻に伝^{うつ}染^{せん}すまいとした。血腥^{けつしん}い青年の最期^{さいご}も、出来るならば話すまいとした。それは優しい妻の胸には、鋭^{えい}すぎる事實だつた。

藤木川の左岸に添^そうて走つた馬車が、新しい木橋を渡ると、橋^{はしたもと}袂^{たもと}の湯の宿の玄関に止まつた。

「奥様がお待ち兼でございます。」と、妻に付けてある女中が、宿の女中達と一緒に玄関に出迎えた。ふと気が付くと、玄関の突き当りの、二階への階段の中段に、降りて出迎え

ようか（それともそれが可なりはしたくない事なので）降りまいかと、躊躇（ためら）つていたらしい静子が、信一郎の顔を見ると、艶然（えつこり）と笑つて、はち切れそうな嬉（うれ）しさを抑えて、いそ／＼と駈（か）け降りて来るのであつた。

「いらつしやいませ。何うして、こう遅かつたの。」静子は一寸（ちよつと）不平らしい様子を嬉（うれ）しさの裡（うち）に見せた。

「遅くなつて済まなかつたね。」

信一郎は、劬（いた）わるように云い捨て、先に立つて妻の部屋へ入つた。

その時に、彼はふと青年から頼まれたノートを、まだ夏（がい）外套（とう）のポケットに入れているのに、気が付いた。先刻真鶴まで歩いたとき、引き裂いて捨てよう／＼と思ひながら、小使の手前、何うしても果し得なかつたのである。当惑（ため）の為に、彼の表情はやゝ曇つた。

「御気分が悪そうね。何うかしたのですか。湯衣（ゆかた）にお着換えなさいまし。それとも、お寒いようなら、襦袢（どてら）になさいますか。」

そう云いながら静子は甲斐（かい）々々しく信一郎の脱ぐ上衣（うわぎ）を受け取つたり、襯衣（シャツ）を脱ぐのを手伝つたりした。

その中に、上衣（うわぎ）を衣桁（いこう）にかけようとした妻は、ふと、

「あれ！」と、可なりけたゝましい声を出した。

「何^どうしたのだ。」信一郎は驚いて訊^きいた。

「何でしょう。これは、血じやなくて。」

静子は、真^{まつ}蒼^{さお}になりながら、洋服の腕のボタンの所を、電^{でん}燈^{とう}の真近に持つて行つた。それは紛^まぎれもなく血だつた。一寸四方ばかり、ベツトリと血が浸^にじんでいたのである。

「そうか。やつぱり付いていたのか。」

信一郎の声も、やゝ顫^{ふる}いを帯びていた。

「何うかしたのですか。何うかしたのですか。」氣の弱い静子の声は、可なり上ずつていた。

信一郎は、妻の氣を落着けようと、可なり冷静に答えた。

「いや何うもしないのだ。たゞ、自動車^が崖^{がけ}にぶつ突^つかつてね。乗合^がわしていた大学生が負傷したのだ。」

「貴^{あなた}君^{どこ}は、何^ど処^こもお負^け傷^がはなかつたのですか。」

「運^うがよかつたのだね。俺^{おれ}は、かすり傷一つ負^おわなかつたのだ。」

「そしてその学生の方は。」

「重傷だね。助からないかも知れないよ。まあ奇禍と云うんだね。」

静子は、夫が免れた危険を想像する丈^だけで、可なり激しい感動に襲われたと見え、目を刮^{みは}つたまゝ暫^{しば}らくは物も云わなかつた。

信一郎も、何だか不安になり始めた。奇禍に逢つたのは、大学生ばかりではないような気がした。自分も妻も、平和な気持を、滅茶々にされた事が、可なり大きい禍^{わざわい}であるように思つた。が、そればかりでなく、時計やノートを受け継いだ事に依^よつて、青年の恐ろしい運命をも、受け継いだような気がした。彼は、楽しく期待した通り静子に逢いながら、優しい言葉一つさえ、かけてやる事が出来なかつた。

夫と妻とは、蒼白^{まっさお}になりながら、黙々として相對していた。信一郎は、ポケットに入れたある時計が、何か魔^まの符^ふでもあるように、気味悪く感ぜられ始めた。

美しき遅参者

青年の横死は、東京の各新聞に依つて、可なり精しく伝えられた。青年が、信一郎の想像した通り青木男爵^{だんしやく}の長子であつたことが、それに依つて証明された。が、不思議に同乗者の名前は、各新聞とも洩^もしていた。信一郎は結局それを気安いことに思った。

信一郎が、静子を伴つて帰京した翌日に、青木家の葬儀は青山の斎場で、執り行われることになつていた。

信一郎は、自分が青年の最期^{さいご}を介抱した当人であると云う事を、名乗つて出るような心持は、少しもなかつた。が、自分の手を枕^{まくら}にしながら、息を引き取つた青年が、傷^{いた}ましかつた。他人でないような気がした。十年の友達であるような気がした。その人の面影^しを偲^{しの}ぶと、何となくなつかしい涙ぐましい気がした。

遺族の人々とは、縁もゆかりもなかつた。が、弔^{なぐさ}われている人とは、可なり強い因縁^{まづ}が、纏^{まと}わつてゐるように思った。彼は、心からその葬^{とむら}いの席に、列^{つら}りたいと思つた。

が、その上、もう一つ是非とも、列るべき必要があつた。青年の葬儀である以上、姉も妹も、瑠璃子^{るりこ}と呼ばれる女性も、返すべき時計の眞の持主も、（もしあれば）青年の恋人も、みんな列つてゐるのに違^{ちが}ない。青年に、由縁^{ゆかり}のある人を物色すれば、時計を返すべき

持主も、案外容易に、見当が付くに違^{ちが}ない。否^{いな}、少くとも瑠璃子と云う女丈^{だけ}は、容易に見^み出し得^いるに違^{ちが}ない、信一郎はそう考えた。

その日は、廓^{かくぜん}然と晴れた初夏の一日だった。もう夏らしく、白い層雲が、むく／＼と空の一角に湧^わいていた。水色の空には、強い光が、一杯に充^みち渡^わつて、生々の気が、空にも地にも溢^{あふ}れていた。たゞ、青山の葬場に集まった人丈^{だけ}は、活^{いき}々とした周囲の中に、しめっぽい静かな陰翳^{いんえい}を、投^なげているのだった。

青年の不幸な夭折^{ようせつ}が、特に多くの会葬者を、惹^ひき付けているらしかった。信一郎が、定刻の三時前に行つたときに、早くも十幾台の自動車と百台に近い俤^{くるま}が、斎場の前の広い道路に乗り捨てゝあつた。控席に待合わしている人々は、もう五百人に近かつた。それなのに、自動車や俤^{くるま}が、幾台となく後から／＼到着するのだった。死んだ青年の父が、貴族院のある団体の有力な幹部である為^{ため}に、政界の巨頭は、大抵網羅しているらしかった。貴族院議長のT公爵の顔や、軍令部長のS大将の顔が、信一郎にも直^すぐそれと判^{わか}つた。葉巻を横^{よこぐわ}銜^{くは}えにしながら、場所柄をも考えないように哄^{こう}笑^{しょう}している巨漢は、逋^{てい}信^{しん}大臣のN氏だった。それと相手になつてゐるのは、戦後の欧^{おう}洲^{しゅう}を、廻^{まわ}つて来て以来、風雲を待つてゐるらしく思われているG男爵だった。その外首相の顔も見えた。内相もいた。

陸相もいた。実業界の名士の顔も、五六人は見覚えがあつた。が、見渡したところ信一郎の知人は一人もいなかった。彼は、受附へ名刺を出すと、ひかえじょう控場の一隅へ退いて、式の始まるのを待つていた。

誰も彼に、話しかけて呉くれる人はなかった。接待をしている人達も、名士達の前には、頭を幾度も下げて、その会葬を感謝しながら、信一郎には、たゞ儀礼的な一いちゆう揖を酬むくいただけだった。

誰からも、顧みられなかったけれども、信一郎の心には、自信があつた。千に近い会葬者が、集まろうとも、青年の臨終に侍したのは、自分一人ではないか。青年の最期を、見届けているのは、自分一人ではないか。青年の信頼を受けているのは自分一人ではないか。その死床に侍して介抱してやつたのは、自分一人ではないか。もし、死者にして霊あらば、大臣や実業家や名士達の社交上の会葬よりも、自分の心からな会葬を、どんなに欣よろこぶかも知れない。そう思うと、信一郎は自分の会葬が、他の何なんびと人の会葬よりも、意義があるように思った。彼はそうした感激に耽ふけりながら、じつと会葬者の群を眺めていた。急に、皆が静かになったかと思うと、憂かつかつ々たる馬蹄ばていの響がして、霊れいきゆう柩を載せた馬車が遺族達に守られて、斎場へ近づいて来るのだった。

二

靈柩を載せた馬車を先頭に、一門の人々を載せた馬車が、七八台も続いた。信一郎は、群衆を擦り脱^ぬけて、馬車の止まった方へ近づいた。次ぎくくに、馬車を降りる一門の人々を、仔細^{しさい}に注視しようとしたのである。

靈柩の直^すぐ後の馬車から、降り立ったのは、今日の葬式の喪主であるらしい青年であった。一目見ると、横死した青年の肉親の弟である事が、直^{わか}ぐ判った。それほど二人はよく似ていた。たゞ学習院の制服を着ている此^{この}青年の背丈が、国府津^{こうづ}で見たその人の兄よりも、一二寸高いように思われた。

その次ぎの馬車からは、二人の女性が現われた。信一郎は、その孰^{いず}れか瑠璃子と呼ばれはしないかと、熱心に見詰めた。二人とも、死んだ青年の妹であることが、直^{わか}ぐ判った。兄に似て二人とも端正な美しさを持っていた。年の上の方も、まだ二十を越^こしていないだろう。その美しい眼を心持泣^{はら}き脹^{はら}して、雪のような喪服を纏^{まと}うて、俯^{うつむ}きがちに、しおたれて歩む姉妹の姿は、悲しくも亦^{また}美しかった。

それに、続いてどの馬車からも、一門の夫人達であろう、白無垢しろむくを着た貴婦人が、一人宛降すつり立った。信一郎は、その裡うちの誰かゞ、屹度瑠璃子に違いないと思ひながら、一人から他へと、慌あわただしい眼を移した。が、たゞいら／＼する丈だけで、ハッキリと確める術すべは、少しもなかった。

霊柩が式場の正面に安置せられると、会葬者も銘々に、式場へ雪崩なだれ入った。手狭な式場は見る見る、一杯になった。

式が始まる前の静けさが、其処そこに在った。会葬者達は、銘々慎しみの心を、表に現わして紫や緋ひの衣を着た老僧達の、居並ぶ祭壇を一斉に注視しているのであった。

式場が静粛に緊張して、今にも読経どきようの第一声が、この静けさを破ろうとする時だった。突如として式場の空気などを、少しも顧慮しないようなけた／＼ましい、自動車の響が場外に近づいた。祭壇に近い人々は、遠さすがに振向きもしなかった。が、会葬者の殆ど過半が、此無遠慮な闖入者ちんにゆうしやに対して叱責しっせきに近い注視を投げたのである。

自動車は、式場の入口に横附けにされた。伊太利製らしい、優雅な自動車の扉が、運転手よに依つて排せられた。

会葬者の注視を引いた事などには、何の恐れ気もないように、翼ひろを拡げた白孔雀くじゃくのよ

うな、け高さと上品さで、その階段から地上へと、スックと降り立ったのは、まだうら若い一個の女性だった。降りざまに、その面をおもておほうていた黒い薄絹のヴェールを、かなぐり捨て、無造作に自動車の中へ投げ入れた。人々の環視の裡に、微笑ともきようしゆう嬌羞とも付かぬ表情を、た湛えた面は、くつきりとしろ皎く輝いた。

白襟紋付の瀟洒しょうしやな衣は、そのスリとした姿を一層気高く見せていた。彼女は、何の悪怯わるびれた容子ようすも見せなかった。打ち並ぶ名士達の間に、細く残された通路を、足早に通り抜けて、祭壇の右の婦人達の居並ぶ席に就いた。

会葬者達は、場所柄の許す範囲で、銘々熱心な眼で、此の美しい無遠慮な遅参者の姿を追った。が、そうした眼の中でも、信一郎のそれが、一番熱心で一番輝いていたのである。彼は、何よりも先きに、此女性の美しさに打たれた。年は二十はたちを多くは出ていなかった。が、そうした若い美しさにも拘かかわらず、人を圧するような威厳が、何処どこかに備わっていた。

信一郎は、頭の中で自分の知っている、あらゆる女性の顔を浮べて見た。が、そのどれもが、此婦人の美しさを、少しでも冒おかすことは出来なかった。

泰西の名画の中からでも、抜け出して来たような女性を、信一郎は驚異に似た心持で暫しば

らくは、茫然^{ぼうぜん}と会衆の頭越しに見詰めていたのである。

三

信一郎が、その美しき女性に、釘付け^{くぎづけ}にされたように、会葬者の眸^{ひとみ}も、一時は此^この女性の身邊に注がれた。が、その裡^{うち}に、衆僧が一齐に始めた読経^{どきよう}の朗々たる声は、皆の心持を死者に対する敬虔^{けいけん}な哀悼^{あいとう}に引き統^すべてしまった。

が、此女性が、信一郎の心の裡に起した動揺は、お経の声などに依^よつて却々^{なかなか}静まりそうにも見えなかつた。

彼は、直覺的に此女性が、死んだ青年に対して、特殊な關係を持つていることを信じた。此女性の美しいけれども颯爽^{さつそう}たる容姿が、あの返すべき時計に鏤刻^{るこく}されている、鋭い短剣の形を想^{おも}い起さしめた。彼は、読経の声などには、殆ど^{ほとん}耳も傾けずに、群衆の頭越しに、女性の姿を、懸命に見詰めたのである。

が、見詰めている中^{うち}に、信一郎の心は、それが瑠璃子であるか、時計の持主であるかなどと云^いう疑問よりも、此の女性の美しさに、段々^{とら}囚^{とら}われて行くのだつた。

此の女性の顔形は、美しいと云つても、昔からある日本婦人の美しさではなかった。それは、日本の近代文明が、初^{はじめ}て生み出したような美しさで表情を持っていた。明治時代の美人のように、個性のない、人形のような美しさではなかった。その眸は、飽くまでも、理智^{りち}に輝いていた。顔全体には、爛^{らんじゆく}熟した文明の婦人に特有な、智^ち的な輝きがあつた。婦人席で多くの婦人の中に立つていながら、此の女性の背後^{だけ}丈には、ほの／＼と明るい後光が、射^さしているように思われた。

年頃から云えば娘とも思われた。が、何処^{どこ}かに備わっている冒しがたい威厳は、名門の夫人であることを示しているように思われた。

信一郎が、此の女性の美貌^{びぼう}に対する耽美^{たんび}に溺^{おぼ}れている裡に、葬式のプログラムはだん／＼進んで行つた。死者の兄弟を先に一門の焼香が終りかけると、此の女性もしとやかに席を離れて死者^{ため}の爲に一抹^{いちまつ}の香を焚^たいた。

やがて式は了^{おわ}つた。会葬者に対する挨拶^{あいさつ}があると、会葬者達は、我先にと帰途を急いだ。式場の前には俤^{くるま}と自動車とが暫^{しばら}くは右往左往に、入り擾^{みだ}れた。

信一郎は、急いで退場する群衆に、わざと取残された。彼は群衆に押されながら、意識して、彼^かの女性に近づいた。

女性が、式場を出外でずれると、彼女はそこで、四人の大学生に取り捲まかれた。大学生達は皆死んだ青年の学友であるらしかった。彼女は何か一言三言ふたことみこと言葉を換すと乗るべき自動車に片手をかけて、華やかな微笑を四人の中の、誰に投げるともなく投げて、その娜しなやかな身をひるがえ翻して忽ち車上の人となつたが、つと上半身を出したかと思うと、

「本当にそう考えて下さつては、妾わたくし困りますのよ。」と、嬌えんぜん然と云い捨てると、扉ドアをハタと閉じたが自動車はそれを合図に散りかゝる群衆の間を縫うて、徐ろおもむに動き始めた。

大学生達は、自動車の後を、暫らく立ち止まって見送ると、その儘肩ままを揃そろえて歩き出した。信一郎も学生達の後を追つた。学生達に話しかけて、此女性の本体を知ることが時計の持主を知る、唯一ゆいいつの機会であるように思つたからである。

学生達は、電車に乗る積つもだろう。式場の前の道を、青山三丁目の方へと歩き出したのであつた。信一郎は、それと悟られぬよう一間ばかり、間隔を以て歩いていた。が、学生達の声は、可なり高かつた。彼等の会話が、切れ切れに信一郎にも聞えて来た。

「青木の変死は、偶然だと云えばそれまでだが、僕は死んだと聞いたとき、直ぐ自殺すじゃないかと思つたよ。」と、一番肥ふとっている男が云つた。

「僕もそうだよ。青木の奴やつ、やつたな！　と思つたよ。」と、他の背の高い男は直ぐ賛成

した。

四

「僕の所へ三保から寄越した手紙なんか、全く変だったよ。」と、たゞ一人夏外套がいたうを着ている男が云った。

信一郎は、そうした学生の会話に、好奇心を唆そそられて、思わず間近く接近した。

「兎とに角かく、ヒドく悄氣しよげていたことは、事実なんだ。誰かに、失恋したのかも知れない。が、彼奴あいつの事だから誰にも打ち明けないし、相手の見当は、サッパリ付かないね。」と、肥ふとつた男が云った。

そう聞いて見ると、信一郎は、自動車に同乗したときの、青年の態度を直すぐ思い出した。その悲しみに閉された面影がアリ／＼と頭に浮んだ。

「相手つて、まさか我々の莊田しょうだ夫人じゃあるまいね。」と、一人が云うと、皆高々と笑った。

「まさか。まさか。」と皆は口々に打ち消した。

其処そこは、もう三丁目の停留場だった。四人連の内の三人は、其処に停車している電車に、無理に押し入るようになつて乗つた。たゞ、後に残つた一人丈だけ、眼鏡をかけた、皆の話を黙つて聴いていた一人だけ、友達と別れて、電車の線路に沿うて、青山一丁目の方へ歩き出した。信一郎は、その男の後を追つた。相手が、一人の方が、話しかけることが、容易であると思つたからである。

半町ばかり、付いて歩いたが、何うしても話しかけられなかつた。突然、話しかけることが、不自然で突飛であるように思われた。彼は、幾度も中止しようとした。が、此この機会を失しては、時計を返すべき緒いとぐちが、永久に見付け得られないようにも思つた。信一郎は到頭思い切つた。先方が、一寸ちよつと振り返るようにしたのを機会に、つか／＼と傍へ歩き寄つたのである。

「失礼ですが、貴君あなたも青木さんのお葬とむらいに？」

「そうです。」先方は突然な問を、意外に思つたらしかつたが、不愉快な容子ようすは、見せなかつた。

「やっぱりお友達でいらつしやいますか。」信一郎はやゝ安心して訊きいた。

「そうです。ずっと、小さい時からの友達です。小学時代からの竹馬の友です。」

「なるほど。それじゃ、嘸お力落しでしたらう。」と云ってから、信一郎は少し躊躇していたが、「つかぬ事を、承わるようですが、今貴君方と話していた婦人の方ですね。」と云うと、青年は直ぐ訊き返した。

「あの自動車で、帰った人ですか。あの人が何うかしたのですか。」

信一郎は少しドギマギした。が、彼は訊き続けた。

「いや、何うもしないのですが、あの方は何と仰しやる方でしょう。」

学生は、一寸信一郎を憫れむような微笑を浮べた。ホンの瞬間だったけれども、それは知るべきものを知っていない者に見せる憫れみの微笑だった。

「あれが、有名な莊田夫人ですよ。御存じなかったのですか。曾て司法大臣をした事のあの唐沢男爵の娘ですよ。唐沢さんと云えば、青木君のお父様と、同じ団体に属している貴族院の老政治家ですよ。お父様同士の関係で、青木君とは近しかったんです。」

そう云われて見ると、信一郎も、莊田夫人なるものゝ写真や消息を婦人雑誌や新聞の婦人欄で幾度も見たことを思い出した。が、それに対して、何の注意も払っていなかったのだ、その名前は何うしても想い浮ばなかった。が、此の場合名前まで訊くことが、可なり変に思われたが、信一郎は思い切つて訊ねた。

「お名前は、確か何とか云われたですね。」

「瑠璃子ですよ、我々は、玉たまかつら桂の瑠璃子夫人と云っていますよ。ハ、ハ、ハ。」と、学生は事もなげに答えた。

五

葬場に於ける遅参者が、信一郎の直覺とおりしていた通、瑠璃子と呼ばれる女性であることが、此この大学生に依つて確められると、彼はその女性に就いて、もつといろいろな事が、知りたくなつた。

「それじゃ、青木君とあの瑠璃子夫人とは、そう大したお交際つきあいでもなかったのですね。」
「いやそんな事ありませんよ。此半年ばかりは、可なり親しくしていたようです。尤ももつとあの奥さんは、大変お交際つきあいの広い方で、僕なぞも、青木君同様可なり親しく、交際している方です。」

大学生は、美貌びぼうの貴婦人を、知己の中に数え得ることが、可なり得意らしく、誇らしげにそう答えた。

「じゃ、可なり自由な御家庭ですね。」

「自由ですとも、夫の勝平氏を失つてからは、思うまゝに、自由に振舞つておられるのです。」

「あ！　じゃ、あの方は未亡人ですか。」信一郎は、可なり意外に思いながら訊いた。

「そうです。結婚してから半年か其処そこらで、夫に死に別れたのです。それに続いて、先妻のお子さんの長男が気が狂つたのです。今では、莊田家はあの奥さんと、美奈子みなこと云う十九の娘さんだけです。それで、奥さんは離縁にもならず、娘さんの親権者として莊田家を切り廻しているのです。」

「なるほど。それじゃ、後妻に來られたわけですね。あの美しきで、あの若きで。」と、信一郎は事毎ごとに意外に感じながらそう呟つぶやいた。

大学生は、それに対して、何か説明しようとした。が、もう二人は青山一丁目の、停留場に来ていた。学生は、今発車しようとしている塩町行の電車に、乗りたそうな容子を見せた。

信一郎は、最後の瞬間を利用して、もう一步進めて見た。

「突然ですが、ある用事で、あの奥さんに、一度お目にかゝりたいと思うのですが、紹介

して下さる訳には……」と、言葉を切った。

大学生は、信一郎のそうしたやゝ不自然な、ぶつきら棒な願いを、美貌の女性の知己にならいたいと云う、世間普通な色好みの男性の願と、同じものだと思つたらしく、一寸嘲ちよつとちやうしやう

笑ようしやうに似た笑いを洩もらそうとしたが、直ぐそれを噛かみ殺して、

「貴君あなたの御身分や、御希望を精くわしく承らないと、僕として一寸紹介して差上げることは出来ません。尤も、莊田夫人は普通の奥さん方とは違いますから、突然尋ねて行かれても、屹度きつとあ逢つて呉くれるでしょう。御宅は、翹こうじまち町の五番町です。」

そう云い捨てると、その青年は身体からだを捷すばしこく動かしながら、将まさに動き出そうとする電車に巧に飛び乗ってしまった。

信一郎は、一寸おいてきぼりを喰つたような、稍やや々不快な感情を持ちながら、暫しばらく其そこ処に佇ちよりつ立した。大学生に話しかけた自分の態度が、下等な新聞記者か何かのようであったのが、恥しかった。どんなに、あの女性の本名が知りたくてももつと上品な態度が取れたのにと思つた。

が、そうした不愉快さが、段々消えて行つた後に、瑠璃子と云う女性の本体つかを掴み得た満足が其処にあつた。而しかも、瑠璃子と云う女性が、今も尚なおハンカチーフに包んで、ポケッ

トの底深く潜ませて、持つて来た時計の持主らしい、凡ての資格を備えていることが何よりも嬉しかった。短剣を鏤めた白金の時計と、今日見た瑠璃子夫人の姿とは、ピッタリと合いすぎるほど、合っていた。今日にでも夫人を訪ねれば、夫人は屹度、死んだ青年に対する哀悼の涙を浮べながら、あの時計を受取つて呉れるに違ない。そして、自分と青年との不思議な因縁に、感激の言葉を発するに違ない。そう思うと、信一郎の瞳にあざやかな夫人の姿が、歴々と浮かんで来た。彼は一刻も早く、夫人に逢いたくなつた。其処へ、彼のそうした決心を促すように、九段両国行きの電車が、軋つて来た。此電車に乗れば、麴町五番町迄は、一回の乗換さえなかつた。

六

電車が、赤坂見附から三宅坂通り、五番町に近づくに従つて、信一郎の眼には、葬場で見た美しい女性の姿が、いろいろな姿勢を取つて、現れて来た。返すべき時計のことなどよりも、美しき夫人の面影の方が、より多く彼の心を占めているのに気が付いた。彼は自分の心持の中に、不純なものが交りかけているのを感じた。『お前は時計を返すために、

あの夫人に逢いたがつていのではない。時計を返すのを口実として、あの美しい夫人に逢いたがつていのではないか。』と云う叱責に似た声を、彼は自分の心持の中に感じた。それほど、瑠璃子と呼ばれる女性の美しさが、彼の心を悩まし惑わしたが、信一郎は懸命にそれから逃れようとした。自分の責任は、たゞ青年の遺言通に、時計を眞の持主に返せばいゝのだ。莊田瑠璃子が、どんな女性であろうとあるまいと、そんな事は何の問題でもないのだ。たゞ、夫人が本当に時計の持主であるかどうか、問題なのだ。自分はそれを確めて、時計を返しさえすれば、責任は尽きるのだ。信一郎は、そう強く思い切ろうとした。が、幾何強く思い切ろうとしても、白孔雀を見るような、臆たけた若き夫人の姿は、彼が思うまいとすればするほど、愈鮮明に彼の眼底を去ろうとはしなかった。

青い葉桜の林に、キラ／＼と夏の風が光る英国大使館の前を過ぎ、青草が美しく茂ったお濠の堤に沿うて、電車が止まると、彼は急いで電車を降りた。彼の眼の前に五番町の広い通が、午後の太陽の光の下に白く輝いていた。彼は、一寸した興奮を感じながらも、暫くは其処に立ち止まった。紳士として、突然訪ねて行くことが、余りにはしたくないようにも思われた。手紙位で、一応面会の承諾を得る方が、自然で、かつは礼儀ではないかと思ったりした。が、そうした順序を踏んで相手が、会わないと云えば、それ切りになつて

しまう。少しは不自然でも、直截に訪問した方が、却って容易に会見し得るかも知れない。殊に、今は死んだ青年の葬儀から帰ったばかりであるから、此の夫人も、きつと青年のことを、考えているに違ない。其処へ、自分が青年の名に依つて尋ねて行けば、案外快く引見するに違いない。そう考えると信一郎は崩れかゝった勇気を振り興して、五番町の表通と横町とを軒並に、物色して歩いた。彼は、五番町の総てを漁った。が、何処にも、莊田と云う表札は、見出さなかつた。三十分近く無駄に歩き廻った末、彼は到頭通り合わした御用聴らしい小僧に尋ねた。

「莊田さんですか。それじゃあの停留場の直ぐ前の、白煉瓦の洋館の、お屋敷がそれです。」と、小僧は言下に教えて呉れた。

その家は、信一郎にも最初から判つていた。信一郎は、電車から降りたとき、直ぐその家に眼を与つたのであるが、花崗岩らしい大きな石門から、楓の並樹の間を、爪先上りになつてゐる玄関への道の奥深く、青い若葉の蔭に聳える宏壮な西洋館が——大きい邸宅の揃つてゐる此界限でも、他の建物を圧倒してゐるような西洋館が莊田夫人の家であらうとは思わなかつた。

彼は、予想以上に立派な邸宅に気圧されながら、暫らくはその門前に佇立した。玄関

への青い芝生の中の道が、曲線カーブをしている為に車寄せの様子などは、見えなかったが、ゴシック風の白煉瓦の建物は瀟洒しょうしゃに而もしか莊重な感じを見る者に与えた。開け放した二階の窓にそよいでいる青色の窓掩おほいが、如何いかにも清々すがすがしく見えた。二階の縁ヴェランダ側に置いてある籐椅子とういすには、燃えるような蒲団クシヨンが敷いてあつて、此家の主人公が、美しい夫人であることを、示しているようだ。

入ろうか、入るまいかと、信一郎は幾度も思い悩んだ。手紙で訊き合して見ようか、それでも事は足りるのだと思つたりした。彼が、宏壯な邸宅に圧迫されながら思わず踵きびすを廻かえそうとした時だった。噴泉の湧わくように、突如として樹の間こまから洩もれ始めた朗々たるピアノの音が信一郎の心をしつかと掴つかんだのである。

七

樹の間を洩れて来るピアノの曲は、信一郎にも聞き覚えのあるショパンの夜曲ノクチュルンだった。彼は、廻かえそうとした踵きびすを、釘付けくぎづけにされて、暫しばらくはその哀艶あいえんな響に、心を奪われずにはいられなかった。嫋々じょうじょうたるピアノの音は、高く低く緩やかに劇はげしく、時には若

葉の梢を馳け抜ける五月の風のように囁き、時には青い月光の下に、俄に迸り出でたる泉のように、激した。その絶えんとして、又続く快い旋律が、目に見えない紫の糸となって、信一郎の心に、後から後から投げられた。それは美しい女郎蜘蛛の吐き出す糸のように、蠱惑的に彼の心を囚えた。

彼の心に、鍵盤の上を梭のように馳けめぐっている白い手が、一番に浮かんだ。それに続いて葬場でヴェールを取り去った刹那の白い輝かしい顔が浮んだ。

彼は時計を返すなどと言うことより、兎に角も、夫人に逢いたかった。たゞ、訳もなく、惹き付けられた。たゞ、会うことが出来さえすれば、その事丈でも、非常に大きな欣びであるように思った。

躊躇していた足を、踏み返した。思い切って門を潜った。ピアノの音に連れて、浮れ出した若き舞踏者のように、彼の心もあやしき興奮で、ときめいた。白い大理石の柱の並んでいる車寄せで、彼は一寸躊躇した。が、その次の瞬間に、彼の指はもう扉の横に取付けたある呼鈴に触れていた。

茲まで来ると、ピアノの音は、愈間近く聞えた。その冴えた触鍵が、彼の心を強く囚えた。

呼鈴を押した後で、彼は妙な息苦しい不安の裡に、一分ばかり待っていた。その時、小さい靴の足音がしたかと思うと扉が静かに押し開けられた。名刺受の銀の盆を手にした美しい少年が、微笑を含みながら、頭を下げた。

「奥さまに、一寸お目にかゝりたいと思いますが、御都合は如何でございましょうか。」
彼は、そう云いながら、一枚の名刺を渡した。

「一寸お待ち下さいませ。」

少年は丁寧に再び頭を下げながら、玄関の突き当りの二階を、栗鼠のように、すばしく駆け上った。

信一郎は少年の後を、じつと見送っていた。骰子は投げられたのだと云ったような、思ひ詰めた心持で、その二階に消える足音を聞いていた。

忽ちピアノの音が、ぱつたりと止んだ。信一郎は、その刹那に劇しい胸騒ぎを感じたのである。その美しき夫人が、彼の姓名を初めて知つたと云うことが、彼の心を騒がしたのである。彼は、再びピアノが鳴り出しはしないかと、息を凝っていた。が、ピアノの鳴り代りに、少年の小さい足音が、聞え始めた。愛嬌のよい微笑を浮べた少年は、トンノと飛ぶように階段を駆け降りて来た。

「一体、何う云う御用でございましょうか、一寸聞かしていただくように、仰しやいました。」

信一郎は、それを聞くと、もう夫人に会う確な望みを得た。

「今日、お葬式がありました青木淳氏のことで、一寸お目にかゝりたいのですが……」と、云った。少年は、又勢いよく階段を馳け上つて行つた。今度は、以前のように早くは、馳け降りて来なかつた。会おうか会うまいかと、夫人が思案している様子が、あり／＼と感ぜられた。五分近くも経つた頃だろう。少年はやつと、二階から馳け降りて来た。

「御紹介状のない方には、何方にもお目にかゝらないことにしてあるのですが、貴君様を御信用申上げて、特別にお目にかゝるように仰しやいました。どうぞ、此方へ。」と、少年は信一郎を案内した。玄関を上つた処は、広間だった。その広間の左の壁には、ゴヤの描いた『踊り子』の絵の、可なり精緻な模写が掲げてあつた。

女王蜘蛛

一

信一郎の案内せられた応接室は、青葉の庭に面している広い明るい部屋だった。花模様
の青い絨氈じゅうたんの敷かれた床の上には、桃花心木の卓子マホガニー テーブルを囲んで、水色の蒲団クシヨンの取り
附けてある腕椅子アームチェアが五六脚置かれていた。壁に添うて横わっている安楽椅子いすの蒲団
も水色だった。窓掩おおいも水色だった。それが純白の布で張られている周囲の壁と映じて、
夏らしい清新な気が部屋一杯に充ちていた。信一郎は勧められるまゝに、扉ドアを後にして、
椅子に腰を下すと、落着いて部屋の装飾を見廻した。三方の壁には、それぞれ新しい油絵
が懸つていた。左手の壁にかゝっているのは、去年の二科の展覧会にかなり世評を騒がし
めた新帰朝のある洋画家の水浴する少女の裸体画だった。此家このの女主人公が、裸体画を応接
室に掲げるほど、社会上の因襲とらに囚われていないことを示しているように、画中の少女は、
一糸も纏まとつていない肉体を、冷たそうな泉の中に、その両膝ひざの所迄まで、オズ／＼と浸してい
るのであった。その他卓子テーブルの上に置いてある灰皿にも、炉マンテルピース棚の上の時計にも、草
花を投げ入れてある花瓶にも、此家の女主人公の繊細な鋭い趣味が、一々現われているよ
うに思われた。

杜絶^{とだ}えたピアノの音は、再び続かなかった。が、その音の主は、なか／＼姿を現わさなかつた。少年が茶を運んで来た後は、暫^{しば}らくの間、近づいて来る人の氣勢^{けはい}もなかつた。三分経^たち、五分経^たち、十分経^たつた。信一郎の心は、段々不安になり、段々いら／＼して来た。自分が、余りに奇を好んで紹介もなく顔を見たばかりの夫人を、訪ねて来たことが、軽率であつたように、悔いられた。

その裡^{うち}に、ふと気が付くと、正面の 炉^{マンテルピース} 棚 の上の姿見に、自分の顔が映つていた。彼が何気なく自分の顔を見詰めていた時だつた。ふと、サラ／＼と云^いう衣擦^{きぬず}れの音がしたかと思うと、背後^{うしろ}の扉^{ドア}が音もなく開かれた。信一郎が、周章^{あわて}で立ち上がった時だつた。正面の姿見に早くも映つた白い美しい顔が、鏡の中で信一郎に、嫣然^{えんぜん}たる微笑^えの会^え釈^{しやく}を投げたのである。

「お待たせしましたこと。でも、御葬式から帰つて、まだ着替えも致していなかったのですもの。」

長い間の友達にでも云うような、男を男とも思つていないような夫人の声は、媚羞^{びしゆう}と狎^{なれなれ}々しさに充ちていた。しかも、その声は、何と云う美しい響と魅力とを持っていただろう。信一郎は、意外な親しさを投げ付けられて最初はドギマギしてしまった。

「いや突然伺いまして……」と、彼は立ち上りながら答えた。声が、妙に上ずって、少年か何かのように、赤くなつてしまつた。

深海色ふかみいろにぼかした模様の錦紗きんしゃ縮緬ちりめんの着物に、黒と緑の飛燕ひえん模様の帯を締めた夫人は、そのスラリと高い身体からだを、くねらせるように、椅子に落着けた。

「本当に、盛んなお葬式でしたこと。でも淳さんじゅんのように、あんなに不意に、死んでは堪たまりませんわ。あんまり、突然で丸切り夢のようでございますもの。」

初対面の客に、ロク／＼挨拶あいさつもしない中に、夫人は何のこだわりもないように、自由に喋しゃべり続けた。信一郎は、夫人からスツカリ先手を打たれてしまつて、暫らくは何なんにも云い出せなかつた。彼は我にもあらず、十分受け答もなし得ないで、たゞモジ／＼してゐた。夫人は、相手のそうした躊躇ちゆうちよなどは、眼中にないように、自由に快活だつた。

「淳さんは、たしかまだ二十四でございましたよ。確か五黄ごおうでございましたよ。五黄ごおうの申さるでございましょうかしら。妾わたしと同じに、よく新聞の九星を氣にする方でございましたのよ。オホ／＼／＼。」

信一郎は、美しい蜘蛛の精の繰り出す糸にでも、懸つたように、話手の美しさに酔えいながら、暫らくは茫然ぼうぜんとしていた。

二

夫人は、口でこそ青年の死を悼^{いた}んでいるものゝ、その華やかな容子^{ようす}や、表情の何処^{どこ}にも、それらしい翳^{かげ}さえ見えなかった。たゞ一寸^{ちよつと}した知己^{しりあい}の死を、死んでは少し淋^{さび}しいが、然^{しか}し大したことの無い知己の死を、話しているのに過ぎなかった。信一郎は、可なり拍子抜けがした。瑠璃子^{るりこ}と云^いう名が、青年の臨終の床で叫^いばれた以上、如何^{いか}なる意味かで、青年と深い交渉があるだろうと思つたのは、自分の思い違いかしら。夫人の容子や態度が、示している通り、死んでは少し淋しいが、然し大したことの無い知己に、過ぎないのかしら。そう、疑つて来ると、信一郎は、青年の死際^{しにぎわ}の囁^{うわごと}語に過ぎなかったかも知れない言葉や、自分の想像を頼りにして、突然訪ねて来た自分の軽率な、芝居がかった態度が氣恥しくて堪^{たま}らなくなつて来た。彼は、夫人に会えば、こう云おうあゝ云おうと思つていた言葉が、咽喉^{のど}にからんでしまつて、たゞモジ／＼興奮するばかりだった。

「妾^{わたくし}、今日すっかり時間を間違えていましてね。気が付くと、三時過ぎでございましょう。驚いて、自動車で馳^はせ付けましたのよ。あんなに遅く行つて、本当にきまりが悪うござい

ましたわ。」

その癖、夫人はきまりが悪かったような表情は少しも見せなかった。あの葬場でも、それを思い出している今も。若い美しい夫人の何処に、そうした大胆な、人を人とも思わないような強い所があるのかと、信一郎はたゞ呆氣あつけに取られている丈だけであつた。先刻からの容子を見ると、信一郎が何のために、訪ねて来ているかなどと云うことは、丸切り夫人の念頭にないようだった。信一郎の方も、訪ねて来た用向をどう切り出してよいか、途方にくれた。が、彼は漸ようやく心を定めて、オズ／＼話し出した。

「実は、今日伺いましたのは、死んだ青木君の事に就てでございますが……」

そう云つて、彼は改めて夫人の顔を見直した。夫人が、それに対してどんな表情をするか、見たかつたのである。が、夫人は無雑作だった。

「そう／＼取次の者が、そんなことを申しております。青木さんの事って、何でございますの？」

帝劇で見た芝居の噂うわさばなし話をでもしているように夫人の態度は平静だった。

「実は、貴方あなたさまにこんなことをお話しすべき筋であるかどうか、それさえ私には分らないのです、もし、人違ひとちがいだったら、どうか御免下さい。」

信一郎は、女王の前に出た騎士のように慇懃^{いんぎん}だった。が、夫人は卓上に置いてあつた支那製の団扇^{うちわ}を取つて、煽^{あお}ぐともなく動かしながら、

「ホ、何のお話か知りませんが大層面白くなりそうでございますのね。まあ話して下さいまし。人違いでございましたにしろ、お聞きいたただけ聞き徳でございますから。」と、微笑を含みながら云つた。

信一郎は、夫人の真面目^{まじめ}とも不真面目とも付かぬ態度に、擲^{から}擧^かれたように、まごつきながら云つた。

「実は、私は青木君のお友達ではありません。只偶然^{ただ}、同じ自動車に乗り合わせたものです。そして青木君の臨終に居合せたものです。」

「ほ、う貴君^{あなた}さまが……」

そう云つた夫人の顔は、遠^さに緊張した。が、夫人は自分で、それに気が付くと、直^すぐ身を躲^{かわ}すように、以前の無関心な態度に帰ろうとした。

「そう！ まあ何と云う奇縁^{みゆら}でございますよう。」

その美しい眼を大きく刮^みきながら、努めて何気なく云おうとしたが、その言葉には、何となく、あるこだわりがあるように思われた。

「それで、実は青木君の死際の遺言を聴いたのです。」

信一郎は、夫人の示した僅かばかりの動搖に力を得て突つ込むようにそう言った。

「遺言を貴君さまが、ほゝう。」

そう云つた夫人のけだかい顔にも、隠し切れぬ不安がアリ／＼と読まれた。

三

今迄は、秋の湖のように澄み切つていた夫人の容子が、青年の遺言と云う言葉を聴くと、急に僅ではあるが、擾れ始めた。信一郎は手答えがあつたのを欣んだ。此の様子では、自分の想像も、必ずしも的が外れているとは限らないと、心強く思った。

「衝突の模様は、新聞にもある通ですが、それでも負傷から臨終までは、先ず三十分も間がありましたでしょう。その間、運転手は医者を呼びに行っていましたし、通りかゝる人はなし、私一人が臨終に居合わしたと云うわけですが、丁度息を引き取る五分位前でしたろう、青木君は、ふと右の手首に入れていた腕時計のことを言い出したのです。」

信一郎が、茲まで話したとき、夫人の面は、急に緊張した。そうした緊張を、現すまい

としている夫人の努力が、アリ／＼と分った。

「その時計を何うしようと、云われたのでございますか。その時計を！」

夫人の言葉は、可なり急ぎ込んでいた。其の美しい白い顔が、サツと赤くなった。

「その時計を返して呉れと云われるのです。是非返して呉れと云われるのです。」信一郎も、やゝ興奮しながら答えた。

「誰方にでございましょうか。誰方に返して呉れと云われたのでございましょうか。」

夫人の言葉は、更に急ぎ込んでいた。一度赤くなつた顔が、白く冷たい色を帯びた。美しい瞳までが鋭い光を放つて、信一郎の答えいかにと、見詰めているのだった。

信一郎は、夫人の鋭い視線を避けるようにして云つた。

「それが誰にとも分らないのです。」

夫人の顔に現れていた緊張が、又サツと緩んだ。暫らく杜絶えていた微笑が、ほのかながら、その口辺に現われた。

「じゃ、誰方に返して呉れとも仰しやらなかつたのですの。」夫人は、ホツと安堵したように、何時の間にか、以前の落着を、取り返していた。

「いやそれがです。幾度も、返すべき相手の名前を訊いたのですが、もう臨終が迫ってい

たのでしよう、私の問には、何とも答えなかったのです。たゞ臨終に貴女あなたのお名前を囁うわご語とのように二度繰り返したのです。それで、万一貴女に、お心当りがないかと思つて参上したのですが。」

信一郎は、肝腎かんじんな来意を云つてしまったので、ホツとしながら、彼は夫人が何う答えるかと、じつと相手の顔を見詰めていた。

「ホ、ホ、ホ、ホ。」先ず美しいその唇から、快活な微笑ほほえみが洩もれた。

「淳じゅんさんは、本当に頼もしい方でいらつしやいましたわ。そんな時にまで私わたしを覚えていて下さるのですもの。でも、私腕時計などには少しも覚えがございませんの。お持ちなら、一寸拝見させていたゞけませんかしら。」

もう、夫人の顔に少しの不安も見えなかった。澄み切つた以前の美しさが、歸つて来ていた。信一郎は、求めらるゝまゝに、ポケットの底から、ハンカチーフに括くくんだ謎なぞの時計を取り出した。

「確か女持には違いなのです。少し、象眼の意匠が、女持としては奇抜過ぎますが。」
「妹さんのものじゃございませんのでしょうか。」夫人は無造作に云いながら、信一郎の差し出す時計を受取つた。

信一郎は断るように付け加えた。

「血が少し附いていますが、わざと拭いてありません。衝突の時に、腕環の止金が肉に喰い入ったのです。」

そう信一郎が云った刹那、夫人の美しい眉が曇った。時計を持っている象牙のように白い手が、思い倣しか、かすかにブル／＼と顫え出した。

四

時計を持つている手が、微かに顫えるのと一緒に、夫人の顔も蒼白く緊張したようだった。ほんのもう、痕跡しか残っていない血が、夫人の心を可なり、脅かしたように思われた。

一分ばかり、無言に時計をいじくり廻していた夫人は、何かを深く決心したように、そのひそめた眉を開いて、急に快活な様子を取った。その快活さには、可なりギゴチない、不自然なところが、交っていたけれども。

「あゝ判りました。やっと思ひ付きました。」夫人は突然云い出した。

「私この此時計に心覚えがございますの。持主の方も存じておりますの。お名前は、一寸ちよつと申上げ兼ますが、ある子ししやく爵の令嬢でいらつしやいますわ。でも、私あの方と青木さんが、こうした物を、お取り換かわしになつていようとは、夢にも思いませんでしたわ。屹度きつと、誰方どなたにも秘密にしていращたのでございましょう。だから青木さんは臨終の時にも、遺族の方には知られたくなかつたのでございましょう。道理で見ず知らずの貴方あなたにお頼みになつたのでございますわ。その令嬢と、愛の印としてお取り換しになつたものを、遺品かたみとしてお返しになりましたのでは、ございせんかしら。」

夫人は、明めい瞭りやうに流暢りゆうちやうに、何のよどみもなく云つた。が、何処どことなく力なく空々しいところがあつたが、信一郎は夫人の云うことを疑う確たしかな証拠は、少しもなかつた。

「私も、多分そうした品物だろうとは思つていたのです。それでは、早速その令嬢にお返ししたいと思いますが、御名前を教えていたゞけませんでしょうか。」

「左様でございますね。」と、夫人は首を傾かしげたが、直ぐ「私を信用していたゞけませんでしょうか、私が、女同士で、そつと返して上げたいと思いますのよ。男の方の手からだ、と、どんなに恥しくお思ひになるか分らないと、存じますのよ。いかゞ？」と、承諾を求めるように、ニツコリと笑つた。華やかな艶美えんびな微笑だつた。そう云われると、信一郎は

それ以上、かれこれ言うことは出来なかった。兎に角、謎の品物が思ったより容易に、持主に返されることを、欣ぶより外はなかった。

「じゃ、貴女さまのお手でお返し下さいませ。が、その方のお名前丈は、承ることが出来ませんでしょうか。貴女さまを、お疑い申す訳では決してないのでございますが。」と、信一郎はオズ／＼云った。

「ホ、貴方様も、他人の秘密を聴くことが、お好きだと見えますこと。」夫人は、忽ち信一郎を突き放すように云った。その癖、顔一杯に微笑を湛えながら、「恋人を突然奪われたその令嬢に、同情して、黙って私に委して下さいませ。私が責任を以て、青木さんの霊が、満足遊ばすようにお計いたしますわ。」

信一郎は、もう一步も前へ出ることは出来なかった。そうした令嬢が、本当にいるのかどうかは疑われた。が、夫人が時計の持主を、知っていることは確かだった。それが、夫人の云う通り、子爵の令嬢であるか何うかは分らないとしても。

「それでは、お委せいたしますから、何うかよろしくお願いいたします。」

そう引き退るより外はなかった。

「確にお引き受けいたしましたわ。貴方さまのお名前は、その方にも申上げて置きますわ。」

屹度、その方も感謝なさるだろうと存じますわ。」

そう云いながら、夫人はその血の附いた時計を、懐ふところから出した白い絹のハンカチーフに包んだ。

信一郎は、時計が案外容易に片づいたことが、嬉うれしいような、同時に呆あっけ気ないような氣持がした。少年が紅茶を運んで来たのを合図のように立ち上った。

信一郎が、勧められるのを振切つて、将まさに玄関を出ようとしたときだった。夫人は、何かを思い付いたように云った。

「あ、一寸ちよつとお待ち下さいまし。差上げるものがございますのよ。」と、呼び止めた。

五

信一郎が、暇いとまを告げたときには何とも引き止めなかった夫人が、玄関のところで、急いそぎから呼び止めたので、信一郎は一寸意外に思いながら、振かえり顧かえつた。

「つまらないものでございますけれども、之これをお持ち下さいまし。」

そう云いながら、夫人は何時いつの間に、手にしていたのだろう、プログラムらしいものを、

信一郎に呉れた。一寸開いて見ると、それは夫人の属するある貴婦人の団体で、催される慈善音楽会の入場券とプログラムであつた。

「御親切に対する御礼は、妾わたくしから、致そうと存じておりますけれど、これはホンのお知ちかづ己きになつたお印に差し上げますのよ。」

そう云いながら、夫人は信一郎に、最後の魅するような微笑を与えた。

「いたゞいて置きます。」辞退するほどの物でもないので信一郎はその儘ままポケットに入れた。

「御迷惑でございましょうが、是非お出いで下さいませ、それでは、その節またお目にかゝります。」

そう云いながら、夫人は玄関の扉ドアの外へ出て暫しばらくは信一郎の歩み去るのを見送つていくようであつた。

電車に乗ってから、暫らくの間信一郎は夫人に対する酔えいから、醒さめなかつた。それは確かに酔心よいしん地ちとでも云うべきものだつた。夫人と会つて話している間、信一郎はそのキビくした表情や、優しいけれども、のしかゝつて来るような言葉に、云い知れぬ魅み力りよくをさえ感じていた。男を男とも思わないような夫人に、もっとグン／＼引きずられたいよう

な、不思議な欲望をさえ感じていたのである。

が、そうした酔が、だん／＼醒めかゝるに連れ、冷たい反省が信一郎の心を占めた。彼は、今日の夫人の態度が、何となく気にかゝり始めた。夫人の態度か、言葉かの何処かに、嘘偽りがあるように思われてならなかった。最初冷静だった夫人が、遺言と云う言葉を聞くと、急に緊張したり、時計を暫らく見詰めてから、急に持主を知っていると云い出した。里したことが、今更のように、疑念の的になった。疑ってかゝると、信一郎は大事な青年の遺品を、夫人から体よく捲き上げられたようにさえ思われた。従って、夫人の手に依つて、時計が本当の持主に帰るかどうかさえが、可なり不安に思われ出した。

その時に、信一郎の頭の中に、青年の最後の言葉が、アリ／＼と甦つて来た。『時計を返して呉れ』と云う言葉の、語調までが、ハッキリと甦つて来た。その叫びは、恋人に恋の遺品を返すことを、頼む言葉としては、余りに悲痛だった。その叫びの裡には、もつと鋭い骨を刺すような何物か、混じっていたように思われた。『返して呉れ』と云う言葉の中に『突つ返して呉れ』と云うような凄惨な語気を含んでいたことを思い出した。たとい、死際であろうとも、恋人に物を返すことを、あれほど悲痛に頼むことはない筈だと思われた。

そう考えて来ると、瑠璃子夫人の云った子爵令嬢と青年との恋愛関係は、烟のように頼りない事のようにも思われた。夫人はあゝした口実で、あの時計を体よく取返したのであるまいか。本当は、自分のものであるのを、他人のものらしく、体よく取返したのであるまいか。

が、そう疑つて見たものゝ、それを確める証拠は何もなかった。それを確めるために、もう一度夫人に会つて見ても、あの夫人の美しい容貌と、澆刺な会話とで、もう一度体よく追いつ返されることは余りに判り切っている。

信一郎は、夫人の張る蜘蛛の網にかゝった蝶か何かのように、手もなく丸め込まれ、肝心な時計を体よく、捲き上げられたように思われた。彼は、自分の腑甲斐なさが、口惜しく思われて来た。

彼の手を離れても、謎の時計は、やつぱり謎の尾を引いている。彼は何かして、その謎を解きたいと思つた。

その時にふと、彼は青年が海に捨つるべく彼に委託したノートのことを思い出したのである。

六

青年から、海へ捨てるように頼まれたノートと、信一郎はまだトランクの裡うちに、持っていた。海に捨てる機会を失なくしたので、焼こうか裂こうかと思ひながら、ついその儘ままになつていたのである。

それを、今になつて披ひらいて見ることは、死者に済まないことには違ちがひなかつた。が、時計の謎なぞを知るためには、——それと同時に瑠璃子夫人の態度の謎を解くためには、ノートを見ることより外に、何の手段も思い浮ばなかつた。あんな秘密な時計をさえ、自分には託したのだ、その時計の本当の持主を知るために、ノートを見る位は、許して呉くれるだろうと、信一郎は思つた。

でも家に歸つて、まだ旅行から歸つたまゝに、放り出してあつたトランクを開いたとき、信一郎は可なり良心の苛かしや責を感じた。

が、彼が時計の謎を知ろうと云いう慾望は、もつと強かつた。美しい瑠璃子夫人の謎を解こうと云う慾望は、もつと強かつた。

彼は、恐る恐るノートを取り出した。秘密の封印を解くような興奮と恐怖とで、オズノ

表紙を開いて見た。彼の緊張した予期は外れて、最初の二三枚は、白紙だった。その次ぎの五六枚も、白紙だった。彼は、裏切られたようなイラ／＼しさで、全体を手早くめくって見た。が、何の頁も、真白な汚れない頁だった。彼が、妙な失望を感じながら、最後までめくって行つたとき、やっと其処に、インキの匂のまだ新しい青年の手記を見たのである。それは、ノートの最後から、逆にかき出されたものだった。

信一郎は胸を躍らしながら、貪るようにその一行々々を読んだのである。可なり興奮して書いたと見え、字体が荒んでゐる上に、字の書き違などが、彼処にも此処にもあつた。

——彼女は、蜘蛛だ。恐ろしく、美しい蜘蛛だ。自分が彼女に捧げた愛も熱情も、たゞ彼女の網にかゝつた蝶の身悶えに、過ぎなかつたのだ。彼女は、彼女の犠牲の悶えを、冷やかに楽しんで見ていたのだ。

今年の二月、彼女は自分に、愛の印だと云つて、一個の腕時計を呉れた。それを、彼女の白い肌から、直ぐ自分の手首へと、移して呉れた。彼女は、それをかけ替のない秘蔵の時計であるようなことを云つた。彼女を、純真な女性であると信じていた自分は、そうした賜物を、どんなに欣んだかも知れなかつた。彼女を囲んでゐる多くの男性の

中で、自分こそ選ばれたる唯一人であると思った。勝利者であると思った。自分は、人知れず、得々として之れを手首に入れていた。彼女の愛の把握が其処にあるように思っていた。彼女の真実の愛が、自分一人にあるように思っていた。

が、自分のそうした自惚は、そうした陶醉は滅茶苦茶に、蹂み潰されてしまったのだ。皮肉に残酷に。

昨日自分は、村上海軍大尉と共に、彼女の家の庭園で、彼女の帰宅するのを待っていた。その時に、自分はふと、大尉がその軍服の腕を捲り上げて、腕時計を出して見るのに気が附いた。よく見ると、その時計は、自分の時計に酷似しているのである。自分はそれとなく、一見を願った。自分が、その時計を、大尉の頑丈な手首から、取り外した時の驚きは、何んなであつたらう。若し、大尉が其処に居合せなかつたら、自分は思わず叫声を挙げたに違ない。自分が、それを持っている手は思わず、顫えたのである。自分は急ぎ込んで訊いた。

「これは、何処からお買いになつたのです。」

「いや、買ったものではありません。ある人から貰つたのです。」

大尉の答は、憎々しいほど、落着いていた。しかも、その落着の中に、得意の色がア

り／＼と見えているではないか。

七

——その時計は、自分の時計と、寸分違つてはいなかった。象眼の模様から、鏤め^{ちりば}てあるダイヤモンドの大きさまで。それは、彼女に取つてかけ替のない、たった一つの時計ではなかったのか。自分は自分の手中にある大尉の時計を、庭の敷石に、叩き付け^{たた}てやりたいほど興奮した。が、大尉は自分の興奮などには気の付かないように、

「何^どうです。仲々奇抜な意匠^{ちよつと}でしょう。一寸類のない品物でしょう。」と、その男性的な顔に得意な微笑を続けていた。自分は、自分の右の手首に入れているそれと、寸分違^{たが}わぬ時計を、大尉の眼に突き付けて大尉の誇^{プライド}を叩き潰^{つぶ}してやりたかった。が、大尉に何の罪があろう。自分達立派な男子二人に、こんな皮肉な残酷な喜劇を演^たぜしめるのは、皆彼女ではないか。彼女が操る蜘蛛^{くも}の糸^{ため}の為ではないか。自分は、彼女が帰り次第、真向から時計を叩き返してやりたいと思つた。

が、彼女と面と向つて、不信を詰^{きつ}責^{せき}しようとしたとき、自分は却^{かえ}つて、彼女から忍

びがたい恥かしめを受けた。自分は小児の如く、翻弄され、奴隸の如く卑しめられた。而も、美しい彼女の前に出ると、唾のようにたわいもなく、黙り込む自分だった。自分は憤と恨との為に、わな／＼顫えながら而も指一本彼女に触れることが出来なかった。自分は力と勇気とが、欲しかった。彼女の華奢な心臓を、一思いに突き刺し得る丈の勇気と力とを。

が、二つとも自分には欠けていた。彼女を刺す勇気のない自分は、彼女を忘れようとして、都を離れた。が、彼女を忘れようとすればするほど、彼女の面影は自分を追いついて、自分を悩ませる。

手記は茲で中断している。が半頁ばかり飛んでから、前よりもつと乱暴な字体で始まっている。

何うしても、彼女の面影が忘れられない。それが蝨のように、自分の心を噛み裂く。彼女を心から憎みながら、しかも片時も忘れることが出来ない。彼女が彼女のサロンで多くの異性に取り囲まれながら、あの悩ましき媚態を惜しげもなく、示しているかと思うと、自分の心は、夜の如く暗くなってしまう。自分が彼女を忘れるためには、彼女の存

在を無くするか、自分の存在を無くするか、二つに一つだと思う。

又一寸中断されてから、

そうだ、一層死んでやろうかしら。純真な男性の感情を弄ぶことが、どんなに危険であるかを、彼女に思い知らせてやるために。そうだ。自分の真実の血で、彼女の偽の贈物を、真赤に染めてやるのだ。そして、彼女の僅に残っている良心を、恥しめてやるのだ。

手記は、茲で終っている。信一郎は、深い感激の中に読み了った。これで見ると、青年の死は、形は奇禍であるけれども、心持は自殺であると云つてもよかつたのだ。青年は死場所を求めて、箱根から豆相の間を逍遙つていたのだつた。彼の奇禍は、彼の望み通りに、偽りの贈り物を、彼の純真な血で真赤に染めたのだ。が、その血潮が、彼女の心に僅かに残っている良心を、恥しめ得るだろうか。『返して呉れ』と云つたのは『叩き返して呉れ』と云う意味だつた。信一郎は果して叩き返しただろうか。

彼女が、瑠璃子夫人であるか何うかは、手記を読んだ後も、判然とは判らなかつた。が、たゞ生易しく平和の裡に、返すべき時計でないことは明だつた。その時計の中に含まれている青年の恨みを、相手の女性に、十分思い知らさなければならぬ時計だつたのだ。たゞ、ボンヤリと返しただけでは青年の心は永久に慰められていないのだ。信一郎はもう一度瑠璃子夫人の手から取り返して、青年の手記の中の所謂『彼女』に突き返してやらねばならぬ責任を感じたのである。

が、『彼女』とは一体誰であらう。

そのかみの事

一

「あら！ お危うございますわ。」と、赤い前垂掛の女中姿をした芸者達に、追い纏われながら、莊田勝平は庭の丁度中央にある丘の上へ、登って行つた。飲み過ぎた三

鞭酒ペンしゅのために、可なり危かしい足付をしながら。

丘の上には、数本の大きい八重桜が、爛漫らんまんと咲乱れて、移り逝く春の名残りを止めていた。其処そこから見渡される広い庭園には、晩春の日が、うらくと射さしている。五万坪に近い庭には、幾つもの小山があり芝生があり、芝生が緩やかな勾配こうばいを作つて、落ち込んで行つたところには、美しい水の湧く泉水があつた。

その小山の上にも、麓ふもとにも、芝生の上にも、泉水の畔りにも、数奇すきを凝らした四阿あずまやの中にも、モーニングやフロックを着た紳士や、華美な裾模様すそを着た夫人や令嬢が、三々伍々さんさんごご打ち集つどうているのだつた。

人の心を浮き立たすような笛つづみや鼓つづみの音が、楓かえでの林の中から聞えている。小松の植込の中からは、其処に陣取つている、三越みつこしの少年音楽隊の華やかな奏樂が、絶え間なく続いている。拍子木が鳴っているのは、市村座の若手俳優の手踊りが始まる合図だつた。それに吸い付けられるように、裾模様や振袖ふりそでの夫人達が、その方へゾロ／＼と動いて行くのだつた。

勝平は、そうした光景や、物音を聞いていると、得意と満足との微笑が後から後から湧いて来た。自分の名前に依よつて帝都の上流社会がこんなに集まっている。自分の名に依つ

て、大臣も来ている。大銀行の総裁や頭取も来ている。侯爵^{こうしやく}や伯爵の華族達も見えて
いる。いろ／＼な方面の名士を、一堂の下に蒐^{あつ}めてゐる。自分の名に依つて、自分の社会
的位置で。

そう考えるに付けても、彼は此^この三年以来自分に振りかゝつて来た夢のような華やかな
幸運が、振り顧^{かえり}みられた。

戦争が始まる前は、神戸の微々たる貿易商であつたのが、偶々^{たまたま}持っていた一隻^{せき}の汽船
が、幸運の緒を紡^{つむ}いで極端な遺^{やり}繰^くりをして、一隻一隻と買い占めて行つた船が、お伽^{ときばな}
噺^{はな}の中の白鳥のように、黄金の卵を、次ぎ次ぎに産んで、わずか三年後の今は、千万円
を越す長者になつてゐる。

しかも、金の出来るに従つて、彼は自分の世界が、だん／＼^{ひろ}拡^{ひろ}がつて行くのを感じた。
今までは、『其処にいるか』とも声をかけて呉^くれなかつた人々が、何時^{いつ}の間にか自分の周
囲に蒐^{あつ}まつて来ている。近づき難いと思つていた一流の政治家や実業家達が、何時の間に
か、自分と同じ食卓に就くようになってゐる。自分を招待したり、自分に招待されたりす
るようになってゐる。その他、彼の金力が物を云^いうところは、到^{いた}る処^{ところ}にあつた。緑酒紅^{こうと}
燈^ちの巷^{ちまた}でも、彼は自分の金の力が万能であつたのを知つた。彼は、金さえあれば、何で

も出来ると思つた。現に、此の庭園なども、都下で屈指の名園を彼が五十万円に近い金を投じて買ったのである。現に、今日の園遊会も、一人宛^{あて}百金に近い巨費を投じて、新邸披露として、都下の名士達を招^よんだのである。

聞えて来る笛の音も、鼓の音も奏樂の響も、模擬店^{もぎてん}でビールの満を引いている人達の哄^こ笑^{うしやう}も、勝平の耳には、彼の金力に対する讚美^{さんび}の声のように聞えた。『そうだ。凡ては金だ。金の力さえあればどんな事でも出来る』と、心の裡^{うち}で呟^{つぶや}きながら、彼が日頃の確信を、一層強めたときだった。

「いや、どうも盛会ですな。」と、ビールの杯^{コップ}を右の手に高く翳^{かざ}しながら、蹠^{ひよろ}跟^{ひよろ}と近づいて来る男があつた。それは、勝平とは同郷の代議士だった。その男の選挙費用も、悉く勝平のポケットから、出ているのだつた。

「やあ！ お蔭^{かげ}さまで。」と、勝平は傲然^{ごうぜん}と答えた。『茲^{ここ}にも俺の金の力で動いている男が一人いる。』と、心の中で思いながら。

「よく集まつたものですね。随分珍しい顔が見えますね。松田老侯までが見えていますね。我輩^{わがはい}一昨日は、英国大使館の園遊^{ガーデンパーティー}会^{だけ}に行きましたかね。とても、今日の盛況には及びませんね。尤も^{もつと}、此名園^{この}を見る丈^{だけ}でも、来る価値^{ねうち}は十分ありますからね。ハハハハ。」

代議士の沢田は真正面からお世辞を云^いうのであつた。

「いゝ天気で、何よりですよ。ハハハハ。」と、勝平は鷹揚^{おうよう}に答えたが、内心の得意は、包^{つつみかく}隠^{かく}することが出来なかつた。

「素晴らしい庭ですな。彼処^{あそこ}の杉林から泉水の裏手へかけての幽邃^{ゆうすい}な趣は、とても市内じゃ見られませんね。五十万円でも、これじゃ高くはありませんね。」

そう云いながら、沢田は持っていたビールの杯^{コップ}を、またグイと飲み乾^ほした。色の白い肥^{ふと}つた顔が、咽喉^{のど}の処^{ところ}まで赤くなっている。彼は、転げかゝるように、勝平に近づいて右の二の腕を捕えた。

「主人公が、こんな所に、逃げ込んでいては困りますね。さあ、彼方^{あっち}へ行きましょう。先刻も我党の総裁が、貴方^{あなた}を探していた。まだ挨拶^{あいさつ}をしていないと云つて。」

沢田は、勝平をグン／＼麓^{ふもと}の方へ、園遊会^{にぎわ}の賑いと混雑の方へ引きずり込もうとした。

「いや、もう少しこの儘^{まま}にして置いて下さい。今日一時から、門の処で一時間半も立ち続

けていた上に、先刻シヤンペンしゅ三鞭酒を、六七杯も重ねたものだから。もう暫らく捨て、置いて下さい。直ぐ行きますよ、後から直ぐ。」

そう云つて、捕えられていた腕を、スラリと抜くと、沢田はその機みで、一間ばかりひよろひよると下へ滑つて行つたが、其処で一寸踏み止まると、

「それじゃ後ほど。」と云つたまゝ空になった杯を、右の手で振り廻すようにしながら、ふら／＼丘の麓にある模擬店の方へ行つてしまった。

園内の数ヶ所で始まつている余興は、それ／＼に來会した人々を、分け取りにしているのだらう。勝平の立つている此の広い丘の上にも五六人の人影しか、残つていなかった。勝平に付き纏つていた芸妓達も、先刻踊りが始まる拍子木が鳴ると、皆その方へ馳け出しました。

が、勝平は四辺に人のいないのが、結局氣楽だった。彼は、其処に置いてある白い陶製の腰掛に腰を下しながら、快い休息を食つていた。心の中は、燃ゆるような得意さで一杯になりながら。

彼が、暫らく、ぼんやりと咲き乱れている八重桜の梢越しに、薄青く澄んでいる空を、見詰めている時だった。

「茲^{ここ}は静かですよ。早く上つていらつしやい。」と、近くで若い青年の声がした。ふと、その方を見ると、スラリとした長身に、学校の制服を着けた青年が、丘の麓を見下しながら、誰かを麾^{さしまね}いている所だった。

青年は、今日招待した誰かゝ伴つて来た家族の一人であろう。勝平には、少しも見覚えがなかった。青年も、此の家の主人公が、こんな淋^{さび}しい処に、一人いようななどは、夢にも気付いていないらしく、麓の方を麾^{さしまね}てしまうと、ハンカチーフを出して、其処にある陶製の腰掛^{ほこり}の埃を払っているのだった。

急に、丘の中腹で、うら若い女の声がした。

「まあ、ひどい混雑ですこと。妾^{わたし}いやになりましたわ。」

「どうせ、園遊会なんてこうですよ。あの模擬店の雑沓^{ざつとう}は、何^どうです。見ている丈^{だけ}でも、あさましくなるじゃありませんか。」と、青年は丘の中腹を、見下しながら、答えた。

それには何とも答えないで、昇つて来るらしい人の氣勢^{けはい}がした。青年の言葉に、一寸傷つけられた勝平は、じつと其方を、睨^{にら}むように見た。最初、前髪を左右に分けた束髪の頭の形が見えた。それに続いて、細面の透き通るほど白い女の顔が現れた。

三

やがて、女は丘の上に全身を現した。年は十八か九であろう。その気高い美しさは、彼女の頭上に咲き乱れている八重桜の、絢爛たる美しさをも奪っていた。目も醒むような藤納戸色の着物の胸のあたりには、五色の色系のかすみ模様の繡が鮮かだった。そのほかされた裾には、さくら草が一面に散り乱れていた。白地に孔雀を浮織にした唐織の帯には、帯止めの大きい真珠が光っていた。

「疲れたでしょう。お掛けなさい。」

青年は、埃を払った腰掛を、女に勧めた。彼女は勧められるまゝに、腰を下しながら、横に立っている青年を見上げるようにして云った。

「妾来なければよかったわ。でも、お父様が一緒に行こうく云って、お勧めになるものですから。」

「僕も、妹のお伴で来たのですが、こう混雑しちや厭ですね。それに、此の庭だって、都下の名園だそうですけれども、ちつともよくないじゃありませんか。少しも、自然な素直な所がありやしない。いやにコセくしていて、人工的な小刀細工が多すぎるじゃありませんか。」

せんか。殊に、あの四阿あずまやの建て方なんか厭いとですネ。」

年の若い二人は、此日の園遊会の主催者なる勝平が、たゞ一人こんな淋さびしい処ところにいろいろな夢にも考え及ばないらしく、勝平の方などは、見向きもしないで話し続けた。

「お金さえかければいゝと思つているのでしうか。」

美しい令嬢は、その美しさに似合わないような皮肉な、口の利き方をした。

「どうせ、そうでしょう。成金と云つたような連中は、金額と云う事より外には、何にも趣味がないのでしょう。凡てすべの事を金の物差で計ろうとする。金さえかければ、何でもいゝものだと思える。今日の園遊会なんか、一人宛ずつ五十円とか百円とかを、入れるとか何とか云つていゝそうですが、あの俗悪な趣向を御覧なさい。」

青年は、何かに激しているように、吐き出すように云つた。

先刻から、聞くともなしに、聞いていた勝平は、烈はげしい怒いかりで胸の中が、煮えくり返るやうに思つた。彼は、立ち上りざま、悪口を云つてゐる青年の細首を捕えて、邸やしきの外へ放り出してやりたいと思つた。彼は若い時、東京に出たときに労働をやつた時の名残りに、残つてゐる二の腕ちからこぶの力癭なを思わず撫なでた。が、逡さすに彼の位置が、つい三四分前まで、あんなに誇らしく思つてゐた彼の社会的位置が彼のそうした怒を制して呉くれた。彼は、ム

ラ／＼と湧いて来る心を抑えながら、青年の云うことを、じつと聞き澄していた。

「成金だとか、何とかよく新聞などに、彼等の豪奢な生活を、謳歌しているようですが、金で贏うる彼等の生活は、何んなに単純で平凡でしょう。金が出来ると、女色を漁る、自動車を買う、邸を買う、家を新築する、分りもしない骨董を買う、それ切りです。中に、よつぽど心掛のいゝ男が、寄附をする。物質上の生活などは、いくら金をかけても、直ぐ尽きるのだ。金で、自由になる芸妓などを、弄んでいて、よく飽きないものですね。」

青年は、成金全体に、何か烈しい恨みでもあるように、罵りつゝけた。

「飽きるって。そりやどうか、分りませんね。貴方のように、敏感な方なら、直ぐに飽きるでしょうが、彼等のように鈍い感じしか持っていない人達は、何時迄同じことをやっていても飽きないのじゃなくって！」女は、美しい然し冷めたい微笑を浮べながら云った。

「貴方は、悪口は僕より一枚上ですね。ハ、ハ、ハ、ハ。」

二人は相顧みて、会心の笑いを笑い合つた。

黙って聞いていた勝平の顔は、憤怒のため紫色になった。

四

まだ年の若い元気な二人は、自分達の会話が、傍に居合す此^{このやしき}邸の主人の勝平にどんな影響を与えているかと云う事は、夢にも気の付いていないように、無遠慮に自由に話し進んだ。

「でも、お招^よばれを受けていて、悪口を云うのは悪いことよ。そうじゃなくって。」

令嬢は、右の手に持つている華^{きやしや}奢^さな象牙骨^{ぞうげぼね}の扇^{あふぎ}を、弄^{まさぐ}りながら、青年の顔を見上げながら、遠^さに女らしく云った。

「いや、もつと云ってやつてもいゝのですよ。」と、青年はその浅黒い男性的な凜^{りり}々しい顔を、一層引き緊^しめながら、「第一華族階級の人達が、成金に対する態度なども、可なり卑^{いや}しいと思つて居るのですよ。平生門閥^{もんぼつ}だとか身分だとか云う愚にも付かないものを、傲慢にして、平民だとか町人だとか云って、輕蔑^{けいべつ}している癖に、相手が金があると、平民だろ^うが、成金だろ^うが、此方^{こつち}からペコ／＼して接近するのですからね。僕の父なんかも、何時^{いつ}の間にか、あんな連中と知己^{しりあ}になつて居るのですよ。此間も、あんな連中に担^{かつ}がれて、何とか云う新設会社の重役になるとか云って、騒いで居るものですから、僕はウンと云ってやつたのですよ。」

「おや！ 今度は、お父様にお鉢が廻ったのですか。」女は、青年の顔を見上げて、ニツコリ笑った。

「其処へ来ると、貴女のお父様なんか立派なものだ。何処へ出しても恥かしくない。いつでも、清貧に安んじていらつしやる。」青年は靴の先で散り布いている落花を踏み躪りながら云った。

「父のは病気ですよ。」女は、一寸美しい眉を落し「あんなに年が寄つても、道楽が止められないのですもの。」そう云った声は、一寸淋しかった。

「道楽じゃありませんよ。男子として、立派な仕事じゃありませんか。三十年来貴族院の闘将として藩閥政府と戦つて来られたのですもの。」

青年は、女を慰めるように云った。が、先刻成金を攻撃したときほどの元気はなかった。二人は話が何時か、理に落ちて来た為だろう。孰ちらからともなく、黙ってしまった。青年は、他の一つの腰掛を、二三尺動かして来て、女と並んで腰をかけた。生あたくかい晩春の微風が、襲つて来た為だろう。花が頻りに散り始めた。

勝平は先刻から、幾度此の場を立ち去ろうと思つたか、分らなかつた。が、自分に対する悪評を怖れて、コソ／＼と逃げ去ることは、傲岸な彼の気性が許さなかつた。張り裂

けるような憤怒を、胸に抑えて、じつと青年の攻撃を聞いていたのであった。

彼は、つい十分ほど前まで、今日の園遊会に集まっている、凡ての人々は自分の金力に對する讚美者であると思っていた。讚美者ではなくとも、少くとも羨望者であると思っていた。否少くとも、自分の持つてゐる金の力丈は、認めて呉れる人達だと思っていた。今日集まつてゐる首相を初め、いろいろな方面の高官も、M公爵を筆頭に多くの華族連中も、海軍や陸軍の将官達も、銀行や会社の重役達も、学者や宗教家や、角力や俳優達も、自分の持つてゐる金力の価値丈は認めて呉れる人だと思つてゐた。認めてゐて呉れ、ばこそやつて來たのだと思つてゐた。それなのに、齒牙にもかけたくない、生若い男女の学生が、たとい貴族の子女であるにしろ、今日の会場の中央で、たとい自分の顔を見知らぬにせよ、自分の目前で、自分の生活を罵るばかりでなく、自分が命綱とも思う金の力を、頭から否定してゐる。金を持つてゐる自分達の生活を、否人格まで、散々に辱めてゐる。そう考えて來ると、先刻まで晴やかに華やかに、昂ぶつてゐた勝平の心は、苦い蕪を喰つたように、不快な暗いものになつてしまつた。彼は、かすり傷を負つた豹のような、凄惨な表情をしながら、二人の後姿を睨んでゐた。もう一言何とか云つて見ろ。そのまゝには済まさないぞ。彼の激昂した心がそうした呻を洩してゐた。

五

そうした恐ろしい豹が、彼等の背後に蹲^{うずく}まっていようと、気の付いていない二人は、今度は四辺^{あたり}を憚^{はばか}るように、しめやかに何やら話し始めた。

もう一言、学生が何か云^いつたら、飛び出して、面と向つて云つてやろうと、逸^{はや}つていた勝平も、相手が急に静^{しずか}になつたので、拍子拔^しがしながら、而^{しか}もその儘^{まま}立ち去^さることも、業^ご腹^{うはら}なので、二人の容子^{ようす}を、じつと睨^{にら}み詰めていた。

自分に対する罵詈^{ばり}のため、カツとなつてしまつて、青年の顔も少女の顔も、十分眼に入らなかつたが、今は少し心が落着いたので、二人の顔を、更^{あらた}めて見直した。

気が付いて見れば見るほど、青年は男らしく、美しく、女は女らしく美しかった。殊^{こと}に、少女の顔に見る淨^{きよ}い美しさは、勝平などが夢にも接したことのない美しさだった。彼は、心の中で、金で購^{あがな}つた新橋や赤坂の、名高い美妓^{びぎ}の面影と比較して見た。何と云う格段な相違^{そご}が其処^{そこ}にあつただろう。彼等の美しさは、造花の美しさであつた。偽^{にせ}真珠の美しさであつた。一目丈^{だけ}は、ごまかしが利^きくが二目見るともう鼻に付く美しさであつた。が、この

少女は、夜毎に下る白露に育まれた自然の花のような生きた新鮮な美しさを持っていた。人間の手の及ばない海底に、自然と造り上げられる、天然真珠の如き輝きを持っていた。一目見て美しく、二目見て美しく、見直せば見直す毎に蘇つて来る美しさを持っていた。勝平が、今迄金で買い得た女性の美しさは、此少女の前では、皆偽物だった。金で買ひ得るものと思つていたものは、皆贗物だったのだ。勝平は此少女の美しさからも、今迄の誇を可なり傷けられてしまった。

それ丈ではなかった。此二人が、恋人同士であることが、勝平にもすぐそれと判つた。二人の交している言葉は、低くて聞えなかったが、時々お互に投げ合っている微笑には、愛情が籠もつていた。愛情に燃えていながら、而も淨く美しい微笑だった。

二人の睦じい容子を見ている裡に、勝平の心の中の憤怒は何時の間にか、嫉妬をさえ交えていた。『凡ての事は金だ。金さえあればどんな事でも出来る。』と思つていた彼の誇は、根柢から揺り動かされていた。此の二人の恋人が、今感じ合っているような幸福は、勝平の全財産を、投じて也得られるか、何うか分らなかつた。少女の顔に浮ぶ、淨いしかも愛に溢れた微笑の一つでさえ、購うことが出来るだろうか。いかにも、新橋や赤坂には、彼に対して、千の媚を呈し、万の微笑を贈る女は、幾何でもいる。が、その媚や微笑の底

には、袖乞そでぐいのような卑いやしさや、狼おおかみのような貪慾どんよくさが隠かくされていた。此の若い男女が交まじわっているような微笑みえうとは、金剛石と木炭のように違ちがっていた。同じ炭素から成なつていても、金剛石が木炭と違ちがうように、同じ笑わらでも質しつが違ちがっていたのだ。

青年が、勝平の金力をあんなに、罵倒ばとうするのも無理はなかった。実際彼は、金力で得られない幸福しあふがあることを、勝平の前で示ししているのだった。

青年の罵倒ばとうが単なる悪口あくぐちでなく、勝平に取とつては、苦い真理である丈だけに、勝平の恨にくみは骨ほねに入いつた。また、罵倒ばとうした後で、罵倒する権利のあることを、勝平にマザ／＼と見せ付けた丈だけに、勝平の憤いきどおりは、肝かんに銘めいじた。彼は、一突き刺された闘牛闘牛のように、怒いかっていた。もう、自制もなかった。彼が、先刻まで誇うっていた社会的位ゐ置ちに対する遠慮もなかった。彼は檉かしの木に出来る木瘤きこぶのような掌てのひらを握にぎりしめながら、今にも青年に飛びかゝるような身構みくまえをしていた。

その時に、蹲うずくまっていた青年がと立ち上あつた。女も続ついて立ち上ありながら云いつた。

「でも、何か召めし上あつたら何なんう。折角せきかくいらしつたのですもの。」

「僕は、成金輩ばちの粟あわを食くむを潔いさぎよしとしないのです。ハ、ハ、ハ。」

青年は、半分冗談じやうたんで云いつたのだつた。が、憤怒ふんぬに心の狂くるいかけていた勝平にとっては、

最後の通牒つうちようだった。彼は、寝そべっていた獅子ししのように、猛然と腰掛から離れた。

六

勝平の激怒には、まだ気の付かない青年は、連の女を促して、丘を下ろうとしているのだった。

「もし、もし、暫らくしば。」勝平の太い声も、速に顫ふるえた。

青年は、何気ないように振返った。

「何か御用ですか。」落着いた、しかも気品のある声だった。それと同時に、連の女も振返った。その美しい眉まゆに、一寸勝平の突然な態度を咎とがめるような色が動いた。

「いや、お呼び止めいたして済みません。一寸御挨拶ごあいさつがしたかったです。」と、云って勝平は、息を切った。昂奮こうふんの為に、言葉が自由でなかった。二人の相手は、勝平の昂奮した様子を、不思議そうにジロ／＼見ていた。

「先刻、皆様に御挨拶ごあいさつした筈はずですが、貴君方あなたは遅くいらしたと見えて、まだ御挨拶をしなかったようです。私が、此家このの主人の莊田勝平です。」

そう云いながら、勝平はわざと丁寧に、頭を下げた。が、両方の手は、激怒のために、ブル／＼と顫えていた。

眞に、青年の顔も、彼に寄り添うている少女の顔もサツと変った。が、二人とも少しも悪^{わる}怖^びれたところはなかった。

「あゝそうですか。いや、今日はお招きに与^{あず}つて有難うございます。僕は、御存じの杉野直^{ただし}の息子です。茲^{ここ}に、いらつしやるのは、唐沢男爵^{だんしやく}のお嬢さんです。」

青年の顔色は、青白くなっていたが、少しも狼狽^{ろうばい}した容子は見せなかった。昂然^{みんぜん}とした立派な態度だった。青年に紹介されて、しとやかに頭を下げた令嬢の容子にも、微塵^{みじん}狼狽^{ろうた}えた様子はなかった。

「いや、先刻から貴君の御議論を拝聴していました。いろ／＼我々には、参考になりました。ハハハ。」

勝平は、高飛車に自分の優越を示すために、哄笑^{こうしょう}しようとした。が、彼の笑い声は、咽喉^{のど}にからんだまゝ、調子外れの叫び声になった。

自分の罵倒^{ばとう}が、その的の本人に聴かれたと云うことが、明かになると、青年も眞^まに当惑^{さす}の容子を見せた。が、彼は冷静に落着いて答えた。

「それはとんだ失礼を致しました。が、つい平生の持論が出たものですから、何とも止むを得ません。僕の不謹慎はお詫びします。が、持論は持論です。」

そう云いながら、青年は冷めたい微笑を浮べた。

自分が飛び出して出さえすれば、周章狼狽して、一溜りもなく参ってしまうだろうと思つていた勝平は、当が外れた。彼は、相手が思いの外に、強いのでタジ／＼となつた。が、それ丈彼の憤怒は胸の裡に湧き立つた。

「いや、お若いときは、金なんかと云つて、よく輕蔑したがるものです。私なども、その覚えがあります。が、今にお判りになりますよ。金が、人生に於てどんなに大切であるかが。」

勝平は、出来る丈高飛車に、上から出ようとした。が、青年は少しも屈しなかつた。

「僕などは、そうは思いません。世の中で、高尚な仕事の出来ない人が、金でも溜めて見よう云うことに、なるのじゃありませんか。僕は事業を事業として、楽しんでいる実業家は好きです。が、事業を金を得る手段と心得たり、又得た金の力を他人に、見せびらかそうとするような人は嫌いです。」

もう、其処そこに何等の儀礼もなかつた。それは、言葉で行われている格闘だつた。青年の

顔も蒼ざめていた。勝平の顔も蒼ざめていた。

「いや、何とでも仰しやるがよい。が、理窟じやありません。世の中のことは、お坊ちやんの理想通に行くものではありません。貴君にも金の力がどんなに恐ろしいかが、お判りになる 때가 来ますよ。いや、屹度来ますよ。」

勝平は、その大きい口を、きつと結びながら青年を睨みすえた。が、青年の直ぐ傍に、立ち竦んだまゝ、黙っている彫像のような姿に目を転じたとき、勝平の心は、再びタジノゝとなった。その美しい顔は勝平に対する憎悪に燃えていたからである。

七

青年が、何かを答えようとしたとき、女は突如彼を遮ぎった。

「もういゝじやございませんか。私達が、参つたのがいけなかつたのでございますもの。御主人には御主人の主義があり貴君には貴君の主義があるのですもの。その孰れが正しいかは、銘々一生を通じて試して見る外はありませんわ。さあ、失礼をしてお暇しようじやありませんか。」

少女は、青年より以上に強かった。其処には火花が漏れるような堅さがあつた。それだけ、勝平に対する侮辱も、甚だしかつた。こんな男と言葉を交えるのさえ、馬鹿々々しいと、云つた表情が、彼女の何処かに漂つていた。孔雀のように美しい彼女は、孔雀のような襟度を持つてゐるのだつた。

青年も、自分の態度を、余り大人気ないと思ひ返したのだろう。女の言葉を、戈を収める機会にした。

「いや、飛んだ失礼を申上げました。」

そう云い捨てたまゝ、青年は女と並んで足早に丘を下つて行つた。敵に、素早く身を躲されたように、勝平は心の憤怒を、少しも晴さない中に、やみく／＼と物別れになつたのが、口惜しかつた。もつと、何とか云えばよかつた。もつと、青年を恥しめてやればよかつたと、口惜しがつた。睦じそうに並んで、遠ざかつて行く二人を見てゐると、勝平は自分の敗れたことが、マザ／＼と判つて来た。青年の罵倒に口惜しがつて、思わず飛び出したところを、手もなく扱われて、うまく肩透しを喰つたのだつた。どんな点から、考えて見ても、自分にいゝ所はなかつた。敗戦だつた。醜い敗戦だつた。そう思うと、わざ／＼五万を越す大金を消つて、園遊会をやつたことまでが、馬鹿らしくなつた。大臣や総裁や公

うしやく
爵 などの挨拶を受けて、有頂天にまで行つた心持が、生若い男女のために地の底へまで引きずり込まれたのだ。

彼の憤りと恨みとが、胸の中で煮えくり返つた時だった。その憤りと恨みとの嵐の中に、徐々に鎌首を擡げて来た一念があつた。それは、云うまでもなく、復讐の一念だつた。そうだ、俺の金力を、あれほどまで、侮辱した青年を、金の力で、骨までも思い知らしてやるのだ。青年に味方して、俺にあんな憎悪の眼を投げた少女を、金の力で髓までも、思い知らしてやるのだ。そう思うと、彼の胸に、新しい力が起つた。

青年の父の杉野直と云う子爵も、少女の父の唐沢男爵も、共に聞えた貧乏華族である。黄金の戈の前に、黄金の剣の前には、何の力もない人達だった。

が、何うして戦つたらいいだろう。彼等の父を苛めることは何でもないことに違いない。が、単なる学生である彼等を、苛める方法は容易に浮かんで、来なかつた。その時に、勝平の心に先刻の二人の様子が浮かんだ。睦じく語っている恋人同士としての二人が浮かんだ。それと同時に、電のように、彼の心にある悪魔的な考えが思い浮かんだ。その考えは、電のように消えないで、徐々に彼の頭に喰い入つた。

まだ、春の日は高かつた。彼が招いた人達は園内の各所に散つて、春の半日を楽しく遊

び暮している。が、その人達を招いた彼丈^{だけ}は、たゞ一人怏々^{おうおう}たる心を懷^{いだ}いて、長閑^{のどか}な春の日に、悪魔のような考えを、考えている。

「あら、まだ茲^{ここ}にいらしたの、方々探したのよ。」

突如、後に騒^{さわ}がしい女の声^{こゑ}がした。先刻^{げいぎ}の芸妓^{げいぎ}達が歸^{かへ}つて來たのである。

「さあ！ 彼方^{あつち}へいらつしやい。お客様^{きやくさま}が皆、探しているのよ。」二三^{さん}人彼のモーニングコート^{コート}の腕^{うで}に縫^{すが}つた。

「あゝ行くよ行くよ。行つて酒でも飲^のむのだ。」彼は、氣の抜けたように、呟^{つぶや}きながら、芸妓^{げいぎ}達に引きずられながら、もう何の興味も無くなつた來客^{きやく}達の集まっている方^{かた}へ拉^らせられた。

父と子

『またお父様と兄様の争いが始まっている。』そう思いながら、瑠璃子^{るりこ}は読みかけていたツルゲネフの『父と子』の英訳の頁^{ページ}を、閉じながら、段々高まって行く父の声に耳を傾けた。

『父と子』の争い、もつと広い言葉で云え^いば旧時代と新時代との争い、旧思想と新思想との争い、それは十九世紀後半の露西亞^{ロシア}や西欧諸国^{だけ}丈の悩みではなかった。それは、一種の伝染病として、何時^{いつ}の間にか、日本の上下の家庭にも、侵入しているのだった。

五六十になる老人の生活目標と、二十年代の青年の生活目標とは、雪と炭のように違っている。一方が北を指せば、一方は西を指している。老人が『山』と云つても、青年は『川』とは答えない。それなのに、老人は自分の握っている権力で、父としての権力や、支配者としての権力や、上長者としての権力で、青年を束縛しようとする。西へ行きたがつている者を、自分と同じ方向の、北へ連れて行くこうとする。其処^{そこ}から、色々な家庭悲劇が生れる。

瑠璃子は、父の心持も判^{わか}った。兄の心持も判った。父の時代に生れ、父のような境遇に育ったものが、父のような心持になり、父のような目的のために戦うのは、当然であるように想^{おも}われた。が、兄のような時代に生れ、兄のような境遇に育ったものが、兄のように

考えるのも亦^{また}当然であるように思われた。父も兄も間違^{まちが}つてはいなかった。お互に、間違^{まちが}つていないものが、争^やつてゐる丈に、その争いは何時が来ても、止^やむことはなかった。何時が来ても、一致しがたい平行線の争いだった。

母が、昨年死んでから、淋^{さび}しくなつた家庭は、取り残された人々が、その淋しさを償^{つぐな}うために、以前よりも、もつと睦^{むつ}まじくなるべき筈^{はず}なのに、実際はそれと反対だった。調^{ピース}和^{メイカー}者としての母がいなくなつた為^{ため}、兄と父との争いは、前よりも激しくなり、露骨になつた。

「馬鹿^{ばか}を云え！ 馬鹿^{ばか}を云え！」

父のしわがれた張り裂けるような声が、聞えた。それに續いて、何かを擲^{なげ}つような物音が、聞えて来た。

瑠璃子は、その音をきくと、何時も心が暗くなつた。また父が兄の絵具を見付けて、擲^{なげ}つてゐるのだ。

そう思つてゐると、又カンバスを引き裂いてゐるらしい、帛^{きぬ}を裂く激しい音が聞えた。瑠璃子は、思わず両手で、顔を掩^{おほ}うたまゝかすかに顫^{ふる}えていた。

芸術と云つたようなものに、粟^{あわ}粒^{つぶ}ほどの理解も持つてゐない父が悲しかった。絵を描

くことを、ペンキ屋が看板を描くのと同じ位に卑しく見貶している父の心が悲しかった。それと同じように、芸術をいろ／＼な人間の仕事の中で、一番尊いものだと思っている、兄の心も悲しかった。父から、描けば勘当だと厳禁されているにも拘わらず、コソ／＼と父の眼を盗んで、写生に行ったり、そつと研究所に通ったりする兄の心が、悲しかった。が、何よりも悲劇であることは、そうしたお互に何の共鳴も持っていない人間同士が、父と子であることだった。父が、卑しき抜いていることに、子が生涯を捧げていることだった。父の理想には、子が少しも同感せず、子の理想には父が少しも同感しないことだった。カンバスが、引き裂かれる音がした後は、暫らくは何も聞えて来なかった。争いの言葉が聞えて来る裡は、それに依つて、争いの経過が判った。が、急に静になつてしまうと、却つて妙な不安が、聞いている者の心に起つて来る。瑠璃子はまた父が、興奮の余り心慄が昂進して、物も云えなくなっているのではないかと思うと、急に不安になつて来て、争いの舞台たる兄の書斎の方へ、足音を忍ばせながらそつと近づいて行つた。

瑠璃子は、そつと足音を立てないように、縁側ヴェランダを伝つとうて兄の書斎へ歩み寄った。とゞろく胸を押えながら縁側ヴェランダに向むかひている窓の硝子越ガラスしに、そつと室内をのぞき込んだ。彼女が予期した通りの光景が其処そこにあつた。長身の父は威丈高に、無言のまゝ、兄を睨にらみ付けて立つていた。痩せた面長な顔は、白く冷めたく光っている。腰の所へやつてゐる手は、ブル／＼顫ふるえている。兄は兄で、昂然こうぜんとそれに対していた。たゞさえ、蒼白あおしろい顔が、激しい興奮のために、血の氣を失つて、死人のように蒼ざめてゐる。

父と子とは、思想も感情もスツカリ違つていたが、負けぬ氣の剛情なところ丈だけが、お互に似ていた。父子おやこの争まじひは、それ丈激しかった。

二人の間には、絵具のチューブが、滅茶苦茶めちゃくちやに散つていた。父の足下には、三十号の画布ンパスが、枠に入つたまゝ、ナイフで横に切られていた。その上に描かれてゐる女の肖像も、無残にも頬の下から胸へかけて、一太刀浴びてゐるのだつた。

そうした光景を見た丈で、瑠璃子の胸が一杯になつた。父が、此上兄このはずかを恥しめないように、兄が大人しく出て呉くれるようにと、心私ひそかに祈つていた。

が、父と兄との沈黙は、それは戦いの後の沈黙でなくして、これからもつと怖おそろしい戦いに入る前の沈黙だつた。

帆布^{カンバス}までも、引き裂いた暴君のような父の前に、真面目^{まじめ}な芸術家として兄の血は、熱

湯のように、沸いたのに違いなかった。いつもは、父に對して、冷然たる反抗を示す兄だったが、今日は心の底から、憤^{いきどお}つているらしかった。憤怒^{ふんぬ}の色が、アリ／＼とその秀^{ひい}でた眉^{まゆ}のあたりに動いていた。

「考えて見るがいゝ。堂々たる男子が、画筆などを弄^{もてあそ}んでいて何うするのだ。」父は、今^{いま}迄^{まで}張り詰めていた姿勢を、少しく崩しながら、苦い物をでも吐き出すように云った。

「考えて、見る迄ありません。男子として、立派な仕事です。」兄の答えも冷たく鋭かった。

「馬鹿^{ばか}を云え！ 馬鹿を！」父は、又カツとなつてしまった。「画^えなどと云うものは、男子が一生を捧^{ささ}げてやる仕事では決してないのだ。云わば余戯^{あそび}なのだ。なぐさみなのだ。お前が唐沢の家の嗣子^{しし}でなければ、どんな事でも好き勝手にするがいゝ。が、俺^{わし}の子であり、唐沢の家の嗣子である以上、お前の好き勝手にはならないのだ。唐沢の家には、画描きなどとは出たくないのだ。俺の子は、画描きなどにはなつて貰^{もら}いたくないのだ！」

父は、そう叫びながら、手近にある卓^{デスク}の端を力委^{まか}せに二三度打った。瑠璃子には、父が貴族院の演壇で獅子吼^{ししこ}する有様が、何処^{どこ}となく慥^{しの}げられた。が、相手が現在の子であること

が、父の姿を可なり淋しいものにした。

「お前は、父が三十年来の苦闘を察しないのか。お前は、俺の子として、父の志を継ぐことを、名譽だとは思わないのか、俺の志を継いで、俺が年来の望みを、果させて呉れようとは思わないのか。お前は、唐沢の家の歴史を忘れたのか、お前にいつも話している、お祖父様の御無念を忘れたのか。」

それは、父が少し昂奮すれば、定まって出る口癖だった。父は、それを常に感激を以て語った。が、子はそれを感激を以て聞くことが、出来なかった。唐沢の家が、三万石の小大名ではあったが、足利時代以来の名家であるとか、維新の際には祖父が勤王の志が、厚かったにも拘わらず、薩長に売られて、朝敵の汚名を取り、悶々の裡に憤死したことや、その死床で洩した『敵を取って呉れ。』という遺言を体して、父が三十年來貴族院で、藩閥政府と戦つて来たことなど、それは父にとって重大な一生を支配する生活の刺戟だったかも知れない。が、子に取つては、彼の画題となる一茎の草花に現われている、自然の美しさほどの、刺戟も持つていなかった。時代が違つてい、人間が違つていた。何の共通点もない人間同士が、血縁でつながっていることが、何より大きい悲劇だった。

「黙つていては分らない。何とか返事をなさい！」日本の大正の王リアは、こう云つて石

のように黙っている子に挑んだ。

三

「お父さん！」兄は静に頭を擡げた。平素は、黙々として反抗を示す丈の兄だったが、今日は徹底的に云って見ようという決心が、その口の辺に動いていた。「貴方が、幾何仰しやっても、僕は政治などには、興味が向かないのです。殊に現在のような議會政治には、何の興味も持っていないのです。僕は、お父さんの仰しやるように、法科を出て政治家になるなどと云うことには、何の興味もないのです。」兄の言葉は、針のように鋭く澄んできた。

「もう少し待って下さい。もう少し、氣長に私のすることを見て居て下さい。その中に、画を描くことが、人間としてどんなに立派な仕事であるか、堂々たる男子の事業として恥かしくないかを、お父さんにも、お目にかけ得る時が来るだろうと思うのです。」
「あゝよして呉れ！」父は排い退けるように云った。「そんな事は聞きたくない。馬鹿な！ 画描きなどが、画を描くことなどが、……」父は苦々しげに言葉を切った。

「お父さんには、幾何云つても解らないのだ。」兄も投げ捨てるように云った。

「解つてたまるものか。」父の手がまたかすかに顫えた。

二人が、敵同士のように黙つて相對峙している裡に、二三分過ぎた。

「光一！」父は改まったように呼びかけた。

「何です！」兄も、それに応ずるように答えた。

「お前は、今年の正月俺が云つた言葉を、まさか忘れはしまいな。」

「覚えています。」

「覚えているか、それじゃお前は、此の家にはおられない訳だろう。」

兄の顔は、憤怒のために、見る／＼中に真赤になり、それが再び蒼ざめて行くに従つて、悲壮な顔付になつた。

「分りました。出て行けと仰しやるのですか。」怒のために、兄はわな／＼顫えていた。

「二度と、画を描くと、家には置かないと、あの時云つて置いた筈だ。お前が、俺の干渉を受けたくないのなら、此家を出て行く外はないだろう。」父の言葉は鉄のように堅かつた。

瑠璃子は、胸が張り裂けるように悲しかった。一徹な父は、一度云い出すと、後へは引

かない性質たちだった。それに対する兄が、父に劣らない意地張だった。彼女が、常々心配していた大破裂カタストロフがとうとう目前に迫つて来たのだった。

父の言葉に、カツと逆上してしまつたらしい兄は、前後の分別もないらしかった。

「いや承知しました。」

そう云うかと思うと、彼は俯うつむきながら、狂人のように其処そこに落ち散っている絵具のチューブを拾い始めた。それを拾つてしまうと、机の引き出しを、滅茶苦茶に掻かき廻し始めた。机の上に在った二三冊のノートのようなものを、風呂敷ふろしきに包んでしまうと、彼は父に一寸目礼として、飛鳥のように室へやから駈かけ出そうとした。

父が、駭おどろいて引き止めようとする前に、狂気のように室内に飛び込んだ瑠璃子は、早くも兄の左手ゆんでに縋すがつていた。

「兄さん！ 待つて下さい！」

「お放しよ。瑠璃ちゃん！」

兄は、荒々しく叱しつするように、瑠璃子の手をもぎ放した。

瑠璃子が、再び取り縋ろうとしたときに、兄は下へ行く階段を、激しい音をさせながら、電光げんくわの如く馳かけ下つていた。

「兄さん！ 待って下さい！」

瑠璃子が、声をしぼりながら、後から馳け下ったとき、帽子も被らずに、玄関から門の方へ足早に走っている兄の後姿が、チラリと見えた。

四

兄の後姿が見えなくなると、瑠璃子はよくと泣き崩れた。張り詰めていた気が碎けて、涙はとめどもなく、双頬を湿おした。

母が亡くなつてからは、父子三人の淋しい家であつた。段々差し迫つて来る窮迫に、召使の数も減つて、たゞ忠実な老婢と、その連合の老僕とがいる丈だつた。

それなのに、僅かしか残っていない齒の中から、またその目ぼしい一本が、抜け落ちるように、兄がいなくなる。父と兄とは、水火のように、何処まで行つても、調和するようには見えなかつたけれども、兄と瑠璃子とは、仲のよい兄妹だつた。母が亡くなつてからは、更に二人は親しみ合つた。兄はたゞ一人の妹を愛した。殊に父と不和になつてから、肉親の愛を換し得るのはたゞ妹だけだつた。妹もたゞ一人の兄を頼つた。父からは、得ら

れない理解や同情を兄から仰いでいた。瑠璃子には父の一徹も悲しかった。兄の一徹も悲しかった。

が、何よりも氣遣われたのは、着のみ着の儘で、飛び出して行つた兄の身の上である。理性の勝つた兄に、万一の間違があるうとは思われなかった。が、貧乏はしていても、華族の家に生れた兄は、独立して口を糊のりして行く手段を知っている訳はなかった。が、一時の激昂のために、カツと飛び出したものゝ屹度きつと帰つて来て下さるに違ちがひない。或は麻布あさぶの叔母さんの家にも、行くに違ちがひない。やつと、そう氣休めを考えながら、瑠璃子は涙を拭ぬぐい拭い、階段を上つて行つた。二階にいる父の事も、氣がかりになつたからである。

父はやつぱり兄の書齋にいた。先刻と寸分違ちがひない位置にいた。たゞ、傍にあつた椅子を引き寄せて、腰を下したまゝじつと俯うつむいてゐるのだつた。たつた一人の男の子に、背き去られた父の顔を見ると、瑠璃子の眼には新しい涙が、また一時に湧わいて来るのであつた。此この頃、交じりかけた白髪しらがが急に眼に立つように思つた。

『齒ぬが脱ぬけて演説の時に声が洩もれて困まる』と、此頃口癖のように云う通とおり、口の辺あたりが淋しく潤しなびているのが、急に眼に付くように思つた。

一生を通じて、やつて来た仕事しごとが、自分の子から理解せられない、それほど淋しみしいこと

が、世の中にあるだろうかと思うと、瑠璃子は、父に言葉をかける力もなくなって、その儘床の上に、再び泣き崩れた。

最愛の娘の涙に誘われたのであろう。老いた政治家の頬にも、一条の涙の痕が印せられた。

「瑠璃子！」父の声には、先刻のような元氣はなかった。

「はい！」瑠璃子は、涙声でかすかに答えた。

「出て行つたかい！ 彼は？」あれ「遺に何処となく恩愛の情が纏わっている声だった。」

「はい！」彼女の声は前よりも、力がなかった。

「いやいゝ。出て行くがいゝ。こころざし志を異にすれば親でない、子でない、血縁は続いていても路傍の人だ。瑠璃子！ お前には、父さんの心持は解るだろう。お前丈は、俺の心持は解るだろう。お前が男であつたら、屹度お父さんの志を継いで呉れるだろうとは、平生思っているのだが。」父は元氣に云つた。が、声にも口調にも力がなかった。

瑠璃子は、それには何とも答えなかった。が、瑠璃子の胸に、一味焼くような激しい気性と、父にも兄にも勝るような強い意志があることは、彼女の平生の動作が示していた。それと同じように、貴族的な氣品があつた。昔氣質の父が時々瑠璃子を捕えて『男なりせ

ば』の嘆を漏すのも無理ではなかった。

まだ父が、何か云おうとする時であった。邸前の坂道を疾駆して馳け上る自動車の爆音が聞えたかと思うと、やがてそれが門前で緩んで、低い警笛と共に、一輛の自動車が、唐沢家の古びた黒い木の門の中に滑り入った。

五

父子の悲しい淋しい緊張は、自動車の音で端なく破られた。瑠璃子は、もつとこうしていたかった。父の気持も訊き、兄に対する善後策も講じたかった。彼女は、自分の家の恐ろしい悲劇を知らず顔に、自動車で騒々しく、飛び込んで来る客に、軽い憎悪をさえ感じたのである。

老婢は、何かに取り紛れているのだろう、容易に取次ぎには出て来ないようだった。

「老婢はいないのかしら！」そう呟くと、瑠璃子は自分で、取次ぎするために、階段を下りかけた。

「大抵の人だったら、会えないと断るのだよ。いゝかい。」

そう言葉をかけた父を振り顧^{かえ}つて見ると、相変らず蒼^{あお}い顫^{ふる}えているような顔色をしていた。

瑠璃子が、階段を下りて、玄関の扉を開けたとき、彼女は訪問者が、一寸^{ちよつと}意外な人だったのに駭^{おどろ}いた。それは、彼女の恋人の父の杉野子爵^{ししやく}であつたからである。

「おや入らっしゃいまし。」そう云^いいながら、彼女は心の中で可なり当惑した。杉野子爵は、彼女にとっては懐^{なつか}しい恋人の父だった。が、父と子爵とは、決して親しい仲ではなかつた。同じ政治団体に属していたけれども、二人は少しも親しんでいなかった。父は、内心子爵を賤^{いや}しんでいた。政商達と結託して、私利を追うているらしい子爵の態度を、可なり不快に思っているらしかつた。公開の席で、二三度可なり激しい議論をしたと云う噂^{うわさ}なども、瑠璃子は何時^{いつ}となく聴いていた。

そうした人を、こんな場合、父に取次ぐことは、心苦しかつた。それかと云つて、自分の恋人の父を、情^{すげ}なく返す気にもなれなかつた。彼女が躊躇^{ちゆうちよ}しているのを見ると、子爵は不審^{いぶかし}そうに訊^きいた。

「いらつしやらないのですか。」

「いゝえ！」彼女は、そう答えるより外はなかつた。

「杉野です。一寸お取次を願います。」

そう云われると、瑠璃子は一も二もなく取次がずにはいられなかった。が、階段を上るとき、彼女の心にふとある動揺どよめきが起った。『まさか』と、彼女は幾度も打ち消した。が、打ち消そうとすればするほど、その動揺どよめきは大きくなった。

杉野子爵の長男直也なおやは、父に似ぬ立派な青年だった。音楽会で知り合ってから、瑠璃子は知らず識らずしその人に惹き付けられて行つた。男らしい顔立と、彼の火のような熱情とが、彼女に対する大きな魅惑だった。二人の愛は、激しく而も清浄しやかだった。

二人は将来を誓い合つた。学校を出れば、正式に求婚します。青年は口癖のように繰返した。

青年は今年の四月学習院の高等科を出ている。『学校を出ると云うことが、学習院を出ることを、意味するなら。』そう考えると瑠璃子は踏んでいる足が、階段に着かぬように、そわ／＼した。まだ一度も、尋ねて来たことのない子爵が、わぎ／＼尋ねて来る。そう考えて来ると、瑠璃子の小さい胸は取り止めもなく掻き擾かみだされてしまった。

が、つい此間この青年と園遊会で会つたとき、彼はおくびにも、そんなことは云わなかった。正式に突然求婚して、自分を駭おどろかそうと云う悪戯いたづらかしら。彼女は、そんなことまで、咄と

嗟つさの間に空想した。

が、苦り切っている、父の顔を見たとき彼女の心は、急に暗くなった。縦令たとい、それが瑠璃子の思う通りの求婚であつたにしろ、父がオイソレと許すだろうか。心の中で、賤しいやんでいる者の子息に、最愛の娘を与えるだろうか。子は子である。父は父である。之れ位この事理の分らない父ではない。が、兄が突然家出して、さなきだに淋しい今、自分を手離して、他家よそへやるだろうか。そう思うと、瑠璃子の心に伸びた空想の翼は、また忽ち半たちまなかば以上切り取られてしまった。が、万一そうなら、又万一父が容易に承諾したら？

「あの！ 杉野子爵がお見えになりました。」彼女の息は可なりはずんでいた。

六

父は娘の心を知らなかった。杉野子爵ししやくの突然の来訪を、迷惑がる表情があり／＼と動いた。

「杉野！ ふーむ。」父は苦り切つたまゝ容易に立とうとはしなかった。

父が、杉野子爵に対してこうした感情を持つている以上、又兄の家出と云う傷ましいたい事

件が起つてゐる以上、縦令子爵の来訪が、瑠璃子の夢見てゐる通の意味を持つていたにしろ、容易に纏まる筈はなかつた。そう考えると、彼女の心は、墨を流したように暗くなつてしまつた。

「仕方がない！ お通しなさい！」

そう云つたまゝ、父は羽織を着るためだろう、階下の部屋へ下りて行つた。

瑠璃子は、恋人の父と自分の父との間に、まつわる不快な感情を悲しみながら、玄関へ再び降りて行つた。

「お待ちせいたしました、どうぞお上り下さいませ。」

「いや、どうも突然伺いまして。」と、子爵は如才なく挨拶しながら先に立つて、応接室に通つた。

古いガランとした応接室には、何の装飾もなかつた。明治十幾年に建てたと云う洋館は、間取りも様式も古臭く旧式だつた。瑠璃子は、客を案内する毎に、旧式の椅子の蒲団が、破れかけてゐることなどが氣になつた。

父は、直ぐ応接室へ入つた。心の中の感情は可なり隔たつていたが、面と向うと、遠に打ち解けたような挨拶をした。瑠璃子は、茶を運んだり、菓子を運んだりしながらも、主

客の話が気にかゝった。が、話は時候の挨拶から、政界の時事などに進んだまゝ、用向きらしい話には、容易に触れなかった。

立ち聞きをするような、はしたない事は、思いも付かなかった。瑠璃子は、来客が気になりながらも、自分の部屋に退いて、不安な、それかと云つて、不快ではない心配を続けていた。

恋人の顔が、絶えず心に浮かんで来た。過ぎ去つた一年間の、恋人とのいろいろな会合が、心の中に蘇^{よみが}えつて来た。どの一つを考えても、それは楽しい清浄な幸福な思出だった。二人は火のような愛に燃えていた。が、お互に個性を認め合い、尊敬し合つた。上野の音楽会の帰途に、ガスの光が、ほのじろく湿^{うる}んでいる公園の木下暗^{このしたやみ}を、ベエトーフエンの『月光曲』を聴いた感激を、語り合いながら、辿^{たど}つた秋の一夜の事も思い出した。新緑の戸山ヶ原の橡^{とち}の林の中で、その頃読んだトルストイの『復活』を批評し合つた初夏の日曜の事なども思い出した。恋人であると共に、得難い友人であつた。彼女の趣味や知識の生活に於^おける大事な指導者だった。

恋人の凛々^{りり}しい性格や、その男性的な容貌^{ようぼう}や、その他いろいろな美点^{びてん}が、それからそれと、彼女の頭の中に浮かんで来た。若^もし子爵の来訪の用向きが、自分の想像した通りで

あつたら、（それが何と云う子供らしい想像であろう）とは、打消しながらも、瑠璃子の真珠のように白い頬は、見る人もない部屋の中にありながら、ほのかに赤らんで来るのだつた。

が、来客の話は、そう永くは続かなかつた。瑠璃子の夢のような想像を破るように、応接室の扉が、父に依つて荒々しく開かれた。瑠璃子は、客を送り出すため、急いで玄関へ出て行つた。

見ると父は、兄の家出を見送つた時以上に、蒼い苦り切つた顔をしていた。杉野子爵はと見ると、その如才のないニコニコした顔に、微笑の影も見せず、周章として追われるように玄関に出て、ロクロク挨拶もしないで、車上の人となると、運転手を促し立てゝ、あわたしく去つてしまつた。

父は、自動車の後影を憎悪と輕蔑との交つた眼付で、しばらくの間見詰めていた。

「お父様どうか遊ばしたのですか。」瑠璃子は、おそろしく父に訊いた。

「馬鹿な奴だ。華族の面汚しだ。」父は唾でも吐きかけるように罵つた。

杉野子爵ししやくに対する、父の燃ゆるような憎悪ぞうおの声を聞くと、瑠璃子は自分の事のように、オドオドしてしまった。胸の中に、ひそかに懷いだいていた子供らしい想像は、跡形もなく踏み躪にじられていた。踏んでいた床が、崩れ落ちて、其儘そのまま底知れぬ深い淵ふちへ、落ち込んで行くような、暗い頼りない心持がした。之迄これまででさえ、父と父との感情に、暗い翳かげのあることは、恋する二人の心を、どんなに傷いたしめたか分らない。それなのに、今日はその暗い翳が、明らかに火を放つて、爆発きたを来したらしいのである。

「一体何どうしたのでございます。そんなにお腹立ち遊ばして。」

瑠璃子は、父の顔を見上げながら、オズ／＼訊きいた。父は、口にするさえ、忌々いまいましきうに、

「訊きくな。訊きくな。汚けがらしい。俺達わしを侮辱わししている。俺ばかりではない、お前までも侮辱わししているのだ。」と、齒齟はがみをしないばかりに激昂げつこうしているのだった。

自分までもと、云いわれると、瑠璃子は更に不安になった。自分のことを、一体何どう云つたのだろう。自分に就いて、一体何を云つたのだろう。恋人の父は、自分のことを、一体何う侮辱したのだろう。そう考えて来ると、瑠璃子は父の機嫌を恐れながらも、黙ってい

る訳には行かなかった。

「一体どんなお話が、ございましたの。^{わたくし}妾の事を、杉野さんは何う仰しやるのでござい
すか。」

「訊くな。訊くな。訊かぬ方がいゝ。聞くと却つて氣を悪くするから。あんな賤しい人間
の云うことは、一切耳に入れぬことじや。」

やゝ興奮の去りかけた父は、却つて娘を宥めるように優しく云いながら、二階の居間へ
行くために階段を上りかけた。父は、杉野子爵を賤しい人間として捨てゝ置くことが出来
た。が、瑠璃子には、それは出来なかった。どんなに、子爵が賤しくても、自分の恋人の
父に違なかつた。^{ちがひ}その人が、自分のことを、何う云つたかは、瑠璃子に取つては是非にも
訊きたい大事な事だつた。

「でも、何と仰しやつたか知りたと思いますの。^{わたくし}妾のことを何と仰しやつたか、氣が
かりでございますもの。」

瑠璃子は、父を追いながら、甘えるような口調で云つた。娘の前には、目も鼻もない父
だつた。母のない娘のためには、何物も惜しまない父だつた。瑠璃子が執拗に二三度訊
くと、どんな秘密でも、明しかねない父だつた。

「なにも、お前の悪口を云つたのじゃない。」

父は憤怒ふんぬを顔に現しながらも、娘に対する言葉丈だけは、優しかった。

「じゃ、何うして侮辱になりますの、あの方から、侮辱を受ける覚えがないのでございませもの。」

「それを侮辱するから怪けしからないのだ。俺を侮辱するばかりでなく、清淨せいじょう潔白けつぱくなお前までも侮辱してかゝるのだ。」

父は、又杉野子爵の態度か言葉かを思い出したのだろう、その人が、前にでもいるように、拳こぶしを握りしめながら、激しい口調で云つた。

「何うしたと云うのでございます、お父様、ハッキリと仰おつしやつて下さいまし、一体どんなお話で、あの方が、私の事を何う仰しやつたのです。一体どんな用事で、入いらしたのでございます。」

瑠璃子も、可なり興奮しながら、本当のことを知りたがつて、畳みかけて訊いた。

「彼あの男は、お前の縁談があると云つて来たのだ。」父の言葉は意外だった。

「妾わたくしの縁談！」瑠璃子は、そう云つたまゝ、二の句が次げなかった。彼女は化石したように、父の書斎の入口に立ち止まつた。父は、瑠璃子の駭おどろきに、深い意味があるうとは、夢

にも知らずに、興奮に疲れた身体を、安樂椅子に投げるのであった。

買い得るか

一

父から、杉野子爵ししやくの来訪が、縁談の爲ためであると、聞かされると、瑠璃子るりこは電火にでも、打たれたように、ハツと駭おどろいた。

やつぱり、自分の子供らしい想像は当つたのだ。杉野子爵は子のために、直接話を進めに来たのだ。その話の中に、子爵の不用意な言葉か、不遜ふそんの態度かが、潔癖な父を怒らせに違ちがい。そう思うと、瑠璃子はあまりに潔癖過ぎる父が急に恨めしくなった。少しも妥協性のない、一徹な父が恨めしかった。自分の一生の運命を狂わすかも知れない、父の態度が、恨めしかった。瑠璃子は父に抗議するように云いった。

「縁談のお話が、何どうして妾わたくしを、侮辱することになりますの。またそんなお話なら、一応

妾にも、話して下さってから、お断りになつても、遅くはないと思いますわ。」

瑠璃子は、誰に対しても、自己を主張し得る女だった。彼女は、父にでも兄にでも恋人にでも、自己を主張せずには、いられない女だった。

瑠璃子の抗議を、父は憫む^{あわれ}ように笑った。

「縁談！ ハハハハハ。普通の縁談なら、無論瑠璃さんにも、よく相談する。が、あの男の縁談は、縁談と云う名目で、貴女^{あなた}を買いに來たのじや。金を積んで、貴女を買いに來たのじや。怪^けしからん！ 俺^{わし}の娘を！」

父の眼は、激怒のために、狂わしいまでに、輝いた。そう云われると、瑠璃子は、一言もなかつたが、そうした縁談の相手は、一体誰だろうかと、思った。

「彼^あの男が來て娘をやらんかと云う。平素から、快く思っていない男じやが、折角來て呉^くれたものだから、無碍^{むげ}に断るのもと、思つたから、与^やらんこともないと云うと、段々相手の男のことを話すのじや。人を馬鹿^{ばか}にして居る。四十五で、先妻の子が、二人までであると言うのじや。俺は、頭から怒鳴り付けてやつたのじや。すると、彼^あの男が、オズ／＼何を云い出すかと思うと、支度金は三十万円まで出すと、云うのじや。俺は憤然と立ち上つて、彼の男を応接室の外へ引きずり出したのだ。」父の声は、わな／＼顫^{ふる}えた。

「此年このになるまで、こんな侮辱を受けたことはない。貧乏はしている。政戦三十年、家も邸やしきも抵当に入っている。が、三十万円は愚か、千万一億の金を積んでも、娘を金のために、売るものか。」

父は、傍はたの見る眼も、傷いたましいほど、激昂げつこうしている。年老いた肉体は、余りに激しい憤怒ふんぬのために今にも砕けそうに、緊張している。瑠璃子も、胸が一杯になった。父の怒いかりを、尤もだと思った。が、その怒を宥なだむべき何の言葉も、思い浮ばなかった。

が、それに付けても、杉野子爵は、何の恨うらみがあつて、こうした侮辱を、年老いた父に与えるのだろう。そう思うと、瑠璃子の胸にも、張り裂けるような怒りが、湧わいて来た。が、それが恋人の父である、思い返すと、身も世もないような悲しみが伴った。

「彼の男は、金のために、あんなに賤いやしくなつてしまったのだ。政商連づれと結託して、金のためにばかり、動いているらしいのだ。今日の縁談なども、纏まとまれば幾何いくばくと云う、口銭が取れる仕事だろう。ハハハハハ。」父は、怒を嘲あざけりに換えながら、蔑さげすむように哄笑こうしょうした。「何でも、今日の縁談の申込み手と云うのが、ホウ瑠璃さんも行つただろう。此間園遊会をやつた莊田しょうだと云う男らしいのだ。」

父は何気なく云つた。が、莊田と云う名を聞くと、瑠璃子は直ぐ、豹ひょうの眼のように恐ろ

しい執拗しつようなその男の眼付を思い出した。冷静な、勝気な、瑠璃子ではあったけれども、悪魔なに頬を、舐められたような気味悪さが、全身をゾク／＼と襲って来た。

二

莊田と云う名前を聴くと、瑠璃子が気味悪く思つたのも、無理ではなかった。彼女は、その人の催した園遊会で、妙な機はずみから、激しい言葉を交かわして以来、その男の顔付や容ようす子が、悪夢の名残りのように、彼女の頭から離れなかった。

太いガサツな肩まゆ、二段に畳まれている鼻、厚い唇、いかにも自我の強そうな表情、その顔付を思い出して見る丈だけでも、イヤな気がした。そんな男と、云い争いをしたことが、執念深い蛇とでも、恨を結び合つたように、何となく不安だった。処が、その男が意外にも自分に婚を求めている。そう思う丈でも、彼女は妙な悪寒おかんを感じた。よく伝説の中にある、白蛇などに見込まれた美少女のように。

瑠璃子は、相手の心持が、容易には分らなかった。容易に、その事を信ずることが出来なかった。

「本当でございますの？　杉野さんが、本当に莊田と仰しやつたのでございますの？」

「確かに、あの男だと云わないが、何うも彼奴の事らしい。杉野はお前の話を始める前に、それとなく莊田の事を賞めているのだ。何うも彼奴らしい。金が出来たのに、付け上つて、華族の娘をでも貰いたい肚らしいが、俺の娘を貰いに来るなんて狂人の沙汰だ！」

父は相手の無礼を怒ったものゝ、先方に深い悪意があるうとは思わならしく、先刻から見ると余程機嫌が直っているらしかった。

が、瑠璃子はそうではなかった。此の求婚を、氣紛れだとか、冗談だとか、華族の娘を貰いたいと云うような單なる虚栄心だとは、何うしても思われなかった。父の一喝に逢つて、這々の体で、逃げ帰った杉野子爵は、ほんの傀儡で、その背後に怖ろしい悪魔の手が、動いていることを感ぜずにはいらなかった。そう思つて来ると、八重桜の下で、自分達二人を、睨み付けた恐ろしい眼が、アリアリと浮んで来た。そう思つて来ると、自分の恋人の父を、自分に対する求婚の使者にした相手のやり方に、悪魔のような意地悪さを、感ぜずにはいらなかった。

瑠璃子は思った。自分が傷つけた蛇は、ホンの僅な恨を酬いるために猛然と、襲いかゝっているのだと。が、そう思うと、瑠璃子は却つて、必死になった。来るならば来て見よ。

あんな男に、指一つ触れさせてなるものか。彼女は心の中でそう決心した。

「いや、杉野の奴一喝してやったら、一縮みになって帰ったよ。あゝ云って置けば、二度と顔向けは出来ないよ。」

父は、もう凡てが済んでしまったように、何気なく云った。が、瑠璃子にはそうは思われなかった。一度飛び付き損った蛇は、二度目の飛躍の準備をしているのだ。いや、二度目どころではない。三度目四度目五度目十度目の準備まで整っているのかも知れない。そう思うと、瑠璃子は又更に自分の胸の処女の誇が、烈火のように激しく燃えるのを感じた。「本当に口惜しゆうございます。あんな男が妾を。それに杉野さんが、そんな話をお取次ぎになるなんて、本当にひどいと思いますわ。」

瑠璃子は、興奮して、涙をポロ／＼落しながら云った。それは口惜しさの涙であり、怒りの涙だった。

「だから、聴かない方が、いゝと云ったのだ。そうだ！ 杉野が怪しからんだ。あんな馬鹿な話を取次ぐなんて、彼奴が怪しからんだ。が、あんな墮落した人間の云うことは、気に止めぬ方がいゝ。縁談どころか、瑠璃さんには、何時までも、茲にいて貰いたいのだ。殊に、光一があゝなつてしまえば、お父様の子はお前丈なのだ。百万円はおろか、お父様

の首が飛んでも、お前を手離しはしないぞ。ハ、ハ、ハ。」

父は、瑠璃子を慰めるように、快活に笑った。瑠璃子の心も、父に対する愛で、一杯になつていた。何時までも、父の傍にいて、父の理解者であり、慰安者であろうと思つた。

「妾もそう思っていますの。何時までも、お父様のお傍にいたいと思つていますの。」

そう云つて瑠璃子は初めてニツコリ笑つた。嵐の過ぎ去つた後の平和を思わせるような、寂しいけれども静かな美しい微笑だつた。

三

二つの忌わしい事件が、渦を捲いて起つた日から、瑠璃子の家は、暴風雨の吹き過ぎた後のような寂しさに、包まれてしまった。

家出した兄からは、ハガキ一つ来なかつた。父は父でおくびにも兄の事は云わなかつた。人を頼んで、兄の行方を探すとか、警察に搜索願を出すなどと云うことを、父は夢にも思つていないらしかった。自分を捨てた子の為には、指一つ動かすことも、父としての自尊心が許さないらしかった。

こうした父と兄との間に挟まって、たゞ一人、心を傷めるのは瑠璃子だった。彼女は、父に隠れて兄の行方をそれとなく探つて見た。兄が、その以前父に隠れて通つたこのある、小石川の洋画研究所も尋ねて見た。兄が、予てから私淑している二科会の幹部のN氏をも訪ねて見た。が、何処でも兄の消息は判らなかつた。

兄の友達の二三にも、手紙で訊き合して見た。が、どの返事も定まつたように、兄に暫らく会つたことがないと云うような、頼りない返事だった。縦令父とは不和になつても、自分丈には安否位は、知らせて呉れてもよいものと、彼女は兄の氣強さが恨めしかつた。が、彼女の心を傷ましめることは外にもう一つあつた。それは、これまで感情の疎隔していた父と杉野子爵との間が、到頭最後の破裂に達したことである。あんな事件が起つた以上、再び元通りになることは、殆ど絶望のように思われた。従つて、自分達の恋が、正式に認められるような機は、永久に来ないように思われた。自分が、恋を達するときには、やつぱり兄と同じように、父に背かなければならぬ時だと思つと、彼女の心は暗かつた。突然な非礼な求婚が、斥けられてから、それに就いては何事も起らなかつた。十日経ち二十日経つた。父は、その事をもうスツカリ忘れてしまつたようだった。が、瑠璃子にはそれが中断された悪夢のように、何となく気がかりだったが、一度限で何の音沙汰もない

ところを見ると、その求婚を、恐ろしい復讐ふくしゅうの企てでもあるように思ったのは、自分の邪推であつたようにさえ、瑠璃子は思った。

その裡うちに五月が過ぎ六月が来た。政治季節の外は、何の用事もない父は、毎日のように書齋にばかり、閉じ籠こもつていた。瑠璃子は何うかして、父を慰めたいと思ひながらも、父の暗い眉まゆや凋しなびた口の辺あたりを見ると、たゞ涙ぐましい氣持が先に立つて、話しかける言葉さえ、容易に口に浮ばなかつた。兄がいる裡は、父と時々争いが起つたものゝ、それでも家の中が、何となく華やかだつた。父娘おやこ二人になつて見ると、ガラソとした洋館が修道院か何かのように、ジメ／＼と淋さびしかった。

六月のある晴れた朝だつた。兄が家出した悲しみも、不快な求婚みだに擾さわされた心も、だん／＼薄らいで行く頃だつた。瑠璃子は、その朝、顔を洗つてしまうと平素いつもの通り、老婢ばあやが自分の室へやの机の上に置いてある郵便物を、取り上げて見た。

父宛あてに來た書状も、一通り目を通すのが、彼女の役だつた。その朝は、父宛の書留が一通難まじつていた。それは内容証明の書留だつた。裏を返すと、見覚えのある川上大吉と云う金貸業者の名前だつた。

『あゝまた督促かしら。』と、瑠璃子は思った。そうした書状を見る毎ごとに、平素は感じな

い家の窮状が彼女にもヒシ／＼感ぜられるのであった。

彼女は、何気なく封を破った。が、それは平素の督促状とは、違っていた。簡単な書式のようなものだった。一寸意外に思いながら読んで見た。最初の『債権譲渡通知書』と云う五字から、先ず名状しがたい不快な感じを受けた。

債権譲渡通知書

通知人川上万吉は被通知人に対して有する金貳万五千円の債権を今般都合に依り莊田勝平殿に譲渡し候に付き通知候也

大正六年六月十五日

通知人 川上万吉

被通知人 唐沢光徳殿

莊田勝平と云う名前が、目に入ったとき、その書式を持っている瑠璃子の手は、その儘

しびれてしまうような、厭いやな重くるしい衝動シヨツクを受けずにはいられなかった。悪魔は、その爪つめを現し始めたのである。

四

相手が、あの儘まま思ひ切ったと思つたのは、やっぱり自分の早合点はやがてんだったと瑠璃子は思つた。求婚が一時の氣紛きまぐれだと思つたのは、相手を善人に解し過ぎていたのだ。相手はその二つの眼が示している通り、やっぱり恐ろしい相手だったのだ。

が、それにしても何と云う執念しつねんぶかい男だろう。父が負うている借財の証書を買入れて、父に対する債権者となつてから、一体何うしよう云う積りなのかしら。卑怯ひきようにも陋ろうれ劣つにも、金の力である清廉せいれんな父を苦しめようとするのかしら。そう思うと、瑠璃子は、女ながらにその小さい胸に、相手の卑怯ひきようを憤いきどおる熱い血が、沸々と声を立て、煮え立つように思つた。

父の借財は多かつた。藩閥内閣打破の運動が、起る度に、父はなけ無しの私財を投じて惜しまなかつた。藩閥打破を口にする志士達に、なけ無しの私財を散じて惜しまなかつた。

父が持つて生れた任侠にんぎょうの性質は、頼まるゝ毎に連帯の判も捺した。手形の裏書もした、取れる見込のない金も貸した。そうした父の、金に対する豪快な遣り口は、最初から多くはなかつた財産を、何時の間にか無一物にしてしまった。が、財産は無くなつても、父の気質は無くならなかつた。初めは親類縁者から金を借りた。親類縁者が、見放してしまうと、高利貸の手からさえ、借ることを敢てした。住んでいる家も、手入は届いていないが、可なりだゞつ広い邸地も、一番も二番もの抵当に入っていることを、瑠璃子さえよく知っている。

金力と云つたものが、丸切り奪われている父が、黄金魔と云つてもよいような相手から、赤児あかこの手を捻じめるように、苛責いじめられる。そう思つて来ると、瑠璃子はやるせない憤りと悲しみとで、胸が一杯になつて来た。金さえあれば、どんな卑しい者でもが、得手勝手なことをする世の中全体が、憤ろしく呪わしく思われた。

瑠璃子は、今の場合、こうした不快な通知書を、父に見せることが、一番厭なことだつた。父が、どんなに怒り、どんなに口惜しがるかが余りに見え透いていたから。

でも、こうした重要な郵便物を、父に隠し通すことは出来なかつた。瑠璃子は、重い足を運びながら、父の寝室へ行つて見た。が、父はまだ起きてはいなかつた。スヤ／＼と安

らかな呼吸をしながら名残りの夢を食^{むさ}っている父の寔^{やつ}れた寝顔を見ると、瑠璃子は出来る丈こうした不快な物を父の眼には触れさせたくはなかった。彼女は、そつと忍び足^{まくら}に枕^{もと}元に寄り添^もつて、枕元の小さい卓^{テーブル}子の上に置いてある、父の手文庫の中にその呪われた紙片を、そつと音を立てずに入れた。何時までも、父の眼には触れずにあれ、瑠璃子は心の中で、そう祈らずにはいられなかった。

その日、食事の度毎に顔を合せても、父は何とも云わなかった。夜の八時頃、一人で基^き譜^ふを開いて盤上に石を並べている父に、紅茶を運んで行つたときにも、父は二^{ふた}言^{こと}三^み言^{こと}瑠璃子に言葉をかけたけれど、書状のことは、何も云わなかった。

願わくは、何時までも、父の眼に触れずにあれ、瑠璃子は更にそう祈つた。どうせ、一度は触れるにしても、一日でも二日でも先きへ、延ばしたかった。

が、翌日眼を覚まして、瑠璃子が前の日の朝の、不快な記憶を想い浮べながら、その朝の郵便物に眼をやったとき、彼女は思わず、口の裡^{うち}で、小さい悲鳴を挙げずにはいられなかった。其^{そこ}処^こに、昨日と同じ内容証明の郵便物が、三通まで重ねられていたのである。

それを取り上げた彼女の手は、思わずかすかに顫^{ふる}えた。もう、父に隠すとか隠さないとか云う余裕は、彼女になかった。彼女はそれを取り上げると、救いを求むる少女のように、

父の寢室に駈^かけ込んだ。

父は起きてはいなかったが、床の中で眼を覺ましていた。

「お父様！　こんな手紙が参りました。」瑠璃子の声は、何時になく上ずっていた。

「昨日のと同じものだろう。いや心配せいでもえゝ、お前が心配せいでもえゝ。」

父は、静かにそう云った。昨日の書状も、父は何時の間にか、見ていたのである。

瑠璃子は、今更ながら、自分の父を頼もしく思わずにはいられなかった。

五

唐沢の家を呪^{じゆそ}するような、その不快な通知状は、その翌日もその又翌日も、無心な配

達夫に依^よつて運ばれて来た。

初^{はじめ}ほどの驚^{シヨック}駭^はは、受けなかったけれども、その一葉々々に、名状しがたい不快と不安とが、見る人の胸を衝^ついた。

「なに、捨てゝ置くさ。同一人に債権^{あつ}の蒐^{あつ}まった方が、弁済をするにしても、督促を受くるにしても手数料が省^{はぶ}けていゝ。」

父は何気ないように、済ましているようだったが、然し内心の苦悶は、表面へ出ずにはいなかった。殊に、父は相手の真意を測りかねているようだった。何のために、相手がこれほど、執念深く、自分を追窮して来るのか、判りかねているようだった。

が、瑠璃子には相手の心持が、判っている丈、わずかばかりの恨を根に持つて、何処までも何処までも、付き纏つて来る相手の心根の恐ろしさが、しみ／＼と身に浸みた。通知状を見る度に、相手に対する憎悪で、彼女の心は一杯になった。彼の金力を罵った自分達丈を苦しめる丈なら、まだいゝ、罪も酬いもない老いた父を、苦しめる相手の非道を、心の底より憎まずにはいられなかった。

こうして、父が負うている総額二十万円に近い負債に対する数多い証書が、たった一つの黒い堅い冷たい手に、握られてしまった頃であった。

ある朝、彼女は平生のように郵便物を見た。——こうした通知状の来ない前は、それは楽しい仕事に違いなかった。其処には恋人からの手紙や、親しい友達の消息が見出されたから——。が、今では不安な、いやな仕事になってしまった。

彼女は、その朝もオズ／＼郵便物に目を通した。幾通かの手紙の一番最後に置かれていた鳥の子の立派な封筒を取り上げて、ふと差出人の名前に、目を触れたとき、彼女の視線

はそこに、筆太に書かれている四字に、釘付けにされずにはいなかった。それは紛れもなく莊田勝平の四字だったのである。

黒手組の脅迫状を受けたように、悪魔からの挑戦状を受けたように、瑠璃子の心は打たれた。反感と、憎悪とある恐怖とが、ごつちやになって、わく／＼と胸にこみ上げて来た。彼女は、その封筒の端をソツと、醜い蠚蠚の尻尾をでも握るように、摘み上げながら、父の部屋へ持つて行つた。

父は差出人の名前を、一目見ると、苦々しげに眉をひそめた。暫らくは開いて見ようとはしなかつた。

「何と申して参つたのでございましょう。」瑠璃子は、氣になつて、急かすように訊いた。父は、荒々しく封筒を引き破つた。

「何だ！」父の声は、初から興奮していた。

「——此度小生に於て、買占め置き候貴下に対する債権に就て、御懇談いたしたきことと有之、且つ先日杉野子爵を介して、申上げたる件に付きて、重々の行違有之、右釈明旁々近日参邸いたし度く——あゝ何と云う図々しきだ。何と云う！ 獣のような図々しきだ。よし、やつて来い。やつて来るがよい。来れば、面と向つて、あの

男の面皮めんぴを引き剥むいて呉くれるから。」

父は、そう云いながら、奉書の巻紙を微塵みじんに引き裂いた。老い凋しなんだ手が、怒いかりのために、ブル／＼顫ふるえるのが、瑠璃子の眼には、傷いたましくかなしかった。

六

父も瑠璃子も、心の中に戦いの準備を整えて、莊田勝平の来るのを遅しと待っていた。手紙が来た日の翌日の午前十時頃、瑠璃子が、二階の窓から、邸前の坂道を、見下していると、遙はるかに続いているプラタナスの並樹なみきの間から、水色に塗られた大形の自動車が、初夏の日光をキラ／＼と反射しながら、眩まぶしいほどの速力で、坂を馳かけ上ったかと思うと、急に速力を緩めて、低いうめくような警笛の音を立てながら、門前に止まるのを見たのである。覚悟ぞうごをしていたことながら、瑠璃子は今更のように、不快な、悪魔の正体をでも、見たような憎悪どうおに、囚とらわれずにはいられなかった。

自動車の扉は、開かれた。ハンカチーフで顔を拭ふきながら、ぬっとその巨おおきい頭を出したのは、紛れもないあの男だった。何が嬉うれしいのか、ニコ／＼と得体の知れぬ微笑を浮べ

ながら、玄関の方へ歩いて来るのだった。

瑠璃子は、取次ぎに出ようか出まいかと、考え迷った。顔を合わしたり、一寸でも言葉交すのが厭でならなかった。が、それかと云つて、平素氣が付けば取次ぎに出る自分が、此の人に限つて出ないのは、何だか相手を怖れているようで彼女自身の勝氣が、それを許さなかつた。そうだ！ あんな卑しい人間に怯れてなるものか。彼の男こそ、自分の清浄な処女の誇の前に、愧じ怯れていゝのだ。そう思うと、瑠璃子は処女にふさわしい勇氣を振り興して、孔雀のような誇と美しさとを、そのスラリとした全身に湛えながら、落着いた冷たい態度で、玄関へ現れた。

勝平は、瑠璃子の姿を見ると、此間会つた時とは別人でもあるように、頭を叮嚀に下げた。

「お嬢さまでございますか、先日は大変失礼を致しまして、申訳もございません。今日は、あのう！ お父様はお在宅でございましょうか。」

こうも白々しく、——あゝした非道なことをしながら、こうも白々しく出られるものかと、瑠璃子が呆れたほど、相手は何事もなかつたように、平和で叮嚀であつた。

瑠璃子は、一寸拍子抜けを感じながらも、冷たく引き緊めた顔を、少しも緩めなかつた。

「在宅いますことは、在宅いますが、お目にかゝれますかどうか一寸伺つて参ります。」

瑠璃子は、そう高飛車に云いながら、二階の父の居間に取つて返した。

「やつて来たな。よし、下の応接室に通して置け。」

瑠璃子の顔を見ると、父は簡単にそう云つた。

応接室に案内する間も、勝平は叮嚀しやうねいに而しかも馴なれ々しげに、瑠璃子に話しかけようとした。が、彼女は冷たい切口上で、相手を傍へ寄せ付けもしなかった。

「やあ！」挨拶あいさつとも付かず、懸声とも付かぬ声を立てながら、父は応接室に入つて来た。父は相手と初対面ではないらしかった。二三度は会っているらしかった。が、苦り切つたまゝ時候の挨拶さえしなかった。瑠璃子は、茶を運んだ後も、はしたないとは知りながら、一家の浮沈に係る話なので、応接室に沿う縁側の椅子いすに、主客には見えないように、そつと腰をかけながら、一語も洩もさないように相手の話に耳を聳そてた。

「此の間から、一度伺おう／＼と思ひながら、つい失礼いたしておりました。今度、閣下に対する債権を、私が買い占めましたことに就つても、屹度私を怪けしからん奴やつだと、お考へになつた／＼うと思ひましたので、今日はお詫わび旁かたがた、私の志のある所を、申述べに参つたのです。」

勝平は、いかにも鄭重に、恐縮したような口調で、ボツリ／＼話し始めたのであった。丁度暴風雨の来る前に吹く微風のように、気味の悪い生あたゝかさを持った口調だった。

「うむ。志！ 借金の証書を買ひ蒐めるのに、志があるのか。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。」父は、頭から嘲るように詰った。

「ございますとも。」相手は強い口調で、而も下手から、そう云い返した。

七

「初はじめから申上げねば分りませんが、実は私は閣下の崇拜者です。閣下の清節を、平生から崇拜致している者であります。」

そう云つて、勝平は叮嚀に言葉を切った。老狐ろうこが化ばかそうと思う人間の前で、木の葉を頭から被かぶつてゐるような白々しさであつた。人を馬鹿ばかにしている癖に、態度だけ丈はいやに、真剣おおまじめに大真面目であるようだった。

「殊ことに近頃になつて、所謂政界の名士達なるものと、お知己ちかづきになるに従つて、大抵の

方には、殆ど愛想を尽してしまいました。お口丈は立派なことを云つていらしても、一歩裏へ廻ると、我々町人風情よりも、抜目がありませんからな。口幅くちはばつたいことを、申す様でございますが、金で動かせない方と云つたら、数える丈しかありませんからね。」

父は黙々として、一言も発しなかった。いざと云う時が来たら、一太刀に切つて捨てようとする氣勢けはいが、ありくと感ぜられた。が、勝平は相手の容子ようすなどには、一切頓着とんちやくしないように、臆面おくめんもなく話し続けた。

「いつか、日本倶楽部クラブで、初めて閣下の崇高なお姿に接して以来、益々ますます閣下に対する私の敬慕の念が高くなつたのです。多年の間、利慾権勢りよくけんせいに目もくれず、たゞ国家のために、一意奮闘していらつしやる。こう云うお方こそ、本当の国士本當の政治家だと思ったのです。」

父が、面と向つてのお世辞に、苦り切つてゐる有様が、室外にゐる瑠璃子にもマザくと感ぜられた。

「御存じの通り、私は外に能のある人間ではありません。たゞ、二三年來の幸運で、金丈だけは相当儲けました。私は、今何に使つても心残りのない金を、五百万円ばかり現金で持っています。あゝ使え、こう寄附しろと云つて呉れる人もありますが、私は閣下のようなお方

に、後顧の憂い^{こうこ}なからしめ、国家のために思い切り奮闘していたゞけるようにする事も、可なり意義のある立派な仕事だと思つたのです。それには、是非ともお交際^{つきあい}を願つて、いろ／＼な立ち入つた御相談にも、与^{あずか}らせて戴^{いた}きたいと、それで実はあんな突然なお申込を……」

そう云つて、言葉を切つた、がいかにも恐縮に堪^たえないと云う口調で、

「ところが、その申込が杉野さんの思い違^{ちが}いで、と云うよりも、あの方の軽率から、私がお嬢さまをお望み致したなどともない。ハ、ハ、ハ。御立腹遊ばすのは当然です。五十に近い私が、お嬢さまに求婚するなどと笑い話にもなりません。実は、当人と申すのは私の倅^{せがれ}、今年二十五になります。亡妻の遺児^{わすれがたみ}です。」

一寸殊勝らしく声を落しながら、

「その倅^もとても、年こそお嬢様に似合ひでございますが、いやもう一向下らない人物です。が、若し万一お嬢様を下さるような事がありましたら、これほど有難い——私の財産を半分無くしても惜しくはない——仕合せだと思ひますのですが、が、そのお話は、兎^とも角^{かく}、閣下の御債務は凡^{すべ}て、私に払わせていたゞきたいと思ひましたから、一月あまりも心掛けて、もう大抵は買い蒐^{あつ}めた積りでございますが、縁談のお話などとは別に、これ丈は私の

寸志です。どうか御心置きなく、お受取り下さるように。」そう云いながら、父の負うている借財の証書の全部を一つの袋に収めて父の前に差し出したらしかった。

虚心平気に、勝平の云い分を聴けば、無^{ぶしつけ}躰なところは、あるにせよ、成金らしい傲^{ごうが}岸^んな無遠慮なところはあるにせよ、それほど、悪意のあるものとは思われなかった。が、瑠璃子にはそうではなかった。瑠璃子と、その恋人とを思い知らせるために、悪魔は、瑠璃子を奪つて、自分の妻に——名前^{だけ}丈は妻でも、本当はその金力を示すための装飾品に——しようとした。が、瑠璃子の父が、予想以上に激怒したのと、年齢の余りな相違から来る世間の非難^{おもんばか}とを慮^おつて、自分の名義で買う代りに、息子^{おい}の名義で買おうとする、瑠璃子を商品と見ている点に於^おては、何の相違もない。瑠璃子と彼女の恋人とを思い知らせようとする、蛇のような執念には何の相違もない。正面から飛びかゝつて父から、手ひどく跳^は付け^{ねつ}られた悪魔は、今度は横合から、そつと騙^{たぶら}かそうと掛^かっているのだつた。

八

瑠璃子には、相手の心が十分に見透かされている。が、相手の本心を知らない父は、そ

の空々しい上部の理由丈に、うか／＼と乗せられて、もしや相手の無駄な贈り物を、受け取りはしないかと、瑠璃子はひそかに心を痛めた。縁談などとは別にと、口で美しく云うものの、父が相手の差し出す餌にふれた以上、それを機に、否応なしに自分を、浚つて行こうとする相手の本心が、彼女には余りに明かであつた。

父を何うにか騙して娘を浚つて行く、それで娘にも、彼女の恋人にも、苦痛を与えればよいのだと相手が謀んでいるらしいのが、瑠璃子には、余りに判り過ぎているように思えた。

が、瑠璃子の心配は無駄だつた。父は相手が長々と喋り続けたのを聞いた後で、二三分ばかり黙っていたらしいが、急に居ずまいを正したらしく、厳格な一分も緩みのない声で云つた。

「いや、大きに有難う。あなたの好意は感謝する。が、考うる所あって、お受けすることは出来ない。借財は証文の期限通に、ちゃんと弁済する。それから、縁談の事じやが、本人が貴方であらうが御息であらうが、お断りすることには変りがない。何うか悪しからず。」

父は激せず熱せず、毅然とした立派な調子で云い放つた。父の立派な男らしい態度を、

瑠璃子は蔭ながら、伏し拝まずにはいられなかった。何と云う凜々しい態度であらう。どんなに此の先苦しもうとも、あゝした父を、父としていることは、何という幸福であらうかと思うと、熱い涙が知らず識らず、頬を伝つて流れた。

真向から平手でピシャツと、殴るような父の返事に、相手は暫らくは、二の句が、次がないらしかった。が、暫らくすると、太い渋い不快な声が聞え始めた。

「ふゝむ。これほど申し上げても、私の好意を汲んで下さらない。これほど申し上げても、私の心がお分りになりませんのですか。」

相手の言葉付は、一瞬の裡に變つていた。豹が、一太刀受けて、後退しながら、低くうなづいているような無気味な調子だった。

「はゝゝゝ、好意！ はゝゝゝ、お前さんは、こんなことを好意だと、云い張るのですか。人の顔に唾を吐きかけて置いて、好意であるものもないものだ、はゝゝゝゝゝゝ。」父は、相手を蔑すみ切つたように嘲笑つた。

「はゝゝゝ、閣下も、貧乏をお続けになったために、何時の間にか、僻んでおしまいになつたと見える。此の莊田が、誠意誠心申上げていることが、お分りにならない。」

相手も、負けてはいなかった。豹が、その本性を現して、猛然と立ち上つたのだった。

「はゝゝゝ、誠意誠心か！ 人の娘を、金で買うと云う恥知らずに、誠意などがあつて、堪^{たま}るものか。出直してお出^{いで}なさい！」父は、低い力強い声で、そう罵^{のの}つた。

「よろしい！ 出直して参りましょう。閣下、覚えて置いて下さい！ 此の莊田は、好意を持つておりますと同時に、悪意も人並に持つているものでございますから。お言葉に従つて、いずれ出直して参りますから。」そう云い捨てる、相手は荒々しく扉^{ドア}を排して、玄關へ出て行つた。

瑠璃子が、急いで応接室に駈^かけ込んだとき、父はそこに、昂^{こう}然と立っていた。半白の髪が、逆^{さか}立つているようにさえ見えた。

「お父様！」瑠璃子は、胸が一杯になりながら、駈^かけ寄つた。

「あゝ瑠璃子か。聞いていたのか。さあ！ お前もしっかりして、飽くまでも戦うのだ。強くあれ、そうだ飽くまでも強くあることだ！」

そう云いながら父は、彼の瘦^やせた胸^{むな}懷^{ぶと}に顔を埋^{うず}めている娘の美しい撫^{なで}肩^{がた}を、軽く二三度叩^{たた}いた。

毘^{わな}

一

羊の皮を被^{かぶ}つて来た狼の面皮を、真正面から、引き剥^はいだのであるから、その次ぎの問題は、狼が本性を現して、飛びかゝつて来る鋭い齒^し牙^がを、どんなに防ぎ、どんなに避^さけるかにあつた。

が、その狼の毒牙^{どくが}は、法律に依^よつて、保護されている毒牙^{どくが}だった。今の世の中では、国家の公正な意志であるべき法律までが、富める者の味方をした。

勝平に買い占められた証書の一部分の期限はもう十日と間のない六月の末であつた。今までは、期限が来る毎^{ごと}に、幾度も幾度も証書の書換をした。そのために、証書の金額は、年一年増^ふえて行つたものゝ、何^どうにか遣^{やり}繰^{くり}は付いていた。が、それが悪意のある相手の手に歸して、こちらを苛^い責^{じめ}るための道具に使われている以上、相手が書換や猶^{ゆう}予^よの相談に應^{こた}ずべき筈^{はず}はなかつた。

六月の末日が、段々近づいて来るに従つて、父は毎日のように金策に奔走した。が、三

方を越している巨額の金が、現在の父に依つて容易に、才覚さるべき筈もなかった。

朝起きると、父は蒼あおざめながらも、眼丈まなだけますますは益鋭ますますくなった顔を、曇らせながら、黙々として出て行つた。玄関へ送つて出る瑠璃子るりこも、

「お早くお帰りなさいまし。」と、挨拶あいさつする外は何の言葉もなかった。が、送り出す時は、まだよかつた。其処そこに、僅わずかでも希望があつた。が、夕方、その日の奔走が全く空に帰して、悄しやうぜん然と歸つて来る父を迎えるのは、何うにも堪たまらなかつた。父と娘とは、黙つて一言も、交わさなかつた。お互の苦しみを、お互に知つていた。

今迄いままでは、元氣であつた父も、折々は嗟嘆さたんの声を出すようになった。夕方の食事が済んで、父娘おやこが向い合つている時などに、父は娘に詫わびるように云いつた。

「皆、お父様が悪かつたのだ。自分の志ばかりに、氣を取られて、最愛の子供のことまで忘れていたのじゃ。俺わしの家を治めることを忘れたために、お前までがこんな苦しい思いをするのだ。」

父の耿々こうこうの氣が——三十年火のように燃えた野心が、こうした金の苦勞のために、碎かれそうに見えるのが、一番瑠璃子には悲しかった。

父の友人や知己は、大抵は、父のために、三度も四度も、迷惑をかけさせられていた。

父が、金策の話をして、彼等は体よく断つた。断られると、潔癖な父は、二度と頼もうとはしなかった。

六月が二十五日となり、二十七日となつた。連日の奔走が無駄になると、父はもう自棄を起したのである。もう、ふツつりと出なくなつた。幡随院長兵衛が、水野の邸に行くように、父は怯びれもせず、悪魔が、下す毒手を、待ち受けているようだった。

今年の春やつと、学校を出たばかりの瑠璃子には、父が連日の苦悶を見ても、何うしようと云う術もなかった。彼女は、たゞオロ／＼して、一人心を苦しめる丈だった。

彼女の小さい胸の苦しみを、打ち明けるべき相手としては、たゞ恋人の直也がある丈だった。が、彼女は恋人に、まだ何も云っていないかった。

家の窮状を訴えるためには、いろ／＼な事情を云わなければならない。莊田の恨みの原因が、直也の罵倒であることも云わなければならない。直也の父が、不倫な求婚の賤しい使者を務めたことも云わなければならない。それでは、恋人に訴えるのではなくして、恋人を責めるような結果になる。潔癖な恋人が、父の非行を聴いて、どんなに悲嘆するかは、瑠璃子にもよく分つていた。自分のふとした罵倒が、瑠璃子父娘に、どんなに禍しているかと云うことを聴けば、熱情な恋人は、どんな必死なことをやり出すかも分らない。

そう思うと、瑠璃子は、出来る丈は、自分の胸一つに収めて、恋人にも知らずまいと思つた。

父や瑠璃子の苦しみなどとは、没交渉に、否凡ての人間の喜怒哀愁とは、何の涉りもなく、六月は暮れて行つた。

二

もう、明日が最後の日という六月二十九日の朝だった。莊田勝平の代理人と云う男が、瑠璃子の家を訪ずれた。驚の嘴のような鼻をした四十前後の男だった。詰襟の麻の洋服を着て、胸の辺に太い金の鎖を、仰々しくきらめかしていた。

父は、頭から面会を拒絶した。瑠璃子が、その旨を相手に伝えると、相手は薄気味の悪い微笑をニヤリと浮べながら、

「いや、お会い下さらなくつても、結構です。それでは、お嬢様から、よろしくお伝え下さい。外の事ではございませんが、今度手前共の主人が、拠ん所ない事情から、買入れました、此方の御主人に対する証文の中、一部の期限が明日に当たっていますから、是非とも

お間違なくお払い下さるように、当方にも事情がございまして、何分御猶予いたすことが出来ませんから、そのお積りで、お間違のないよう。もし、万一お間違がありますと、手前共の方では、直ぐ相当な法律上の手段に訴えるような手筈に致しておりますから。後でお怨みなさらないように。」と、云ったが、此の冷たそうな男の胸にも、美しい瑠璃子に対する一片の同情が浮んだのであろう。彼は急に、口調を和けながら、

「どうかお嬢様、こんなことを申上げる私の苦しい立場もお察し下さい。怨も報もない御当家へ参つて、こんなことを申上げる私は可なり苦しい思いを致しているのでございます。然し、これも全く、使われています主人の命令でございますから。それでは、いずれ明日改めて伺いますから。」

瑠璃子が、大理石で作った女神の像のように、冷たく化石したような美しい顔の、眉一つ動かさず黙つて聞いているために、男はある威圧を感じたのであろう。そう云つてしまふと、コソコソと、逃ぐるように去つてしまった。

父に、この督促を伝えようかしら。が伝えたつて何にもならない。何万と云う金が、今日明日に迫つて、父に依つて作られる筈がなかった。が、もし払わないとすると、向うでは直ぐ相当な法律上の手段に、訴えたと云う。一体それはどんなことをするのだらう。そ

う考えて来ると、瑠璃子は自分の胸一つには、収め切れない不安が湧いて来て、進まないながら、父の部屋へ、上って行かずにはいられなかった。

「うむ！ 直ぐ法律上の手段に訴える！」

父はそう云つて、腕を拱こまぬいて、追さすに抑え切れない憂慮の色が、アリ／＼と眉の間に溢あふれた。

「執達吏を寄越すと云うのだな。あは／＼／＼、まかり違つたら、競売にすると云うのかな。それもいゝ、こんなボロ屋敷なんか、ない方が結句気楽だ！ は／＼／＼。」

父は、元氣らしく笑おうとした。が、それは空むなしい努力だった。瑠璃子の眼には、笑おうとする父の顔が、今にも泣き出すように力なくみじめに見えた。

「何どうにかならないものでございましょうか、ほんとうに。」

父の大事などには、今迄いまま一度も口出しなどをしたことのない彼女も、恐ろしい危機に、つい平生のたしなみを忘れてしまった。

父も、それに釣り込まれたように、

「そうだ！ 本多さえ早く帰つておれば、何どうにかなるのだがな。八月には帰ると云うのだから、此この一月か二月さえ、何どうにか切り抜けければ——」

父は、娘に対する虚勢も捨てたように、首をうな垂れた。そうだ、父の莫逆ばくぎやくの友たる本多男爵だんしゃくさえ日本におればと、瑠璃子も考えた。が、その人は、宮内省くないしょうの調度頭の かみをしている男爵は、内親王の御降嫁ごこうかの御調度買入れのために、歐洲おうしゅうへ行っていて、此の八月下旬でなければ、日本へは帰らないのだった。

住んでいる家に、執達吏が、ドヤ／＼と踏み込んで来て家財道具に、封印をベタ／＼と付ける。そうした光景を、頭の中に思い浮べると、瑠璃子は生きていることが、味気ないようにさえ思った。

父も娘も、無言のまゝに、三十分も一時間も坐すわっていた。いつまで、坐すわつていても父娘の胸の中の、黒いやな塊かたまりが、少しもほぐれては行かなかった。

その時である。また唐沢家を訪おもとう一人の来客があつた。悪魔の使であるか、神の使であるかは分らなかったけれど。

三

父と娘ことが、差し迫まる難関に、やるせない当惑まゆの眉をひそめて、向い合つて坐すわつてい

る時に、尋ねて来た客は、木下と云う父の旧知だった。政治上の乾分とも云うべき男だった。父が、日本で初ての政党内閣に、法相の椅子を、ホンの一月半ばかり占めた時、秘書官に使つて以来、ズツと目をかけて来た男だった。長い間、父の手足のように働いていた。父も、いろ／＼な世話を焼いた。が、二三年来父の財力が、尽きてしまつて、乾分の面倒などは、少しも見えていられなくなつてから、此の男も段々、父から遠ざかつて行つたのだ。が、父は久し振に、旧知の尋ねて来たことを欣んだ。溺るゝ者は、藁をでも掴むように、窮し切つてゐる父は、何処かに救いの光を見付けようと、焦つてゐるのだった。その男は、今年の五月来た時とは、別人のような立派な服装をしてゐた。

「何うだい！ 面白い事でもあるかい！」

父は、心の中の苦悶を、此の来客に依つて、少しは紛ぎらされたように、淋しい微笑を、浮べながら応接室へ入つて行つた。

「お蔭さまで此の頃は、何うにかこうにか、一本立で食つて行けるようになりました。もう、二年お待ち下さい！ その中には、閣下への御恩報じも、万分の一の御恩報じも、出来るような自信もありますから。」

そう云いながら、得意らしく哄笑した。此の場合の父には、そうした相手のお世辞

さえ嬉^{うれ}しかった。

「そうかい！ それは、結構だな、俺^{わし}は、相変らず貧乏でう。年頃になった娘にさえ、いろ／＼の苦勞をかけている始末でう。」

父はそう云いながら、茶を運んで行つた瑠璃子の方を、詫^わびるように見た。

「いや、今に閣下にも、御運が向いて来る時代が参りますよ。此の頃ポツ／＼新聞などに噂^{うわさ}が出ますように、若^もし××会中心の貴族院内閣でもが、出来るような事がありませんたら、閣下などは、誰を差し措^おいても、第一番の入閣候補者ですから、本当に、今暫^{しばら}くの御辛抱です。三十年近い間の、閣下の御清節が、報^{むく}われないで了^{おわ}ると云うことは、余りに不当なことですから。……いやどうも、閣下のお顔を見ると、思わずこうした愚痴が出て困ります。いや、実は本日参つたのは、一寸^{ちよつと}お願いがあるのです。」

そう云いながら、その男は立ち上つて、応接室の入口に、立てかけてあつた風呂敷包^{ふろしきづつみ}を、卓^{テーブル}の上に持つて来た。その長方形な恰^{かつ}好^{こう}から推して、中が軸物^{じくもの}であることが分つていた。

「実は、之^{これ}を閣下に御鑑定していただきたいのです。友人に頼まれましたのですが、書画屋などには安心して頼まれませんかのですから。是非一つ閣下をお願いしたいと思うたも

のですから。」

瑠璃子の父は、素人鑑定家として、堂に入っていた。殊に北宗画南宗画に於ては、その道の権威だった。

「うむ！ 品物は何なのだな。」父は余り興味がないように云った。書画を鑑定すると云ったような、落着いた気分は、彼の心の何処にも残っていないからである。

「夏珪の山水図です。」

「馬鹿な。」父は頭から嘲るように云った。「そんな品物が、君達の手にはヒョコ／＼あるものかね。それに、見れば、大幅じゃないか。まあ黙って持って帰った方がいゝだろう。

見なくつても分っているようなものだ。ハハハハハハ。」

父は、丸切り相手にしようとはしなかった。相手は、父にそう云われると、恐縮したように、頭をかきながら、

「閣下に、そう手厳しく出られると、一言もありません。が、諦めのために見て戴きたいのです。贗物は覚悟の前ですから。持っている当人になると、怪しいと思いながら、諦められないものですから。ハハハハハハ。」

四

久し振で、訪ねて来た旧知の熱心な頼みを聞くと、父は素氣すげなく、断りかねたのであるう、それかと云いつて、書画を鑑定すると云ったような、静かな穏かな気持は、今の場合、少しも残つてはいないのだつた。

「見ないことはないが、今日は困るね、日を改めて、出直して来て貰もらいたいね。」父は余儀なさそうに云つた。

「いや決して、直すぐ只ただいま今見て下さいなどと、そんな御無理をお願いいたすのではありません。お手許てもとへおいて置きますから、一月でも二月でも、お預けしておきますから、何どうかお暇な時に、お氣が向いたときに。」相手は、叮嚀ていねいに懇願こんがんした。

「だが、夏珪かけいの山水なんて、大した品物を預つておいて、若もしもの事があると困るからね。尤もつとも、君などが、そうヒョックリ本物を持つて来ようなどとは、思わないけれども、ハ、ハ、ハ、ハ。」

父は、品物が贗物であることに、何の疑いもないように笑つた。

「いやそんな御心配は、御無用です。閣下のお手許に置いて置けば、日本銀行へ供託きようたく

して置くより安全です、ハ、ハ、ハ。閣下のお口から、麿だと一言仰しやうて下さると当人も諦めが、付くものですから。」

相手に、そう如才なく云われると、父も断りかねたのであろう。口では、承諾の旨を答えなかつたけれども、有耶無耶の裡に、預ることになってしまった。

その用事が、片付くと客は、取つて付けたように、政局の話などを始めた、父は暫らくの間、興味の乗らないような合槌を打っていた。

客が、帰って行くとき、父は玄関へ送つて出ながら、

「凡そ何時取りに来る？」と訊いた。やつぱり、軸物のことが少しは氣になっているのだつた。

「御覧になつたら、ハガキでも、御一報を願えませんか、本当にお氣に向いた時でよろしいのですから。当方は、少しも急ぎませんのですから。」

客は幾度も繰返しながら、帰つて行つた。応接室へ引き返した父は、瑠璃子呼びながら、

「之を蔵つて置け、俺の居間の押入へ。」と、命じた。が、瑠璃子が、父の云い付に従つて、その長方形の風呂敷包を、取り上げようとした時だつた。父の心が、急にふと變つた

のだろう。

「あ、そう。やつぱり一寸^{ちよつと}見て置かな。どうせ廬^{きま}に定っているのだが。」

そう云いながら、父は瑠璃子の手から、その包みを取り返した。父は包みを解^といて、箱を開くと追^{さす}に丁寧^{さすが}に、中の一軸を取り出した。幅三尺に近い大幅だった。

「瑠璃さん！一寸掛けて御覧。その軸の上へ重ねてもいゝから。」

瑠璃子は父の命ずるまゝに、応接室の壁に古くから懸っている、父が好きな維新の志士雲井龍雄^{たつお}の書の上へ、夏珪の山水を展開した。

先^まず初め、層々と聳^{そび}えている峰巒^{ほうらん}の相^{すがた}が現れた。その山が尽きる辺から、落葉し尽くした疎林^{そりん}が淡々と、浮かんでいる。疎林の間には一筋の小径^{こみち}が、遙々^{はるばる}と遠く続いている。その小径を横ぎつて、水の乾^かれた小流^{さながれ}が走っている。その水上に架する小さい橋には、牛に騎した牧童が牧笛を吹きながら、通り過ぎていく。夕暮が近いのであろう、蒼茫^{そうぼう}たる薄霽^{うすもや}が、ほのかに山や森を掩^{おほ}うている。その寂寞^{せきばく}を僅^{わず}かに破るものは、牧童の吹き鳴らす哀切なる牧笛の音であるのだろう。

父は、軸が抐^{ひろ}げられるのと共に、一言も言葉を出さなかった。が、じつと見詰めている眸^{ひとみ}には感激の色がアリ／＼と動いていた。五分ばかりも黙っていただろう。父は感に堪^たえ

たように、もう黙つてはいられないように云つた。

「逸品いっぴんだ。素晴らしい逸品だ。此間この、伊達侯爵家だてこうしやくの売立に出た夏珪かけいの『李白観瀑』
以上の逸品だ！」

父は熱に浮かされたように云つていた。夏珪の『李白観瀑』は、つい此間行われた伊達家の大売立に九万五千円と云う途方もない高価たかねを附せられた品物だった。

五

「不思議だ！ 木下などが、こんな物を持つて来る！」父は暫しばらくの間は魅せられたように、その山水図に対して、立つていた。

「そんなに、此絵このがいゝのでございますか。」瑠璃子も、つい父の感激に感染して、こう訊きいた。

「いゝとも。徽宗皇帝きせうてう、梁楷りようかい、馬遠ばえん、牧溪もつけい、それから、この夏珪、みんな北宗画の巨頭なのだ、どんな小幅だつて五千円もする。この幅などは、お父様が、今迄いままで見た中での傑作だ。北宗画と云うのは、南宗画とはまた違つた、柔かい佳いい味のあるものだ。」

父は、名画を見た^{よろこ}びに、つい明日に迫る一家の窮境を忘れたように、瑠璃子に教えた。「そうだ。早く木下に知らせてやらなければいけない。贗^{にせもの}物だからいくら預っていて、心配ないと思つて預かつたが、本物だと分ると急に心配になった。そうだ瑠璃さん！二階の押入れへ、大切に^{しま}蔵つて置いておくれ！」

父は十分もの間、近くから遠くから、つくづくと見尽した後、そう云つた。

瑠璃子は、それを持つて、二階への階段を上りながら思った。自分の手中には、一幅十万円に近い名画がある。此の一幅さえあれば一家の窮状は何の苦もなく脱することが出来る。何んなに名画であろうとも、長さ一丈を超えず、幅五尺に足らぬ布片に、五万十萬の大金を投じて惜しまない人さえある。それと同時に、同じ金額のために、いろ／＼な侮辱や迫害を受けている自分達^{おやこ}父娘もある。そう思うと、手中にあるその一幅が、人生の不当な、不公平な状態を皮肉に示しているように思われて、その品物に対して、妙な反感をさえ感じた。

その日の午後、二階の居間に閉じ籠^{こも}つた父は、何うしたのであろう。平素^{いつも}に似ず、檻^{おり}に入れられた熊^{くま}のように、部屋中を絶間なしに歩き廻つていた。瑠璃子は、階下の自分の居間にいながら、天井に絶間なく続く父の足音に不安な眸^{ひとみ}を向けずには、いられなかった。

常には、軽い足音さえ立てない父だった。今日は異常に昂奮こうふんしている様子が、瑠璃子にもそれと分った。暫らく音が、絶えたかと思うと、又立ち上って、ドシ／＼と可なり激しい音を立てながら、部屋中を歩き廻るのだった。瑠璃子はふと、父が若い時に何かに激昂げつこすると、直ぐ日本刀を抜いて、ビュウビュウと、部屋の中で振り廻すのが癖だったと、亡き母から聞いたことを思い出した。

あんなに、父が昂奮しているとすると、若し明日莊田の代理人が、父に侮辱に近い言葉でも吐くと短慮な父は、どんな椿事ちんじを惹き起さないと限らないと思うと、瑠璃子は心配の上に、又新しい心配が、重なって来るように、こんな時家出した兄でも、いて呉れ／＼ばと、取止めもない愚痴さえ、心の裡うちに浮んだ。

その日、五時を廻った時だった。父は、瑠璃子を呼んで、外出をするから、車を呼べと云った。もう、金策あての当などが残っている筈はないと思うと、彼女は父が突然出かけて行くことが、可なり不安に思われた。

「何処どこへ行らっしゃるのでございますか。もう直ぐ御飯でございますのに。」瑠璃子は、それとなく引き止めるように云った。

「いや、木下から預った軸物が急に心配になつてね。これから行って、届けてやろうと思

うのだ。向うでは、あゝした高価なものだとは思わずに、預けたのだろうから。」父の答えは、何だか曖昧あいまいだった。

「それなら、直ぐ手紙でもお出しになって、取りに参るように申したら、如何いかにでございましょう。別に御自身でお出かけにならなくても。」瑠璃子は、妙に父の行動が不安だった。「いや、一寸行ちよつとつて来よう。殊ことに此家このは、何時いつ差押えになるかも知れないのだから。預つて置いて差押えられたりすると、面倒だから。」父は声低く、弁解するように云った。そう云えば、父が直ぐ返しに行こうと云うのにも、訳がないことはなかった。

が、父が車に乗つて、その軸物の箱を肩に靠もたせながら、何処いずこともなく出て行く後姿を見た時、瑠璃子の心の中の妙な不安は極点に達していた。

六

到頭のろ呪のろわれた六月の三十日が来た。梅雨つゆ時には、珍らしいカラリとして朗ほがらかな朝だった。明るい日光の降り注いでいる庭の樹立こたちでは、朝早くから蟬せみがさん／＼と鳴きしきっていた。が、早くから起きた瑠璃子の心には、暗い不安と心配とが、泥のように澱よどんでいた。父

が、昨夜遅く、十二時に近く、酒気を帯びて帰って来たことが、彼女の新しい心配の種だった。還暦かんれきの年に禁酒してから、数年間一度も、酒杯を手にしたことのない父だったのだ。あれほど、気性の激しい父も、不快な執拗しつような圧迫のために、自棄やけになったのではな
いかと思うと、その事が一番彼女には心苦しかった。

つい此間来た、驚おどろの嘴くちばしのような鼻をした男が、今にも玄関に現れて来そうな気がして、瑠璃子は自分の居間に、じつと坐すわっていることさえ、出来なかった。あの男が、父に直接会って、弁済を求める。父が、素気すげなく拒絶する。相手が父を侮辱するような言葉を放つ。いら／＼し切っている父が激怒する。恐ろしい格闘が起る。父が、秘蔵ひざうの貞宗さだむねの刀を持ち出して来る。そうした厭いやな空想が、ひっきりなしに瑠璃子の頭を悩ました。が、午前中は無事だった。一度玄関に訪おもう声があるので驚いて出て見ると、得体の知れぬ売薬を売り付ける偽癆兵にせはいへいだった。午後になつてからも、却々なかなか来る様子はなかった。瑠璃子は絶えずいら／＼しながら厭な呪わしい来客を待っていた。

父は、朝食の時に、瑠璃子と顔を合わせたときにも、苦り切ったまゝ一言も云いわなかった。昨日きのうよりも色が蒼あおく、眼が物狂わしいような、不気味な色を帯びていた。瑠璃子もなるべく父の顔を見ないように、俯うつむいたまゝ食事をした。それほど、父の顔は傷いたまみじめに

見えた。昼の食事に顔を合した時にも、親子は言葉らしい言葉は、交さなかった。まして、今日が呪われた六月三十日であると云ったような言葉は、孰^{どち}らからも、おくびにも出さなかった。その癖、二人の心には六月三十日と云う字が、毒々しく烙^やき付けられているのだった。

が、長い初夏の日が、漸^{ようや}く暮れかけて、夕日の光が、遥^{はる}かに見える山王台の青葉を、あか／＼と照し出す頃になつても、あの男は来なかった。あんなに、心配した今日が、何事も起らずに済むのだと思うと、瑠璃子は妙に拍子抜けをしたような、心持にさえなろうとした。

が、然^{しか}し悪魔に手拔かりのある筈^{はず}はなかった。その犠^{いけにえ}牲が、十分苦しむのを見すまして、最後に飛びかゝる猫のように瑠璃子父子^{おやこ}が、一日を不安な期待の裡^{うち}に、苦しみ抜いて、やっと一時逃れの安心に入ろうとした間隙^{すき}に、かの悪魔の使者は護謨輪^{ゴムわ}の車に、音も立てず、そつと玄関に忍び寄つたのだつた。

「いや、大変遅くなりまして相済みません。が、遅く伺いました方が、御都合が、およろしかろうと思ひましたものですから、お父様は御在宅でしょうか。」

瑠璃子が、出迎えると、その男は妙な薄笑いをしながら、言葉丈^{だけ}はいやに、鄭^{てい}重^{ちよう}だ

った。

来る者が、到頭来たのだと思いながらも、瑠璃子はその男の顔を見た瞬間から、憎悪と不快とで、小さい胸が、ムカムカと湧き立って来るのだった。

「お父様！ 莊田の使が参りました。」

そう父に取り次いだ瑠璃子の声は、かすかに顫えを帯びるのを、何うともする事が出来なかった。

「よし、応接室に通して置け。」

そう云いながら、父は傍の手文庫を無造作に開いた。部屋の中は可なり暗かったが、その開かれた手文庫の中には、薄紫の百円紙幣の束が、——そうだ一寸にも近い束が、二つ三つ入れられてあるのが、アリくと見えた。

瑠璃子は、思わず『アッ』と声を立てようとした。

七

父の手文庫に思いがけなくも、ほのかな薄紫の紙幣の厚い束を、発見したのであるから、

瑠璃子が声を立てるばかりに、駭いたのも無理ではなかった。駭くのと一緒に、有頂天になつて、躍り上つて、欣ぶべき筈であつた。が、實際は、その紙幣を見た瞬間に云い知れぬ不安が、潮の如くヒタ／＼と彼女の胸を充した。

瑠璃子は、父がその札束を、無造作に取り上げるのを、恐ろしいものを見るように、無言のまゝじつと見詰めていた。

父が、応接室へ出て行くと、鷺鼻の男は、やんごとない高貴の方の前にでも出たように、ペコ／＼した。

「これは、これは男爵様でございますか。私はあの、莊田に使われております矢野と申しますものでございます。今日止むを得ません主命で、主人も少々現金の必要に迫られましたものですから止むを得ず期限通りにお願ひ致しまする次第で、何の御猶予も致しませんで、誠に恐縮致しておる次第でございます。」父は、そうした挨拶に返事さえしなかった。

「証文を出して呉れたまえ。」父の言葉は、匕首のように鋭く短かつた。

「はあ！ はあ！」

相手は、周章たように、ドギマギしながら、折靴の中から、三葉の証書を出した。

父は、じつと、それに目を通してから、右の手に、驚掴みにしていた札束を、相手の面前に、突き付けた。

相手は、父の鋭い態度に、オド／＼しながら、それでも一枚々々算え出した。

「莊田に言伝ことづてをしておいて呉れたまえ、いゝか。俺わしの云うことをよく覚えて、言伝をして、おいて呉れ給えたま。此この唐沢は貧乏はしている。家も邸やしきも抵当に入っているが、金銭のために首の骨を曲げるような腰抜けではないぞ。日本中の金の力で、圧迫されても、横に振るべき首は、決して縦には動かさないぞ。いゝか。帰って、そう云うのだ！ 五万や十万の債務は、期限どおり何時いつでも払ってやるからと。」

父は、犬猫をでも叱咤しったするように、低く投げ捨てるような調子で云った。相手は何と、罵ののられても、兎とに角厭かくやな役目を満足に果し得たことを、もっけの幸と思っているらしく、一層丁寧いんぎんに慇懃だつただつた。

「はあ！ はあ！ 畏かしこまりました。主人に、そう申し聞けますでござります。どうも、私の口からは、申し上げられませんが、成り上り者などと云う者は、金ばかりありましても、人格などと云うものは皆目かいもく持っていない者が、どうございまして、私の主人なども、使われている者の方が、愛想を尽かすような、卑いやしい事を時々、やりますので。いや、閣下

のお腹^{はら}立^{たち}は、全く御尤^{ごもつと}もです。私からも、主人に反省を促すように、申します事でございます。それでは、これでお暇^{いとま}致します。」

丁度^い烏賊^{いか}が、敵^{おそ}を怖^{おそ}れて、逃げるときに厭な墨汁を吐き出すように、この男も出鱈^{でたらめ}目な、その場限りの、遁辞^{とんじ}を並べながら、忽^{そうそつ}卒として帰って行つた。

そうだ！ 父は最初の悪魔の突撃を物の見事に一蹴^{いつしゅう}したのだった。この次ぎの期限までには、半年の余裕がある。その間には、父の親友たる本多男爵も帰って来る。そう思うと、瑠璃子はホッと一息ついて安心しなければならない筈だった。が、彼女の心は、一つの不安が去ると共に、又別な、もつと性質^{たち}のよくない不安が、何時の間にか入れ換つていた。

「瑠璃さん！ お前にも心配をかけて済まなかつたのう。もう安心するがいゝ。これで何事もないのだ。」

父は、客が帰つた後で、瑠璃子の肩に手をかけながら慰め顔にそう云つた。
が、瑠璃子の心は、怏^{おう}々^{おう}として楽しまなかつた。

『お父様！ あなたは、あの大金を何^どうして才覚なさつたのです。』
そう云う不安な、不快な、疑いが咽喉^{のど}まで出かゝるのを、瑠璃子は、やっと抑え付けた。

ユージツト

一

一家の危機は過ぎた。六月は暮れて、七月は来た。が、父の手文庫の中に奇蹟きせきのように見出みいだされた、三万円以上の、巨額な紙幣に対する、瑠璃子るりこの心の新しい不安は、日の経たつに連れても、容易には薄れて行かなかった。

七月も半なかばになった。庭先に敷き詰めた、白い砂利の上には、瑠璃子の好きな松葉牡丹ぼたんが、咲き始めた。真紅しんくや、白や、琥珀こはくのような黄や、いろく変った色の、少女おとめのような優しい花の姿が、荒れた庭園の夏を彩る唯一ゆいいつの色彩だった。

莊田しょうだの、思い出す丈だけでも、憤いきどおろしい面影も、だんく思い出す回数すべが、少くなつた。驚おどろ鼻ばなの男の顔などは、もう何時いつの間にか、忘れてしまった。凡すべてが、一場の悪夢のように、その厭いやな苦い後感も何時しか消えて行くのではないかと思われた。

が、それは瑠璃子の空しい思^{おも}違^{ちが}ひだつた。悪魔は、その最後の毒矢を、もう既に放つていたのだつた。

七月の末だつた。父は、突然警視總監のT氏から、急用があると云つて、会見を申し込まれた。父は、T氏とは公開の席で、二三度顔を合せた丈で、私交のある間ではなかつた。殊^{こと}に、父は政府当局からは常に、白眼を以て見られていたのだから。

「何の用事だろう?」

父は、一寸不審^{ちよつとふしん}そうに首を傾けた。警視總監と云つたような言葉丈でも、瑠璃子には妙に不安の種だつた。

が、父は何か考え当る事があつたのだろう、割合気軽に出發して行つた。が、掻^かき乱された瑠璃子の胸は、父の車を見送つた後も、暫^{しば}らくは静まらなかつた。

父は、一時間も経たぬ間に歸つて來た。瑠璃子は、ホツと安心して、いそぐと玄關に迎えた。

が、父の顔を一目見たとき、彼女はハツと立竦^{たちすく}んでしまった。容易ならぬ大事が、父の身边に起つたことが、直ぐそれと分つた。父の顔は、土のように暗く蒼^{あお}ざめていた。血の色が少しもないと云つてよかつた。眼丈^{だけ}は、平素^{いつも}のように爛^{らんらん}々と、光つていたが、そ

の光り方は、狂人の眼のように、物^{もの}凄^{すご}く而^{しか}も、ドロンとして力がなかった。

「お帰りなさいまし。」と、云う瑠璃子の言葉も、しわがれたように、咽喉^{のど}にからんでしまった。瑠璃子が、父の顔を見上げると、父は子に顔を見られるのが、恥しそうに、コソ／＼と二階へ上つて行こうとした。

父の狼^{ろうばい}狽^{ばい}したような、血迷ったような姿を見ると、瑠璃子の胸は、暗い憂慮で一杯になつてしまった。彼女は、父を慰めよう、訳を訊^きこうと思ひながら、オズ／＼父の後から、随^ついて行つた。

が、父は自分の居間へ入ると、後から随^ついて行つた瑠璃子を振り返りながら云つた。

「瑠璃さん！　どうか、お父様を、暫らく一人にして置いて呉^くれ！」

父の言葉は、云い付けと云うよりも哀^{あい}願^{がん}だった。父としての力も、權威もなかった。

それにふと気が付くと、そう云つた刹^{せつ}那^な、父の二つの眼には、抑えかねた涙が、ほた／＼と湧^わき出しているのだった。

父が涙を流すのを見たのは、彼女が生れて十八になる今日まで、父が母の死床に、最後の言葉をかけた時、たった一度だった。

瑠璃子は、父にそう云われると、止^やむなく自分の部屋に帰つたが、一人自分の部屋にい

ると、墨のような不安が、胸の中を一杯に塗り潰してしまうのだった。

夕食の案内をすると、父は、『喰べたくない』と云ったまゝ、午後四時から、夜の十時頃まで、カタと云う物音一つさせなかった。

十時が来ると、寝室へ移るのが、例だった。瑠璃子は、十時が鳴ると父の部屋へ上つて行つた。そして、オズ／＼扉ドアを開けながら云つた。

「もう、十時でございます。お休み遊ばしませ。」默然としていた父は、手を拱こまねいたまゝ、振向きもしないで答えた。

「俺わしは、もう少し起きているから、瑠璃さんは先きへお寝なさい！」

そう云われると、瑠璃子は、愈いよいよ不安になつて来た。寝室へ退しりぞくことなどは愚か、父の部屋を遠く離れることさえが、心配で堪たまらなくなつて来た。瑠璃子は、階段を中途まで降りかけたが、烈はげしい胸騒ぎがして、何どうしても足が、進まなかった。彼女は、足音を忍ばせながら、そつと、引き返した。彼女は、灯ひもない廊下の壁に、寄り添いながら立っていた。父が、寝室へ入るまでは、何うにも父の傍を離れられないように思つた。

二十分経ち三十分経つても、父は寢室へ行くような様子を見せなかった。そればかりではなく、部屋の中からは、身動きをするような物音一つ聞えて来なかった。瑠璃子も、息を凝しながら、ずっとほの暗い廊下の暗に立っていた。一時間余りも、立ち尽したけれども、疲労も眠気も少しも感じなかった。それほど、彼女の神経は、異常に緊張しているのだった。じじと鳴く庭前の、虫の声さえ手に取るように聞えて来た。

十二時を打つ時計の音が、階下の闇から聞えて来ても、父は部屋から出て来る様子はないかった。

夜が、深くなつて行くのと一緒に、瑠璃子の不安も、だん／＼深くなつて行つた。十二時を打つのを聞くと、もうじつと、廊下で待つていられないほど、彼女の心は不安な動揺に苛まれた。彼女は、無理にも父を寝させようと決心した。云い争つてでも、父を寢室へ連れて行こうと決心した。彼女が、そう決心して、扉の白い瀬戸物の取手に、手を触れたときだった。何時もは、訳もなくグルリと廻転する取手が、ガチリと音を立てたまゝ、彼女の手に逆うように、ビクリともしなかった。

『内部から鍵をかけたのだ！』

そう思った瞬間に、瑠璃子は鉄槌で叩かれたように、激しい衝動を受けた。気味の悪い悪寒が、全身を水のように流れた。

「お父様！」彼女は、我を忘れて叫んだ。その声は、悲鳴に近い声だった。が、瑠璃子が、その声をかけた瞬間、今迄静であつた父が、俄に立ち上つて、何かをしているらしい様子が、アリ／＼と感ぜられた。

「お父様！ お開けなすつて下さい！ お父様！」

瑠璃子が、続けざまに、呼びかけても、父は返事をしなかった。父が、何とも返事をしないことが彼女の心を、スツカリ動揺させてしまった。恐ろしい不安が、彼女の胸に、充ち溢れた。彼女は、扉を力一杯押した。その細い、華奢な両腕が、折れるばかりに打ち叩いた。

「お父様！ お父様！ お開けなすつて下さい！」

彼女の声は、狂女のそのように、物凄かった。魔物に、その可憐な弟を奪われて、鉄の扉の前で、狂乱するタンタジールの姉のように、命掛の声を振擻った。

「お父様！ 何うして茲をお閉めになるのです。茲をお閉めになつて何う遊ばそうとなさるのです。お開け下さい！ お開け下さい。」

が、父は何とも返事をしなかった。父が返事をしない事に依^よつて、瑠璃子は、目が眩^{くら}むほど恐ろしい不安に打たれた。彼女は、ふと気が付いて、窓から入ろうと、電^{いなすま}のように、ヴェランダへ走つて出た。が、ヴェランダに面した窓には、丈夫な鎧^{よろいど}戸^おが掩^{おお}われていた。彼女は、死物狂いになつて、再び扉^{ドア}の所へ歸つて来た。そして、必死に、そのかわい、しなやかな身体^{からだ}を、思い切り扉^{ドア}に投げ付けて見た。が、扉^{ドア}は無慈悲に、傲^{ごうぜん}然と彼女の身体を突き返した。

彼女は、血を吐かんばかりに叫んだ。

「お父様！　なぜ、開けて下さらないのです。何う遊ばそうと云うのです。此^{この}瑠璃を捨て、置いて何う遊ばそうと云うのです。万一の事をなさいますと、瑠璃も生きていないつもりでございますよ。お父様！　お恨みでございます。どんな事情がございましたらうとも、私に一応話して下さいまして、およろしいじゃございませんか。お父様の外に、誰一人頼る者もない瑠璃ではございませんか。お開け下さいませ。兎^とに角^{かく}、お開け下さいませ。万一の事でもなさいますと、瑠璃はお父様をお恨みいたしますよ。」

狂つたように、扉^{ドア}を搔^かき、打ち、押し、叩いた後、彼女は扉^{ドア}に、顔を当てたまゝ、と泣き崩れた。

その悲壮な泣き声が、古い洋館の夜更よふけの闇を物凄く顫ふるわせるのだった。

三

よゝと泣き崩れた瑠璃子は、再び自分自身を凜りり々しく奮い起して、女々しく泣き崩れて
いるべき時ではないと思つた。彼女は、最後の力、その繊細な身体からだにある丈だけの力を、両
方の腕にこめて、砕けよ裂けよとばかりに、堅い、鉄のように堅い扉ドアを乱打した後、身体
全体を、烈はげしい音を立てゝ、それに向つて、打ち付けた。その時に、何かの奇蹟きせきが起つた
ように、今迄いままではガタリとも動かなかつた扉ドアが軽々と音もなく口を開いた。機はすみを喰つた
彼女の身体からだは、つゝと一間ばかりも流れて、危く倒れようとした。その時、父の老いては
いるけれども、尚なお力強い双腕もううでが、彼女の身体を力強く支えたのである。
「お父様！」と、上ずつた言葉が、彼女の唇くちびるを洩もれると共に、彼女は暫しばらくは失神したよ
うに、父の懷ふところに顔を埋うずめたまゝ、烈しい動悸どうきを整えようと、苦しさにあえいでいた。
気が付いて見ると、父の顔は涙で一杯だった。卓テーブルの上には、遺書かきおきらしく思われる書状
が、数通重ねられている。

「瑠璃さん！ あわれんでお呉れ！ お父さんは死に損つてしまったのだ！ 死ぬことさえ出来ないような臆病者になつてしまったのだ！ お前の声を聞くと、俺の決心が訳もなく崩されてしまったのだ！ お前に恨まれると思うと、お父様は死ぬことさえ出来ないのだ。」

父は、瑠璃子の昂奮が、漸く静まりかけるのを見ると、呟くように語り始めた。

「まあ、何を仰しやるのでございます、死ぬなどと。まあ何を仰しやるのでございます。一体何うしたと云つて、そんな事を仰しやるのでございます。」

「あゝ恥しい。それを訊いて呉れるな！ 俺はお前にも顔向けが出来ないのだ！ 彼奴の恐ろしい毘に、手もなくかゝつたのだ。あんな卑しい人間のかけた毘に、狐が狸かのように、手もなくかゝつたのだ。恥しい！ 自分で自分が厭になる！」

父は、座にも堪えないように、身悶えて口惜しがった。握っている拳がブル／＼と顫えた。

「彼奴と仰しやりますと、やっぱり莊田でございますか。莊田が、何をいたしましたのでございますか。」

瑠璃子も烈しい昂奮に、眼の色を変えながら、父に詰め寄つて訊いた。

「今から考えると、見え透いた罠だったのだ。が、木下までが、俺を売ったかと思うと俺は此の胸が張り裂けるようになって来るのだ！」

父は、木下が眼前にでもいるように、前方を、きつと睨みながら、声はわな／＼と顫えた。

「へえ！ あの木下が、あの木下が。」と、瑠璃子も暫らくは茫然となった。

「金は、人の心を腐らすものだ。彼奴までが、十何年と云う長い間、目をかけて使つてやつた彼奴迄が、金のために俺を売つたのだ。金のために、十数年来の旧知を捨て、敵の犬になったのだ。それを思うと、俺は坐つても立つてもおられないのだ！」

「木下が、何うしたと云うのでございます。」

瑠璃子も、父の激昂に誘われて桜色に充血した美しい顔を、極度に緊張させながら、問い詰めた。

「此間、彼奴が持つて来た軸物を、何だと思う、あれが、俺を陥れる罠だったのだ。あれは一体誰のものだと思う。友達のものだと云う、その友達は誰だったと思う。」

父は、眼を熱病患者のそのように光らせながら、じつと瑠璃子を見下した。

「あれは誰のものでもない、あの荘田のものなのだ。荘田のものを、空々しく俺の所へ持

つて来たのだ。」

「何の為ためでございましたらう。何だつてそんなことを致したのでございましょう。でも、お父様はあの晩、直ぐお返しになつたではございませんか。」

瑠璃子が、そう云うと父の顔は、見る／＼曇つてしまった。彼は、崩れるように後の腕椅子いすに身を落した。

「瑠璃さん！ 許しておくれ！ 罨をかける者も卑しい。が、それにかゝる者もやつぱり卑しかったのだ。」

父は、そう云うと肉親の娘の視線をも避けるように、面おもてを伏せた。

四

暫らくは、強い緊張の裡うちに、父も子も黙つていた。が、父はその緊張に堪たえられないように、面を俯うつむけたまゝ、眩つぶやくように云つた。

「瑠璃さん！ お前にスツカリ云つてしまおう。俺わしはな、浅墓あさはかにも、相手の罨わなにかゝつて飛んでもないことをしてしまつたのだ。あの木下の奴やつ！ 彼奴迄あいつまでが、莊田の犬になつ

ていようとは夢にも悟らなかつたのだ。お前に云うのも恥しいが、俺は木下が、あの軸物を預けて行つたとき、フラ／＼と魔がさしたのだ。一月でも二月でも何時までも預けて置くと云う、此方が通知しない中は、取りに來ないと云う。俺は、そう聴いたときに、此の一軸で一時の窮境を逃れようと思つたのだ。素晴らしい逸品だ、殊に俺の手から持つて行けば、三万や五万は、直ぐ融通が出來ると思つたのだ。果して融通は出來た。が、それは罨の中の餌に、俺が喰ひ付いたのと、丁度同じだつたのだ。彼奴は、俺を散々餓えさした揚句、俺の旧知を買収して、俺に罨をかけたのだ。飢えていた俺は、不覺にも罨の中の肉に喰ひ付いたのだ。罨をかける奴の卑しさは、論外だが、かゝつた俺の卑しさも笑つて呉れ。三十年の清節も、清貧もあつたものではない！」

父は、のたうつように、椅子の中で、身を悶えた。之れを聞いている瑠璃子も、身体中が、猛火の中に入つたように、烈しい憤怒のために燃え狂うのを感じた。

「それで、それで、何うなつたと云うのでございます。」

彼女は、身を顫わしながら訊いた。卓の上にかけている白い蠟のような手も、烈しい顫えを帯びていた。

「あの軸物の本当の所有者は莊田なのだ。彼奴は、俺に対して横領の告訴を出しているの

だ。」

父は吐くように云った。蒼白い頬が烈しく痙攣した。

「そんな事が罪になるのでございますか。」

瑠璃子の眼も血走ってしまった。

「なるのだ！ 逆に取って、逆に出るのだから、堪らないのだ。預っている他人の品物は、売つても質入してもいけないのだ。」

「でも、そんなことは、世間に幾何もあるではございませんか。」

「そうだ！ そんなことは幾何でもある、俺もそう思つてやったのだ。が、向うでは初から謀つてやった仕事だ。俺が少しでも、蹉くのを待つていたのだ。蹉けば後から飛び付こうと待つていたのだ。」

瑠璃子の胸は、莊田に対する恐ろしい怒で、火を発するばかりであつた。

「人非人奴！ 人非人奴！ どれほどまで執念く妾達を、苦しめるのでございましょう。あゝ口惜しい！ 口惜しい！」

彼女は、平生のたしなみも忘れたように、身を悶えて、口惜しがった。

「お前が、そう思うのは無理はない。お父様だつて、昔であつたら、そのまゝにはして置

かないのだが。」

父の顔は益^{ますます}凄^{せい}愴^{そう}な色を帯びていた。

「あゝ、男でしたら、男に生れていましたら。残念でございます。」

そう云いながら、瑠璃子は卓^{テーブル}の上に、泣き伏した。

何^{どこ}処かで、一時を打つ音がした、騒^{さわ}がしい都の夏の夜も、静寂に更^ふけ切つて、遠くから響いて来る電車の音さえ、絶えてしまった。瑠璃子の泣き声が絶えると、深夜の静けさが、しん／＼と迫つて来た。

「それで、その告訴は何^どうなるのでございますか。まさか取上げにはなりませんでしょうね。」

瑠璃子は泣き顔を擡^{もた}げながら、心配そうに訊いた。

涙に洗われた顔は、一種の光沢を帯びて、凄^{せい}艶^{えん}な美しさに輝いているのであった。

五

「さあ！ 其^{そこ}処なのだ！ 今日警視總監が、個人として俺^{わし}に会見を求めたのは、その問題

なのだ。総監が云うのには、この位なことで、貴方を社会的に葬ってしまうことは、何とも遺憾なことなので告訴を取り下げるように懇々云つて見たが、頑として聴かない。そして唐沢氏本人がやつて来て、手を突いて謝まるならば告訴を取り下げようと云うのだ。何うも先方では貴方に対して何か意趣を含んで居るらしい。貴方も快くはあるまいが、此際先方に詫を入れて、内済にして貰つたら何うかと云うのだ。貴方もあんな男に詫びるのは、不愉快だろうが、然し、貴方の社会的地位や名誉には換えられないから、此際思い切つて謝罪して見たら何うかと云つて呉れるのだ。先方が告訴を取り下げさえすれば、検事局では微罪として不起訴にしようと云つていと云うのだ。」

父は低くうめくように云つて来たが、茲まで来ると急に烈しい調子に変わりながら、

「だが、瑠璃子考えておくれ。あんな男に、あんな卑しい人間に、謝罪はおろか、頭一つ下げることさえ、俺に取つてどんな恥辱であるか。俺は、それよりも寧ろ死を選みたいのだ。然し謝罪しないと、何うしても起訴を免れないのだ。起訴されると、お前此罪は破廉恥罪なのだ！ 爵位も返上を命ぜられるばかりでなく、俺の社会的位置は、滅茶苦茶だ！ あれ見い！ 貴族院第一の硬骨と云われた唐沢が、あのザマだと、世間から嘲笑されることを考えておくれ。死以上の恥辱だ。何の道を選んでも、死ぬより以上の

恥辱なのだ。瑠璃子、俺が死のうと決心した心の裡を、お前は察して呉れるだろう。」

瑠璃子は、父の苦しい告白を、石像のように黙って聴いていた。火のように熱した身体中の血が今は却って、氷のように冷たくなっていた。

「俺が死ねば、彼奴の迫害の手も緩むだろうし、それに依って、汚名を流さずして済む。

つまり、俺は悪魔の手に買い取られた俺の社会的名誉を、血を以て買い戻そうと思ったのだ。お前のことを、思わないではない。父の外には頼る者もないお前のことを思わないではない。が、破廉恥の罪人になることを考えると、泥棒と同じ汚名を被ることを考えると、何も考えておられなくなつたのだ。」

父は、そう云いながら、心の裡の苦しさに堪えられないように、頻りに身を悶えた。

「が、扉の外でお前が突然叫び出した声を聞くと、刀を持っていた俺の手が、しびれてしまったように、何うしても俺の思い通りに、動かないのだ。未練だ！ 未練だ！ と、心で叱つても、手が何うしても云うことを聴かないのだ。俺は、今初めてお前に対する父としての愛が、名誉心や政治上の野心などよりも、もっと大きいことが分つたのだ。俺は、社会上の位置を失つても、お前の為に生き延びようと思つたのだ。破廉恥罪の名を被ても、お前の父として、生き延びようと思つたのだ。名誉や位置などは、なくなつても、お前さ

えあれば、まだ生き甲斐^{がい}があると云うことが、分つたのだ。いや名誉や野心のために、生きるのよりも、自分の子供のために、生きる方が人間として、どれほど立派であるかと云うことが、今やつと分つたのだ。俺^{わし}は、今光一を追出したことを後悔する。親の野心のために、子を犠牲にしようとしたことを後悔する。瑠璃子！ お前のために、どんな汚名を忍んでも生き延びるのだ。お前も、罪人のお父様を見捨てないで、いつまでも俺の傍を離れて呉れるな。」

父の顔は今、子に対する愛に燃えて、美しく輝いていた。彼は、子に対する愛に依って、その苦しみの裡から、その罪の裡から、立派に救われようとしているのだった。

六

そうだ！ 子の心は、^{すさま}凄じい^{ふんぬ}憤怒と復讐^{ふくしゅう}の一念とに、湧^わき立った。父が、子に対する愛のために、敵の与えた恥辱を忍ぼうとするのに拘^かわらず、子の心は敵に対する反抗と憎悪^{ぞうお}のために、狂ってしまった。

「お父様、それでいゝのでございましょうか。お父様！ 金さえあれば悪人がお父様のよ

うな方を苦しめてもいい、のでございましょうか。而も、国の法律までが、そんな悪人の味方をするなどと云う、そんなことが、許されることでございましょうか。」

瑠璃子は、平生のおとなしい、慎しやかな彼女とは、全く別人であるように、熱狂していた。父は子の激昂を宥めるように、「だが瑠璃子！ 悪人がどんな卑しい手段を講じてもお父様さえ、しっかりとしていればよかったのだ。国の法律に触れたのはやっぱり俺の不心得だったのだ。」

「いゝえ！ 妾は、そうは思いません。」瑠璃子は、昂然として父の言葉を遮ぎった。

「莊田のやりましたような奸計を廻らしたならば、どんな人間をだつて、罪に陥すことは容易だと思ひます。お父様が信任していらつしやる木下をまで、買収してお父様を罠に陥し入れるなど、悪魔さえ恥じるような卑怯な事を致すのでございますもの。もし、国に本当の法律がございましたら、莊田こそ嚴罰に処せらるべきものだと思ひます。莊田のような悪人の道具になるような法律を、妾は心から呪いたいと思ひます。」

「眦が、裂けると云つたらいゝのだろう。美しい顔に、凄じい殺氣が迸つた。父も、子の烈しい氣性に、氣圧されたように、黙々として聴いていた。」

「お父様、あんな男に起訴されて、泣寝入りになさるような、腑甲斐ないことをして下さ

いますな。飽くまでも戦^{たたか}つて、相手の悪意を懲^{こころ}しめてやって下さいませ。あゝ妾^{わたくし}が男でございまして、……本当に男でございましたら……」

瑠璃子は、熱に浮かされたように、昂^{こうふん}奮して叫び続けた。

「が、瑠璃子！ 法律と云うものは人間の行為の形丈^{だけ}を、律するものなのだ。莊田が、悪魔のような卑しい悪事を働いても、その形が法律に触れていなければ、大手を振って歩けるのだ。俺^{わし}は切羽詰つて一寸逃れに、知人の品物を質入れした。世間に有り触れたことで、事情止むを得なかったのだ。が、俺の行為の形は、ちゃんと法律に触れているのだ。法律が罰するものは、莊田の恐ろしい心ではなくして、俺の一寸した心得違^{ちがひ}の行為なのだ。行為の形なのだ！」

「若^もし、法律がそんなに、本当の正義に依^よつて、動かないものでしたら、妾^{わたくし}は法律に依ろうとは思いません。妾の力で莊田を罰してやります。妾の力で、莊田に思い知らせてやります。」

気が狂つたのではないかと思うほど、瑠璃子の言葉は烈しくなった。父は呆氣^{あつけ}に取られたように、子の口もとを見詰めていた。

「金の力が、万能でないと云うことをあの男に知らせてやらねばなりません。金の力で動

かないものが、世の中に在ることを知らせてやらねばなりません。このまゝで、お父様が、有罪になるような事がございましたら、莊田は何と思うか分りません。世の中には、法律の力以上に、本当の正義があることを、あの男に思い知らせてやらねばなりません。金の力などは、本当の正義の前には土塊つちくれにも等しいことを、あの男に思い知らせてやりたいと思います。」

そう云いながら、瑠璃子は父の顔をじつと見詰めていたが、思い切ったように云った。

「お父様！ お願いでございます。瑠璃子を、無い者と諦めて、今後何を致ししようと、妾わたくしの勝手に委まかせて下さいませんか。」

瑠璃子の顔に、鉄のように堅い決心が閃ひらめいた。父は、瑠璃子の真意を測りかねて、茫然ぼうぜんと愛児の顔を見詰めていた。

「お父様？ 妾わたくしは、ユージットになろうと思うのでございます。」

七

「ユージット？」老いた父には、娘の云った言葉の意味が分らなかった。

「左様でございます。^{わたくし}妾はユージツトになろうと思うのでございます。ユージツトと申しますのは猶太の美しい娘の名でございます。」

「その娘になろうと云うのは、どう云う意味なのだ？」父は、激しい興奮から覚めて、やゝ落着いた口調になっていた。

「ユージツトになろうと申しますのは、^{わたくし}妾の方から進んで、あの莊田勝平の妻になろうと云うことでございます。」

瑠璃子の言葉は、^{かしこ}慍の如く堅く氷の如く冷やかであつた。

「えーッ。」と叫んだまゝ、父は雷火に打たれた如く茫然^{ぼうぜん}となつてしまった。

「お父様！ お願ひでございます。どうか、^{わたくし}妾をないものと諦めて、^{あきら}妾の思うまゝに、させて下さいませ！」

瑠璃子は、何時^{いつ}の間にか再び熱狂し始めた。

「馬鹿^{ばか}なッ！」父は、烈^{はげ}しい、然^{しか}し慈愛の籠^{こも}つた言葉で叱^{しつ}責^{せき}した。

「馬鹿なことを考へてはいけない！ 親の難儀を救うために子が犠牲になる。親の難儀を救うために娘が、身売をする。そんな道徳は、古い昔の、封建時代の道徳ではないか。お前が、そんな馬鹿なことを考へる。聡明^{そうめい}なお前が、そんな馬鹿なことを考へる。お父^{とうさ}」

様を救おうとして、お前があんな豚のような男に身を委す。考える丈でも汚らわしいことだ！ お前を犠牲にして、自分の難儀を助かろうなどと、そんなさもしいことを考える父だと思うのか。俺は、自分の名誉や位置を守るために、お前の指一本髪一筋も、犠牲にしようとは思わない。そんな馬鹿々々しいことを考えるとは、平生のお前にも似合わないじゃないか。」

父は、思いの外に、激昂して、瑠璃子をたしなめるように云った。が、瑠璃子は、ビクとしなかった。

「お父様！ お考え違いをなさつては、困ります。お父様の身代りになろうなどと、そんな消極的な動機から、申上っているではありません。妾は、法律の網を潜るばかりでなく、法律を道具に使つて、善人を陥れようとする悪魔を、法律に代つて、罰してやろうと思うのです。一家が受けた迫害に、復讐するばかりでなく、社会のために、人間全体のために、法律が罰し得ない悪魔を罰してやろうと思うのです。お父様の身代りになろうと云うような、そんな小さい考えばかりではありません。」

瑠璃子は、昂然と現代の烈女と云つてもいゝように、美しく勇ましかった。

「お前の動機は、それでもいゝ。だが、あの男と結婚することが、何うしてあの男を罰す

ることになるのだ。何うして、一家が受けた迫害を、復讐することになるのだ。」

「結婚は手段です。あの男に対する刑罰と復讐とが、それに続くのです。」瑠璃子は凜然と火花を発するように云った。

「お父様、昔猶太のベトウリヤと云う都市が、ホロフェルネスと云う恐ろしい敵の猛将に、囲まれた時がありました。ホロフェルネスは、獅子を搏にするような猛将でした。ベトウリヤの運命は迫りました。破壊と虐殺とが、目前に在りました。その時に、美しい少女が、ベトウリヤ第一の美しい少女が、侍女をたった一人連れた切りで、羅衣を纏った美しい姿を、虎のようなホロフェルネスの陣営に運んだのです。そしてこの少女の、容色に魅せられた敵将を、閨中でたった一突きに刺し殺したのです。美しい少女は、自分の貞操を犠牲にして、幾万の同胞の命と貞操とを救ったのです。その少女の名こそ、今申し上げたユージットなのでございます。」

八

瑠璃子の心は、勇ましいロマンチックな火炎で包まれていた。牝獅子の乳で育ったと云

う野蛮人の猛将を、細い腕で刺し殺した猶太の少女の美しい姿が、勇ましい面影が、蝕画のように、彼女の心にこびりついて離れなかった。少女に仮装して、敵将を倒した日本武尊よりも、本当の女性である丈に、それ丈け勇ましい。命よりも大切な、貞操を犠牲にしている丈に、限りなく悲壮であつた。

「妾はユージツトのように、戦つて見たいと思うのです。」

二千有余年も昔の、猶太の少女の魂が、大正の日本に、甦つて来たように、瑠璃子は炎の如く熱狂した。

が、父は冷静だつた。彼は、熱狂し過ぎている娘を、宥めるように、言葉静かに説き諭した。

「瑠璃子！ お前のように、そう熱しては困る。女の一番大事な貞操を、犠牲にするなどと、そんな軽率なことを考えては困る。数万の人の命に代るような、大事な場合は、大切な操を犠牲にすることも、立派な正しいことに違いない。が、あんな獣のような卑しい男を、懲すために、お前の一身を犠牲にしては、黄金を土塊と交換するほど、馬鹿々々しいことじゃないか。」

「だが、お父様！」と、瑠璃子は直ぐ抗弁した。

「相手は、お父様の仰しやる通り、取るに足りない男には違いありません。が、現在の社会組織では人格がどんなに下劣でも、金さえあれば、帝王のように強いのです。お父様は、相手を『獣のように卑しい男』とお蔑すみになつても、その卑しい男が、金の力で、お父様のような方に、こんな迫害を加え得るのですもの。妾が、戦わなければならぬ相手は莊田勝平と云う個人ではありません。莊田勝平と云う人間の姿で、現れた現代の社会組織の悪です。金の力で、どんなことでも出来るような不正な不当な社会全体です。金さえあれば、何でも出来ると云つたような、その思想です。觀念です。妾は、それを破つて見たいと思うのです。」

瑠璃子は、処女らしい羞恥心を、興奮のために、全く振り捨てゝしまつたように、叫びつゝけた。

父は、子の烈しい勢を、持ち扱つたように、黙つて聞いていた。

「それに、お父様！ ユージツトは、操を犠牲にしましたが、それは相手が、勇猛無比なホロフェルネス、操を捨てゝかからなければ、油断をしなかつたからです。妾は、妻と云う名前ばかりで、相手を懲し得る自信があります。何うか妾を無いものと、お諦めになつて、三月か半年かの間、莊田の許へやつて下さいまし。匕首で相手を刺し殺す代りに、

精神的にあの男を滅ぼして御覽に入れますから。」

其処そこには、もう優しい処女おとめの姿はなかった。相手の卑怯ひきような執念深い迫害のために、到頭最後の堪忍かんにんを、し尽して、反抗やいばの刃を取って立ち上がった彼女の姿は、復讐ふくしゅうの女神その物の姿のように美しく凄愴せいそうだった。

「瑠璃さん！ あなたは、今夜は何うかしている。お父様とうさんも、ゆっくり考えよう。あなたも、ゆっくりお考えなさい。あなたの考えは、余り突飛だ。そんな馬鹿なことが今時：

…

「でも、お父様！」瑠璃子は少しも屈しなかった。「妾わたくしは、毒に報いるのには毒を以てしたいと思います。陰謀に報いるのには、陰謀を以てしたいと思います。相手が悪魔でも恥じするような陰謀たくましを逞くするのですもの。此方こつちだって、突飛な非常手段で、懲しめてやる必要があると思います。現代の社会では万能な金の力に対抗するのには、非常手段に出るより外はありません。妾は、自分の力を信じているのでございます。あんな男一人滅ぼすのには余る位の力を、持っているように思います。お父様！ どうか妾を信じて下さいまし。瑠璃子は、一時の興奮に駆られて無謀なことを致すものではありません。ちゃんと成算があるのでございます。」

瑠璃子の興奮は何処までも、続くのだった。父は黙々として、何も答えなくなった。父と娘との必死な問答の裡に、幾時間も経つたのであろう、明け易い夏の夜は、ほのぼのと白みかけていた。

美奈子

一

「はゝゝゝ、唐沢の奴、面喰っているだろう。はゝゝゝ。」

莊田は、籐製の腕椅子の裡で、身体をのけ反るようにしながら、哄笑した。

「どうも、貴方も人間が悪くていけない。あんないゝ方を苛めるなんて、何うも甚だ宜しくない。貴方が、持つて行けと云ったから、つい持つて行ったものゝ、どうも寢覚が悪くていけない。私は随分唐沢さんにお世話になったのですからね。」

木下は、遠に烈しい良心の苛責に堪えられないように、苦しげに云った。

「あゝいゝよ。分っているよ。君の苦衷も察しているよ。俺だって、何も唐沢が憎くて、やるのじゃないんだ。つい、意地でね。妙な意地でね。一寸した意地でやり始めたのだが、やり始めると俺の性質でね、徹底的にやり徹さないと気が済まないのだ。親を苛める気は、少しもないのだ。あの美しい娘に対する色恋からでもないんだ。はゝゝゝゝ、誤解して呉れちゃ困るよ。はゝゝゝゝ。」

莊田は、その赤い大きい顔の相好を崩しながら、思惑が成功した投機師のように、得意な哄笑を笑い続けた。

「どうだ！ 俺が云つた通り。君は、高潔な人格の唐沢さんは、決してそんな事はないとか何とか云つて、反対したじゃないか。何うだ！ 人間は、金に窮すればどんなことでもするだろう。金に依つて、保護されていない人格などは、要するに当にないのだ。清廉潔白など云うことも、本当に経済上の保証があつて出来ることだよ。貧乏人の清廉潔白なんか、当になるものか、はゝゝゝゝ。」

（此の世をばわが世とぞ思う望月の欠けたることの無いように、勝平は得意だった。「だが、私は気になります。私は唐沢さんが自殺しやしないかと思つているのです。何うもやりそうですよ。屹度やりますよ。」木下は、心からそう信じているように、眉をひそ

めながら云った。

「うむ！ 自殺かね。」^{さすが}真に莊田も、一寸誘われて眉をひそめたが、直ぐ^す傲岸^{ごうがん}な笑いで打ち消した。

「はゝゝゝ、大丈夫だよ。人間はそう易々^{やすやす}とは、死なないよ。いや待っていたまえ。今に、泣きを入れに来るよ。なに、先方が泣きを入れさえすれば、そうは苛め^{いじ}ないよ。もとく、一寸した意地からやっていることだからね。」

「それでも、もしお嬢さんをよこすと云つたら御結婚になりますかね。」

「いや、それだがね。俺^{わし}も考えたのだよ。いくら何だと言つても、二十五六も違うのだろう。世間が五月蠅^{うるさい}からね。只^{ただ}でさえ『成金！ 成金！』と、いやな眼^{まなこ}で見られているんだろ。それなのに、そんな不釣合な結婚でもすると、非難攻撃が、大変だからね。それで、俺^{わし}が花婿^{はなむこ}になることは思い止^{とど}まったよ。倅^{せがれ}の嫁にするのだ。倅の嫁にね。あれとなら、年丈^{だけ}は似合っているからね。その事は先方へも云つて置いたよ。」

「御子息の嫁に！」

そう云つたまゝ、木下は二の句が継げなかった。莊田の息、勝彦^{かつひこ}と云うその息は、二^は十^{たち}を二つ三つも越していながら、子供のようにたわいもない白痴だった。白痴に近い男だ

った。そうだ！ 年丈ただけは似合っている。が、瑠璃子の夫としては、何と云う不倫ふりんな、不似合な配偶だろう。金のために旧知を売った木下にさえ、莊田の思い上った暴虐ぼうぎやくが、不快に面憎つらにくく感ぜられた。

「なに、俺わしがあのお嬢さんと結婚する必要は、少しもないのだ。金の力で、あのお嬢さんを、左右してやればそれでいゝのだよ。金の力が、どんなに大きいかを、あのお嬢さんと、あゝそうく、もう一人の人間とに、思い知らしてやればいいのだよ。」

莊田は、何物も恐れないように、傲然ごうぜんと云い放った。

丁度、その時だった。莊田の背後うしろの扉ドアが、ドンくくと、激しく打ち叩たたかれた。

「電報！ 電報！」と、誰かゞ大声で叫んだ。

二

「電報！ 電報！」

扉ドアは、続け様に割れるように叩たたかれた。今迄いままで、傲然ごうぜんと反り返っていた莊田は、急にしよげ悄気切しよげつてしまった。彼はテレ隠しに、苦笑しながら、

「おい！ 勝彦！ おい！ よさないか、お客様がいるのだぞ。おい！ 勝彦！」
客を憚はばって、高い声も立てず、低い声で制しようとしたが、相手は聴かなかった。

「電報！ 電報！」強い力で、扉は再び続けざまに、乱打された。

「まあ！ お兄様！ 何を遊ばすのです。さあ！ 彼方あつちへ行らっしゃい。」優しく制している女の声が聞えた。

「電報だい！ 電報だい！ 本当に電報だよ。美奈みなさん。」男は抗議するように云った。

「あら！ 電報じやありません、お客様の御名刺じやありませんか、それなら早くお取次ぎ遊ばすですよ。」

そうした問答が、聞えたかと思うと、扉が音もなく開いて、十六——恐らく七にはなるまい少女が姿を現した。色の浅黒い、眸ひとみのいきいきとした可愛かわいい少女だった。彼女は、兄の恥を自分の身に背負ったように、顔を真赤にしていた。

「お父様！ お客様でございます。」

客に、丁寧えいやくに会釈をしてから、父に向って名刺を差し出しながら、しとやかそうに云った。傲岸ごうがんな父の娘として、白痴の兄の妹として、彼女は狼おおかみに伍した羊のように、美しく、しとやかだった。

「木下さん。これが娘です。」

そう云つた莊田の顔には、娘自慢の得意な微笑が、アリ／＼と見えた。が、彼の眼が、開かれた扉ドアの所に立つて、キョトンと室内を覗のぞいている長男の方へ転ずると、急にまた悄気てしまった。

「あゝ美奈さん。兄はよさんを早う向うへ連れて行つてね。それから、杉野さんをお通しするように。」

娘に、優しく云い付けると、客の方へ向きながら、

「御覽の通りの馬鹿ばかですからね。唐沢のお嬢さんのような立派な聡明そうめいな方に、来ていたゞいて、引き廻していたゞくのですね。はゝゝゝゝ。」

馬鹿な長男が去ると、莊田は又以前のような得意な傲岸な態度に還かえつて行つた。

其処そこへ、小間使に案内されて、入つて来たのは、杉野子爵ししやくだった。

「やあ！ 莊田さん！ 懸賞金はやつぱり私のものですよ。到頭、先方で白旗しらはたを上げましたよ、はゝゝゝ。」

「白旗をね、なるほど。はゝゝゝゝ。」莊田は、凱旋がいせんの將軍のように哄笑こうしょうした。

「案外もろ脆かつたですね。」木下は傍から、合槌あいづちを打った。

「それがね。令嬢が、案外脆かったのですよ。お父様が、監獄へ行くかも知れないと聞いて、狼狽ろうばいしたらしいのです。父一人子一人の娘としては、無理はないとも思うのです。私の所へ、今朝そつと手紙を寄越したのです。父に対する告訴を取り下げた上に、唐沢家に対する債権を放棄して呉くれるのなら莊田家へ興こし入れしてもいいと云うのです。」

「なるほど、うむ、なるほど。」

莊田は、血の臭においを嗅かいだ食人鬼のように、満足そうな微笑を浮べながら、肯うなずいた。

「ところが、令嬢に註文があるのです。莊田君！ お欣よろこびなさい！ 私に対する懸賞金は倍増ばいましにする必要がありますよ、令嬢の註文がこうなのです。同じ莊田家へ嫁ぐのなら、息子さんよりも、やつぱりお父様のお嫁になりたい。男性的な実業家の夫人として、社交界に立つて見たいとこう云つてあるのです。手紙をお眼にかけてもいいのですが。」

そう云いながら、子爵はポケットから、瑠璃るりこ子の手紙を取り出した。丁度敵かたきから来た投降状でも出すように。

凱旋^{がいせん}の将軍が、敵の大將の首実検をでもするように、莊田は瑠璃子^{るりこ}が杉野子^{しやくあて}爵宛に
寄越した手紙を取り上げた。得意な、満ち足りたと云ったような、賤しい微笑^{いや}が、その赤
い顔一面に拡^{ひろ}がった。

「うむ！ 成る程！ 成る程！」

舌^{した}鼓^{つづみ}をでも打つように、一句々々を食^{むさば}るように読み了^{おわ}ると、彼は腹を抱えんばかり
に哄笑^{こうしょう}した。

「はゝゝゝ。強いようでも、やっぱり女子は弱いものじゃ。はゝゝゝ。なにも、あの
お嬢さんを嫁にしようなどとは、夢にも考えていなかったが、こうなると一番若返るかな、
はゝゝゝ、じゃ、杉野さん、どうかよろしくね。あの証文全部は、お嬢様に、結^{マリ}婚^{エジ}の
進^{プレゼント}物として差しあげる。そうだ！ 差し上げる期日は、結婚式の当日と云うことにし
よう。それから、支度金は軽少だが、二万円差し上げよう。そうく、貴^{あなた}君方に対するお
礼もあつたけ。」

王女のように、美しく気高い処女を、到頭征服し得たと云う欣^{よろこ}びに、莊田は有頂天にな
っていた。彼は、呼鈴^{ベル}を鳴らして女中を呼ぶと、

「お嬢さんに、そう云うのだ、俺^{わし}の手提金庫^{てきぎんこ}に小切手帳が入っているから持って来るよう

に。」と命じた。

良心を悪魔に、売り渡した木下と杉野子爵とは、自分達の良心の代価が、幾何になるだろうかと銘々心の裡で、莊田の持つ筆の先に現れる数字を、貪慾に空想しながら、美奈子が小切手帳を持って、入って来るのを待っていた。

「十八の娘にしては、なか／＼達筆だ！文章も立派なものだ！」

莊田は、尚飽かず瑠璃子の手紙に、魂を擾みだされていた。

が、丁度その同じ瞬間に、瑠璃子の手紙に依よつて、魂を擾みだされていたのは莊田勝平丈だけだけではなかった。

瑠璃子は、杉野子爵に宛てゝ、一通の手紙を書くのと同時に、その息子の杉野直也なおやに対しても、一通の手紙を送った。杉野子爵に対する手紙は、冷たい微笑と堅い鉄のような心とで書いた。直也に送った手紙は、熱い涙と堅い鉄のような心とで書いた。

莊田勝平が、一方の手紙を読んで、有頂天うちようてんになったと同じに、直也は他の一方の手紙を読んで、奈落ならくに突落されたように思った。

父を恐ろしい恥辱より救い、唐沢一家を滅亡より救う道は、これより外にはないので

ございます。……

法律の力を悪用して、善人を苦しめる悪魔を懲しめる手段は、これより外にはないのでございます。^{わたくし}妾の行動を奇^{ききよう}矯だとお笑い下さいますな。芝居があるとお笑い下さいますな。現代に於^{おい}ては、万能力を持つている金に対抗する道は、これより外にはないのでございます。……名ばかりの妻、そうです、妾はありとあらゆる手段と謀計^{もつ}とで、妾の貞操をあゝの悪魔のために汚^{けが}されないように努力する積^{つも}りです。北海道の牧場では、よく牡牛^{おうし}と羆^{ひぐま}とが格闘するそうです。妾と莊田との戦いもそれと同じです。牡牛が、羆の前足で、搏^うたれない裡に、その鉄のような角を、敵の脾腹^{ひばら}へ突き通せば牡牛の勝利です、妾も、自分の操^{みさお}を汚されない裡に、立派にあの男を倒してやりたいと思います。

妾の結婚は、愛の結婚でなくして、憎しみの結婚です。それに続く結婚生活は、絶えざる不断の格闘です。……

が、どうか妾^{わたくし}を信じて下さい。妾には自信があります。半年と経^たたない裡に精神的にあの男を殺してやる自信があります。

直也様よ、妾^{わたくし}のためにどうか、勝利をお祈り下さい。

手紙は尚続いた。

四

妾^{わたくし}は、勝利を確信しています。が、それは実質の勝利で、形から云えば、妾は金のために莊田に購^{あがな}われる女奴隷^{おんなどれい}と、等しいものかも知れません。妾が、自分の操^{みさお}を清^{しようじ}淨^{よう}に保ちながら、莊田を倒し得ても、社会的には妾は、莊田の妻です。何人^{なんびと}が妾の心も身体^{からだ}も処女であることを信じて呉^くれるでしょう。妾は貴君^{あなた}丈には、それを信じて戴きたいと思います。が、妾にはそれを強いる権利はありません。

男性化^{マンリフアン}と言う言葉があります。妾^{わたくし}の現在はその中です。妾は女性としての恋を捨て、優しさを捨て慎^{つつま}しやかさを捨て、たゞ復讐^{ふくしゅう}と膺懲^{ようちよう}のために、狂奔する化物のような人間になろうとしているのです。顧みると、自分ながら、浅ましく思わずには、いられません。が、悪魔を倒すのには、悪魔のような心と謀計とが必要です。

貴君を愛し、また貴君から愛されていた無垢^{むく}な少女は、残酷な運命の悪戯^{いたずら}から、凡^{すべ}ての女性らしさを、自分から捨ててしまうのです。凡ての女性らしさを、復讐の神に捧^{ささ}

げてしまうのです。愛も恋も、慎しやかさも淑さも、その黒髪も白き肌も。

次ぎのことを申上げるのは、一番厭でございますが、莊田からの最初の申込みを取り繼がれた方は、貴君のお父様です。従つて、求婚に対する妾の承諾も、順序として、貴君のお父様に、取次いでいたゞかねばなりません。妾は、貴君に対する、この不快な恐ろしい手紙を書いた後に、貴君のお父様宛に、もう一つの、もっと不快な恐ろしい手紙を書かねばなりません。

それを見ると、妾の心が暗くなります。が、妾はあくまで強くなるのです。あゝ、悪魔よ！ もっと妾の心を荒ませてお呉れ！ 妾の心から、最後の優しさと恥しさを奪つておくれ！

一句一句鋭い匕首の切先で、抉られるように、読み了つた直也は最後の一章に來ると、鉄槌で横ざまに殴り付けられたような、恐ろしい打撃を受けた。

最初は、縦令どんな理由があるにしろ、自分を捨て、莊田に嫁ごうとする瑠璃子が恨めしかった。心を喰ひ裂くような烈しい嫉妬を感じた。が、だん／＼読んで行く裡に、唐沢家に対する莊田の迫害の原因が、莊田に対する自分の罵倒であつたことが、マザ／＼と

分つて来た。瑠璃子を唐沢家から奪おうとするのは、つまり自分の手から奪おうとするのだ。莊田が、自分に対する皮肉な恐ろしい復讐なのだ。意趣返しなのだ。瑠璃子は、復讐と膺懲の手段として、結婚すると云う。が、それを自分が漫然と見ていられるだろうか。かよい女性が、貞操の危険を冒してまで、戦っている時に、第一の責任者たる自分が、茫然と見ていられるだろうか。が、そんなことは兎に角直也には、自分の恋人が縦令操は許さないにしても、莊田と――豚のように不快な莊田と、形式的にでも夫と呼び妻と呼ぶことが、堪まらなかった。瑠璃子は、飽くまでも、操を汚さないと云うが、そんなことは、聡明ではあるにしろ、まだ年の若い彼女の夢想的な空想で、縦令彼女の決心が、どんなに堅かろうとも、一旦結婚した以上、獣のように強い莊田の為に、ムザ／＼と蹂み躪られてしまいはせぬか。どんなに強い精神でも、鉄のように強い腕には、敵せない時がある。瑠璃子の心が火のように烈しく、石のように堅くても、羅衣にも堪えないような、その優しい肉体は、莊田の強い把握のために、押し潰されてしまいはせぬか。そう考えると、直也の心は、恐ろしい苦悶と焦燥のために、烈しく動乱した。が、それよりも、自分の父が自分の恋人を奪う悪魔の手下であることを知ると、彼は憤怒と恥辱とのために、逆上した。

彼は瑠璃子の手紙を握りながら、父の部屋へかけ込んだ。父の姿は見えないで、女中が座敷を掃除していた。

「お父様は何うした。」

彼は女中を叱咤するように云った。

「今しがた、莊田様へ行らっしゃいました。」

瑠璃子の承諾の手紙を読むと、鬼の首でも取ったように、莊田の所へ駆け付けたのだと思うと、直也の心は、恐ろしい憤怒のために燃え上った。

五

美奈子が、小切手帳を持って来ると、莊田は、傍の小さい卓の上にあつた金蒔絵の硯箱を取寄せて不器用な手付で墨を磨りながら、左の手で小切手帳を繰広げた。

「はゝゝゝ、貴方にも、お礼をうんと張り込むかな。」彼は、そう得々と哄笑しながら、最初の一葉に、金二万円也と、小学校の四五年生位の悪筆で、その癪澆刺と筆太に書いた。それは無論、支度料として、唐沢家へ送るものらしかった。

その次ぎの一葉を、木下も杉野も、爛々らんらんと眼を、梟ふくろうのように光らせて、見詰めていた。莊田は、無造作に壺万円也と書き入れると、その次ぎの一葉にも、同じ丈の金額を書き入れた。

「何どうです。これで不足はないじやろう。はゝゝゝゝ。」と、莊田は肩を揺ゆがせながら笑った。

食事を与えられた犬のように、何の躊躇ちゆうちよもなく、二人がその紙片に手を出そうとしている時だった。莊田の背後うしろの扉ドアが、軽く叩たたかれて、小間使が入って来て、

「旦那様だんなさま！ あの杉野さんと云いう方が、御面会です。」と、云った。

「杉野！」と、莊田は首を傾かしげながら云った。「杉野さんなら茲ここにいらつしやるじやないか。」

「いゝえ！ お若い方でございます。」

「若い方？ いくつ位？」と、莊田は訊きき返した。

「二十三四の方で、学生の服を着た方です。」

「うゝむ。」と、莊田は一ちよつと寸考え込んだが、ふと杉野子ししやく爵しやくの方を振向きながら、

「杉野さん！ 貴君の御子息じやないかね。」と、云った。

「私の倅せがれ 私の倅がお宅へ伺うことはない。尤も、私にでも用があるのかな。そうじゃありませんか。私に会いたいと云うのじやありませんか。」

子爵は小間使の方を振り向きながら云った。小間使は首を振った。

「いゝえ！ 御主人にお目にかゝりたいと仰おつしやるのです。」

「あゝ分った！ 杉野さん！ 貴君あなたの御子息なら、僕の所へ来る理由が、大にあるのです。殊ことに今の場合、唐沢のお嬢さんが、私に屈伏しようと云う今の場合、是非とも来なければならぬ方です。そうだ！ 私も会いたかった。そうだ！ 私も会いたかった！ おい、お通しするのだ。主人もお待ちしてましたと云つてね。貴君方は、別室で待つていたぐかね。いや、立会人があつた方が、結局いゝかな。そうだ！ 早くお通しするのだ！」

興奮した熊くまのように、莊田は卓テーブルに沿うて、二三歩ずつ左右に歩きながら、叫んだ。

杉野子爵には、莊田の云つた意味が、十分に判わからなかつた。何の用事があつて、自分の息子が、莊田を尋ねて来るのか見当も立たなかつた。が、それは兎とも角かく、自分が莊田から、邪やましい金を受け取ろうとする現場へ、肉親の子——しかも、その潔白な性格に対しては、親が三目も四目も置いている子が——突然現れて来ることは、いかにも愧はずかしいキマリの悪い事に違ひなかつた。彼は顔には現さなかつたが、心の裡うちでは、可なり狼狽ろうばいした。莊田

が、早く氣を利かして、小切手帳をしまつて呉れればいゝ、呉れるものは、早く呉れて、早く蔵しまつて呉れゝばいゝと、虫のいゝことを、考えていたけれど、莊田は妙に興奮してしまつて、小切手帳のことなどは、念頭にもないようだった。マザ／＼と見えている壺万円也と云う金額が、杉野や木下等の罪惡を、歴々ありありと語っているように、子爵には心苦しかった。

「一体、私の倅は何だつて、貴方をお尋ねするのです。前から御存じなのですか。何の用事があるのでしょうか。」杉野子爵は、堪たまらなくなつて訊いた。

「いや、今に直ぐ判すります。やつぱり、今度の私の結婚に就てです。が、媒介ばいかいの手数コンミツ料シヨンを貰もらいに來るのでないことは、確たしかですよ。はゝゝゝゝ。」

と、莊田は腹を抱えるように哄笑こうしょうした。その哄笑が終らない中に、彼の背後うしろの扉ドアが、静かに開かれて、その男性的な顔を、蒼白そうはくに緊張させている、杉野直也が姿を現した。

六

直也の姿を見ると、莊田の哄笑が、ピタリと中断した。相手の決死の形相が、傲岸ごうがんな

莊田の心にも鋭い刃物に触れたような、気味悪い感じを与えたのに違ちがい。が、彼はさり気なく、鷹揚おうように、徹頭徹尾勝利者であると云いう自信で云った。

「いやあ！ 貴君あなたでしたか。いつぞやは大変失礼しました。さあ！ 何どうか此方こちへお入り下さい！ 丁度、貴君のお父様も来ていらつしやいますから。」

外面丈うわべだけは可なり鄭重ていちょうに、直也を引いた。直也は、その口を一文に緊ひきしめたまゝ、

黙々として一言も発しなかつた。彼は、父の方をなるべく見ないように——それは父に對する遠慮ではなくして、敬虔けいけんな基督教徒キリストが異教徒と同席する時のような、憎惡ぞうおと侮蔑ぶべつとのために、なるべく父の方を見ないように、莊田の丁度向い側に卓テーブルを隔てゝ相對した。

「何どう云う御用か、知りませんが、よく入いらつしやいました。貴君があんなに輕蔑なさつた成金の家へも、尋ねて来て下さる必要が出来たと見えますね。はゝゝゝ。」

莊田は、直也と面と向つて立つと、直ぐ挑戰ちようせんの第一の彈丸を送った。

直也は、それに対して、何かを云い返そうとした。が、彼は烈はげしい怒りで、口の周圍まわりの筋肉が、ピク／＼と痙攣けいれんする丈で、言葉は少しも、出て来なかつた。

「何どう云う御用です。承ろうじやありませんか。何どう云う御用です。」

莊田はのしかゝるように畳かけて訊きいた。直也は、心の裡うちに沸騰ふつとうする怒りを、何どう現

してよいか、分らないように、暫らくは両手を顫わせながら、莊田の顔を睨んで立っていたが、突如として口を切った。

「貴君は、良心を持っていますか。」

「良心を！」と、莊田は直ぐ受けたが、問が余りに唐突であつたため暫らくは語に窮した。「そうです。良心です。普通の人間には、そんなことを訊く必要はない。が、人間以下の人間には、訊く必要があるのです。貴君は良心を持っていますか。」

直也は、卓を叩かんばかりに、烈しく迫った。

「あはゝゝゝ。良心！ うむ、そんな物はよく貧乏人が持ち合わせているものだ。そして、それを金持に売り付けたがる。はゝゝゝ、私も度々買わされた覚えがある。が、私自身には生憎良心の持ち合せがない、はゝゝゝ。いつかも、貴君に云つた通り、金さえあれば、良心なんなくても、結構世の中が渡って行けますよ。良心は、羅針盤のようなものだ。ちつぽけな帆前や、たかが五百噸や千噸の船には、羅針盤が必要だ。が、三万とか四万とか云う大軍艦になると、羅針盤も何も入りやしない、大手を振って大海が横行出来る。はゝゝゝ。俺なども、羅針盤の入らない軍艦のようなものじゃ。はゝゝゝ。」

莊田は、飽くまでも、自分の優越を信じているように、出来る丈直也を、じらすように、

ゆつくりと答えた。

それを聴くと、直也は堪^{たま}らないように、わなわなと身体^{からだ}を顫^{ふる}わせた。

「貴君は、自分がやったことを恥だとは思わないのですか。卑劣^{ひれつ}な盗人^{ぬすつと}でも恥じるような手段^{めづ}を廻^{めぐ}らして、唐沢家を迫害^{ふりん}し、不倫^{ふりん}な結婚^{けっこん}を遂げようと云うような、浅ましいやり方を、恥ずかしいとは思わないのですか。貴君は、それを恥ずる丈の良心を持っていないのですか。」

直也は、吃々^{きつぎつ}とどもりながら、威丈^{いたけだ}高^かに罵^{のの}した。が、莊田はビクともしなかった。

「お黙りなさい。国家が許してある範囲で、正々堂々と行動しているのですよ。何を恥じる必要があるのです。貴方は、白昼公然と、私の金の力を、あざ嗤^{わら}った。が、御覧なさい！ 貴君は、金の力で自分のお父様を買収^{かいしゆ}され、あなたの恋人を、公然と奪^{うば}われてしまつたではありませんか。貴君こそ、自分の不明を恥じて、私の前でいつかの暴言を謝しなさい！ 唐沢のお嬢^こさんは、もう此^この通り、ちゃんと前非^{ぜんび}を悔^くいている。御覧なさい！ 此の手紙を！」

そう云いながら、莊田は得々として、瑠璃子の手紙を直也に突き付けたとき、彼の心は火のような憤^{いきどおり}と、恋人を奪^うわれた墨^{うらみ}のような恨^{うらみ}とで、狂^{くる}ってしまった。

七

「御覽なさい！ 私は、自分の息子の嫁に、するために、お嬢さまを所望したのだが、お嬢さまの方から、却^{かえ}つて私の妻になりたいと望んでおられる。有力な男性的な実業家の妻として、社会的にも活動して見たい！ こう書いてある。あはゝゝ。何^どうです！ お嬢様にも、ちゃんと私の価値が判^{わか}つたと見える。金の力が、どんなに偉大なものが判^{わか}つたと見える！ あはゝゝ。」

莊田は、得々とその大きい鼻を、うごめかしながら、言葉を切つた。

直也は、湧^わき立つばかりの憤怒^{ふんぬ}と、嵐^{あらし}のような嫉妬^{しつと}に、自分を忘れてしまった。彼は瑠璃子の手紙を見たときに、莊田と媒介人たる自分の父とに、面と向つて、その不正と不倫^{ふりん}とを罵^{のの}り、少しでも残つてゐる莊田の良心を、呼び覺して、不当な暴^{ぼうぎやく}虐^くな計画を思い止まらせようと決心したのだが、實際に会つて見ると、自分のそうした考えが、獸に道德を教えるのと同じであることを知つた。そればかりでなく、莊田の逆襲的嘲^{ちやうろう}弄^{ろう}に、直也自身まで、獸のように荒^{すさ}んでしまった。彼の手は、いつの間にか知らず識^しらず、ポケツ

トの中に入れて来た拳銃ピストルにかかつていた。その拳銃ピストルは、今年の夏、彼が日本アルプスの乗鞍のりくらヶ岳から薬師ヶ岳へ縦走したときに、護身用として持って行って以来、つい机の引出しに入れて置いた。彼は激昂げっこうして家を出るとき、ふと此この拳銃ピストルの事が、頭に浮んだ。莊田の家へ、単身乗り込んで行く以上、召使や運転手や下男などの多数から、どんな暴力的な侮辱を受けるかも知れない。そうした場合の用意に持って来たのだが、然しかし今になつて見ると、それが直也に、もつと血ちなまぐさ腥しんい決心の動機となつていた。

暴に報むくゆるには暴を以てせよ。相手が金を背景として、暴を用いるなら、こちらは死を背景とした暴を用いてやれ。憤怒と嫉妬とに狂つた直也は、そう考えていた。そうした考かんがえが浮ぶと共に、直也の顔には、死そのもののような決死の相が浮んでいた。

「貴君あなたの、この不正な不当な結婚を、中止なさい。中止すると誓いなさい！ でなければ……でなければ……」そう云いつたまゝ、直也の言葉も追さすがに後が続かなかつた。

「でなければ、何うすると云うのです。あはゝゝゝゝ。貴君あなたは、この莊田を脅迫きようはくするのですな。こりや面白い！ 中止しなければ、何うすると云うのです。」

直也は、無我夢中だつた。彼は、自分も父も母も恋人も、国の法律も、何もかも忘れてしまった。ただ眼前数尺の所にある、大きい赤ら顔を、何うにでも叩たたき潰つぶしたかつた。

「中止しなければ……こうするのです。」

そう叫んだ刹那^{せつな}、彼の右の手は、鉄火の如くポケットを放れ、水平に突き出されていた。その手先には、白い光沢のある金属が鈍い光を放っていた。

「何！ 何をするのだ。」と、莊田が、悲鳴とも怒声とも付かぬ声を挙げて、扉^{ドア}の方へタジ／＼と二三歩後ずさりした時だった。

直也の父は、狂気のように息子の右の腕に飛び付いた。

「直也！ 何をするのだ！ 馬鹿^{ばか}な。」

その声は、泣くような叱^{しか}るような悲鳴に近い声だった。

父の手が、子の右の手に触れた刹那だった。轟然^{ごうぜん}たる響は、室内の人々の耳を劈^{つんざ}いた。

その響きに応ずるように、莊田も木下も子爵^{ししやく}も「アッ」と、叫んだ。それと同時に、どうと誰かが崩れるように倒れる音がした。帛^{きぬ}を裂くような悲鳴が、それに続いて起った。その悲鳴は、莊田の口から洩^もるゝような、太いあさましい悲鳴とは違っていた。

父の手が直也の手に触れた丁度その刹那に、発せられた弾丸は、皮肉にも二十貫に近い莊田の巨軀きよくを避けて、わずかに開かれた扉ドアの隙すきから、主客の烈はげしい口論に、父の安否を氣遣つて、そつと室内をのぞき込んでいた莊田の娘美奈子の、かわいい肉体を貫ぬいたのであつた。

莊田は娘の悲鳴を聞くと、自分の身の危さをも忘れて飛び付くように、娘の身体からだに掩おほかゝつた。

美奈子は、二三度起き上ろうとするように、身体を悶もたえた後に、ぐつたりと身体を、青い絨毯じゅうたんの上に横えた。絶え入るような悲鳴が続いて、明石縮あかしちぢみらしい单衣ひとえの肩の辺に出来た赤黒い汚点しみが、見る見る裡うちに胸一面に拡ひろがつて行くのだった。

「美奈子！ 氣を確たしかに持て！ おい！ 繃帶ぼうたいを持って来い！ なければ白木綿だ！ 近藤さんと呼べ！ そうだ！ 自動車を迎えにやれ！ いなかったら、誰でもいゝ外科の博士を。そうだ！ その前に、誰でもいゝから、近所の医者と呼んで来い！ 早く、早く、早くだ！」

狼狽ろうばいして、前後左右にたゞウロ／＼する、召使の男女を莊田は声を枯して叱咤しったした。彼はそう云いながらも、右の掌てのひらで、娘の傷口を力一杯押えているのだった。

直也は、自分の放った弾丸が、思いがけない結果を生んだのを見ながら、彼は魂を奪われた人間のように、茫然として立っていた。色は土の如く蒼く、眼は死魚のそのような光を失った。彼はまだ短銃を握ったまゝ、突つ立っていた。直也の父も、木下も、此の犯人の手から、短銃を奪い取ることさえ忘れていた。殊に、子爵の顔は子のそれよりも、血の気がなかった。彼は自分の罪が、ヒシヒと胸に徹えて来るのを感じた。自分の野卑な、狡猾な行為が、子の上に靦面に報いて来たことが、恐ろしかった。彼は、子の短慮と暴行とを叱すべき言葉も、權威も持つていなかった。彼の身体を支えている足は、絶えずわなわなと顫えた。

莊田は、娘の肩口を繃帯で、幾重にもクルクルと、捲いてしまうと、やつと小康を得たように、室内へ帰つて来た。その巨きい顔は殺気を帯びて物凄い相を示した。

「お蔭で傷は浅いです。可哀そうに、あれは大層親思いですから、あんな飛沫を喰うのです。」

彼は、氷のような薄笑いを含んで、直也の顔をマジマジと見詰めながら云った。赤手にして一千万円を超ゆる暴富を、二三年の裡に、攫取した面魂が躍如として、その顔に動いた。

「いや、私は暴に報いるに、暴を以つてしません。たゞ、国の公正なる法律に、あなたの処分を委^{まか}せる丈です。杉野さん！ お気の毒ですが、御子息は直^すぐ、警察の方へお引き渡ししますから、そのおつもりでいて下さい。おい警視庁の刑事課へ電話をかけるのだ。そして、殺人未遂の犯人があるから、直ぐ来て呉れと。いゝか。」

莊田は、冷然として、鉄の如く堅く冷かに、商品の註文をでもするような口調で、小間使に命じた。

小間使の方が恐ろしい命令に、躊躇^{ちゆうちゆう}して、ウロ／＼している時だった。仮の縋帶^{おわ}が了つて、自分の部屋へ運ばれようとしていた美奈子が、父の烈しい言葉を、そのかすかな聴覚で、聞きわけたのであろう。彼女は、ふり搾^{しぼ}るような声を立てた。

「お父様！ お願いでございます。何^どうぞ、内済にして下さいませ！ 妾^{わたくし}が、短銃^{ピストル}で打たれましたなどは、外聞が悪うございますわ。どうぞ！ どうぞ！」

彼女は、哀願するように、力一杯の声を出した。

莊田は、娘からの思いがけない抗議に、狼狽^{うろた}えながら、尚^{なお}も頑然として云った。

「お前さんの知ったことじゃない。お前さんは、そんなことは、一切考えないで、気を落着けているのだ。いゝか。いゝか。」

「いゝえ！ いゝえ！ 妾^{わたくし}を打ったために、あの方が牢^{ろう}へ行かれるようなことが、ございましたら、妾は生きては、おりません。お父様！ どうぞ、どうぞ、内済にして下さいませ。」

美奈子は、息を切らしながら、とぎれ／＼に云った。傲岸^{ごうがん}不屈^{ふくくつ}な莊田も、逡^{さす}に黙ってしまった。

直也の二つの眼には、あつい湯のような涙が、湧^わくように溢^{あふ}れていた。初めて、顔を見ただばかりの少女の、厚^ない情^{なさけ}に対する感激の涙だった。

心の武装

一

記憶のよい人々は、或^{ある}は覚えているかも知れない。大正六年の九月の末に、東京大阪の各新聞紙が筆を揃^{そろ}えて報道した唐沢男^{だんしやく}爵^くの愛嬢^{るりこ}瑠璃子の結婚を。それは近年にない大^せ

ンセイシヨナル
評 判 な結婚であつた。

此の結婚が、一世の人心を湧かし、姦しい世評を生んだ第一の原因は、その新郎新婦の年齢が恐ろしいほど隔つていた為であつた。二三の新聞は、第二の小森幸子事件であると称して、世道人心に及ぼす悪影響を嘆いた。小森幸子事件とは、ついその六七年前、時の宮内大臣田中伯が、還暦を過ぎた老体を以て、まだ二十を過ぎたばかりの処女——爵位と権勢に憧る、虚栄の女と、婚約をした為に一世の烈しい指弾と抗議とを招いた事件だった。無論、新郎の莊田勝平は、当時の田中伯よりも若かつた。が、それと同時に、新婦の唐沢瑠璃子は小森幸子などとは比較にならないほど美しく、比較にならないほど名門の娘であり、比較にならないほど若かつた。

新聞紙に並べられた新郎新婦の写真を見た者は、男性も女性も、等しく眉を顰めた。が、此の結婚が姦しい世評を産んだ原因は、たゞ新郎新婦の年齢の相違ばかりではなかつた。もう一つの原因は、成金、莊田勝平が、唐沢家の娘を金で買ったと云う噂だった。或新聞紙は貴族院第一の硬骨を以て、称せらるゝ唐沢男爵に、そうした卑しい事のあるべき筈はないと、打消した。他の新聞紙は宛も事件の真相を伝える如くに云つた、曰く『莊田勝平は唐沢男に私淑しているのだ。彼は数十万円を投じて唐沢家の財政上の窮状を救つたの

だ。唐沢男が、娘を与えたのは、その恩義に感じたからである。』と。他の新聞紙は、またこんな記事を書いた。結婚の動機は、唐沢瑠璃子の強い虚栄からである。彼女は学習院の女子部にいた頃から、同窓の人々の眉を顰めさせるほど、虚栄心に富んだ女であつたと。そうした記事に伴つて女子教育家や社会批評家の意見が紙面を賑わした。或者は、成金の金に委せての横暴が、世の良風美俗を破ると云つて憤慨した。或者は、米国の富豪の娘達が、歐洲の貴族と結婚して、富と爵位との交換を計るうちに、日本でも貧乏な華族と富豪が頻々として縁組を始めたことを指摘して、面白からぬ傾向である、華族の墮落であると結論した。

が、そうした轟々たる世論を外に、莊田は結婚の準備をした。春の園遊会に、十萬円を投じて惜しまなかつた彼は、晴の結婚式場には、黄金の花を敷くばかりの意気込であつた。彼は、自分の結婚に対して非難攻撃が高くなればなるほど、反抗的に公然に華美に豪奢に、式を挙げようと決心していた。

彼は、あらゆる手段で、朝野の名流を、その披露の式場に蒐めようとした。彼は、あらゆる縁故を辿つて、貴族頭官の列席を、頼み廻つた。

九月二十九日の夕であつた。日比谷公園の樹の間に、薄紫のアーチ燈が、ほのめき始め

た頃から幾台も幾台もの自動車が、北から南から、西から東から、軽快な車台で夕暮の空気を切りながら、山下門の帝国ホテルを目指して集まって来た。最新輸入の新しい型の自動車と交つては、昔ゆかしい定紋じようもんの付いた箱馬車に、栗毛くりげの駿足しゅんそくを並べて、優雅に上品に、軋きしりせて来る堂上華族も見えた。道みちに広いホテルの玄関先も、後から／＼蒐あつまつて来る馬車や自動車を、収め切れないではみ出された自動車や馬車は往来に沿うて一町ばかりも並んでいた。

祝宴が始まる前の控場ひかえじようの大広間には、余興の舞台が設けられていて、今しがた帝劇かくこの嘉久子と浪子なみことが、二人道成寺ににんどうじようじを踊り始めたところだった。

二

新郎の勝平は、控室の入口に、新婦の瑠璃子と並び立って、次ぎ次ぎに到着する人々を迎えていた。

彼は嘘うそから出た真まことと云う言葉を心の裡うちで思い起していた。本当に、彼の結婚は嘘から出た真であつた。彼は、妙にこじれてしまった意地から、相手を苦しめるため為に、申込んだ結

婚が、相手が思いの外に、脆もろかった為、手輕に実現したことが少しくすぐったいようにも思つた。それと同時に、名門のたつた一人の令嬢をさえ、自分の金の力で、到頭買ひ得たかと思うと、心の底からむら／＼と湧わく得意の情を押えることが出来なかつた。

が、結婚の式場に列つらなるまで、彼は瑠璃子を高価たかねで購あがなつた装飾品のようにしか思つていなかった。五万円に近い大金を投じて、落藉ひかした愛妓あいぎに対するほどの感情をも持つていなかった。『此このお嬢さん屹度きつとむずがるに違ひない。なに、むずかつたつて、高の知れた子供だ。ふゝん。』と云つたような氣持で神聖なるべき式場に列つた。

が、雪のように白い白紋綸子りんずの振袖ふりそでの上に目も覺むるような唐織錦にしきの襦うち襦かけを被きた瑠璃子の姿を見ると、彼は生れて初めて感じたような氣高さと美しさに、打たれてしまつて、神官が朗々と唱え上げる祝詞のりとの言葉なども耳に入らぬほど、じつと瑠璃子の姿に、魅せられていた。その輪廓の正しい顔は凄すこいほど澄みわたつて、神々こうこうしいと云つてもいゝような美しさ、勝平の不純な心持ちをさえ、淨きよめるようだった。

式が、無事に終つて、大神宮から帝国ホテルまでの目と鼻の距離を、初めて自動車に乗したときに云い知れぬ嬉うれしさが、勝平の胸の中に、こみ上げて來た。彼は、どうかして、最初の言葉を掛けたかつた。が、日頃傲岸不遜ごうがんふそんな、人を人とも思わない勝平であるにも

拘かかわらず、話しかけようとする言葉が、一つ／＼咽喉のどにからんでしまつて、小娘か何かのように、その四十男の巨おおきい顔が、ほんの少しではあるが、赤らんだ。彼は、唐沢家をあんなにまで、迫害したことが、後悔された。瑠璃子が、自分のことを一体何どう思っているだろうと、云うことが一番心配になり始めた。

式服を着換えて、今勝平の横に立っている瑠璃子は、前よりもっと美しかった。御所ごしよど解模きもよう様を胸高に総縫にした黒縮緬ちりめんの振袖が、そのスラリとした白皙はくせきの身体からだに、しつくりと似合っていた。勝平は、こうして若い美しい妻を得たことが、自分の生涯を彩いろどる第一の幸福であるようにさえ思われた。今までは、彼の唯一ただつの誇は、金力であつた。が、今はそれよりも、もつと誇つていゝものが、得られたようにさえ思つた。

大臣を初め、政府の高官達が来る。実業家が来る。軍人が来る。唐沢家の関係から、貴族院に籍を置く、伯はくしやく爵や子爵が殊ことに多かつた。大抵は、夫人を同伴していた。美人の妻を持つていたので、有名な小早川伯爵が来たとき、勝平は同伴した伯爵夫人を、自分の新妻にいづまと比べて見た。伯爵夫妻が、会釈えしやくして去つた時、勝平の顔には、得意な微笑が浮んだ。虎とらの門第もん第一の美人として、謳うたわれたことのある勸業銀行の総裁吉村氏の令嬢が、その父に伴われて、その美しい姿を現わしたとき、勝平はまた思わず、自分の新妻と比べて

見ずにはいられなかった。無論、この令嬢も美しいことは美しかった。が、その美しさは、華美な陽気な美しさで、瑠璃子のそれに見るような澄んだ神々しさはなかった。

『やつぱり、育ちが育ちだから。』勝平は、口の中で、こんな風に、新しい妻を讃美しながら、日本中で、一番得意な人間として、後から後からと続いて来る客に、平素に似ない愛嬌を振り蒔いていた。

来客の足が、やゝ薄らいだ頃だった。此の結婚を纏めた殊勲者である木下が新調のフロックコートを着ながら、ニコニコと入って来た。

「やあ！ お目出度うございます。お目出度うございます！」

彼は勝平に、ペコ／＼と頭を下げてから、その傍の新夫人に、丁寧に頭を下げたが、今迄は凡ての来客の祝賀を、神妙に受けていた瑠璃子は木下の顔を見ると、その高島田に結った頭を、昂然と高く持したまゝ、一寸は愚か一分も動かさなかった。勝手が違って、狼狽する木下に、一瞥も与えずに、彼女は怒れる女王の如き、冷然たる儀容を崩さなかった。

祝宴が開かれたのは、午後七時を廻っていた時分だった。集合電燈シャンデリアの華やかな昼のような光の下に五百人を越す紳士とその半分に近い婦人たちが淑かに席に着いた。紳士は、大抵フロックコートか、五つ紋の紋付であつたが、婦人達は今日を晴と銘々きらびやかな盛装を競きそっていた。

花嫁と云つたような心持は、少しも持たず、戦場にも出るような心で、身体からだには錦繡きんしを纏まとっているものの、心には甲冑かっちゅうを装よそおうている瑠璃子ではあつたが、こうして沢山の紳士淑女の前に、花嫁として晒さらされると、必死な覚悟をしている彼女にも、恥しさが一杯だつた。列席の人々は、結婚が非常な評判センセイシヨウを起した丈だけ、それ丈、花嫁の顔を、ジロ／＼と見ているように、瑠璃子には思われた。金で操かねみさおを左右されたものと思われているかも知れないことが、瑠璃子には――勝気な瑠璃子には、死に勝る恥まさのようにも思われた。が、彼女は全力を振って、そうした恥しさと戦った。人は何とも思え、自分は正しい勇ましい道を辿たどっているのだと、彼女は心の中で、ともすれば撓たわみがちな勇気を振り起した。

が、苦しんでいるものは、瑠璃子丈だけではなかつた。新郎の勝平と、一尺も離れないで、

黙々と席に就いている父の顔を見ると、瑠璃子は自分の苦しみなどは、父の十分の一にも足りないように思った。自分は、自分から進んで、こうした苦痛を買っているのだ。が、父は最愛の娘を敵に与えようとしている。縦令たとい、それが娘自身の発意であるにしろ、男子として、殊ことに硬骨な父として、どんなに苦しい無念なことであろうかと思った。

が、苦しんでいる者は、外にもあった。それは今宵こよひの月下氷人を勤めている杉野子爵ししやくだった。子爵は、瑠璃子が自分の息子の恋人であることを知ってから、どれほど苦しんでいるか分らなかった。瑠璃子に対する莊田の求婚が、本当は自分の息子に対する、復ふくしゆ讐うであつたことを知ってから、彼はその復讐の手先になつていた、自分のあさましさが、

しみ／＼と感ぜられた。殊に、そのために、息子が殺傷の罪を犯したことを考えると、彼は立つても坐つても、いられないような良心の苛責かしやくを受けた。

日比谷大神宮の神前でも、彼は瑠璃子の顔を、仰ぎ見ることさえなし得なかった。彼は、瑠璃子親子の前には、罪を待つ罪人のように、悄しやうぜん然ぜんとその頭を垂れていた。

今宵の祝賀の的まとであるべき花嫁を初め、親や仲人なこうどが、銘々の苦しみに悶もだえているにも拘かわらず、祝賀の宴は、飽くまでも華やかだった。価高あたいい洋酒が、次ぎから次ぎへと抜かれた。料理人が、懸命の腕を振つた珍しい料理が後から後から運ばれた。低くはあるが、

華やかなさゝめきが卓から卓へ流れた。

デザートコースになつてから、貴族院議長のT公爵こうしやくが立ち上つた。公爵は、貴族院の議場の名物である、その莊重な態度を、いつもよりも、もつと莊重にして云つた。

「私は、茲こゝに御列席になつた皆様を代表して、莊田唐沢両家の万歳を祈り、新郎新婦の前途を祝いしたいと思ひます。何どうか皆様新郎新婦の前途を祝いうて御乾杯を願ひます。」

公爵は、そう云いながら、そのなみくと、つがれた三鞭酒シャンペンしゆさかずきの盃を、自分と相對して立つている通相ていしやうの近藤男爵の盃に、カチリと触れさせた。

それと同時に、公爵の音頭おんどで、莊田唐沢両家の万歳が、一斉に三唱された。

丁度その時であつた。その祝辞を受くるべく立ち上ろうとした唐沢男爵の顔が、急に蒼あおざめたかと思うと、ヒョロ／＼とその長身の身体が後に二三歩よろめいたまゝ、枯木の倒れるように、力なく床の上に崩れ落ちた。

四

唐沢男爵の突然な卒倒は、晴の盛宴を滅茶苦茶めちゃくちやにしてしまった。遺さすに、心の利きいた給仕

人は、手早く一室に担ぎ込んだが、列席の人々の動揺は、どうともすることが出来なかった。瑠璃子は、花嫁である身分も忘れて、父の傍に駆け付けたまゝ、晴着の振袖を気にしながら、懸命に介抱した。

給仕人が、必死になつて最後のコーヒを運ぶのを待ち兼ねて、仲人の杉野子爵は立つて来客達に、列席の労を謝した。それを機会に、今まで浮腰になつていた来客は、潮の引くように、一時に流れ出てしまつて、煌々たる電燈の光の流れている大広間には、勝平を初めとし四五人の人々が寂しく取り残された丈だった。

瑠璃子の父は、幸に軽い脳貧血であつた。呼びにやつた医者が出来ない前に、もう、常態に復していた。が、彼は黙々として自分を取り囲んでいる杉野や勝平には、一言も言葉をかけなかった。

父が、用意された自動車に、やつと恢復した身体を乗せて、今宵からは、最愛の娘と離れて、たゞ一人住むべき家へ歸つて行く後姿を見ると、鉄のように冷くつぼんでいる瑠璃子の心も、底から搔き廻されるような痛みを感じずにはいられなかった。

瑠璃子は、父の自動車に身体をピッタリと附けながら、小声で云つた。

「お父様暫らく御辛抱して下さいませ。直きにお父様の許へ歸つて行きます。どうぞ、妾

を信じて待つていて下さいませ。」

遺に彼女の眼にも、湯のような涙が、ほたほたと溢れた。

父は、瑠璃子の言葉を聴くと大きく肯きながら、

「お前の決心を忘れるな。お父さんが、今宵受けた恥を忘れるな。」

父が低く然し、力強くこう呟いた時、自動車は軽く滑り出していた。

父を乗せた自動車が、出で去った後の車寄に附けられた自動車は、莊田がつい此間、伊太利から求めた華麗なフィヤット型の大自動車であった。新郎新婦を、その幾久しき合衾の床に送るべき目出度き乗物だった。

瑠璃子は、夫——それに違いはなかった——に招かるゝまゝ、相並んで腰を降した。が、その美しい唇は彫像のそののように、堅く／＼結ばれていた。

勝平は、何うにかして、瑠璃子と言葉を交えたかった。彼は、瑠璃子の美しさがしみ／＼と、感ぜられゝば感ぜられる丈、たゞ黙つて、並んでいることが、愈々苦痛になり出した。

彼は、瑠璃子の顔色を窺いながら、オズ／＼口を開いた。

「大変沈んでおられるようじやが、そう心配せいでもようござんすよ。俺だって貴女が思

っているほど、無情な人間じゃありません。貴女のお父様を、苛めて済まんと思っているのです。罪滅ぼしに、出来る丈のことはしようと思つて居るのです。貴女も、俺を敵のうに思わんでな。これも縁じやからな。」

勝平は、誰に対しても、使つたことのないような、丁寧な訛のある言葉で、哀願するような口調でしみ／＼と話し出した。が、瑠璃子は、黙々として言葉を出さなかつた。二人の間に重苦しい沈黙が暫らく続いた。

「実は恥を云わねばならないのだが、今年の春、俺の家の園遊会で、貴女を見てから、年とし甲斐もなく、はゝゝゝゝ。それで、つい、心にもなく貴女のお父様までも、苦しめて、どうも何とも済まないことをしました。」

勝平は、瑠璃子の心を解こうとして心にもない嘘うそを云いながら、大きく頭を下げて見せた。

その刹那に、美しい瑠璃子の顔に、皮肉な微笑が動いたかと思うと、彼女の容子ようすは、一瞬の裡うちに變つていた。

「そんなに云つて下さると妾の方が却つて痛み入りますわ。妾のような者を、それほどまでして、望んで下さつたかと思うと、ほゝゝゝゝ。」

と、車内の薄暗の裡でもハッキリと判るほど、瑠璃子は勝平の方を向いて、嫣然と笑つて見せた。勝平は、その一笑を投げられると、魂を奪われた人間のように、フラフラとしてしまった。

五

瑠璃子の嫣然たる微笑を浴びると、勝平は三鞭酒の酔が、だん／＼廻つて来たその巨きい顔の相好を、たわいもなく崩してしまいながら、

「あゝ、そうですが。貴女の心持はそうですか、それを知らんもんですから、心配したわい。」

彼は余りのうれしさに、生れ故郷の訛りを、スツカリ丸出しにしながら、身体に似合わない優しい声を出した。

「貴女が心の中から、私のところへ、欣んで来て下さる。こんな嬉しいことはない。貴女のためなら俺の財産をみんな投げ出しても惜しみはせん。あはゝゝゝゝ。」

莊田は、恥しそうに顔を俯している瑠璃子の、薄暗の中でも、くつきりと白い襟足を、

貪^{むさぼ}るように見詰めながら、有頂天になって云った。

「貴女が来て下されば、俺^{わし}も今迄^{いままで}の三倍も五倍もの精力で、働きますぞ。うんと金を儲^{もつ}けて、貴女の身体をダイヤモンドで埋^{うず}めて上げますよ。あはゝゝゝゝ。」

莊田は、何^どうかして、瑠璃子の微笑と歡心とを贏^かちえようと、懸命になって話しかけた。十時を過ぎたお濠^{ほり}端^{ばた}の闇^{やみ}を、瑠璃子を乗せた自動車^{自動車}を先頭に、美奈子^{みなこ}を乗せた自動車^{自動車}の中に、召使達の乗った自動車を最後に、三台の自動車は、瞬^{またた}く裡^{うち}に、日比谷^{ひびや}から三宅^{みやげ}坂^かへ、三宅坂から五番町へと殆^{ほとん}ど三分もかゝらなかつた。

瑠璃子が、夫^{たす}に扶^{たす}けられて、自動車から宏^{こう}壮^{そう}な車寄に、降り立った時、遠^さにその覺悟した胸^{はげ}が、烈^{はげ}しくときめくを感じた。單身敵の本城へ乗り込んで行く、刺客のような緊張と不安を感じた。勝平に扶^{たす}けられている手が、かすかに顫^{ふる}えるのを、彼女は必死に制しようとした。

瑠璃子が、勝平に従つて、玄関へ上がろうとした時だつた。其^{そこ}処^こに出迎えている、多数の召使の前に、ヌツとツツ立っている若者が、急に勝平に縋^{すが}り付くようにして云つた。

「お父さん！ お土産^{みやげ}だい！ お土産^{みやげ}だい！」

勝平は、縋^{すが}り付かれようとする手を、瑠璃子の手前、きまり悪そうに、払い退^のけながら、

「あゝ分っている、分っている。後で、沢山やるからな。さあ！ 此方へおいで。お前の新しいお母様が出来たのだからな。挨拶あいさつをするのだよ。」

勝平は、その若者を拉らっしながら先に立った。若者は、振り向き／＼瑠璃子の顔をジロ／＼と珍らしそうに見詰めていた。

勝平は先きに立つて、自分の居間に通った。

「美奈子も、茲ここへおいで。」

彼は、娘を呼び寄せてから、改めて瑠璃子に挨拶させた後、勝平はその見るからに傲ごうが岸んな顔に、恥しそうな表情を浮べながら、自分の息子を紹介した。

「これが俺わしの息子ですよ。御覧とおりの通の人間で、貴女あなたにさぞ、御面倒をかけるだろうと思いますが、ゼヒ、面倒を見てやっていたゞきたいのです。少し足りない人間ですが、悪気はありませんよ。極く単純で、此方こつちの云うことは可なり聴くのです。おい勝彦かつひこ！ これが、お前のお母様だよ。さあ／＼挨拶するのだ。」

勝彦は、瑠璃子の顔を、ジロ／＼と見詰めていたが、父にそう促うながされると急に気が付いたように、

「お母様じゃないや。お母様は死んでしまったよ。お母様は、もっと汚きたない婆ばばあだったよ。」

此人は綺麗きれいだよ。此人は美奈ちゃんと同じように、綺麗だよ。お母様じゃないや、ねえそうだろう、美奈ちゃん。」彼は妹に同意を求めるように云った。妹は顔を、火のように赤くしながら、兄を制するように云った。

「お母様と申上げるのでございますよ。お父様のお嫁になって下さるのでございますよ。」
「何んだ、お父様のお嫁！ お父様は、ずるいや。俺わしに、お嫁を取って呉くれると云っているが、取って呉れないんだもの。」

彼は、約束した菓子もらを貰えなかった子供のように、すねて見せた。

瑠璃子は、その白痴な息子の不平を聞くと、勝平が中途から、世間体を憚はばって、自分を息子の嫁にと、云い出したことを、思い出した。金で以もつて、こんな白痴の妻——否いな弄あそび物に、自分をしようとしたのだと思うと、勝平に対する憎悪ぞうおが又新しく心の中に蒸し返された。

六

勝彦と美奈子とが、彼等自身の部屋へ去った頃には、夜は十一時に近く、新郎新婦が新

婚の床に入るべき時刻は、刻々に迫っていた。

勝平は、先刻さつきから全力を尽くして、瑠璃子の歓心かんしんを買おうとしていた。彼は、急に思ひ出したように、

「おゝそうく、貴女あなたに、結婚マリエイジ進物プレゼントとして、差し上げるものがありましたっけ。」

そう云いながら、彼は自分の背後に据え付けてある小形の金庫から、一束の証書を取り出した。

「貴女のお父様に対する債権の証文は、みんな蒐あつめた筈はずです。さあ、これを今貴女に進上しますよ。」

彼は、その十五万円に近い証書の金額に、何の執着もないように、無造作に、瑠璃子の前に押しやった。

瑠璃子は、その一束を、チラリと見たが、追さすにその白い頬に、興奮の色が動いた。彼女は、二三分の間、それを見るときもなく見詰めていた。

「あのマッチは、ございますまいか。」彼女は、突如そう訊きいた。

「マッチ？」勝平は、瑠璃子の突然な言葉を解し得なかった。

「あのマッチでございますの。」

「あゝマツチ！ マツチなら、幾何いくわでもありますよ。」彼は、そう云いながら、身を反そらして、其処そこの 炉マントルピース 棚の上から、マツチの小箱を取つて、瑠璃子の前へ置いた。

「マツチで、何をするのです。」勝平は不安らしく訊たずねた。

瑠璃子は、その問を無視したように、黙つて椅子いすから立ち上ると、鉄盤で掩おおうてあるストーヴの前に先刻三度目に着替えた江戸紫の金紗きんしゃ縮緬ちりめんの袖そでを気にしながら、蹲うずくまった。
 「貴君あなた、瓦斯ガスが出ますかしら。」彼女は、其処で突然勝平を、見上げながら、馴なれなれな微笑を浴びせた。

初めて、貴君あなたと呼ばれた嬉うれしさに、勝平は又相好そうごうを崩しながら、

「出るとも、出るとも。瓦斯ガスは止めてはない筈ですよ。」

勝平が、そう答おわえ了らない裡うちに、瑠璃子の華奢きゃしゃな白い手の中に燐寸マッチは燃えて、迸ほとばしり始めた瓦斯ガスに、軽い爆音を立てゝ、移つていた。

瑠璃子は、その火影ほかげに白い顔をほてらせて、暫しばらく立っていたが、ふと身体を翻ひるがえすと、卓の上にあつた証書を、軽く無造作に、薪まきをでも投げるように、漸ようやく燃え盛さかりかけた火の中に投じてしまった。

呆氣あつけに取られている勝平を、嫣然にっこりと振り向きながら、瑠璃子は云つた。

「水に流すと云うことがございますね。^{わたくし}妾達は、此の証文を火で焼いたように、これまでのいろいろな感情の行き違いを、火に焼いてしまおうと思ひますの……ほゝゝゝ、火に焼く！ その方がよろしゅうございますわ。」

「あゝそうく、火に焼く、そうだ、後へ何も残さないと云うことだな。そりや結構だ。今までの事は、スツカリ無いものにして、お互に信頼し愛し合つて行く。貴女^{あなた}が、その氣でいて呉れゝば、こんな嬉しいことはない。」

そう云いながら、勝平は瑠璃子に最初の接吻^{せつぶん}をでも与えようとするように、その眸^{ひとみ}を異常に、輝かしながら、彼女の傍へ近よつて来た。

そう云う相手の氣勢^{けいはい}を見ると、瑠璃子は何氣ないように、元の椅子に帰りながら、端^{たんぜ}然たる様子に歸つてしまつた。

その時に、扉^{ドア}が開いた。

「彼方^{あちら}の御用意が出来ましたから。」

女中は、淑やか^{しと}にそう云つた。

絶体絶命の時が迫つて来たのだ。

「じゃ、瑠璃さん！ 彼方^{あちら}へ行きましよう。古風に盃^{さかずき}事をやるそうですから、はゝゝ

ゝゝゝ。」

勝平が、卑いやしい肉に飢えた獣けだもののように笑ったとき、追さすに瑠璃子の顔は蒼あおざめた。
が、彼女の態度は少しも乱れなかった。

「あの、一寸電話ちよつとをかけたいと思いますの。父のその後の容体が気になりますから。」
それは、此の場合突然ではあるが、尤もつともな希望だった。

七

「電話なら、女中にかけてさせるがいゝ。おい唐沢さんへ……」

と、勝平が早くも、女中に命じようとするのを、瑠璃子は制した。

「いゝえ！ 妾わたくしが自身で掛けたいと思いますの。」

「自身で、うむ、それなら、其処そこに卓上電話がある。」

と、云いいながら、勝平は瑠璃子の背後うしろを指し示した。

いかにも、今迄いままで気が付かなかったが、其処の小さい桃花心木マホガニイの卓の上に、卓上電話が置かれていた。

瑠璃子は、淑やかに椅子から、身を起したとき、彼女の眉宇の間には、凄じい決心の色が、アリアリと浮んでいた。

「あもう。番町の二八九一番！」

瑠璃子は、送話器にその紅の色の美しい唇を、間近く寄せながら、低く呟くように言った。

「番町の二八九一番！」

そう繰り返しながら、送話器を持っている瑠璃子の白い手は、かすかに顫えていた。彼女は暫くの間、耳を傾けながら待っていた。やっと相手が出たようだった。

「あゝ唐沢ですか。妾瑠璃子なのよ、貴女は婆や。」

相手の言葉に聞き入るように、彼女は受話器にじつと、耳を押し付けた。

「そう。あなたの方から、電話を掛けるところだったの。それは、丁度よかったのね。それでお父様の御容体は。」

そういい捨てると、彼女は又じつと聞き入った。

「そう！……それで……入沢さんが、入らしたの！……それで、なるほど……」

彼女は、短い言葉で受け答をしながらも、その白い面は、だん／＼深い憂慮に包まれ

て行つた。

「えい！ 重体！ 今夜中が……もつと、ハッキリと言つて下さい！ 聞えないから。なに、なに、お父様は歸つて来てはいけないつて！ でもお医者は何と仰しやるの？ えい！ 呼んだ方がいゝつて！ 妾！ 何うしようかしら。あゝあゝ。」

彼女は、もうスツカリ取り擾してしまつたように、身を悶えた。

「何うしたのだ。何うしたのだ。」

勝平は、逡に色を変えながら、瑠璃子の傍に、近づいた。

「あのう、お父様が、宅の玄関で二度目の卒倒を致しましてから、容体が急変してしまつたようでございますの。妾こうしてはおられませんわ。ねえ！ 一寸歸つて来ましてもようございましょう。お願いでございますわ。ねえ貴方！」

瑠璃子は、涙に濡れた頬に、淋しい哀願の微笑を湛えた。

「あゝいゝとも、いゝとも。お父様の大事には代えられない。直ぐ自動車で行つて、しっかり介抱して上げるのだ。」

「そう言つて下さると、妾本当に嬉しゅうございますわ。」

そう云いながら、瑠璃子は勝平に近づいて、肥つた胸に、その美しい顔を埋めるような

容子ようすをした。勝平は、心の底から感激してしまった。

「ゆつくりと行っておいで、向うへ行ったら、電話で容体を知らして呉くれるのだよ。」

「直ぐお知らせしますわ。でも、此方こちらから訊たずねて下さると困りますのよ。父は、莊田へは決して知らせてはならない。大切な結婚の当夜だから、死んでも知らしてはならないと申しているそうでございますから。」

「うむよし〜。じゃ、よく介抱して上げるのだよ。出来る丈だけの手当をして上げるのだよ。」

自動車の用意は、直ぐ整った。

「容体がよろしかったら、今晚中に帰って参りますわ。悪かったら、明日になりましても御免あそばしませ。」

瑠璃子は、自動車の窓から、親しそうに勝平を見返った。

「もう遅いから、今宵は帰って来なくつてもいいよ。明日は、俺わしが容子を見に行つて上げるから。」

勝平は、もういつの間にか、親切な溺愛できあいする夫になり切ってしまった。

「そう。それは有難うございますわ。」

彼女は、爽さわかな声を残しながら、戸外やみの闇に滑り入った。が、自動車きとくが英国大使館前うれの桜並樹なみきの樹下このした闇を縫なみうている時だった。彼女の面おもてには、父の危篤きとくを憂うれうような表情は、痕あとも止めていなかった。人を思とおう通もてに、弄あそんだ妖女ウィッチの顔に見るような、必死な薄笑いあが、その高貴な面に宿やっていた。

まも 護りの騎士

一

名ばかりの妻、これは瑠璃子るりこが最初考るえていたように、生易なまやさしいことではなかった。彼女は、自分みさおの操みさおを守るために、あらゆる手段と謀計めくとを廻めくらさねばならなかった。結婚後しよば暫しばらくは、父の容体を口実に、瑠璃子るりこは莊田しやうだの家に帰かえって行いかなかった。勝平は毎日のように、瑠璃子を訪まれた。日に依よつては、午前午後ごぜんごごの二回に、此この花嫁の顔を見ねば気が済やまぬらしかった。

彼は訪問の度毎に、瑠璃子の歓心を買うために、高価な贈物おくりものを用意することを、忘れなかった。

それが、ある時は金剛石入りの指輪だった。ある時は、白金の腕時計だった。ある時は、真珠の頸飾くびかざりだった。瑠璃子は、そうした贈物を、子供が玩具おもちゃを貰うときのように、無邪気に何の感謝なしに受取った。

が、父の容体を口実に、いつまでも、実家に止まることは、許されなかった。それは、事情が許さないばかりでなく、彼女の自尊心が許さなかった。敵を避けていることが、勝気な彼女に心苦しかった。もつと、身体を危険に晒して勇ましく戦わなければならぬと思った。形式的にでも、結婚した以上、形の上文だてでは飽くまでも、妻らしくしなければならぬと思った。敵の卑怯ひきように報いるに卑怯を以てしてはならない。此方は、飽くまでも、正々堂々と戦って勝たねばならない。そう思いながら、彼女は勝平が迎えるの自動車に同乗した。

久しぶりに、瑠璃子と同乗した嬉しさに、勝平は訳もなく笑い崩れながら、

「あはゝゝゝ。そんなに、実家を恋しがらなくてもいゝよ。親一人子一人のお父様に別れるのは淋しいだろう。が、何も心配することはないよ。俺を恐がらなくってもいゝよ。

俺だつて、こんな顔をしているが、お前さんを取つて喰おうと云うのじやないよ。娘！

そうだ、美奈子に新しい姉が出来たと思つて、可愛がつて上げようと思うのだ。あはゝゝ

ゝゝ。」と、勝平は何うかして、瑠璃子の警戒を解こうとして、心にもないことを云つた。

勝平の言葉を聴くと、今迄^{いままで}^{はかばか}捌々しい返事もしなかつた瑠璃子は、甦^{よみが}えつたように、快活な調子で云つた。

「おほゝゝ、ほんとうに、娘にして下さるの、妾^{わたくし}のお父様になつて下さるの！ 妾本当に
そうお願いしたいのよ。ほんとうのお父様になつていたゞきたいのよ。」

そう言いながら、彼女はこぼるゝような嬌^{きようしゆう}羞^{しゆう}を、そのしなやかな身体^{からだ}一面に湛^{たた}えた。

「あゝ、いゝとも、いゝとも。」勝平は、人の好い本^よ当^ての父^{ておや}親^{うなず}のように肯いて見せた。

「ほゝゝゝ、それは嬉しゆうございますわ、本当に、妾^{わたくし}を娘にして下さいませ。それも、

ほんの少しの間ですの。お約束しますわ。半年、本当に半年でいゝのよ。でも、そうじゃ
ございませんか。妾、まだ年弱の十八でございましょう。学校を出てから、まだ半年にし
かなりませんのですもの。それに、今度の話でございましょう、それに、いろゝな事件
で、興奮して、まだその興奮が続いているのでございましょう。結婚生活に対する何の準
備も出来なかつたのでございますもの。貴君^{あなた}の本^{ほん}当^ての妻になるのには、もう少し心の準備

が欲しいと思いますの。貴君に対する愛情と信頼とを、もつと心の中で、準備したいと思っていますの。だから、暫らくの間、本当に美奈子さんの姉にして置いて下さいませ。『源氏物語』に、末摘花すえつむはなと云うのがございましょう。あれでございますの。」

そう云いながら、瑠璃子は嫣然にっこりと笑った。勝平は、妖術ようじゆつにでもかゝったように、ぼんやりと相手の美しい唇を見詰めていた。瑠璃子は相手を人とも思わないように傍若ぼうじやくぶ無人じんだった。

「ねえ！ お父様！ 妾わたくしの可愛いお父様！ そうして下さいませ。」

そう云いながら、彼女はそのスラリとした身体を、勝平にしなだれるように、寄せかけながら、その白い手を、勝平の膝ひざの上に置いて静しずかに軽く叩たたいた。

瑠璃子の処女ごとつつまの如く慎べしく娼婦しょうふの如く大胆な媚態びたいに、心を奪われてしまった勝平は、自分の答こたが何どう云うことを約束しているかも考えずに答えた。

「あゝいゝとも、いゝとも。」

勝平は心の裡うちで思った。どうせ籠かごの中に入れた鳥である。その中うちには、自分の強い男性としての力で征服して見せる。男性の強い腕の力には、凡すべての女性は、何時いつの間にか、掴つかみ潰つぶされているのだ。彼女も、しばらくの間、自分の掌しょうちゆう中で、小鳥らしい自由を楽しむがいゝ。その裡に、男性の腕の力がどんなに信頼すべきかが、だん／＼分つて来るだろう。

勝平はそうした余裕のある心持で、瑠璃子の請こいを容れた。

が、それが勝平の違算であつたことが、直すぐ判わかつた。十日経たち二十日経つ裡に、瑠璃子の美くしきは勝平の心を、日に夜について悩した。若い新鮮な女性の肉体から出る香においが勝平の旺盛おうせいな肉体の、あらゆる感覚を刺戟しげきせずにはいなかった。

その夜も、勝平は若い妻を、帝劇に伴つた。彼はボックスの中に瑠璃子と並んで、席を占めながら眼は舞台の方から、しば／＼歸つて来て、愛妻の白い美しい襟えり足あしから、そのほつそりとした撫なで肩がたを伝うて、膝ひざの上に、慎つつましやかに置かれた手や、その手を載せているふくよかな、両膝を、貪むさぼるように見詰めていた。彼は、こうして妻と並んでいと、身も心も溶けてしまうような陶醉を感じた。そうした陶醉の醒さめ際ぎわに、彼の烈はげしい情火が、ムラ／＼と彼の身体全体からだを、嵐あらしのように包むのだった。

瑠璃子は、勝平のそうした悩みなどを、少しも気が付かないように、雲雀のように快活だった。彼女は、勝平との感情の経緯いきざつを、もうすっかり忘れてしまったように、ほんとうの娘にでも、なりきったように、勝平に甘えるように纏まとわっていた。

「おい瑠璃さん。もう、お父様ごつこも大抵にしてよそうじやないか、貴女あなたも、少しは私が判っただろう。はゝゝゝゝ。約束の半年を一月とか二月とかに、縮めて貰もらえないものかねえ！」

勝平は、その夜自動車での帰途、冗談のように、妻の柔かい肩を軽く叩たたきながら、囁ささやいた。

「まあ！ 貴君あなたも、性急せっかちですのねえ。妾達わたくしたちには約婚時代というものが、なかったのですもの。もつと、こうして楽しみたいと思ひますもの。何かが来ると云うことの方が、何か came と云うことよりも、どんなに楽しいか。それに妾本當はもつと処女でいたいものよ。ねえ、いいでしょう。妾のわが儘ままを、許して下さつてもいいでしょう！」

そう云う言葉と容子あふには、溢あふれるような媚こびがあつた。そうした言葉を、聴いていると、勝平は、タジ／＼となつてしまつて、一言でも逆うことは出来なかつた。

が、その夜、勝平は自分一人寢室に入つてからも、若い妻のすべてが、彼の眼にも、鼻

にも、耳にもこびり付いて離れなかった。眼の中には、彼女の柔い白い肉体が、人魚のように、艶めかしい媚態びたいを作つて、何時までも何時までも、浮んでいた。鼻には、彼女の肉体の持つてゐる芳香ほうこうが、ほのぼのと何時までも、漂つていた。耳には、そうだ！彼女の快活な湿りしめのある声や、機智きちに富んだ言葉などが、何時までも何時までも消えなかった。彼は、そうした妄想もうそつを去つて、何うかして、眠りを得ようとした。が、彼が努力すれば努力するほど、眼も耳も冴さえてしまった。おしまいには、見上げて居る天てん井じやうに、幾つもく妻の顔が、現れて、媚びのある微笑を送つた。

『彼女は、たゞ恥かしがつてゐるのだ。処女としての恥かしさに過ぎないのだ。それは、此方こちらから取り去つてやればそれでいゝのだ！』

彼は、そう思い出すと、一刻も自分の寢台にじつと、身体を落ち着けていることが出来なかつた。子供らしい処女らしい恥らいを、その儘に受け入れていた自分が、あまりに人好ひとよしのように思われ始めた。

彼は、フラ／＼として、寢台を離れて、夜更よふけの廊下へ出た。

廊下へ出て見ると、家人達はみんな寢静まっていた。まだ十月の半なかばではあったが、広い洋館の内部には、深夜の冷氣が、ひや／＼と、流れていた。が、烈はげしい情火に狂っている勝平の身体からだには、夜の冷たさも感じられなかった。彼は、自分の家の中を、盗人ぬすびとのように、忍びやかに、夢遊病者のように覺束おぼつかなく、瑠璃子の部屋の方向へ歩いた。

彼女の部屋は、階下に在った。廊下の燈火とうかは、大抵消されていたが、階段に取り付けられている電燈が、階上にも階下にも、ほのかな光を送っていた。

勝平は、彼女に与えた約束を男らしくもなく、取り消すことが心苦しかった。彼女に示すべき自分の美点は、男らしいと云いう事より、外には何も無い。彼女の信頼を得るように、男らしく強く堂々と、行動しなければならぬ。それが、彼女の愛を得る唯一ゆいいつの方法だと勝平は心の中で思っていた。それなのに、彼女に一旦いったん与えた約束を、取り消す。男らしくもなく破約する。が、そうした心苦しさも、勝平の身体全体に、今潮のように漲みなぎってくる烈しい慾望を、何どうすることも出来なかった。

階段を下りて、左へ行くと応接室があった。右へ行くと美奈子みなこの部屋があり、その部屋と並んで瑠璃子に与えた部屋があった。

瑠璃子の部屋に近づくに従つて、勝平の心には烈しい動揺があつた。それは、年若い少年が初めて恋人の唇を知ろうとする刹那せつなのような、烈しい興奮だつた。彼は、そうした興奮を抑えて、じつと瑠璃子の部屋へ忍び寄ろうとした。

丁度、その時に、勝平は我を忘れて『アッ』と叫び声を挙げようとした。それは、今彼が近づこうとしたその扉ドアに、一人の人間が紛れもない一人の男性が、ピツタリと身体を寄せていたからである。冷たい悪寒おかんが、勝平の身体を流れて、爪つめの先までをも顫ふるわせた。彼は、電氣に掛けられたように廊下の真中へ立ち竦すくんでしまった。

が、相手は勝平の近づくのを知っている筈はずなのに、ピクリとも身体を動かさなかつた。扉ドアに彫り付けられている木像が何かのように、闇やみの中にじつと立ち尽しているようだつた。『盗賊どろぼう！』最初勝平は、そう叫ぼうかとさえ思ったが、彼の四十男に相当した冷静が彼の口を制したが、その次ぎに、ムラ／＼と彼の心を閉したものは、漠然たる嫉妬しつとだつた。一人の男性が、妻の寢室の扉ドアの前に立っている。それだけで、勝平の心を狂わすのに十分だつた。

彼は、握りしめた拳こぶしを、顫ふるわしながら、必死になつて、一步步ドア扉に近づいた。が、相手は気味の悪いほど、冷静にピクリとも動かない。勝平が、最後の勇気を鼓して、相手の

胸倉を掴みながら、低く、

「誰だ！」と、叱した時、相手は勝平の顔を見て、ニヤリと笑った。それは紛れもなく勝彦だったのである。

自分の子の卑しい笑い顔を見たときに、剛愎な勝平も、ガンと鉄槌で殴られたように思った。言い現し方もないような不快な、あさましいと云った感じが、彼の胸の裡に一杯になった。自分の子があさましかった。が、あさましいのは、自分の子丈けではなかった。もつと、あさましいのは、自分自身であつたのだ。

「お前！ 何をしているのだ！ 茲で。」

勝平は、低くうめくように訊いた。が、それは勝彦に訊いているのではなく、自分自身に訊いているようにも思われた。

勝彦は、離れの日本間の方で寝ている筈なのだ。が、それがもう夜の二時過であるのに、瑠璃子の部屋の前に立っている。それは、勝平に取つては、堪えられないほど、不快なあさましい想像の種だった。

「何をしているのだ！ こんな処で。こんなに遅く。」何時もは、馬鹿な息子に対しかなり寛大である父であつたが、今宵に限つては、彼は息子に対してかなり烈しい憎悪を感じ

たのである。

「何をしていたのだ！ おい！」

勝平は、鋭い眼で勝彦を睨みながら、その肩の所を、グイと小突いた。

四

「茲^{ここ}に何をしていたのだ、茲^{ここ}に！」

父が、必死になつて責め付けているのにも拘^からず、勝彦はたゞニヤリくと、たわいもなく笑い続けた。薄気味のわるいとりとめもなき子の笑いが、丁度自分の恥しい行為を、嘲笑^{あざわら}っているかのように、勝平には思われた。

彼は、瑠璃子やまた、直^すぐ次ぎの扉^{ドア}の裡^{うち}に眠っている美奈子の夢を破らないようにと、気を付けながらも、声がだんだん激しくなつて行くのを抑えることが出来なかつた。

「おい！ こんなに遅く、茲^{ここ}に何をしていたのだ。おい！」

そう云いながら、勝平は再び子の肩を突いた。父にそう突き込まれると、白痴相当に、勝彦は顔を赤^{あか}めて、口ごもりながら云^いつた。

「姉さんの所へ来たのだ。姉さんの所へ来たのだ。」姉さん、勝彦はこの頃、瑠璃子をそう呼び慣^{なら}つていた。

「姉さん！　姉さんの所へ！」

勝平は、そう云いながらも、自分自身地の中へ、入ってしまいたいような、浅ましさと恥しさを感じた。が、それと同時に、蕐^{にち}を嚙^かむような嫉妬^{しつと}が、ホンの僅^{わず}かではあるが、心の裡^{きざ}に萌^もして来るのを、何^どうすることも出来なかった。が、父のそうした心持を、嘲^{あざけ}るように、勝彦は又ニタリ／＼と愚かな笑いを、笑いつづけている。

「姉さんの所へ何をしに来たのだ。何の用があつて来たのだ。こんなに夜遅く。」

勝平は、心の中の不愉快さを、じつと抑えながら、訊^きく所まで、訊^{ただ}き質^たさずにはいられなかった。

「何も用はない。たゞ顔を見たいのだ。」

勝彦は、平然とそれが普通な当然な事でもあるように云った。

「顔を見たい！」

勝平は、そう口では云ったものの、眼^{くろ}が眩^{くら}むように思った。他人は、誰も居合わさない場所ではあったが、自分の顔を、両手^おで掩^おい隠したいとさえ思った。

彼は、もう此の上、勝彦に言葉を掛ける勇氣もなかった。が、今にして、息子のこうした心を、刈り取って置かないと、どんな恐ろしい事が起るかも知れないと思った。彼は不快と恥しさを制しながら云った。

「おい！ 勝彦これから、夜中などに、お姉さんの部屋へなんか来たら、いけないぞ！二度とこんな事があると、お父様が承知しないぞ！」

そう云いながら、勝平は、わが子を、恐ろしい眼で睨んだ。が、子はケロリとして云った。

「だって、お姉さまは、来てもかまわない！ と云ったよ。」勝平は、頭からガンと殴られたように思った。

「来てもかまわない！ 何時、そんな事を云った？ 何時そんなことを云った？」

勝平は、思わず平常の大声を出してしまった。

「何時って、何時でも云っている。部屋の前になら、何時まで立っていてもいって、番兵になつて呉れるのならいって！」

「じゃ、お前は今夜だけじゃないのか。馬鹿な奴め！ 馬鹿な奴め！」

そう云いながらも、勝平は子に対して、可なり激しい嫉妬を懷かすにはいらなかった。

それと同時に、瑠璃子に対しても、恨に似た烈しい感情を持たずにはいられなかった。

「そんな事を姉さんが云った！ 馬鹿な！ 瑠璃子に訊いて見よう。」

彼は、息子を押し退けながら、その背後の扉を、右の手で開けようとした。が、それは釘付けにでもされたように、ピタリとして、少しも動かなかった。彼は声を出して、叫ぶとした。

その途端に、ガタリと扉が開く音がした。が、開いたのはその扉ではなくして、美奈子の寢室の扉であつた。

純白の寢衣を付けた少女はまろぶように、父の傍に走り寄つた。

「お父様！ 何と云うことでございます。何も云わないで、お休みなさいませ。お願いでございます。お姉様にこんなところを見せては親子の恥ではございませんか。」

美奈子の心からの叫びに、打たれたように、勝平は黙ってしまった。

勝彦は、相変らず、ニヤリ／＼と妹の顔を見て笑っていた。

丁度此の時、扉の彼方の寢台の上に、夢を破られた女は、親子の間の浅ましい葛藤を、聞くともなく耳にすると、其美しい顔に、凄い微笑を浮べると、雪のような羽蒲団を又再び深々と、被つた。

五

自分の寢室へ帰って来てからも、勝平は悶々^{もんもん}として、眠られぬ一夜を過してしまった。恋する者の心が、競争者の出現に依^よつて、焦^{あせ}り出すように、勝平の心も、今迄^{いままで}の落着、冷静、剛愎^{ごうふく}の凡^{すべ}てを無くしてしまった。競争者、それが何と云^いう堪^{たま}らない競争者であらう。それが自分の肉親の子である。肉親の父と子が、一人の女を廻^{めぐ}つて争っている。親が女の許^{もと}へ忍ぶと子が先廻りしている。それは、勝平のような金の外には、物質の外には、何物をも認めないような墮落^{だらく}した人格者に取つても堪らないほどあさましいことだった。もし、勝彦が普通の頭脳があり、道義の何物かを知つていれば、罵^{のの}り恥かしめて、反省させることも容易なことであるかも知れない。(尤^{もつと}も、勝平に自分の息子の不道德を責め得る資格があるか何^どうかは疑問であつた。)が、勝彦は盲目的な本能と烈^{はげ}しい慾望の外は、何も持つていない男である。相手が父の妻であらうが、何であらうが、たゞ美しい女として映らない男である。それに人並外れた強^{ごう}力を持つている彼は、どんな乱暴をするかも知らなかった。

その上に、勝平は自分の失言に対する苦い記憶があつた。彼は、一時瑠璃子を勝彦の妻にと思つたとき、その事を冗談のように勝彦に、云い聴かせたことがある。何事をも、直ぐ忘れてしまふ勝彦ではあつたが、事柄が事柄であつた丈に、その愚な頭の何処かにこびり付かせているかも知れない。そう考えると、勝平の頭は、愈重苦しく濁つてしまつた。

『そうだ！ 勝彦を遠ざけよう。葉山の別荘へでも追いやろう。何とか賺して、東京を遠ざけよう。』勝平はわが子に対して、そうした隠謀をさえ考え始めていた。

興奮と煩悶とに勞れた勝平の頭も、四時を打つ時計の音を聴いた後は、何時しか朦朧としてしまつて、寝苦しい眠りに落ちていた。

眼が覚めた時、それはもう九時を廻つていた。朗かな十月の朝であつた。青い紗の窓掛を透した明るい日の光が、室中に快い明るさを湛えた。

朝の爽やかな心持に、勝平は昨夜の不愉快な出来事を忘れていた。尨大な身体を、寢台から、ムクムクと起すと、上草履を突っかけて、朝の快い空氣に吸い付けられたように、縁側に出た。彼は自分の宏大な、広々と延びている庭園を見ながら、両手を高く掲げて、快い欠伸をした。が、彼が拵げた両手を下した時だった。十間ばかり離れた若い楓の植込の中を、泉水の方へ降りて行く勝彦の姿を見た。彼に似て、尨大な立派な体格だつ

た。が、歩いて行くのは勝彦一人ではなかった。勝彦の大きい身体の蔭^{かげ}から、時々ちら／＼美しい色彩の着物が、見えた。勝平は、最初、それが美奈子であることを信じた。勝彦は白痴ではあったが、美奈子^{だけ}丈には、やさしい大人しい兄だった。勝平は何時もの通り兄^きようだい^妹の散歩であると思っていた。が、植込の中の道が右に折れ、勝平の視線と一直線になったとき、その男女は相並んで、後姿を勝平に見せた。女は紛れもなき瑠璃子だった。しかも彼女の白い、遠目にも、くつきりと白い手は、勝彦の肩、そうだ、肩よりも少し低い所へ、そつと後から当てられているのだった。

それを見たとき、勝平は煮えたぎっている湯を、飲まされたような、凄^{すさま}しい気持になっていた。ニヤリ／＼と悦^{えつ}に入っているらしいわが子の顔が、アリ／＼と目に見えるように思った。彼は、縁^{ヴェランダ}側から飛び降りて、わが子の顔を思うさま、殴り付けてやりたいような恐ろしい衝動を感じた。

が、それにも増して、瑠璃子の心持が、グツと胸に堪えて来た。昨夜^{ゆうべ}の騒ぎを知らぬ筈^{はず}がない、親子の間の、浅ましい情景^{シーン}を知らぬ筈がない。隣の部屋^{シム}の美奈子さえ、眼を覚しているのに、瑠璃子が知らない筈はない。知っていながら、昨夜^{ゆうべ}の今日勝彦をあんなに近づけている。

そう思うと、勝平は、瑠璃子の敵意を感じずにはいられなかった。そうだ！ 自分が小娘として、つまらない油断や、約束をしたのが悪かったのだ。云わば降伏した敵将の娘を、妻にしているようなものである。美しい顔の下に、どんな害心を蔵しているかも知れない。が、そう警戒はしながら、瑠璃子を愛する心は、少しも減じなかった。それと同時に、眼前の情景シーンに対する嫉妬しつとの心は少しも減じなかった。

六

勝平が、縁ヴェランダ側の欄干に、釘付けくぎづにされながら、二人の後姿が全く見えなくなった若い楓かえでの林を、じつと見詰めている時に、その林の向うにある泉水の畔ほとりから、瑠璃子の華やかな笑いが手に取るように聞えて来た。

それは、雲雀ひばりの歌うように、自由な快活な笑いだった。結婚して以来、もう一月以上の日が経たつ内、勝平に対しては決して笑ったことのないような自由な快活な笑い声であった。茲ここからは見えない泉水のほとりで、縦令馬鹿たとえばかではあるにしろ年齢としだけは若い、身体だけ丈は堂々と立派な勝彦が、瑠璃子と相並んで、打ち興じている有様が、勝平の眼に、マザ／＼と

映つて来るのであった。

彼は苦々しげに、二人に向つてでも吐くように、唾つばを遥かな地上へ吐いてから、その太い眉まゆに、深い決心の色を凝こめながら、階下へ降りて行つた。

勝平は、抑え切れない不快な心持に、悩まされつゝ、罪のない召使を、叱しかり飛ばしながら、漸ようやく顔を洗つてしまうと、苦り切つた顔をして、朝の食卓に就いた。いつも朝食を一緒にする筈はずの瑠璃子はまだ庭園から、歸つて来なかつた。

「奥さんは何うしたのだ。奥さんは！」勝平は、オド／＼している十五六の小間使を、噛かみ付けるように叱り飛した。

「お庭でございます。」

「庭から、早く歸つて来るように云つて来るのだ。俺わしが起きているじゃないか。」

「ハイ。」小さい小間使は、勝平の凄すさまじい様子に、縮み上りながら、瑠璃子を呼びに出て行つた。

瑠璃子が、入つて来れば、此この押え切れない憤いきどおりを、彼女に対しても、洩もそう。白痴の子を弄もてあそんでいるような、彼女の不謹慎ふきんしんを思い切り責めてやろう。勝平はそう決心しながら、瑠璃子が入つて来るのを待つていた。

二三分も経たない裡に、衣ずれの音が、廊下にしたかと思うと、瑠璃子は少女のようにいそいそと快活に、馳け込んで来た。

「まあ！ お早う！ もう起きていらしたの。妾ちつとも、知らなかったのよ。お寝坊の貴方の事だから、どうせ十一時近くまでは大丈夫だと思っていたのよ。昨夜あんなに遅く帰って来たのに、よくまあ早くお目覚めになったこと。この花美しいでしょう。一番大きくて、一番色の烈しい花なのよ。妾これが大好き。」

そう云いながら、瑠璃子は右の手に折り持っていた、真紅の大輪のダリヤを、食卓の上の一輪挿に投げ入れた。

勝平は、何うかして瑠璃子をたしなめようと思いつながらも、彼女の快活な言葉と、矢継早の微笑に、面と向うと、彼は我にもあらず、凡ての言葉が咽喉のところに、からんでしまうように思った。

「昨夜、よくお眠りになつて？ 妾芝居で疲れましたでしょう、今朝まで、グツスリと寝入ってしまったのよ。こんなに、よく眠られたことはありませんわ、近頃。」

昨夜の騒ぎを、親子三人のあさましい騒ぎを、知っているのか知らないのか、瑠璃子はその美しい顔の筋肉を、一筋も動かさずに、華奢な指先で、軽く箸を動かしながら、勝

平に話しかけた。

勝平は、心の裡に、わだかまっている気持ちを、瑠璃子に向って、洩すべき緒を見出すのに苦しんだ。相手が、昨夜の騒ぎを、少しも知らないと言うのに、それを材料として、話を進めることも出来なかった。

彼は、瑠璃子には、一言も答えないで、そのいら／＼しい気持ちを示すように、自棄に忙しく箸を動かしていた。

勝平の不機嫌を、瑠璃子は少しも気に止めていないように、平然と、その美しい微笑を続けながら、

「妾、今日三越へ行きたいと思ひますの。連れて行って下さらない？」

彼女は、プリ／＼している勝平に、尚小娘か何かのように、甘えかゝった。

「駄目です。今日は東洋造船の臨時総会だから。」

勝平は、瑠璃子に対して、初めて荒々しい言葉を使った。彼女はその荒々しい語氣を跳ね返すように云った。

「あら、そう。それでは、勝彦さんに一緒に行っていたゞくわ。……いゝでしょう。」

七

勝彦の名が瑠璃子の唇を洩れると、勝平の巨きい顔は、益苦り切ってしまった。

相手のそうした表情を少しも眼中に置かないように、瑠璃子は無邪気にしつこく云った。

「勝彦さんに、連れて行っていたゞいたらいけませんの。一人だと何だか心細いのですもの。妾一人だと買物をするのに何だか定りが付かなくて困りますのよ。表面丈でもいゝからいゝとか何とか合槌を打って下さる方が欲しいのよ。」

「それなら、美奈子と一緒にやらうしやい。」

勝平は、怒った牝牛のようにプリ／＼しながら、それでも正面から瑠璃子をたしなめることが出来なかった。

「美奈子さん。だって、美奈子さんは、三時過ぎでなければ学校から、帰って来ないのですもの。それから支度をしていては、遅くなってしまうわ。」

瑠璃子は、大きい駄々っ子のような表情を見せながら、その癡顔丈は、微笑を絶たなかった。勝平は又黙ってしまった。瑠璃子は追撃するように云った。

「何うして勝彦さんに一緒に行っていたゞいては、いけませんの。」

勝平の顔色は、咄嗟^{とつさ}に變つた。その顚顚^{こめかみ}の筋肉が、ピク／＼動いたかと思うと、彼は顚^{ふる}える手で箸^{はし}を降しながら、それでも声丈^だけは、平静な声を出そうと努めたらしかったが、變に上ずツてしまつていた。

「勝彦！ 勝彦勝彦と、貴女^{あなた}はよく口にするが、貴女は勝彦を一体何だと思つているのです。もう、一月以上此家^{この}にいるのだから、氣が付いたでしょう。親の身として、口にするさえ恥かしいが、あれは白痴ですよ。白痴も白痴も、御覽^{とおり}の通東西も弁じない白痴ですよ。あゝ云う者を三越に連れて行く。それは此の莊田の恥、莊田一家の恥を、世間へ広告して歩くようなものですよ。貴女も、動機は兎^とも角^{かく}、一旦^{いったん}此の家の人となつた以上、こう云う馬鹿息子^{ばか}があると云うことを、広告して下さらなくつてもいゝじやありませんか。」

勝平は、結婚して以来、初めて荒々しい言葉を、瑠璃子^{るりこ}に対して吐いた。が、象牙^{ぞうげ}の箸^{めしわん}を飯^{めしわん}碗^{わん}の中に止めたまゝ、じつと聴いていた瑠璃子は、眉^{まゆ}一つさえ動かさなかつた。勝平の言葉が終ると、彼女は駭^{おどろ}いたように、眼を丸くしながら、

「まあ！ あんなことを。そんな邪推^{じゃすい}していらつしやるの。妾勝彦^{わたくし}さんを馬鹿だとか白痴だとか賤^{いや}しめたことは、一度もありませんわ。あんな無邪氣な純な方はありませんわ。それは、少し足りないことは足りないわ。それは、お父様の前でも申し上げねばなりません

ん。でも、あんなに正直な方に、妾初めてお目にかゝりましたのよ。それに妾の云ったことなら、何でもして下さるのですもの。此間、お家が広いので、夜寢室の中に、一人いると何だか寂しく心細くなると、申しますと、勝彦さんは、それなら毎晩部屋の外で番をしてやろうと仰しやるのですよ、妾冗談だとばかり、思っていますと、一昨夜二時過ぎに、廊下に人の氣勢けはいがするので、扉ドアを開けて見ますと、勝彦さんが立っていらつしやるじゃありませんか。それが、丁度中世紀の騎士ナイトが、貴婦人を護まもる時のように、儼然げんぜんとして立っていらつしやるのですもの。妾可笑おかしくもあれば、有難くも思つたわ。妾此の頃、智恵ちえのある伶俐れいりな方には、飽きくしてありますの。また、その智恵を、人を苦しめたり陥おとしれたりする事に使う人達に、飽きくしてありますのよ。また、人が傷け合ったり陥れ合ったりする世間その物にも、愛想あいそが尽きていますのよ。妾、勝彦さんのような、のんびりとした太古の心で、生きている方が、大好きになりましたのよ。貴方あなたの前でございますが、何うして勝彦さんを捨てゝ、貴方を選んだかと思うと、後悔していますのよ。おほゝゝゝゝゝ。」「
爽さわやかな五月さつきの流なみだが、蒼あおい野を走るように、瑠璃子は雄弁だった。黙って聴いていた勝平の顔は、怒いかりと嫉妬しつとのために、黒ずんで見えた。

余りに脆きもろ

一

勝平は、冗談かそれとも真面目まじめかは分らないが、人を馬鹿ばかにしているように、からかっているように、勝彦かつひこを賞める瑠璃子るりこの言葉を聞いていると、思わずカッとなつてしまつて、手に持っている茶碗ちやわんや箸はしを、彼女に擲なげつけてやりたいような烈はげしい嫉妬しつとと怒いを感じた。が、口先ではそんな厭いやがらせを云いいながらも、顔丈だけは此この頃の秋の空のように、澄み渡つた麗うらちかな瑠璃子を見ていると、不思議に手が竦すくんで、茶碗を投げ付くことは愚か、一指を触るゝことさえも、為なし得なかつた。

が、勝平は心の中で思った。此の儘ままにして置けば、瑠璃子と勝彦とは、日増に親しくなつて行くに違いない。そして自分を苦しめるのに違いない。少くとも、当分の間、自分と瑠璃子とが本当の夫婦となるまで、何どうしても二人を引き離して置く必要がある。勝平は、咄嗟とつさにそう考えた。

「あはゝゝゝ。彼は突然取つて付けたように笑い出した。「まあいゝ！ 貴女あなたがそんなに馬鹿が好きなら連れて行くもよからう。貴女のようなのは、天邪鬼あまのじやくと云うのだ。あはゝゝゝ。」

勝平は、嫉妬ふんぬと憤怒とを心の底へと、押し込みながら、何気ないように笑つた。

「何うも、有難う。やつと、お許しが出ましたのね。」瑠璃子も、サラリと何事もなかったように微笑した。

その時に、勝平は急に思い付いたように云つた。

「そうく。貴女あなたに話すのを忘れていた。此間中頭おとといが重いので、一昨日、近藤みに診て貰もらうと、神経衰弱の気味らしいと云うのだ。海岸へでも行つて、少し静養したら何うだと云うのだがね、そう云われると、俺わしも此の七月以来会社の創立や何かで、毎日のように飛び廻つていたものだからね、精力主義の俺わしも可なりグダグダしばになっているのだ。神経衰弱だなんて、大したこともあるまいと思うが、まあ暫しばらく葉山へでも行つて、一月ばかり遊んで来ようかと思うのだ。尤も、彼処あそこからじゃ、毎日東京に通つても訳はないからね。それに就いては、是非貴女と一緒に行っていたゞきたいと思うのだがね。」勝平は、熱心に、退の引つびきならないように瑠璃子に云つた。

「葉山へ！」と云つたまゝ、^{さすが}遠に彼女は二の句を云い淀んだ。

「そうです！ 葉山です。彼処に、林子爵^{ししやく}が持つていた別荘を、此春譲つて貰つたのだ^が、此夏美奈子^{みなこ}が避暑に行った丈^{だけ}で、俺^{わし}はまだ二三度しか宿^{とま}つていないのだ。秋の方が、^{しずか}静でよいそうだから、ゆつくり滞在したいと思うのだが。」

勝平は、落着いた口調で言つた。葉山へ行くことは、何の意味もないように云つた。が、瑠璃子には、その言葉の奥に潜んでいる勝平のよからぬ意思を、明かに読み取ることが出来た。葉山で二人丈^{だけ}になる。それが何う云う結果になるかは瑠璃子には可なりハッキリ分るように思つた。が、彼女はそうした危機を、未然に避けることを、^{いさぎよ}潔しとしなかつた。

どんな危機に陥つても、自分自身を立派に守つて見せる。彼女には、女ながらそうした烈しい最初の意気が、ピクリとも揺いでいなかった。

「結構でございますわ、^{わたくし}妾も、そんな所で静かな生活を送るのが大好きでございますのよ。」

彼女は、その清麗な面に、少しの曇も見せないで、^{さわや}爽かに答えた。

「あゝ行つて呉^くれるのか。それは有難い。」

勝平は、心から嬉^{うれ}しそうにそう云つた。葉山へさえ、伴つて行けば、当分勝彦と引き離

することが出来る上に、其処そこでは召使を除いた外は、瑠璃子と二人切りの生活である。殊ことに、鍵かぎのかかり得るような西洋室はない。瑠璃子を肉体的に支配してしまえば、高が一個の少女である。普通の処女がどんなに嫌い抜いていても、結婚してしまえば、男の腕に縋すがり付くように、彼女も一いったん旦その肉体を征服してしまえば、余りに脆もろき一個の女性であるかも知れない。勝平はそう思った。

「それなら丁度ようございますわ。三越みつこしへ行つて、彼方あちらで入用な品物を揃そろえて参りますわ。」

彼女は、身に迫る危険な場合を、少しも意に介しないように、寧ろむしいそぐとしながら云った。

二

愛し合つた夫であるならば、それは楽しい新婚旅行である筈はずだけれども、瑠璃子の場合、そうではなかった。勝平と二人限きりで、東京を離れることは、彼女に取つては死地に入ることであつた。東京の邸やしきでは、人目が多い丈だけに、勝平も一いったん旦与えた約束の手前、理不

尽な振舞に出ることは出来なかったが、葉山では事情が違っていた。今迄は敵と戦うのに、地の利を得ていた。小さいながらも、彼女の城廓が あった。殊に盲目的に、彼女を護っている勝彦と云う番兵も あった。が、葉山には、何もなかった。彼女は赤手にして、敵と渡り合わねばならなかった。勝敗は、天に委せて、兎に角に、最後の必死的な戦いを、戦わねばならなかった。

そうした不安な期待に、心を擾されながらも、彼女はいろ／＼と、別荘生活に必要な準備を整えた。彼女は、当座の着替や化粧道具などを、一杯に詰め込んだ大きなトランクの底深く、一口の短剣を入れることを忘れなかった。それが、夫と二人限りの別荘生活に對する第一の準備だった。

父の男爵が、瑠璃子の烈しい執拗な希望に、到頭動かされて、不承々に結婚の承諾を与えて、最愛の娘を、憎み賤しんでいた男に渡すとき、男爵は娘に最後の贈り物として、一口の短剣を手渡した。

「これは、お前のお母様が家へ来るときに持って来た守り刀なのだ。昔の女は、常に懷刀を離さずに、それで自分の操を守ったものだ。貴女も普通の結婚をするのなら、こんなものは不用だが、今度のような結婚には、是非必要かも知れない。これで、貴女の現

在の決心を、しっかりと守るようになさい。」

父の言葉は簡単だった。が、意味は深かった。彼女はそのあいくち首を身辺から離さないで、最後の最後の用意としていた。そうした最後の用意が、如何なる場合にも、彼女を勇氣付けた。牡牛おおしのように巨きおおい勝平と相對していながら、彼女は一度だって、怯れたことおそはなかった。

瑠璃子しほが暫らく東京を離れると云うことが分ると、一番に驚いたのは勝彦だった。彼は瑠璃子が準備をし始めると、自分も一緒に行くのだと云って、父の大きいトランクを引つ張ばり出して来て、自分の着物や持物を滅茶苦茶めちやくちやに詰め込んだ。おしまいには、自分の使っている洗面器までも、詰め込んで召使達を笑わせた。彼は、瑠璃子に捨て、置かれないようにと、一瞬の間も瑠璃子を見失わないように後へあとと付き纏まとった。

それを見ると、勝平は眉まゆを蹙ひそめずにはいられなかった。

出立しゅったつの朝だった。自分が捨て、置かれると云うことが分ると、勝彦は狂人のように暴れ出した。毎年一度か二度は、発作的に狂人のようになってしまふ彼だった。彼は瑠璃子と父とが自動車に乗るのを見ると、自分も跣足はだしで馳かけ降りて来ながら、扉ドアを無理矢理に開けようとした。執事や書生が三四人で抱き止めようとしたが、馬鹿力ばかの強い彼は、後か

ら抱き付こうとする男を、二三人も其処へ振り飛ばしながら、自動車に縋り付いて離れなかった。

白痴でありながらも、必死になつてゐる顔色を見ると、瑠璃子は可なり心を動かされた。主人に慕い纏わつて来る動物に対するようないじらしさを、此の無智な勝彦に対して、懷かすにはいられなかった。

「あんなに行きたがつていらつしやるのですもの。連れて行つて上げてはいけないのですか。」

瑠璃子は夫を振返りながら云つた。その微笑が、一寸皮肉な色を帯びるのを、彼女自身制することが出来なかった。

「馬鹿な！」

勝平は、苦り切つて、一言に斥けると、自動車の窓から顔を出しながら云つた。

「遠慮をすることはない。グン／＼引き離して彼方へ連れて行け。暴れるようだったら、何時かの部屋へ監禁してしまえ。当分の間、監視人を付けて置くのだぞ、いゝか。」

勝平は、叱り付けるように怒鳴ると、丁度勝彦の身体が、多勢の力で車体から引き離されたのを幸に、運転手に発車の合図を与えた。

動き出した車の中で瑠璃子は一寸居ずまいを正しながら、背後うしろに続いている勝彦のあさましい怒号に耳を掩おほわずにはいられなかった。

三

葉山へ移ってから、二三日の間は、麗うらちかな秋日和びよりが続いた。東京では、とても見られないような薄緑の朗かな空が、山と海とを掩おほうていた。海は毎日のように静かで波の立たない海面は、時々緩やかなうねりが滑かに起伏していた。海の色も、真夏に見るような濃のうら藍らんの色を失って、それ丈だけ親しみ易い軽い藍あいろ色に、はる／＼と続いていた。その端はてに、伊豆いずの連山が、淡くほのかに晴れ渡っているのだった。

十月も終に近い葉山の町は、洗われたように静かだった。どの別荘も、どの別荘も堅く閉けされて人の氣勢けいはいがしなかった。

御用邸に近い海岸にある莊田しょうだ別荘は、裏門を出ると、もう其処そこの白い砂地には、崩れくずた波の名残りが、白い泡沫ほうまつを立てているのだった。

勝平は、葉山から毎日のように、東京へ通っていた。夫の留守の間、瑠璃子は何人なんびと

にも煩わわづらされない静寂うちの裡に、浸ひつていることが出来た。

瑠璃子まればはよく、一人海岸を散歩した。人影の稀な海岸には、自分一人の影が、寂しく砂の上に映はつていた。遙はるかに／＼悠々と拡ひろがっている海や、その上を限かぎりなく広大に掩おほうている秋の朗かな大空を見詰みめっていると、人間の世のあさましさが、しみ／＼と感ぜられて来た。自分自身が、復讐ふくしゅうに狂奔きやうほんして、心にもない偽りの結婚けっこんをしていることが、あさましい罪惡のように思われて、とりとめもなく、心を苦しめることなのであつた。

葉山へ移うつつてから、三四日の間、勝平は瑠璃子まればを安全地帯に移し得たことに満足したのであろう。人のよい好々爺こうこうやになり切きつて、夕方東京から歸かへつて来る時には、瑠璃子まればの心を欣よろこぶような品物や、おいしい食物などをお土産みやげにすることを忘れなかつた。

葉山へ移うつつてから、丁度五日目の夕方そのだつた。其日は、午過ひるぎから空模様があやしくなつて、海岸へ打ち寄せる波の音が、刻一刻凄すさまじくなつて来るのだつた。

海に馴なれない瑠璃子まればには、高く海岸に打ち寄せる波の音が、何となく不安だつた。別荘番の老爺おやじは暗く澱よじんでいる海の上を、低く飛んで行く雲の脚を見ながら、『今宵こよひは時化しけかも知れないぞ。』と、幾度も／＼口ずさんだ。

夕刻になるに従したがつて、風は段々吹き募もつて来た。暗く暗く暮れて行く海おもての面に、白い大

きい浪^{なみ}がしら、後から／＼走っていた。瑠璃子は硝子戸^{ガラスド}の裡から、不安な眉^{まゆ}をひそめながら、海の上を見詰めていた。烈^{はげ}しい風が砂^まを捲いて、パラ／＼と硝子戸^{ガラス}に打ち突けて来た。

「あゝ早く雨戸を閉めておくれ。」

瑠璃子は、狼^{ろうばい}狽^{ばい}して、召使に命じると、ピツタリと閉ざされた部屋の中に、今宵に限って、妙に薄暗く思われる電燈^{でんとう}の下に、小さく縮かまっていた。人間同士の争いでは、非常に強い瑠璃子も、こうした自然の脅威の前には、普通の女らしく臆^{おくびよう}病^{びよう}だった。海岸に立っている、地形の脆^{ぜい}弱^{じやく}な家は、時々今にも吹き飛ばされるのではないかと思われるほど、打ち揺いだ。海岸に砕けている波は、今にも此^この家を呑^のみそうに轟^{ごうごう}々たる響を立てゝいる。

瑠璃子には、結婚して以来、初めて夫の帰るのが待たれた。何時^{いつ}もは、夫の帰るのを考えると、妙に身体^{からだ}が、引き緊^{しま}つてムラ／＼とした悪感^{おかん}が、胸を衝^ついて起るのであったが、今宵に限っては、不思議に夫の帰るのが待たれた。勝平の鉄のような腕^{かいな}が何となく頼もしいように思えた。逗子^{ずし}の停車場から自動車で、危険な海岸伝いに帰って来ることが何となく危^{あやぶ}まれ出した。

「こう荒れていると、あぶずり 罅あひのところがなんか、危険じゃないかしら。」と女中に対して瑠璃子は、我にもあらず、そうした心配を口に出してしまった。

その途端に、吹き募あらしった嵐は、可なり宏壮こうそうな建物を打ち揺すった。鎖で地面へ繋つながれている廂ひさしが、吹きちぎられるようにメリ／＼と音を立てた。

四

「こんなに荒れると、本当に自動車はお危あちうございますわ。一層こんな晩は、彼方あちでお宿とまりになるとおよろしいのでございますが。」

女中も主人の身を案ずるようにそう云いった。が、瑠璃子は是非にも帰もって貰もらいたいと思おもった。何時いつもは、顔を見ている丈だけでも、ともすればムカ／＼して来る勝平が、何となく頼たのもしく力強いように感ぜられるのであった。

日が、トツプリ暮れてしまった頃から、嵐あらしは益ますます吹き募つった。海は頻しきりに轟ごうごう々と吼ほえ狂くるった。波は岸を超え、常には干乾ひからびた砂地を走って、別荘の土堤どての根元まで押し寄せた。

「潮が満ちて来ると、もつと波がひどくなるかも知れねえぞ！」

海の模様を見るために出ていた、別荘番の老爺おやじは、漆のように暗い戸外から帰つて来ると、不安らしく眩くらいた。

「まさか、此間こののような大暴風雨にはなりますまいね。」

女中も、それに釣り込まれたように、オド／＼しながら訊きいた。皆の頭に、まだ一ひと月つきにもならない十月一日の暴風雨の記憶がマザ／＼と残つていた。それは、東京の深川本所おおつなみに大海嘯おおつなみを起して、多くの人命を奪つたばかりでなく、湘南しょうなん各地の別荘にも、可なりヒドイ惨害さんがいを蒙こうむらせたのであつた。

「まさか先度せんどのような大暴風雨にはなるまいかと思うが、時刻も風の方むき向もよく似ているでなあ！」

老爺おやじは、心なしに瑠璃子達を脅おどすように、首を傾かしげた。

夜に入つてから、間もなく雨戸を打つ雨の音が、ボツリ／＼と聞え出したかと思うと、それが忽たちまち盆くつがえを覆すような大雨となつてしまった。天地を洗い流すような雨の音が、瑠璃子達の心を一層不安に充みたしめた。

恐ろしい風が、グラ／＼と家を吹き揺すつたかと思う途端に、電燈でんとうがふつと消えてしまった。こうした場合に、燈火あかりの消えるほど、心細いものはない。女中は闇やみの中から手探

りにやつと、洋燈ランブを探し当て、火を点じたが、ほの暗い光は、一層瑠璃子の心を滅め入らし
てしまった。

暗い燈火あかりの下に蒐あつまつている瑠璃子と女中達を、もつと脅かすように、風は空を狂い廻
り、波は断しきりなしに岸を嚙かんで殺到した。

風は少しも緩みを見せなかった。雨を交えてからは、有力な味方でもが加わったように、
益々ますます暴威を加えていた。風と雨と波とが、三方から人間の作った自然の邪魔物を打ち砕
こうとでもするように力を協あわせて、此建物を強襲した。

ガラ／＼と、何処どこかで物の碎け落ちる音がしたかと思うと、それに続いて海に面してい
る廂ひさしが吹き飛ばされた見え、ベリ／＼と云う凄すさまじい音が、家全体を震動した。今迄いままでは、
それでも、慎つつましく態度の落着を失っていなかった瑠璃子もつい度を失ったように立ち上つ
た。

「何うどしようかしら、今の裡うちに避難しなくてもいいのかしら。」

そう云う彼女の顔には、恐怖の影がアリ／＼と動いていた。人間同士の交渉では、烈女
のように、強い彼女も、自然の恐ろしい現象に対しては、女らしく弱かった。

女中達も、色を失っていた。女中は声を挙げて別荘番の老翁おやじを呼んだけれども、風雨の

音に遮^{さへぎ}られて、別荘番の家までは、届かないらしかった。

ベリく〜と云う廂の飛ぶ音は、尚^{なお}続いた。その度に、家がグラ〜と今にも吹き飛ばされそうに揺いだ。

丁度、此の時であつた。瑠璃子の心が、不安と恐怖のどん底に陥つて、藁^{わら}にでも縋^{すが}り付きたいように思っている時だつた。凄じい風雨の音にも紛れない、勇ましい自動車の警^{サイレ}笛^ンが、暗い闇を衝^ついてかすかに〜聞えて来た。

「あゝお帰りになつた！」瑠璃子は甦^{よみが}えつたように、思わず歓喜に近い声を挙げた。その声には、夫に対する妻としての信頼と愛とが籠^{こも}っていることを否定することが出来なかつた。

五

風雨の烈^{はげ}しい音にも消されずに、警^{サイレン}笛^ンの響^{たちま}は忽ちに近づいた。門内の闇^{やみ}がパツと明るく照^あられて、その光の裡^{うち}に雨が銀糸^{つら}を列ねたように降っていた。

瑠璃子と女中達二人とは、その燦^{さんぜん}然と輝く自動車の頭^{ヘッド}光^{ライト}に吸われたように、玄関

へ馳け付けた。

微醺びくんを帯びた勝平は、その赤い巨おおきい顔に、暴風雨あらしなどは、少しも心に止めていないような、悠然たる微笑を湛たたえながら、のつそりと車から降りた。

「お帰りなさいまし、まあ大変でございましたでしょうね。お道が。」

瑠璃子のそうした言葉は、平素いつものように形式丈だけのものではなく、それに相当した感情が、ピッタリと動いていた。

「なに、大したことはなかったよ。それよりもね、貴女あなたが蒼あおくなっているだろうと思ってね。此間このの大暴風雨で、みんなビク／＼している時だからね。いや、鎌倉かまくらまで一緒に乗り合あわして来た友人にね、此の暴風雨あらしじや道が大変だから、鎌倉で宿とまつて行かないかと云いわれたけれどもね。やつぱり此方こつちが心配だね。是非葉山へ行くと云つたら、冷かされたよ。美しい若い細君もろを貰もらうと、それだから困るのだと、は／＼／＼／＼。」

凄すさましい風の音、烈しい雨の音を、聞き流しながら、勝平は愉快に哄こうしやう笑した。自然の脅威を跳ね返しているような勝平の態度に接すると、瑠璃子は心強く頼もしく思わずにはいられなかった。男性の強さが、今始めて感ぜられるように思った。

「妾わたくし何うしようかと思ひましたの。廂ひさしがベリベリと吹き飛ばされるのですもの。」

瑠璃子は、まだ不安そうな眼付をしていた。

「なに、心配することはない。十月一日の暴風雨の時だって、土堤が少しばかり、崩された丈なのだ。あんな大暴風雨が、二度も三度も続けて吹くものじゃない。」

勝平は、瑠璃子が後から、着せかけた襦袢に、くるまりながら、どつかりと腰を降ろした。

が、勝平のそうした言葉を、裏切るように、風は刻々吹き募って行つた。可なり、ピツタリと閉されている雨戸迄が、今にも吹き外されそうに、バタ／＼と鳴り響いた。

「さあ！ お酒の用意をして下さらんか、こうした晩は、お酒でも飲んで、大に暴風雨と戦わなければならん、は／＼。」

勝平は、暴風雨の音に、怯えたように耳を聳てゐる瑠璃子にそう云つた。

酒盃の用意は、整つた。勝平は吹き荒ぶ暴風雨の音に、耳を傾けながら、チビリ／＼と盃を重ねていた。

「妾、本当に早く帰つて下さればいゝと思つていましたのよ。男手がないと何となく心細くつてよ。」

「は／＼、瑠璃子さんが、俺を心から待つたのは今宵が始めてだろうな、は／＼。」

勝平は機嫌よく哄笑した。

「まあ！ あんなことを、毎日心からお待ちしているじゃありませんか。」

瑠璃子は、ついそうした心こころ易やすい言葉を出すような心持ちになっていた。

「何どうだか。分りやしませんよ。老爺おやじめ、なるべく遅く帰って来ればいゝのに。こう思っているのじゃありませんか。はゝゝゝゝ。」

瑠璃子の今宵に限って、温かい態度に、勝平は心から悦えつに入っているのだった。

「それも、無理はありません。貴女あなたが内心俺わしを嫌っているのも、全く無理はありません。

当然です、当然です。俺わしも嫌きらがる貴女あなたを、何時いつまでも名ばかりの妻として、束縛そくばくしてい

たくはないのです。これが、どんな恐ろしい罪かと云うことが分っているのです。所がで

すね。初めはホンの意地から、結婚した貴女が、一旦いったん形式丈だけでも同棲どうせいして見ると、：

：一旦貴女を傍に置いて見ると、死んでも貴女を離したくないのです。いや、死んでも貴

女から離れたくないのです。」

余程酒が進んで来たと見え、勝平は管くだを捲まくようにそう云った。

六

風は益々ますます吹き荒れ雨は益々降り募っていた。が、勝平は戸外のそうした物音に、少しも気を取られないで、瑠璃子が酌ついでやった酒を、チビリ／＼と嘗なめながら、熱心に言葉を継いだ。

「まあ、簡単に云いつて見ると、スツカリ心から貴女あなたに惚ほれてしまったのです！ 俺は今年四十五ですが、此年このまで、本当に女と云うものに心を動かしたことはなかったのです。勝彦や美奈子の母などとも、たゞ、在あり来きたりの結婚で、給金の入いらない高等な女中をでも、傭やとつたように考うて、接していたのです。金が出来るのに従つて、金で自由になる女とも沢山接して見ましたが、どの女もどの女も、たゞ玩具おもちゃか何かのように、弄もてあそんでいたのに過ぎないのです。俺は女などと云うものは、酒や煙草たばこなどと同じに、我々男子の事業の疲れを慰めるために存在している者に過ぎないとまで高を括くつていたのです。所がです、俺のそうした考えは貴女に会った瞬間に、見事に打ち破られていたのです。男子の為ために作られた女でなくして、女自身のために作られた女、俺は貴女に接していると、直すぐそう云う感じが頭に浮かんだのです。男の玩具として作られた女ではなくして、男を支配するためいに作られた女、俺は貴女を、そう思っているのです。それと一緒に、今まで女に対して懐いだ

いていた侮蔑^{ぶべつ}や輕視は、貴女に對してはだん／＼無くなつて行くのです。その反對に、一種の尊敬、まあそう云つた感じが、だん／＼胸の中に萌^{きざ}して來たのです。結婚した当座は、何の此の小娘が、俺を嫌うなら嫌つて見ろ！ 今に、征服してやるから。と、こう思つていたのです。所が、今では貴女の前でなら、どんなに頭を下げて、いいと思ひ出したのです。貴女の愛情を、得るためになら、どんなに頭を下げて、いゝと思ひ始めたのです。何^どうです、瑠璃子さん！ 俺の心が少しはお分りになりますか。――

勝平は、そう云つて言葉を切つた。酔つてはいたが、その顔には、一本氣な眞面目^{まじめ}さが、アリ／＼と動いていた。こうした心の告白をするために、故意^{わざ}と酒盃^{さかずき}を重ねているようにさえ、瑠璃子に思われた。

「俺^{わし}は、世の中に金より貴いものはないと思つていました。俺は金さえあれば、どんな事でも出来ると思つていました。實際貴女を妻にすることが、出來た時でさえ、金がなければこそ、貴女のような美しい名門の子女を、自分の思ひ通^{とお}りにすることが出来るのだと思つていたのです。が、俺が貴女を、金で買うことが出來たと想^{おも}つたのは、俺の考^{かんがえ}違^{ちが}ひでした。金で俺の買得たのは、たゞ妻と云う名前^{だけ}です。貴女の身体^{からだ}をさえ、まだ自分の物に、することが出來ないで苦しんでいるのです。まして、貴女の愛情の断片^{きれはし}でも、俺の

自由にはなっていないのです。俺は貴女の俺に対する態度を見て、つく／＼悟ったのです。俺の全財産を投げ出しても、貴女の心の断片をも、買うことが出来ないと云うことを、つく／＼悟ったのです。が、そう思いながらも、俺は貴女を思い切ることが出来ないのです。俺は金で買ったものを、俺の真心で、買おうと思ひ立つたのです。いや、買うのではない、貴女の前に跪いて、買うことの出来なかったものを哀願しようとさえ思っているのです。また、そうせずにはいられないのです。先刻も申しました通り、もう一刻も貴女なしには生きられなくなつたのです。」

変に言葉までが改まつた勝平は、恋人の前に跪いている若い青年か、何かのように、激していた。彼の巨きい真赤な顔は、何処にも偽りの影がないように、真面目に緊張していた。彼は大きい眼を刮きながら、瑠璃子の顔を、じつと見詰めていた。敵意のある凝視なら、睨み返し得る瑠璃子であつたが、そうした火のような熱心の凝視には却って堪えかねたのであろう、彼女は、眩しいものを避けるように、じつと顔を俯けた。

「何うです！ 瑠璃子さん！ 俺の心を、少しは了解して下さいますか。」

勝平の声は、瑠璃子の心臓を衝くような力が籠つていた。

七

酒の力を借りながら、その本心を告白しているらしい勝平の言葉を、聴いていると、今までは猥^{ブルータル}的な、俗悪な男、精神的には救われるところのない男だと思い捨てゝいた勝平にも、人間的な善良さや弱さを、感ぜずにはいられなかった。

あれ丈^{だけ}、傲岸^{ごうがん}で黄金の万能を、主張していた男が、金で買えない物が、世の中に儼^{げん}として存在していることを、潔^{いさぎよ}く認めている。金では、人の心の愛情の断片^{かけら}をさえ、買い得ないことを告白している。彼は、今自分の非を悟つて、瑠璃子の前に平伏して彼女の愛を哀願^{もろ}している。敵は脆^{もろ}くも、降^{くだ}つたのだ。そうだ！ 敵は余りにも、脆^{もろ}くも降^{くだ}つたのだ、瑠璃子は心の裡^{うち}で思わず、そう叫ばずにはいられなかった。

「瑠璃子さん！ 俺^{わし}はお願いするのだ。俺は、俺の前非を悔^{あな}いて貴女に、お願いするのじや。貴女は、心から俺の妻になつて下さることは出来んでしょうか。これまでの偽りの結婚を、俺の真心^{きよこ}で浄めることは出来んでしょうか。俺は、この結婚を浄めるために、どんなことをしてもいい。俺の財産を、みんな投げ出してもいい。いや俺の身体^{からだ}も生命^{いのち}もみんな投げ出してもいい。俺は、貴女から、夫として信賴され愛されさえすれば、どんな犠牲

を払つてもいゝと思つてゐるのです。俺は、先刻自動車から降りて、貴女と顔を見合せた時、俺は結婚して以来初めて幸福を感じたのです。今日丈は、貴女が心から俺を迎えて呉れてゐる。貴女の笑顔が心からの笑顔だと思つと、俺は初めて結婚の幸福を感じたのです。が、それも落着いて考えて見ると、貴女が俺を喜んで迎えて呉れたのも、夫としてではない、たゞこんな恐ろしい晩に必要な男手として喜んでゐるのだと思つと、又急に情なくなるのです。俺が貴女を、賤しい手段で、妻にしたと云う罪を、俺の貴女に対する現在の真心で浄めさせて下さい！」

勝平は、酒のために、気が狂つたのではないかと思われるほどに激昂してゐた。瑠璃子は相手の激しい情熱に咽せたように何時の間にか知らず／＼、それに動かされてゐた。「瑠璃子さん、貴女も今までの事は、心から水に流して、俺の本当の妻になつて下さい。貴女が心ならずも、俺の妻になつたことは、不幸には違ひない。が、一旦妻になつた以上、貴女が肉体的には、妻でないにしろ、世間では誰も、そうは思つてゐないのです。社会的に云えば、貴女は飽くまでも、莊田勝平の妻です。貴女も、こうした羽目に陥つたことを、不幸だと諦めて、心から俺の妻になつて下さるのでしょうか。」

勝平の眼は、熱のあるように輝いてゐた。瑠璃子も、相手の熱情に、ついフラ／＼と動

かされて、思わず感激の言葉を口走ろうとした。が、その時に彼女の冷たい理性が、やつとそれを制した。

『相手が余りに脆いのではない！ お前の方が余りに脆いのではないか。お前は、最初のあれほど烈しい決心を忘れたのか。正義のために、私憤ではなくして、むしろ公憤のために、相手を倒そうと云う強い決心を忘れたのか。勝平の口先丈の懺悔に動かされて、余りに脆くお前の決心を捨て、しまうのか。お前は勝平の態度を疑わないのか。彼は、お前に降伏したような様子を見せながら、お前を肉体的に、征服しようとしているのだ。兜を脱いだような風を装いながら、お前に飛び付こうとしているのだ。お前が、勝平の告白に感激して、お前の手を与えて御覧！ 彼は、その手を戴くような風をしながら、何時の間にかお前を蹂み躪つてしまうのだ。お前は敵の暴力と戦うばかりでなく、敵の甘言とも戦わなければならぬ。敵は、お前の誇に媚びながら、逆にお前を征服しようとしているのだ。余りに脆いのは敵でなくしてお前だ。』

瑠璃子の冷たい理性は、覚めながらそう叫んだ。彼女は、ハッと眼が覚めたように、居ずまいを正しながら云った。

「あら、あんな事を仰しやつて？ 最初から、本当の妻ですわ。心からの妻ですわ。」

そう云いながら、彼女は冷たい、然しながら、美しい笑顔を見せた。

あらし
嵐を衝いて

一

勝平は、瑠璃子の言葉だけは、打ち解けていても、笑顔は氷のように冷たいのを見ると、絶望したように云った。

「あゝ貴女は、何うしても俺を理解して下さらぬのじや。俺の最初の罪を何うしても許して下さらぬのじや。貴女は、俺と勝彦とを、操って俺に、畜生道の苦しみを見せようとしているのじや。よい、それならよい！ それならそれでよい！ 貴女が、何時までも俺を敵と見るのなら、俺も、俺も敵になつていてもいい。俺が貴女の前に、跪いてこれほどお願いしているのに、貴女は俺の真心を受け容れて下さらんのじやから。」

もう先刻から、一升以上も飲み乾している勝平は、濁った眸を見据えながら、威丈高に

瑠璃子にのしかゝるような態度を見せた。相手が下手から出ると、ついホロリとしてしまふ瑠璃子であつたが相手が正面からかゝつて呉れゝば、一足だつて踏み退く彼女ではなかつた。

相手の態度が急変すると、瑠璃子は先刻の勝平の神妙な態度は、たゞ自分を説き落すため、偽りの手段であつたことが、ハッキリしたように思つた。

「あら、あんな事を仰しやつて、貴君の真心は、初から分つてゐるじやありませんか。」
瑠璃子は、相手の脅を軽く受け流すように、嫣然と笑つた。

「あゝ、貴女のその笑顔じや。それは俺を悩ますと同時に、嘲けり恥しめ罵しつてゐるのじや。あゝ俺は貴女のその笑顔に堪えない。俺は貴女のその笑顔を、初はどんなに楽しんでゐたか分らないが、だん／＼見てゐると、貴女のその美しい笑顔の皮一つ下には、俺に對する憎悪と嘲笑とが、一杯に充ちてゐるのだ。貴女の笑顔ほど皮肉なものはない。貴女の笑顔ほど、俺の心を突き刺すものはない。貴女は、その笑顔で俺を悩まし殺そうとしているのだ。いや、俺ばかりじやない！あの馬鹿の勝彦をまで悩ましておるのじや。」
勝平の態度には、愈々乱酔の萌が見えていた。彼の眸は、怪しい輝きを帯び、狂人か何かのように瑠璃子をジロ／＼と見詰めていた。

風も雨も、海岸の此^{この}一角に、その全力を蒐^{あつ}めたかのように、益々^{ますます}吹き荒^{すさ}び降り増^{まさ}った。瑠璃子は人と人との必死の戦いのために、そうした暴風雨の音をも、聞き流すことが出来た。

「疑心暗鬼と云うことがございますね。貴君のは、それですよ。妾^{わたし}を疑ってかかるから、妾の笑顔迄^{まで}が、夜叉^{やしや}の面か何かのように見えるのでございますよ。」

そう云いながらも、瑠璃子はその美しい冷たい笑いを絶たなかった。勝平は、その巨^{おお}きい身体をのたうつようにして云った。

「貴女は、俺を飽くまでも、馬鹿にしておられるのじゃ。貴女は人間としての俺を信用しておられんのじゃ。貴女は、俺の人格を信じておられないのじゃ。俺に人間らしい心のあることを信じておられないのじゃ。よし、貴女が俺を人間として扱って下さらないなら、俺は獣^{けだもの}として、貴女に向って行くのじゃ。俺は獣のように、貴女に迫って行くのじゃ。」

勝平の眸は燃ゆるように輝やいた。

「そうだ！ 俺は獣として貴女に迫って行く外はない！」

そう云ったかと思うと、勝平は羆^{ひぐま}が人間を襲う時のように、のツと立ち上った。

瑠璃子も弾^{はじ}かれたように、立ち上った。

立ち上った勝平は、フラ／＼と蹠^{よろ}めいてやつと踏み堪^{こた}えた。彼はその凄^{すさま}じい眸^まを、真中に据えながら、瑠璃子の方へジリ／＼と迫^{せま}つて来た。

かよい瑠璃子の顔は、真蒼^{まつさお}だった。身体はかすかに顫^{ふる}えていたけれども、怯^{おそ}びれた所は少しもなかった。その美しい眉宇^{びう}は、きつと、緊^ひきしまつて、許すまじき色が、アリ／＼と動いた。

丁度、その時だった。風に煽^{あお}られた大雨が一頻^{ひとしき}り沛然^{はいぜん}として降り注いで来た。

二

荒るゝまゝに、夜は十二時に近かった。

台所にいる筈^{はず}の女中達は、眠りこけてでもいるのだろう、話声一つ聞えて来なかった。ただ吹き暴^あるゝ大風雨の裡^{うち}に勝平と瑠璃子と丈^{だけ}が、取り残されたように、睨^{にら}みながら、相對していた。

空に風と雨とが、戦っているように、地に彼等は戦っているのだった。瑠璃子は戦うべき力もなかった。武器も持つてはいなかった。たゞ彼女の態度に備る天性の美しい威厳一

つが、勝平の獸的な攻撃を躊躇ちゆうちよさせていた。が、その躊躇も、永く続く筈はなかった。勝平の眼が、段々狂暴な色を帯びると共に、彼は勢猛いきまうに瑠璃子に迫つて来た。彼女は、相手の激しい勢に圧おされるようにジリ／＼と後退あとずさりをせずにはいられなかった。

勝平の今少し前の懺悔ざんげや告白が、こうした態度に出るまでの径路であつた——一旦いったん下手から説いて見て、それで行かなければ腕力に訴える——かと思うと、勝平に対して、懐いだいていた一時の好感は、煙のようになくなって、たゞ苦い苦い憎悪ぞうおの滓丈かすが、残っていた。指一つ触れさせてなるものか、そうした堅い決意が、彼女の繊細な心臓を、鉄のように堅くしていた。

が、彼女の精神的な強さも、勝平の肉体の上の優越に打ち勝つことが出来なかった。何時いつの間にか追い詰められたように、部屋の方に、海に面した硝子戸ガラスドの方へ、逃るゝ道のない硝子戸の方へ、瑠璃子は押し付けられている自分を見出みいだした。

其処そこで、追い詰められた牝鹿めしかと獅子ししとのように、二人は暫しばらくは相対していた。

暴風雨は、少しも勢いを減じていなかった。岸を噛かんで殺到する波濤はとうの響が、前よりももつと恐ろしく聞えて来た。が、相争っている二人の耳には、波の音も風の音も聞えては来なかった。

「何をなさるのです。貴君は？」

勝平が、その堅肥りの巨い手を差し出そうとした時、瑠璃子は初めて声を出して叱した。

「何をしようと、俺の勝手だ。夫が妻を、生そうが殺そうが。」

勝平は、そう云いながら、再び猿臂を延して、瑠璃子の柔かな、やさ肩を掴もうとしたが、軽捷な彼女に、ひらりと身体を避けられると、酒に酔った足元は、ふら／＼と二歩躊めて、のめりそうになった。

「恥をお知りなさい！ 恥を！ 妻ではございまして奴隷ではありませんよ。暴力を振うなんて。」

彼女は、汚れた者を叱するように、吐き捨てるように云った。彼女の声は、追にわな／＼と顫えていた。

「なに！ 恥を！ 恥も何もあるものか、俺はもう獣になり切っているのじゃ。」

勝平は、そう云ったかと思うと前よりもっと烈しい勢で瑠璃子に迫った。こうしたあさましい人間の争いを、讃美するかのように、風は空中に凄じい歓声を挙げ続けている。

瑠璃子は、ふとその時護り刀のことを思い出した。こうした非常な場合には、それを抜

き放つて自分を護る外はない。が、そう思い付いたものの、それはトランクの底深く、蔵しまつてあるので、急場の今は、何の援たすけにもならなかった。

彼女は、最後の手段として、声を振り搾しぼつて女中を呼んだ。が、彼女の呼び声は、風雨の音に消されてしまつて、台所の方からは、物音も聞えて来なかった。

瑠璃子が、愈いよいよ窮したのを見ると、勝平は愈威丈高になった。彼は、獣そのまゝの形相を現していた。ほの暗い洋燈ランブの光で、眼が物もの凄すごく光った。

「あれ！」と、瑠璃子が身を避けようとした時、勝平の強い腕は、彼女の弱い二の腕を、グツと握り占めていた。

「何をするのです。お放しなさい！」

彼女は必死になつて、振りほどこうとした。が、強い把握はあくは、容易に解けそうもなかった。

「何を！ 何をするのです！」

瑠璃子は、死者狂いになつて突き放した。が、突き放された勝平は、前よりも二倍の狂暴さで、再び瑠璃子に飛びかゝつた。

その時だった。瑠璃子の背後うしろの雨戸と硝子戸とが、バタ／＼と音を立てゝ外れると、恐

ろしい一陣の風が、サツと室の中へ吹き込んだ。

洋燈は忽ちに消えてしまった。が、灯の消える刹那だった。風と共に飛び込んで来た一個の黒影が今瑠璃子に飛びかゝろうとする勝平に、横合からどうと組み付くのが、灯の消ゆるたゆたいの瞬間に瞥見された。

三

硝子戸の外れるのと共に、室の中へ吹き入った風と雨とは、忽ちに、二十畳に近い大広間に渦巻いた。床の間の掛軸が、バラ／＼と吹き捲られて、跳ね落ちると、ガタ／＼と烈しい音がして、鴨居の額が落ちる、六曲の金屏風が吹き倒される。一旦吹き込んだ風は逃れ口がないために、室内の闇を縦横に馳け廻って、何時までも何時までも狂奔した。而も、此の風雨の暴れ狂う漆黒の闇の中に、勝平は飛び込んだ黒影と、必死の格闘を続けていたのだ。

「貴様は誰だ！ 誰だ！」

不意の襲撃に驚いたらしく勝平は、狼狽して怒号した。が、相手は黙々として返事を

しなかった。

肉と肉とが、相搏^{あいう}つ音が、風雨の音にも紛^{まぎ}れず、凄^{すさま}しい音を立てた。身体と身体とが、打ち合う音、筋肉と筋肉とが、軋^{きし}み合う音、それは風雨の争いにも、負けないほどに恐ろしかった。

其^その中にどうと家中を揺がせる地響を打って、一方が投げ出される音が聞えた、それに続いて転がり合いながら、格闘する凄^ししい音が続いた。

「強盗だ！ 強盗だ！ 早く老爺^{じい}を呼んで来い！ 瑠璃子！ 瑠璃子！」

戦いが不利と見えて、勝平の声は悲鳴に近かった。

瑠璃子は、物事の烈しい変化に、気を奪^とられたように、ボンヤリ闇の中に立っていた。身に迫った危険を、思いがけなく脱し得た安心と、新しく突発した危険に対する不安とで、心が一種不思議な動乱の中に在った。

勝平の悲鳴を聴いていると、助けてやらねばならぬと思いながら、一種の小気味よさを感じずにはいられなかった。自分に獣^べの如く迫って来た彼が、突然の侵入者に依^よつて、脆^{もろ}くも取って伏せられている。そう思うと瑠璃子の動乱した胸にも皮肉な快感が、ぞくぞくともみ上げて来る。

格闘は尚なほ続いた。組み合いながら、座敷中をのたくっている恐ろしい物音が絶えなかつた。

「瑠璃子！ 瑠璃子！ 早く、早く。」

援たすけを呼ぶ勝平の声は、だん／＼苦しうに喘あえいで来た。

瑠璃子の心の裡うちに、もつと勝平を苦しませてやれ、こうした不意の出来事に依つて、もつと彼を懲こらしてやれと云う、勝平に対する憎悪ぞうおの心持と、平生の憎悪は兎とに角かく、不時の災難に苦しんでいる相手を、援けてやろうと云う人間的な心持とが、相争つた。

其裡に、ゼイ／＼と息も絶えそうに、喘ぎ始めた勝平の声が、聞え出した。

「苦しい！ 苦しい！ 人殺し！ 人殺し！」

勝平は、到頭最後の悲鳴を出してしまった。そうした声を聞くと、瑠璃子の心にも、勝平に対する憐憫あわれみが湧わかずにはいなかった。彼女は、始めて我に返つたように、台所の方に駆け出しながら、大声を出した。

「老爺じいや！ 老爺！ 早く来ておくれ！ 泥棒！ 泥棒！」

瑠璃子の声も、スツカリ上ずつてしまつていた。が、そう叫んだ時、彼女の頭の中に突然恋人の直也なおやの事が閃ひらめいた。彼は、勝平を射うとうとして誤つて、美奈子みなこを傷つけた為ため、危

く罪人となろうとしたのを、勝平に対する父の子爵ししやくの哀訴のために、告訴されることを免れた。が、彼は敵かたきの勝平からそうした恩恵を受けたことを、死ぬほど恥しがって、学業を捨ててしまつて、遠縁の親戚しんせきが経営しているボルネオの護謨園ゴムに走ろうとしている。瑠璃子は、そんな噂うわさを、耳にはさんでいる。が、あの多血性な恋人は、そうした逃避的な態度を、捨てゝ、その恋の敵を倒すために、再び風雨の夜に乗じて迫つたのであろうか。否、自分いなに訣別けつべつするため、外よそながら自分を見ようとした時、偶然自分が危難に遭遇したため、前後の思慮もなく飛び込んだのではないだろうか。

強盗！ 泥棒！ 強盗や泥棒が、あゝした襲撃なを為すだろうか。もし、あれが直也だつたら、縦令たとい、勝平を倒したにしろ、彼の一生はムザ／＼と埋れてしまうのだ。尤ももつと、今でも自分のために、半分埋れかけているのだが。

そう思うと、瑠璃子は老爺を呼ぶ声も出なくなつてしまつて、再び其処そこへ立ち竦すくんだ。が、瑠璃子の声に騒ぎ立つた女中は、声を振り搾しぼつて老爺を呼んだ。

四

叫び立てる女中達の声に、別荘番の老爺は驚いて馳け付けて来た。強盗だと聴くと、いきなり取って返して、古い獵銃用の村田銃を持って来た。彼は手早く台所の棚から、カンテラを取り出すと、取り乱す容子もなく、灯を点じて、戸外同様に風雨の暴れ狂う広間の方へと、勇ましく立ち向った。もう六十を越した老人ではあったが、根が漁師育ちである丈けに、胆力はガツシリと据つていた。

瑠璃子は、勝平と相搏つている相手が、もしや恋人の直也でありはしないかと思うと、此の一徹の老人が、一気に銃口を向けやしないかと思う心配で、心が怪しく擾れた。それかと云つて、強盗であるかも知れぬ闖入者を、庇うような口は利けなかった。台所に顫えている女中を後に残しながら、固唾を飲みながら、老人の後から、随いて行つた。

座敷は、風雨で滅茶苦茶になつていた。室の中に渦巻く風のために、硝子戸が三枚も外れていた。其処から吹き入る雨のために、水を流したように、濡れた畳が、カンテラの光に物凄く映つていた。今にも、天井が吹き抜かれるように、バリ／＼と恐ろしい音を立て、鳴り続けた。

老人は、カンテラの光を翳しながら、

「旦那！ 旦那！ 喜太郎が参りましたぞ！」と次ぎの間から、先ず大声で怒鳴った。

が、勝平はそれに対して、何とも答えなかった。たゞ勝平が発しているらしい低いうめき声が聞える丈だった。

「旦那！ 旦那！ しつかりなさい！」

そう云いながら、喜太郎は暗い座敷の中を、カンテラで照しながら、駈^かけ込んだ。その光で、ほの暗く照し出された大広間の中央^{まんなか}に、勝平は仰向に打ち倒れながら、苦しうにうめいているのだった。

「旦那！ 旦那！ しつかりなさい！ 喜太郎が参りましたぞ！ 泥棒は何うしただ！」

喜太郎は、勝平の耳許^{みみもと}で勢よく叫んだ。が、勝平はたゞ低く、喘息^{ぜんそく}病みか何かのよう^どに咽喉のところで、低くうめく丈だった。

「旦那！ 怪我^{けが}をしたか。何処^{どこ}だ！ 何処だ！」

老人は、狼狽^{ろうばい}しながら、その太い堅い手で、勝平の身体を撫^なで廻した。が、何処にも傷らしい傷はなかった。が、それにも拘^{かか}わらず、半眼に開かれている勝平の眼は、白く釣り上がっている。

「あゝ！ こりやいけねえ。奥様、こりやいけねえぞ。」

そう云いながら、老人は勝平の身体を半抱^{なかば}き起すようにした。が、巨^{おお}きい身体は少しの

弾力もなく石の塊か何かのように重かった。

瑠璃子は、追に驚いた。

「もし、貴君！　もし貴君！　貴君！」

彼女は、名ばかりの夫の胸に、縋り付くようにして叫んだ。が、勝平の身体に残っている生気は、こうしている間にも、だん／＼消えて行くように思われた。

おず／＼顫えながら、座敷へ近づいて来た女中を顧みながら、瑠璃子はハッキリと少しも取り擾さない口調で云った。

「ブランデーの壺を大急ぎで持つておいで。それから、吉川様へ直ぐお出下さるるように電話をおかけなさい！　直ぐ！　主人が危篤でございますからと。」

女中の一人は、直ぐブランデーの壺を持つて来た。瑠璃子は、それをコップに酌ぐと、甲斐甲斐しく勝平の口を割って、口中へ注ぎ入れた。

勝平の蒼ざめていた顔が、心持赤く興奮するように見えた。彼の釣り上った眼が、ほんの僅かばかり、人間の眼らしい光を恢復したように見えた。

「旦那！　旦那！　相手は何うしただ。強盗ですか。何方へ逃げました。」

老人の別荘番は、主人の敵を取りたいような意気込で訊いた。

勝平はその大きい声が、消えかゝる聴覚に聞えたのだろう、口をモグ／＼させ初めた。「何でございますか。何でございますか。」

瑠璃子も、勝平を励ますために、そう叫ばずにはいられなかった。

その時に、室の薄暗い一隅で、何者とも知れずカラ／＼と悪魔の嗤うように声高く笑った。

五

カンテラの光の届かない部屋の一隅から、急にカラ／＼と頓狂に笑い出す声を聴くと、元気のある度胸の据った喜太郎迄が、ハツと色を変えた。村田銃の方へ差し延した左の手が、二三度銃身を掴み損っていた。勝気な瑠璃子の襟元をも、気味の悪い冷たさが、ぞつと襲つて来た。

「誰だ！ 誰だ！」

喜太郎は狼狽しながら、しわがれた声で闇の中の見知らぬ人間を誰何した。が、相手はまだ笑い声を収めたまゝ、じつとしている。

「誰だ！ 誰だ！ 黙っていると、射ち殺すぞ！」

相手が黙っているの、勢いを得た喜太郎は、村田銃を取り上げながら、その方へ差し向けた。

暗い片隅に蹲うずくまっている人間の姿が、差し向けられたカンテラの灯で、朧おぼろげながら判わかつて来た。

「誰だ！ 誰だ！ 出て来い！ 出て来い！ 出て来ないと射つぞ！」

喜太郎は、益ますます々勢を得ながらそれでも飛び込んで行くほどの勇気もないと見えて、間へだを隔へだてながら、叫んでいた。

相手が、割に落着いているところを見ると、それが強盗でないことは、判っていた。が、不意に耳を襲った頓狂な笑い声に依よつては、それが何なん人であるかは、瑠璃子にも判らなかつた。彼女は、じつと眸ひとみを凝こらして、それが自分の怖おそれている如ごとく、恋人の直也ではありはしないかと、闇の中を見詰めていた。

丁度その時に、喜太郎の大きい怒声に依よつて、朧気な意識を恢復したらしい勝平は、低くうめくように云いった。

「射つな、射つたらいけないぞ！」

それは、一生懸命な必死な言葉だった。そう云ってしまうと、勝平はまたグタリと死んだようになってしまった。

主人の言葉を聴くと、喜太郎は何かを悟つたように鉄砲を、投げ出すと、じり／＼と見知らぬ男の方に近づいた。男は、喜太郎が近づくと、だん／＼蹲まったまゝで、身を退かしていたが、壁の所まで、追い詰められると、矢庭に、スツクと立ち上った。瑠璃子は、また恐ろしい格闘の光景を想像した。が、瑠璃子の想像は忽ち裏切られた。

「やあ！ 若旦那じゃねえか！」

喜太郎は、驚駭とも何とも付かない、調子外れの声を出した。

瑠璃子も、その刹那弾かれたように立ち上った。

「奥様！ 若旦那だ！ 若旦那だ。」

喜太郎は、意外なる発見に、狂ったように叫び続けた。瑠璃子も思わず、瀕死の勝平の傍を離れると、二人が突つ立ちながら、相對している方へ近づいた。

いかにも、その男は勝彦だった。何時も見馴れている大島の不斷着が、雨でズブ濡れに濡れている。髪の毛も、雨を浴びて黒く凄く光っている。日頃は、無気味な顔ではあるが、何となく温和であるのが、今宵は殺気を帯びている。それでも、瑠璃子の顔を見ると、

少し顔を赤めながら、ニタリと笑った。

暫らくの間は、瑠璃子も言葉が出なかった。が、凡ては明かだった。東京の家に監禁せられていた彼は、瑠璃子を慕うの余り、監禁を破つて、東京から葉山まで、風雨を衝いて、やつて来たのに違いなかった。

「お父様をあんなにしたのは、貴君でしたか。」

瑠璃子は、可なり厳肅な態度でそう訊いた。

勝彦は、黙つて肯いた。

「東京から、一人で来たのですか。」

勝彦は黙つて肯いた。

「汽車に乗ったのですか。」

勝彦は、又黙つて肯いた。

「お父様を、何うしてあんなにしたのです。何うしてあんなにしたのです。」

瑠璃子に、そう問い詰められると、勝彦は顔を赤めながら、モジ／＼していた。もし勝彦が、聡明な青年であつたならば、簡単に率直に、しかも貴夫人を救った騎士のように勇ましく、

『貴女を救うために。』と答え得たのであるが。

六

瑠璃子から、何と訊かれても、勝彦は何とも返事はしないで、たゞニタリ／＼と笑い続けている丈だった。

老人の喜太郎は、張り詰めていた勇気が、急に抜け出してしまったように云った。

「仕様のない若旦那だ。こんな晩に東京から、飛び出して来て、旦那をとつちめるなんて、理窟のねえ事をするのだから、始末に了えねえや。奥様！　こんな人に介意っているよりか旦那の容体が大事だ！」

喜太郎は、勝彦を囁んで捨てるように非難しながら、座敷の真中に、生死も判らず横わり続けている勝平の方へ行つた。

が、瑠璃子は喜太郎のように心から勝彦を、非難する気には、なれなかった。口では勝彦を咎めるようなことを云いながら、心の中では此の勇敢な救い主に、一味温かい感謝の心を持たずにはいられなかった。

丁度、その時に、勝平のうめき声が、急に高くなつた。瑠璃子は思わず、その方に引き付けられた。

彼の顔面の筋肉が、頻りに痙攣し、太い巨きい四肢は、最後のあり丈の力を籠めたように、烈しく畳の上にのたうつた。

「水！ 水！」

勝平は、苦しそうな呻き声を洩した。

女中が、転がるように持つて来た水を、コップのまゝ口へ注ごうとしたが、思い通にはならないらしい口辺の筋肉は、当がわれたコップの水を、咽喉の辺から胸にかけて滾してしまつた。瑠璃子は、それを見ると、コップの水を一息飲みながら、口移しに勝平の口中へ注いでやつた。名ばかりではあるが、妻としての情であつた。

水に依つて、湿された勝平の咽喉は、初めてハッキリした苦悶の言葉を発した。

「あゝ苦しい。胸が苦しい。切ない。」

彼は、そう叫びながら、心臓の辺を幾度も掻きむしつた。

「直ぐ医者がかかります。もう少しの御辛抱です。」

瑠璃子も、才口くしながら、そう答えた。瑠璃子の言葉が、耳に通じたのだろう。彼

は、空虚な視線を妻の方に差し向けながら、

「瑠璃子さん、俺が悪かった。みんな、俺が悪かった。許して下さい！」

彼は、身体中に残った精力を蒐めながら、やつと切々に云った。つい一時間前の告白を疑った瑠璃子にも、男子のこうした瀕死の言葉は疑えなかった。瑠璃子の冷たく閉じた心臓にも、それが針のように刺し貫いた。

「あゝ苦しい。切ない！ 心臓が裂けそうだ！」

勝平は、心臓を両手で抱くようにしながら、畳の上を、二三回転げ廻った。

「美奈子！ 美奈子はいないか！」

彼は、突如苦しうに、半身を起しながら、座敷中を見廻した。併し美奈子が其処にいる訳はなかった。二三秒間身体を支え得た丈で、またどうと後へ倒れた。

「美奈子さんも直ぐ来ます。電話で呼びますから。」

瑠璃子は、耳許に口を寄せながら、そう云った。

「あゝ苦しい！ もういけない！ 苦しい！ 瑠璃子さん！ 頼みます、美奈子と勝彦のこと。貴女は、俺を憎んでいても、子供達は憎みはしないでしよう。貴女を頼むより外はない！ 俺の罪を許して子供達を見てやって下さい！ 頼みます！ 勝彦！ 勝彦！」

彼は、そう云いながら、再び身体を起そうとした。愚かなる子に、最後の言葉をかけようとしたのであろう。が、愚なる子は、父の臨終の苦しみを外に、以前のまゝに、ケロリとして立つたまゝ、此場の異常な光景を、ボンヤリと凝視している丈であつた。

「あゝ、苦しい！ 切ない！」

勝平は最後の苦痛に入つたように、何物かを掴もうとして、二三度虚空を掴んだ。瑠璃子は、その時始めて心から、夫のために、その白い二つの手を差し延べた。勝平は、瑠璃子の白い腕に触れるとそれを生命の最後の力で握りしめながら、また差し延べられた手に、瑠璃子からの宥を感じながら、妻からの情を感じながら、最後の呼吸を引き取つてしまつたのである。

七

勝平の最後の息が絶えようとしている時に、医師がやって来た。レインコートの下へまで、激しい雨が浸み入つたと見え、洋服の所々から、雫がタラ／＼と落ちていた。

「車で来ようと思つたのですが、家を二間ばかり離れると、直ぐ吹き倒されそうになりま

したから、徒歩で来ました。風が北へ廻ったようですから、もう大丈夫です。まさか、先度のようなことはありませんでしょう。」

医師は、^{さすが}遠に職業的な落着を見せながら、女中達の出迎えを受けて、座敷へ通つて来た。「お電話じや十分判り^{わか}りませんでしたでしたが、何^どうなさったのです。強盗と組打ちをなさったと云^いうのは本当ですか。」

医師は、横わっている勝平の傍近く、膝^{いざ}行り寄りながら、瑠璃子にそう訊^きいた。瑠璃子は、遠に落着きを失わなかった。

「いゝえ！ 女中が狼狽^{うろた}えて、そんなことを申したのでございましょう。強盗などは嘘^{うそ}でございます。お恥かしいことでございますが、つい息子と……」

そう云つたものの、後は続け得なかった。医師は直ぐその場の事情を呑み込んだように、勝平の身体に手をやって、一^{ひと}と^とり^あら^た通^と検^{けん}めた。

「何^{どこ}処もお負^け傷はないのですね。」

「はい！ 負傷はないようでございます。」瑠璃子は静かに答えた。

「御心配はありません。何処か打ち所が悪くつて氣絶をなさったのです。」

医師は事もなげにそう云いながら、その夜目にも白い手を脈に触れた。五秒十秒、医師

はじつと耳を傾けていた。それと同時に、彼の眸ひとみに、勝平の蒼あおざめて行く顔色が映つたのだろう。彼は、急に狼狽ろうばいしたように前言を打ち消した。

「あゝこりやいけない！」

そう云いながら、彼は手早く聴診器ちようしんきを、靴かばんの中から、引きずり出しながら、勝平の肥ふとり切つた胸の中の心臓を、探るように、幾度もく当がった。

「あゝこりやいけない！」

彼は再び絶望したような声を出した。

「いけませんでございましょうか。」

そう訊いた瑠璃子の声にも、深い憂慮うれいが含まれていた。

「こりやいけない！ 心臓麻痺まひらしいです。何時いつか診察したときにも、よく御注意して置いた筈はずですが、可なり酷い脂肪心だから、よく御注意なさらないと、直ぐ心臓麻痺を起し易やすいと、幾度も云つた筈ですが。喧嘩けんかだとか格闘だとか、興奮するようなことは、一切してはならないと、注意して置いたのですがね。」

医師は、いかにも、自分の与えた注意が守られなかったのが、遺憾いかんに堪たえないように、耳は聴診器に当がいながら、幾度も繰り返した。

「心臓の周囲に、脂肪が溜ると、非常に心臓が弱くなってしまうのです。火事の時などに、駈け出した丈で、倒れてしまう人があるのです。それに酒を召し上っていたのですね。酒を飲んでいる上に、烈しい格闘をやつちや堪りません。お子さんとなら、また何だつて早くお止めにならなかつたのです。」

そう云われると、瑠璃子の良心は、グイと何かで突き刺されるように感じた。

「もう駄目だとは思いますが、諦めのために、カンフル注射をやつて見ましょう。」

医師は、手早くその用意をしようとして、今肉体を去ろうとして、たゆとうている魂を、呼び返すために、巧みに注射針を操つて、一筒のカンフルを体内に注いだ。

医師は、注射の反応を待ちながらも、二三度人工呼吸を試みた、が、勝平の身体は、刻一刻、人間特有の温みと生氣とを失いつゝあつた。その巨きい顔に、死相がアリ／＼と刻まれていた。

「お気の毒ですが、もう何とも仕方がありません。」

医師は、死に対する人間の無力を現すように、悄然と最後の宣告を下した。

戦は終わった。不意に突然に意外に、敵は今彼女の眼前に、何の力もなく何の意地もなく土塊つちくれの如ごとくに横わっている。

彼女は見事に勝った。勝ったのに違いなかった。傲岸ごうがんな、金の力に依よって、人間の道を蔑なみしようとした相手は倒れている。そうだ！ 勝利は明かだ。

が、勝平の死顔をじつと見詰めている時に、彼女の心に湧わいて来たものは、勝の欣よろこびではなくしてむしろ勝の悲しみだった。勝利の悲哀だった。確に勝っている。が、勝平の肉体に勝った如く、彼の精神にも勝ち得ただろうか。勝平は、その瀕死ひんしの刹那せつなに於おいて、精神的にも瑠璃子に破られていただろうか。

否いな！ 否！ 瑠璃子自身の良心が、それを否定している。愈々いよいよ、死が迫って来た時の

勝平の心は、彼の一生すべの凡すべての罪惡を償つくい得るほどに、美しく輝いていたではないか。

彼は、自分の容ゆるしを瑠璃子に乞こうた上、二人の愛児の行末を、瑠璃子に頼たのんでいる。彼は名ばかりの妻から、夫として堪たえがたき反抗を受けながら、尚なお彼女に美しき信頼を置くとしてゐる。

それよりも、もつと瑠璃子の心を穿うつたものは、彼が臨終の時に示した子供に対する、

綿々たる愛だった。格闘の相手が——従つて彼の死の原因が——勝彦であることを知らないが、此の愚なる子の行末を、苦しき臨終の刹那に氣遣つてゐる。彼の人間らしい心は、その死床に於て、燦然として輝いたではないか。

彼を敵として結婚し、結婚してから、彼に心身を許さないことに依つて、彼に悶々（もんもん）の悩みを嘗めさせ、それが半ば偶然であるとは云え、勝彦を操ることに依つて、畜生道の苦しみを味わせた自分を死の刹那に於て心から信頼している。そうした言葉を聴いたとき、瑠璃子の良心は、可なり深い痛手を負わずにはいらなかった。

悪魔だと思つて刺し殺したものは、意外にも人間の相を現している。が、刺し殺した瑠璃子自身は、刺し殺す徑路（けいろ）に於て、刺し殺した結果に於て、悪魔に近いものになっている。自分の一生を犠牲にして、倒したものは、意外にも倒し甲斐（がい）のないものだった。恋人を捨て、処女としての誇を捨て、世の悪評を買いながら、全力を尽くして、戦つた戦いは、戦い栄（ばえ）のしない無名の戦（いくさ）だった。

負けた勝平は、負けながら、その死床に人間として救われている。が、見事に勝つた瑠璃子は、救われなかった。

自分の一生を賭（と）してかゝつた仕事、空虚な幻影であることが、分つた時ほど、人間の

心が弛緩し墮落することはない。

彼女の心は、その時以来別人のように荒んだ。清浄なる処女時代に立ち帰ることは、その肉体は許しても、心が許さなかった。敵と戦うために、自分自身心に塗った毒は、いつの間にか、心の中深く浸み入って消えなかった。

その上に、もっと悪いことには、名ばかりの妻として、擅にした物質上の栄華が、何時の間にか、彼女の心に魅力を持ち始めていた。

彼女は、荒んだ心と、処女としての新鮮さと、未亡人としての妖味とを兼ね備えた美しさ、その美を飾るあらゆる自由とを以て、何時となく、世間のあらゆる男性の間に、孔雀の如く、その双翼を拡げていた。

怪頭醜貌の女怪ゴルゴンは、見る人をして悉く石に化せしめたと希臘神話は伝えられている。

黒髪皎齒清麗真珠の如く、艷容人魚の如き瑠璃子は、その聡明なる機智と、その奔放自由なる所作とを以て、彼女を見、彼女に近づくものを、果して何物に化せしめるであらうか。

魅惑

一

奇禍のために死んだ青年の手記を見た後も、美しき瑠璃子夫人は、尙信一郎の心に、一つの謎として止まっていた。手記に依れば、青年を翻弄し、彼をして、形は奇禍であるが、心持の上では、自殺を遂げしめた彼女なる女性が、瑠璃子夫人であるようにも思われた。が、夫人その人は、信一郎の目前で、青年の最後の怨みが籠っている筈の、時計の持主であることを否定していた。

信一郎は、夫人の白いしなやかな手で、軽く五里霧中の裡へ、突き放されたように思った。血腥い青木淳の死と、美しい夫人とを、不思議な糸が、結び付けて、その周囲を、神秘的な霧が幾重にも閉ざしている。その霧の中に、チラ／＼と時折、瞥見するものは、半面紫色になった青年の死顔と、艶然たる微笑を含んだ夫人の咬玉の如き美観とであった。

青年から、瀕死の声で、返すことを頼まれた時計は、——青年の怨みを籠めて、返さなければならぬ時計は、あやふやな口実のもとに、謎の夫人の手に、手軽に手渡されている。信一郎は、死んだ青年に対する責任感からも、此の謎を一通は解かねばならぬと思つた。時計が、その真の持主に、青年の望んだ通の意味で、返されることの為に、出来る丈は尽さねばならぬことを感じた。

が、その謎を解くべき、唯一の手がかりなる時計は、既に夫人の手に渡っている。たゞ、その受取のように、夫人から贈られた慈善音楽会の一葉の入場券が、信一郎の紙入に、何の不思議もなく残っている丈である。

が、此の何の奇もない入場券と、『是非お出下さいませ。その節お目にかゝりますから。』と云う夫人の言葉とが、今の場合夫人に近づく、従つて夫人の謎を解くべき唯一の心細い頼りない手がかりだった。夫人と信一郎とを結び付けている細い蜘蛛の糸のような、継ぎであつた。尤も、どんなに細くとも、蜘蛛の糸には、それ相応の粘着力はあるものだが。

音楽会の期日は、六月の最後の日曜だった。その日の朝までも、信一郎の心には、妙に躊躇する心持もあつた。お前は、青年に対する責任感からだ、お前の行為を解釈し

ているが、本当は一度言葉を交えた瑠璃子夫人の美貌びぼうに惹ひき付けられているのではないか。彼の心の裡で、反噬はんぜいするそうした叫びもあった。その上、今日までは、こうした会合へ出るときは、屹度きつと新婚の静子を伴わないことはなかった。が、今日は妻を伴うことは、考えられないことだった。会場で出来る丈、夫人に接近して夫人を知ろうとするためには、妻を同伴することは、足手纏まといだった。

昼食を済ましてからも、信一郎は音楽会に行くことを、妻に打ち明けかねた。が、外出をするためには、着替をすることが、必要だった。

「一寸散歩に。」と云ってブラリと、着流しのまま、外出する訳には行かなかった。

「一寸音楽会に行つて来るよ。着物を出しておくれ。」

そうした言葉が、何うしても気軽にしなかつた。それは、何でもない言葉だった。が、信一郎に取つては、妻に対して吐かねばならぬ最初の冷たい言葉だった。

「音楽会に行くから、お前も支度をおしなさい。」

そうした言葉丈しか、聞かなかつた静子には、それが可なり冷たく響くことは、信一郎には余りによく判わかつていた。

彼は、ぼんやり縁側に立っているかと思うと、また、何かを思い出したように二階へ上

つた。が、机の前に坐つても、少しも落着かなかつた。彼は、思い切つて妻に云う積りで、再び階下へ降りて来た。

が、解き物をしながら、階段を降りて来る夫の顔を見ると、心の裡の幸福が、自然と弾み出るような微笑を浮べる妻の顔を見ると、手輕に云つて退ける筈の言葉が、またグツと咽喉にからんでしまった。

「あら！ 貴君、先刻から何をそんなに、ソワソワしていらつしやるの？」

無邪気な妻は夫の図星を指してしまった。指さゝれてしまうと、信一郎は却つて落着いた。

「うっかり忘れていたのだ。今日は専務が米国へ行くのを送って行かなければならないのだつた！」

彼は、咄嗟に今日出発する筈の専務のことを思い出したのだ。

「何時の汽車？ これから行つても、間に合うのでございますか？」
静子は一寸心配そうに云つた。

「間に合うかも知れない。確か二時に新橋を立つ筈だから。」

そう云いながら、信一郎は柱時計を見上げた。それは、一時を廻つたばかりだった。

「じゃ、早くお支度なさいまし。」解き物を、搔きやって、妻は、甲斐々々しく立ち上った。

信一郎は、最初の冷たい言葉を云う代りに、最初の嘘を云ってしまった。その方が、ズツと悪いことだが。

二

その日の音楽会は、露西亞ロシアのピアノスト若きセザレヴィツチ兄妹の独奏会だった。

去年から今年にかけて、故国の動乱を避けて、漂泊さすらいの旅に出た露西亞の音楽家達が、幾人も幾人も東京の樂壇を賑わした。其中そのなかには、ピアノやセロやヴァイオリンの世界的名手さえ交っていた。セザレヴィツチ兄妹もやつぱり、漂泊の旅の寂しさを、背負っている人だった。殊に、妹のアンナ・セザレヴィツチの何処か東洋的な、日本人向きの美貌が、兄妹の天才的な演奏と共に、樂壇の人氣を唆っていた。その日の演奏は、確か三四回目の演奏会だった。上流社会の貴夫人達の主催にかゝる、その日の演奏会の純益は、東京に亡命ぼうめいの露人達の窮状を救うために、投ぜられる筈だった。

信一郎が、その日の会場たる上野の精養軒の階上の大広間の入口に立った時、会場はザツと一杯だった。が、人数は三百人にも足らなかつただろう。七円と云う高い会費が、今日の聴衆を、可なり貴族的に制限していた。極楽鳥のように着飾った夫人や令嬢が、ズラリと静肅に並んでいた。その中に諸所瀟洒なモオニングを着て、楽譜を手に持つている、音楽研究の若殿様と云つたような紳士が、二三人宛交じつていた。信一郎は聴衆を一瞥した刹那に、直ぐ油に交じつた水のような寂しさを感じた。こうした華やかな群の中に、女王のように立ち働いている莊田夫人が、自分に——片隅に小さく控えている自分に、少しでも注意を向けて呉れるかと思うと、妻の手前を繕ろつてまで、出席した自分が、何だか心細く馬鹿々々しくなつて来た。

信一郎が、席に着くと間もなく、妹の方のアンナが、華やかな拍手に迎えられて壇上に現われた、スラヴ美人の典型と云つてもいゝような、碧い眸と、白い雪のような頬とを持つた美しい娘だった。彼女は微笑を含んだ会釈で喝采に応え、水色のスカートをひるがえりながら、快活にピアノに向つて腰を降した。と、思うと、その白い蠟のような纖手は、直ぐ靈活な蜘蛛か何かのように、鍵盤の上を、駆け廻り始めた。曲は、露西亜の国民音楽家の一人として名高いボロディンの譚歌だった。

その素朴な、軽快な旋律に、耳を傾けながら、信一郎の注意は、半ば聴衆席の前半の方に走っていた。彼は、若い婦人の後姿を、それからそれと一人々々検めた。あらたが、たった一度、相見た丈の女は、後姿に依つては、直ぐそれと分りかねた。

妹の演奏が終ると、美しい花環が、幾つも幾つも、壇上へ運ばれた。露西亜の少女は、それを一々溢れるような感謝で受取ると、子供のように欣びながら、ピアノの上へ幾つもの置き並べた。余り沢山置き並べるので、演奏の邪魔になりそうなので、司会者が周章あわてて取り降した。聴衆が、此の少女の無邪氣さをどつと笑った。信一郎も、少女の美しさと無邪氣さに、引きずられて、つい笑ってしまった。

丁度その途端、信一郎の肩を軽く軟打するものがあつた。彼は駭いて、振り顧つた。かえそこに微笑する美しき瑠璃子夫人の顔があつた。

「よくいらつしやいましたのね。先刻からお探していましたのよ。」

信一郎の言うべきことを、向うで言いながら、瑠璃子は、信一郎と並んで其処そこに空いた椅子いすに腰を下した。

「あまりお見えにならないものですから、いらつしやらないのかと思っていましたのよ。」
信一郎の方から、改めて挨拶する機会のないほど、向うは親しく馴々なれなれしく、友達か

何かのように言葉をかけた。

「先日は、何^どうも失礼しました。」

信一郎は、遅ればせに、ドギマギしながら、挨拶した。

「いゝえ！ 妾^{わたくし}こそ。」

彼女は、小波^{さざなみ}一つ立たない池の面か何かのように、落着いていた。

丁度、その時に兄のニコライ・セザレヴィッチが壇上に姿を現した。が、瑠璃子夫人は立とうとはしなかった。

「妾^{しば}、暫^{しば}らく茲^{こゝ}で聴かせていただきますわ。」

彼女は、信一郎に云うともなく独^{ひとりごと}語^{こと}のように呟^{つぶや}いた。

三

丁度その時、兄のセザレヴィッチの奏^ひき初めた曲は、シヨパンの前奏^{プレリユ}曲^{ウド}だった。聴衆は、水を打ったような静寂^{しじま}の裡^{うち}に、全身の注意を二つの耳に蒐^{あつ}めていた。が、その中で、信一郎の注意丈は、彼の左半身の触觉に、溢^{あふ}れるように満ち渡っていた。彼の左側には、

瑠璃子夫人が、坐^{すわ}つていたからである。彼女は、故意にそうしているのかと思われるほどに、その華^{きやしや}奢^{しゃ}な身体を、信一郎の方へ寄せかけるように、坐^{すわ}つていた。

信一郎は、淡彩に夏草を散らした薄^{うす}葡萄^{ぶどう}色の、金^{きん}紗^{しゃ}縮^{ちりめん}緬^{めん}の着物の下に、軽く波打つている彼女の肉体の暖かみをさえ、感じ得るように思つた。

彼女は、演奏が初まると、直^すぐ独語のように、「雨^{レインドロップス} 滴^つ のプレリユウドですわね。―と、軽く小声で云^いつた。それは、いかにもシヨパンの数多い前奏曲^{うち}の中、『雨滴の前奏曲』として、知られたる傑作だつた。

彼女は、演奏が進むに連れて、彼女の膝^{ひざ}の、夏草模様^{なぐさ模様}に、実物剥^{はく}製^{せい}の蝶^{ちよう}が、群れ飛んでいる辺^{あたり}を、其^{そこ}処^こに目に見えぬ鍵^{けん}盤^{ばん}が、あるかのように、白い細い指先で、軽くしなやかに、打ち続けているのだつた。而^{しか}も、それと同時に、彼女の美しい横^{プロファイル}顔^{がん}は、本当に音楽^{わか}が解^{わか}るものゝ感ずる恍^{こう}惚^{こつ}たる喜悦で輝いているのだつた。其^{そこ}処^こには日本の普通の女性には見られないような、精神的な美しさがあつた。思想的にも、感覺的にも、開発された本当に新しい女性にしか、許されていないような、神^{こう}々^{こう}しい美しさがあつた。

信一郎は、時々彼女の横顔を、そのくつきりと通つた襟足を、そつと見詰めずにはいられないほど、彼女独特の美しさに、心を惹^ひかされずにはいられなかつた。

曲が、終りかけると、彼女は何人^{なんびと}よりも、先に慎^{つつま}しい拍手を送った。

快い緊張から夢のように醒^さめながら、彼女は信一郎を顧^さみだ。

「妹の方が、技巧は確ですけれども、どうも兄の方が、奔放で、自由で、それ丈天才的だと思ひますのよ。」

「僕も同感です。」信一郎も、心からそう答えた。

「貴君^{あなた}、音楽好き？ ほゝゝゝ、わざゝゝ来て下さったのですもの、お好きに定^{きま}つていますわね。」

彼女は、二度目に会ったばかりの信一郎に、少しの気兼ねもないように、話した。

「好きです。高等学校にいたときは、音楽会の会員だったのです。」

「ピアノお奏^ひきになつて？」

「簡単なバラッドや、マーチ位は奏けます。はゝゝゝゝ。」

「ピアノお持ちですか。」

「いいえ。」

「じゃ、妾^{わたくし}の宅へ時々、奏きにいらつしやいませ。誰も氣の置ける人はいませんから。」

彼女は、薄氣味の悪いほど、馴^{なれなれ}々々しかつた。その時に、壇上には、妹のアンナが立つ

ていた。

「バラキレフの『イスラメイ』を演やるのですね。随分難しいものを。」

そう云いながら、彼女は立ち上った。

「みんなが、妾を探しているようですから、失礼いたしますわ。会が終わりましたら、階した下の食堂でお茶と一緒に召上りませんか。約束して下さいませうね。」

「はあ！ 結構です。」

信一郎は、何かの命令をでも、受けたように答えた。

「それでは後ほど。」

彼女は、軽く会釈えしやくすると、静まり返っている聴衆の間の通路を、怯わるれもせず遙はるか前方の自分の席へ帰って行つた。信一郎は可なり熱心な眼付で、彼女を見送つた。

彼女が、席に着こうとしたとき彼女の席の周囲にいた、多くの男性と女性とは、彼女が席に帰つて来たのを、女王でもが、帰還したように、銘々に会釈した。彼女が多くの男性に囲まれているのを見ると、信一郎の心は、妙な不安と動揺とを感じずにはいられなかつたのである。

四

それから、演奏が終つてしまふまで、信一郎は、ピアノの快い旋律と、瑠璃子夫人の残して行つた魅惑的な移り香との中に、恍惚として夢のような時間を過してしまつた。

最後の演奏が終つて、華やかな拍手と共に、皆が立ち上つたとき、信一郎は夢から、さめたように席を立ち上つた。

彼は、自分から先刻の約束を守るために、瑠璃子夫人を探し求めるほど大胆ではなかつた。それかと云つて、その儘歸つてしまふには、彼は夫人の美しさに、支配され過ぎていた。彼は聴衆に先立つて階段を降りたものゝ、階段の下で誰かを待つてでもいるように、躊躇ちゆうちよしていた。

美しい女性の流れが、暫らくは階段を滑つていた。が、待つても、待つても夫人の姿は見えなかつた。

彼が、待ちあぐんでゐる裡に、聴衆は降り切つてしまつたと見え、下足の前に佇んでゐる人の数がだん／＼疎まばらになつて来た。

彼は『一緒にお茶を飲もう。』と云うことが、ただ一寸ちよつとした、夫人のお世辞であつた

のではないかと思つた。それを金科玉条のように、一生懸命に守つて、待ちつゞけていた自分が、少し馬鹿ばからしくなつた。夫人は、屹度きつと混雑を避けて、別の出口から、もうとつくに帰り去つたに違ひない。そう思つて、彼は軽い失望を感じながら、踵きびすを返そうとした時だつた。階段の上から、軽い靴音と、やさしい衣擦きぬずれの音と、流暢りゆうちような仏蘭西語フランスの会話とが聞えて来た。彼が、軽い駭おどろきを感じて、見上げると、階段の中途を静に降りかかつているのは、今日の花形スタアなるアンナ・セザレヴィツチと瑠璃子夫人とだつた。その二人の洗ひ出したような鮮さが、信一郎の心を、深く深く動かした。一種敬虔けいけんな心持をさえ懷いだかせた。白皙はくせきな露西亞美人ロシアと並んでも、瑠璃子夫人の美しさは、その特色を立派に發揮してゐた。殊ことに、そのスラリとして高い長身は、凡てすべの日本婦人が白人の女性と並び立つた時の醜さから、彼女を救つてゐた。

信一郎は、うつとりとして、名画の美人画をでも見るように、暫らくは見詰めていた。それと同じように、彼を駭かしたものは瑠璃子夫人の暢達ちようたつな仏蘭西語フランスであつた。仏法出の法学士である信一郎は、可なり会話にも自信があつた。が、水の迸ほとばしるように、自然に豊富に、美しい発音もつを以て、語られている言葉は、信一郎の心を魅し去らずにはいなかった。

瑠璃子は、階段の傍に、ボンヤリ立っている信一郎には、一瞥^{いちべつ}も与えないで、アンナを玄関まで送って行つた。

其処^{そこ}で、後から来た兄のセザレヴィツチを待ち合わすと、兄妹が自動車に乗ってしまう迄^{まで}、主催者の貴婦人達と一緒に見送っていた。彼女一人、兄妹を相手に、始終快活に談笑しながら。

兄妹を乗せた自動車が、去ってしまうと、彼女は、初めて信一郎を見付けたように、いそいそと彼の傍へやって来た。

「まあ！ 待つていて下さいましたの。随分お待たせしましたわ。でも兄妹を送り出すまで、幹事として責任がごさいますの。」

彼女は、そう云いながら、帯の間から、時計を取り出して見た。それはやつぱり白金^{プラチナ}の時計だった。それを見た刹那^{せつな}、不安なやな連想が、電火^{いなずま}のように、信一郎の心を走せ過ぎた。

「おやもう、六時でございますわ。お茶なんか飲んでいますと、遅くなつてしまいますわ。如何^{いかが}でございます。あのお約束は、またのことにして下さいませんか。ねえ！ それでい、でございますよう。」

「はあ！　それで結構です。」

信一郎は、従順な僕しもべのように答えた。

「貴君あなた！　お宅は何方どちら！」

「信濃町です。」

「それじゃ、院線で御帰りになるのですか。」

「市電でも、院線でも孰どちらでも帰れるのです。」

「それじゃ、院線で御帰りなさいませ。万世橋でお乗りになるのでしょうか。妾わたくしの自動車で万世橋までお送りいたしますわ。」

彼女は、それが何でもないことのように、微笑しながら云った。

五

わずか二度しか逢っていない、而も確しかかな紹介もなく妙な事情から、知己しりあいになっている男性に——その職業も位置も身分も十分分っていない男性に、突然自動車の同乗を勧める瑠璃子夫人の大胆さに、勧められる信一郎の方が、却かえってタジ／＼となってしまう。信

一郎は、一寸狼狽ちよつとろうばいしながら、急いでそれを断ろうとした。

「いゝえ恐れ入ります。電車で帰った方が勝手ですから。」

「あら、そんなに改まって遠慮して下さると困りますわ。妾わたくし本当は、お茶でもいたゞきな
がら、ゆつくりお話がしたかったのでございますよ。それなのに、ついこんなに遅くなっ
てしまったのですもの。せめて、一緒に乗っていたゞいて、お話したいと思ひますの。死
んだ青木さんのことなども、お話したいことがございますのよ。」

「でも御迷惑じやございませんか。」

信一郎は、もう可なり、同乗する興味に、動かされながら、それでも口先ではこう云いつ
て見た。

「あら、御冗談でございましょう。御迷惑なのは、貴君あなたではございませんか。」

夫人の言葉は、銘刀のように鮮かな刃さえを持っていた。信一郎が、夫人の奔放な言葉に圧
せられたように、モジ／＼している間に、夫人はボーイに合図した。ボーイは、玄関に立
つて、声高く自動車を呼んだ。

暮れなやむ初夏の宵ゆうやみの夕暗に、今点火したばかりの、眩まぶしいような頭ヘッドライト光を輝かし
ながら、青山の葬場で一度見たことのある青色大型の自動車は、軽い爆音を立てながら、

玄関へ横付になった。会衆は悉く散じ去つて、供待する俥も自動車一台も残っていなかった。

「さあ！ 貴君から。」

信一郎の確な承諾をも聴かないのにも拘わらず、夫人はそれに定つた事のように、信一郎を促した。

そう勧められると、信一郎は不安と幸福とが、半分宛交つたような心持で、胸が掻き乱された。彼は、心から同乗することを欲していたのにも拘わらず、乗ることが何となく不安だった。その踏み段に足をかけることが、何だか行方知らぬ運命の岐路へ、一步を踏み出すように不安だった。

「あら、何をそんなに遠慮していらつしやるの。じゃ、妾が御先に失礼しますわ。」

そう云うと、夫人は軽やかに、紫のフェルトの草履で、踏台を軽く踏んで、ヒラリと車中の人になつてしまった。

「さあ！ 早くお乗りなさいませ。」

彼女は振り願つて、微笑と共に信一郎を麾ねいた。

相手が、そうまで何物にも囚われないように、奔放に振舞っているのに、男でありなが

ら、こだわり通しにこだわっていることが、信一郎自身にも、厭いやになった。彼は、思い切
つて、踏ステッ台に足を踏みかけた。

信一郎は、車中に入ると、夫人と対角線的に、前方の腰かけを、引き出しながら、腰を
掛けようとした。

夫人は駭おどろいたように、それを制した。

「あら、そんなことをなさつちや、困りますわ。まあ、殿方にも似合わない、何と云う遠
慮深い方でしょう。さあ此方こちらへおかけなさい！ 妾と並んで。そんなに遠慮なさるものじ
やありませんよ。」

信一郎を、窘たしなめるように、叱しかるように、夫人の言葉は力を持っていた。信一郎は、今は
止むを得ないと云つたように、夫人と擦れくく腰を降した。夫人の身体を掩おほうている金き
紗縮緬んしやちりめんのいじり痒かゆいような触感が、衣服きもの越しに、彼の身体に浸しみるように感ぜられた。
給仕やボーイなどの挨拶あいさつに送られて、自動車は滑るように、玄関前の緩い勾配こうばいを、
公園の青葉の闇やみへと、進み始めた。

給仕人達の挨拶が、耳に入らないほど、信一郎は、烈はげしい興奮の裡うちに、夢みる人のよう
に、恍惚こうこつとしていた。

六

つい知り合つたばかりの女性、しかも美しく高貴な女性と、たつた二度目に会つたときに、もう既に自動車に、同乗すると云うことが、信一郎には、宛ら美しい夢のような、二十世紀の伝奇譚の主人公になつたような、不思議な歓びを与えて呉れた。万世橋駅迄の三四分が、彼の生涯に再び得がたい貴重な三四分のように思われた。彼の生涯を通じて、寶石のように輝く、尊い瞬間のように思われた。彼は、その時間を心の底から、享け入れようと思つていた。が、そう決心した刹那に、もう自動車は、公園の蒼い樹下闇を、後に残して、上野山下に拡がる初夏の夜、そうだ、豊に輝ける夏の夜の描けるが如き、光と色との中に、馳け入っているのだつた。時は速い翼を持つてゐる。が、此の三四分の時間は、電光その物のように、アツと云う間もなく過ぎ去ろうとしている。

試験の答案を書く時などに、時間が短ければ短いほど、冷静に筆を運ばなければならぬのに、時間があまりに短いと、却てわく／＼して、少しも手が付かないように、信一郎も飛ぶが如くに、過ぎ去ろうとする時間を前にして、たゞ茫然と手を拱いている丈だつ

た。

然るに、瑠璃子夫人は悠然と、落着いていた。親しい友達か、でなければ自分の夫とでも、一緒に乗っているように、微笑を車内の薄暗に、漂わせながら、急に話しかけようとしなかった。

丁度、自動車が松坂屋の前にさしかゝった時、信一郎は、やっと——と言っても、たゞ一分間ばかり黙っていたのに過ぎないが——会話の緒を見付けた。

「先刻、一寸立ち聴ちよつときした訳ですが、大変仏蘭西語フランスが、お上手でいらつしやいますね。」

「まあ！ お恥かしい。聴いていらしたの。動詞なんか滅茶苦茶めちゃくちやなですよ。単語を並べる丈。でもあのアンナと云う方、大変感じのいい方よ。大抵お話が通ずるのですよ。」

「何うして滅茶苦茶なのですか。大変感心しました。」

信一郎は心でもそう思った。

「まあ！ お賞ほめに与あずつて有難いわ。でも、本当にお恥かしいのですよ。ほんの二年ばかり、お稽古けいこした丈なのですよ。貴君あなたは仏法の出身でいらつしやいますか。」

「そうです。高等学校時代から、六七年もやっているのですが、それで会話と来たら、丸切り駄目なのです。よく、会社へ仏蘭西人が来ると、私丈が仏蘭西語が出来ると云うので、

応接を命ぜられるのですが、その度毎に、閉口するのです。奥さんなんか、このまゝ直ぐ外交官夫人として、巴里^{パリ}辺の社交界へ送り出しても、立派なものだと思います。」

信一郎は、つい心からそうした讃辞^{さんじ}を呈してしまった。

「外交官の夫人！ ほゝゝ、妾^{わたくし}などに。」

そう云ったまゝ、夫人の顔は急に曇ってしまった。外交官の夫人。彼女の若き日の憧れ^{あこが}は、未来の外交官たる直也^{なおや}の妻として、遠く海外の社交界に、日本婦人の華として、咲き出ることではなかったか。彼女が、仏蘭西語の稽古をしたことも、みんなそうした日のため、準備ではなかったか。それもこれも、今では煙の如く空^{むな}しい過去の思出となつて了つている。外交官の夫人と云われて、彼女の華やかな表情が、急に光を失つたのも無理はなかった。

瞬間的な沈黙が、二人を支配した。自動車は御成街道の電車の右側の垣^{かた}々^{たんたん}たる道を、速力を加えて疾駆^{しゅくく}していた。万世橋迄は、もう三町もなかった。

信一郎は、もつとピッタリするような話がしたかった。

「仏蘭西文学は、お好きじゃございませんか。」

信一郎は、夫人の顔を窺^{うかが}うように訊いた。

「あのう——好きでございますの。」

そう云ったとき、夫人の曇っていた表情が、華やかな微笑で、拭い取られていた。

「大好きでございますの。」

夫人は、再び強く肯定した。

七

「仏蘭西文学が大好きですの。」と、夫人が答えた時、信一郎は其処そこに夫人に親しみ近づいて行ける会話の範囲が、急に開けたように思った。文学の話、芸術の話ほど、人間を本当に親しませる話はない。同じ文学なり、同じ作家なりを、両方で愛していると云うことは、ある未知の二人を可なり親しみ近づける事だ。

信一郎は、初めて夫人と交すべき会話の題目が見付かったように欣喜よろこびながら、勢よく訊きき続けた。

「やはり近代のものを好きですか、モウパッサンとかフローベルなどとか。」

「はい、近代のものとか、古典クラシックスとか申し上げるほど、沢山はよんでおりませんの。で

も、モウパッサンなんか大嫌いでございますわ。何うも日本の文壇などで、仏蘭西文学とか露西亜文学とか申しまして、英語の廉価版のある作家ばかりが、流行っているようにございますわね。」

信一郎は、瑠璃子夫人の辛辣な皮肉に苦笑しながら訊いた。

「モウパッサンが、お嫌いなのは僕も同感ですが、じゃ、どんな作家がお好きなのですか？」
「一等好きなのは、メリメですわ。それからアナトール・フランス、オクターヴ・ミルボームなども嫌いではありませんわ。」

「メリメは、どんなものがお好きです。」

「みんないゝじやありませんか。カルメンなんか、日本では通俗な名前になってしまいましたが、原作はほんとうにいゝじやありませんか。」

「あの女主人公を何うお考えになります。」

「好きでございますよ。」

言下にそう答えながら、夫人は嫣然と笑った。

「妾（わたくし）そう思いますのよ。女に捨てられて、女を殺すなんて、本当に男性の暴虐（ぼうぎやく）だと思
いますの。男性の甚（はな）だしい我（わが）儘（まま）だと思ひますの。大抵の男性は、女性から女性へと心を

移していながら、平然と済していますのに、女性が反対に男性から男性へと、心を移すと、直ぐ何とか非難を受けなければなりませんのですもの。妾、ホセに刺し殺されるカルメンのことを考える度毎に、男性の我儘と暴虐とを、憤らずにはいられないのです。」

夫人の美しい顔が、興奮していた。やゝ薄赤くほてった頬が、悩しいほどに、
魅惑的チャーミングであつた。

信一郎は生れて初めて、男性と対等に話し得る、立派な女性に会つたように思った。彼は、はしなくも、自分の愛妻の静子のことを考えずにはいられなかつた。彼女は、愛らしく慎しく従順貞淑な妻には違いない。が、趣味や思想の上では、自分の間に手の届かないように、広いく隔へだたりが横わっている。天気の話や、衣類の話や、食物の話をするときには立派な話相手に違いない。

が、話が少しでも、高尚になり精神的になると、もう小学生と話しているような、もどかしさと頼りなさがあつた。同伴の登山者が、わずか一町か二町か、離れているのなら、麾さしまねいてやることも出来れば、声を出して呼んでやることも出来た。が、二十町も三十町も離れていれば、何うすることも出来ない。信一郎は、趣味や思想の生活では、静子に対してそれほどの隔を感じずにはいられなかつた。

が、彼は今までは、諦めていた。^{あきら}日本婦人の教養が現在の程度で止まっている以上、そうしたことを、妻に求めるのは無理である。それは妻一人の責任ではなくして、日本の文化そのものの責任であると。

が、彼は今瑠璃子夫人と会って話していると、日本にも初めて新しい、趣味の上から云つても、思想の上から云つても優に男性と対抗し得るような女性の存在し始めたことを知ったのである。夫人と話していると、妻の静子に依^よつて充^{みた}されなかつた欲求が、わずか三四分の同乗に依つて、十分に充たされたように思った。

そう思ったとき、その貴い三四分間は、過ぎていた。自動車は、万世橋の橋上を、やゝ速力を緩めながら、走っていた。

「いやどうも、大変有難うございました。」

信一郎は、そう挨拶しながら、降りるために、腰を浮かし始めた。

その時に、瑠璃子夫人は、突然何かを思い出したように云った。

「貴君！^{あなた} 今晚お暇じゃなくなつて？」

「貴君！ 今晚お暇ひまじゃなくって？」

と、云う思いがけない間に、信一郎は立ち上ろうとした腰を、つい降してしまった。

「暇と云いますと。」

信一郎は、夫人の間の真意を解げしかねて、ついそう訊きき返さずにはいられなかった。

「何かお宅に御用事があるかどうか、お伺いいたしましたのよ。」

「いゝえ！ 別に。」

信一郎は夫人が、何を云い出すだろうかと云う、軽い好奇心に胸を動かしながら、そう答えた。

「実は……」夫人は、微笑を含みながら、一寸ちよつと云い澱よどんだが、「今晚、演奏が済みますと、あの兄妹の露西亞人ロシア人を、晚餐ばんさん旁帝劇たがたへ案内してやろうと思っていましたの。それでボックスを買って置きましたところ、向うが止やむを得ない差さ支しかえがあると云って、辞退しましたから妾わたくし一人でこれから参ろうかと思つていたのでございますが、一人ボンヤリ見ているのも、何だか変でございましょう。如何いかでございます、もし、およろしかったら、付き合つて下さいませんか。どんなに有難いか分りませんわ。」

夫人は、心から信一郎の同行を望んでいるように、余儀ないように誘った。

信一郎の心は、そうした突然の申出を聴いた時、可なり動揺どうようせずにはいなかった。今までの三四分間でさえ彼に取つてどれほど貴重な三四分間であるか分らなかった。夫人の美しい声を聞き、その華やかな表情に接し、女性として驚くべきほど、進んだ思想や趣味を味わっていると、彼には今まで、閉されていた楽しい世界が、夫人との接触に依よつて、洋々と開かれて行くようにさえ思われた。

そうした夫人と、今宵こよひ一夜を十分に、語ることが出来ると云うことは、彼にとってどれほどな、幸福と欣よろこびを意味しているか分らなかった。

彼は、直すぐ同行を承諾しようと思つた。が、その時に妻の静子の面影が、チラツと頭を掠かすめ去つた。新橋へ、人を見送りに行つたと云う以上、二時間もすれば帰つて来るべき筈はずの夫を、夕餉ゆうけの支度おを了えて、ボンヤリと待ちあぐんでいる妻の邪気あどけない面影が、暫しばらく彼の頭を支配した。その妻を、十時過ぎ、恐らく十一時過ぎ迄も待ちあぐませることが、どんなに妻の心を傷いたませることであるかは、彼にもハッキリと分つていた。

「如何でございます。そんなにお考えなくつても、手輕きに定めて下さつても、およろしいじゃありませんか。」

夫人は躊躇ちゅうちよしている信一郎の心に、拍車はくしゃを加えるように、やゝ高飛車にそう云った。

信一郎の顔をじつと見詰めている夫人の高貴ノーブルな厳おごそかに美しい面が、信一郎の心の内の子の慎つつましい可愛かわいい面影を打ち消した。

「そうだ！ 静子と過すべき晩は、これからの長い結婚生活に、幾夜だつてある。飽き／＼するほど幾夜だつてある。が、こんな美しい夫人と、一緒に過すべき機会がそう幾度もあるだろうか。こんな浪漫ロマンチックな美しい機会が、そう幾度だつてあるだろうか。生涯に再びとは得がたいたゞ一度の機会であるかも知れない。こうした機会を逸しては……」

そう心の中で思うと、信一郎の心は、籠かごを放れた鳩はとか何かのように、フワ／＼となつてしまった。彼は思い切つて云った。

「もし貴女あなたさえ、御迷惑でなければお伴いたしてもいゝと思います。」

「あらそう。付き合つて下さいますの。それじゃ、直ぐ、丸の内へ。」

夫人は、後の言葉を、運転手へ通ずるように声高く云った。

自動車は、緩みかけた爆音を、再び高く上げながら、車首を転じて、夜の須田町すだちようの混雑の中を泳ぐように、馳かけり始めた。

電車道の、舗石ペーメントが悪くなっている故せいか、車台は頻しきりに動揺した。信一郎の心も、そ

れに連れて、軽い動揺を続けている。

車が、小川町の角を、急に曲つたとき、夫人は思い出したように、とぼけたように訊いた。

「失礼ですが、奥様おありになつて？」

「はい。」

「御心配なさらない！ 黙つて行らしては？」

「いゝえ。決して。」

信一郎は、言葉丈は強く云つた。が、その声には一種の不安が響いた。

九

帝劇の南側の車寄の階段を、夫人と一緒に上るとき、信一郎の心は、再び動揺した。この晴れがましい建物の中に、其処にはどんな人々がいるかも知れない群衆の中へ、こうした美しい、それ丈人目を惹き易い女性と、たつた二人連れ立って、公然と入って行くことが、可なり気になつた。

が、信一郎のそうした心遣いを、救^{たす}けるように、舞台では今丁度幕が開いたと見え、廊下には、遅れた二三の観客が、急ぎ足に、座席^{シート}へ帰って行くところだった。

夫人と並んで、広い空^{むな}しいボックスの一番前方に、腰を下したとき、信一郎はやつと、自分の心が落着いて来るのを感じた。舞台が、煌^{こうこう}々と明るいの^にに比べて、観客席が、ほの暗いのが嬉^{うれ}しかった。

夫人は席へ着いたとき、二三分ばかり舞台を見詰めていたが、ふと信一郎の方を振り返ると、

「本当に御迷惑じゃございませんでしたの。芝居はお嫌いじゃありませんの。」

「いゝえ！ 大好きです。尤^{もつと}も、今の歌舞伎芝居には可なり不満ですがね。」

「妾^{わたくし}も、そうです。外に行く処^{ところ}もありませんからよく参りますが、妾達の実生活と歌舞伎芝居の世界とは、もう丸きり違っているのでございますものね。歌舞伎に出て来る女性と云^いえば、みんな個性のない自我のない、古い道德の人形のような女ばかりでございますのね。」

「同感です。全く同感です。」

信一郎は、心から夫人の秀^{すく}れた見識^{さんたん}を讃嘆した。

「親や夫に臣従しないで、もつと自分本位の生活を送ってもいいと思いますの。古い感情や道徳に囚とらわれないで、もつと解放された生活を送ってもいいと思いますの。英国のある近代劇の女主人公が、男が雲雀スカイラークのように、多くの女と戯たわむれることが出来るのなら、女だつて雲雀のように、多くの男と戯れる権利があると申しておりますが、そうじゃございませんでしうか。妾もそう思うことがございますのよ。」

夫人は、周囲の静けさを擾みださないように、出来る丈信一郎の耳に口を寄せて語りつゞけた。夫人の温い薫かおるような呼吸が、信一郎のほてつた頬を、柔かに撫なでるごとに、信一郎は身体中からだじゅうが、溶とろけてしまふような魅力を感じた。

「でも、貴君あなたなんか、そうした女性は、お好きじゃありませんでしうね。」そう、信一郎の耳に、あたゝかく囁ささやいて置きながら、夫人は顔を少し離して嫣然にっこりと笑つて見せた。男の心を、搔かき擾みだしてしまうような媚こびが、そのスラリとした身体全体に動いた。

夫人の大胆な告白と、美しい媚のために、信一郎は、目が眩くらんだように、フラ／＼としました。美しい妖精ようせいに魅せられた少年のように、信一郎は顔を薄赤く、ほてらせながら、たゞ茫ぼう然ぜんと黙つていた。

夫人は、ひらりと身を躲かわすように、真面目まじめなしんみりとした態度に歸つていた。

「でも、妾、こんな打ち解けたお話をするのは、貴君が初めてなのよ、文学や思想などに、理解のない方に、こんなお話をする、直ぐ誤解^すされてしまうのですもの、妾、かねてから、貴君のようなお友達が欲しかったの、本当に妾の心持を、聴いて下さるような男性のお友達が、欲しかったの、二人の異性の間には、真の友情は成り立たないなどと云うのは嘘でございますわね、異性の間の友情は、恋愛への階段などと云うのは、嘘でございますわね。本当に自覚している異性の間なら、立派な友情が何時^{いつ}までも続くと思いますの。貴方と妾との間で、先例を開いてもいゝと思いますわ。ほゝゝゝ。」

夫人は、真の友情を説きながらも、その美しい唇は、悩ましきまでに、信一郎の右の頬近く寄せられていた。信一郎は、うつとりとした心持で、阿片^{アヘン}吸入者が、毒と知りながら、その恍惚^{こうこつ}たる感覚に、身体を委^{まか}せるように、夫人の蜜^{みつ}のように甘い呼吸と、音楽のように美しい言葉とに全身を浸していた。

客間の女王

一

帝劇のボックスに、夫人と肩を並べて、過した数時間は、信一郎に取っては、夢とも現とも分ちがたいような恍惚たる時間だった。

夫人の身体全体から出る、馥郁たる女性の香が、彼の感覚を爛し、彼の魂を溶かしたと云つてもよかつた。

彼は、其夜、半蔵門迄、夫人と同乗して、其処で新宿行の電車に乗るべく、彼女と別れたとき、自動車の窓から、夜目にもくつきりと白い顔を、のぞかしながら、

「それでは、此次の日曜に屹度お訪ね下さいませ。」と、媚びるような美しい声で叫んだ夫人の声が、彼の心の底の底まで徹するように思った。彼は、其処に化石した人間のようになり立ち止まつて、葉桜の樹下闇を、ほの／＼と照し出しながら、遠く去つて行く自動車の車台の後の青色の灯を、何時までも何時までも見送つていた。彼の頬には、尚夫人の甘い快い呼吸の匂が漂うていた。彼の耳の底には、夫人の此世ならぬ美しい声の余韻が残つていた。彼の感覚も心も、夫人に酔うていた。

彼の耳に囁かれた夫人の言葉が、甘い蜜のような言葉が、一つ／＼記憶の裡に甦がえつ

て来た。『自分を理解して呉れる最初の男性』とか、『そんな女性をお好きじゃありませんの』と云ったような馴なれなれ々々しい言葉が、それが語られた刹那せつなの夫人の美しい媚こびのある表情と一緒に、信一郎の頭を悩ました。

自分が、生れて始めて会ったと思うほどの美しい女性から、唯一ただ一人の理解者として、馴々しい信頼を受けたことが、彼の心を攪かくらん乱し、彼の心を有頂天にした。

彼の頭の裡には、もう半面紫色になった青木淳じゅんの顔もなかった。謎なぞの白金プラチナの時計もなかった。愛している妻の静子の顔までが、此の朧ろうたけた瑠璃子夫人の美しい面影のために、屢々しばしば掻き消されそうになっていた。

十二時近く帰つて来た夫を、妻は何時ものように無邪気に、何の疑念もないように、いそいそと出迎えた。そうした淑しとやかな妻の態度に接すると、信一郎は可なり、心の底に良心かしやくの苛責を感じながらも、しかも今迄は可なり美しく見えた妻の顔が、平凡に単純に、見えるのを何うともすることが出来なかった。

その次ぎの日曜まで、彼は絶えず、美しい夫人の記憶に悩まされた。食事などをしながらも、彼の想像は美しい夫人を頭の中に描いていることが多かった。

「あら、何をそんなにぼんやりしていらつしやいますの、今度の日曜は何日？」と云つて

お尋ねしているのに、たゞ『うむ！　うむ！』と云っていらつしやるのですもの。何をそんなに考えていらつしやるの？」

静子は、夫がボンヤリしているのが、可笑おかしいと云いながら、給仕をする手を止めて、笑いこけたりした。夫が、他の女性のことを考えて、ボンヤリしているのを、可笑しいと云つて無邪気に笑いこける妻のいじらしさが、分らない信一郎ではなかったが、それでも彼は刻々に頭の中に、浮んで来る美しい面影めんくを拭い去ることが出来なかった。

到頭夫人と約束した次ぎの日曜日が来た。その間の一週間は、信一郎に取つては、一月も二月もに相当した。彼は、自分がその日曜を待ちあぐんでいるように、夫人がやつぱりその日曜を待ち望んでいて呉れることを信じて疑わなかった。

夫人が、自分を唯一人の真実の友達として、選んで呉れる。夫人と自分との交こう情じやうが發展して行く有様が、いろ／＼に頭の中に描かれた。異性の間の友情は、恋愛の階段であると、夫人が云つた。もしそれがそうなったら、何うしたらよいだろう。あの自由奔放な夫人は、屹度きつと云うだろう。

「それが、そうなつたつて、別に差さ支しつかえはないのよ。」

夫のない夫人はそれで差支がないかも知れない。が、自分は何うしたらいいだろう。妻

のある自分は。結婚して間もない愛妻のある自分は。

信一郎は、そうした取りとめもない空想に頭を悩まししながら、七月の最初の日曜の午後に、夫人を訪ねるべく家を出た。

夫人を訪ねるのも、二度目であつた。が、妻を欺くのも二度目であつた。あざむ

「社の連中と、午後から郊外へ行く約束をしたのでね。新宿で待ち合まして、多摩川へ行く筈はずなのだよ。」

帽子を持って送つて出た静子に、彼は何気なくそう云つた。

二

電車に乗つてからも、妻を欺いたと云う心持が、可なり信一郎を苦しめた。が、美しい夫人が自分が尋ねて行くのを、じつと待つていて呉れるのだと思うと、電車の速力さえ平素いつもよりは、鈍いように思われた。

夫人と会つてからの、談話の題目などが、頭の中に次から次へと、浮んで来た。文芸や思想の話に就ても、今日はもつと、自分の考えも話して見よう。自分の平生の造詣ぞうけいを、

十分披瀝ひれきして見よう。信一郎はそう考えながら、夫人のそれに対する澆刺はつちつたる受答や表情を絶えず頭の中に描き出しながら何時いつの間にか五番町の宏壮こうそうな夫人の邸宅の前に立っている自分を見出した。

お濠ほりの堤とての青草や、向う側の堤の松や、大使館前の葉桜の林などには、十日ほど前に来たときなどよりも、もっと激しい夏の色が動いていた。

十日ほど前には、可なりビク／＼と潜くぐった花崗石みかげいしらしい大石門を、今日は可なり自信に充みちた歩調で潜ることが出来た。

楓かえでを植え込である馬車廻しの中に、たゞ一本の百日紅さるすべりが、もう可なり強い日光の中に、赤く咲き乱れているのが目に付いた。

追さすに、大理石の柱が、並んでいる車寄せに立ったとき、胸があやしく動揺するのを感じた。が、夫人が別れ際ぎわに、再び繰り返して、

「本当にお暇なとき、何時でもいらして下さい。誰も気の置ける人はいませんのよ。妾わたくしがお山の大将をしているのでございますから。」と、言った言葉が、彼に元氣を与えた。その上に、あれほど堅く約束した以上、屹度心きつとから待っていて呉くれるに違ない。心から、歓び迎えて呉れるに違ない。そう思いながら、彼は「押せ！」と、仏蘭西語で書いてある

呼鈴に手を触れた。

この前、来たときと同じように、小さい軽い靴音が、それに応じた。扉が静に押し開けられると、一度見たことのある少年が、名刺受の銀の盆を、手にしながら、笑靨のある可愛い顔を現した。

「あのう、奥様にお目にかゝりたいのですが。」

信一郎が、そう言うとき少年は待っていたと言わんばかりに、

「失礼でございますが、渥美さまとおっしゃいますか。」

信一郎は軽く肯いた。

「渥美さまなら、直ぐ何うかお通り下さいませ。」

少年は、慇懃に扉を開けて、奥を指した。

「何うか此方へ。今日は奥の方の客間にいらつしやいますから。」

敷き詰めてある青い絨毯の上を、少年の後から歩む信一郎の心は、可なり激しく興奮した。自分の名前を、ちゃんと玄関番へ伝えてある夫人の心遣いが、嬉しかった。一夜夫人と語り明したことさえ生涯に二度と得がたい幸福であると思っていた。それが、一夜限りの空しい夢と消えないで、実生活の上に、ちゃんとした根を下して来たことが、信一

郎には此上なく嬉しかった。彼は絨毯の上を、しっかりと歩んでいた積であつたが、もし傍觀者があつたならば、その足付が、宛然躍っているように見えたかも知れない。夫人と、美しい客間で二人限り、何の邪魔もなしに、日曜の午後を愉快に語り暮すことが出来る。そうした楽しい予感で、信一郎の心は、はち切れそうに一杯だつた。

長い廊下を、十間ばかり来たとき、少年は立ち止まつて、其処の扉を指した。

「此方でございます。」

信一郎は、その中に瑠璃子夫人が、腕椅子に身体を埋ませるように掛けながら、自分を待つてゐるのを想像した。

彼は、興奮の余り、かすかに顫えそうな手を扉の把手にかけた。彼が、胸一杯の幸福と歓喜とに充されて、その扉を静かに開けたとき、部屋の中から、波の崩れるように、ワーツと彼を襲つて来たものは、数多い男性が一斉に笑つた笑い声だつた。彼は、不意に頭から、水をかけられたように、ゾツとして立ち竦んだ。

彼がハツと立ち竦んだ時には、もう半身は客間の中に入っていた。

凡てが、意外だった。瑠璃子夫人の華奢なスラリとした、身体の代りに、其処に十人に近い男性が色々な椅子に、いろいろな姿勢で以って陣取っていた。瑠璃子夫人はと見ると、これらの惑星に囲まれた太陽のように、客間の中央に、女王のような美しさと威厳とを以て、大きい、彼女の身体を埋めてしまいそうな腕椅子に、ゆったりと腰を下していた。楽しい予想が、滅茶々々になってしまった信一郎は、もし事情が許すならば、一目散に逃げ出したいと思った。が、彼が一足踏み入れた瞬間に、もうみんなの視線は、彼の上に菟まつていた。

「あゝ、お前もやって来たのだな。」と、云ったような表情が、薄笑いと共に、彼等の顔の上に浮んでいた。信一郎は、そうした表情に依って可なり傷つけられた。

瑠璃子夫人は、遠に目敏く彼を見ると、直ぐ立ち上った。

「あ、よくいらつしやいました。さあ、どうぞ。お掛け下さいまし。先刻からお待ちしていました。」

そう云いながら、彼女は部屋の中を見廻して、空椅子を見付けると、その空椅子の直ぐ傍にいた学生に、

「あゝ阿部さん一寸その椅子を！」と、云った。

するとその学生は、命令をでも受けたように、

「はい！」と、云つて気軽に立ち上ると、その椅子を、夫人の美しい眼で、命ずるまゝに、夫人の腕椅子の直ぐ傍へ持つて来た。

「さあ！ お掛けなさいませ。」

そう云つて、夫人は信一郎を麾さしまねいた。孰どちらかと云えば、小心な信一郎は、多くの先客を押し分けて、夫人の傍近く坐すわることが、可なり心苦しかった。彼は、自分の頬が、可なりほてつて来るのに気が付いた。

信一郎が椅子に着こうとすると夫人は一寸押し止めるようにしながら云った。

「そうく。一寸御紹介して置きますわ。この方、法学士の渥美信一郎さん。三菱みつびしへ出ていらつしやる。それから、茲にいらつしやる方は、——そう右の端から順番に起立していただくのですね、さあ小山さん！」

と彼女は傍若無人と云つてもよいように、一番縁側の近くに坐っている、若いモーニングを着た紳士を指した。紳士は、柔順すなおにモジくしながら立ち上った。

「外務省に出ていらつしやる小山男爵だんしゃく。その次の方が、洋画家の永島龍太さん。其その

次の方が、帝大の文科の三宅さん、作家志望でいらつしやる。その次の方が、慶応の理財科の阿部さん、第一銀行の重役の阿部保さんのお子さん。その次の方が日本生命へ出ていらつしやる深井さん、高商出身の。その次の方が、寺島さん、御存じ？ 近代劇協会にいたことのある方ですわ。其の次の方は、芳岡さん！ 芳岡伯爵の長男でいらつしやる。彼^あ処^{そこ}に一人離れていらつしやる方が、富田さん！ 政友会の少壮代議士として有名な方ですわ。みんな私のお友達ですわ。」

夫人は、夫人の眼に操られて、次から次へと立ち上る男性を、出席簿でも調べるように、淀^{よど}みなく紹介した。

信一郎は、可なり激しい失望と幻滅とで、夫人の言葉が、耳に入らぬ程不愉快だった。

自分一人を友達として選ぶと云った夫人が、十人に近い男性を、友人として自分に紹介しようとは、彼は憤怒^{ふんぬ}と嫉妬^{しつと}との入り交じったような激昂で、眼が眩^{くら}めくようにさえ感じた。彼は直ぐ席を蹴^けつて帰りたいと思った。が、何事もないように、こぼれるように微笑している夫人の美しい顔を見てみると、胸の中の激しい憤怒が春風に解くるように、何時^{いつ}の間にか、消えてゆくのを感じた。

コロネーションに結った黒髪は、夫人の長身にピッタリと似合っていた。黒地に目も醒^さ

めるような白い棒^{ぼうじま}縞のお召が、夫人の若々しさを一層引立てゝいた。白地の^{フランス}仏蘭西縮緬^{ちりめ}の丸帯に、施された薔薇^{ばら}の刺^し繡^{ゆう}は、匂^{にお}入りと見え、人の心を魅^めするような芳香が、夫人の身边を包んでいる。

信一郎の失望も憤怒も、夫人の鮮^{あざやか}な姿を見ていると、何時の間にか撫^なでられるように、和んで来るのだった。

四

「渥美さん！ 今大変な議論が始まっているのでございますよ。明治時代第一の文豪は、誰だろうと云^いう問題なのでございますよ。貴君^{あなた}の御説も伺^{うかが}わして下さいませな。」

夫人は、信一郎を会話の^{けんない}圈内に入れるように、取り倣^なして呉^くれた。が、初めて顔を合^あわす未知の人々を相手にして、直^すぐおいそれ！と文学談などをやる気にはなれなかった。その上に、夫人から、帝劇のボックスで聴いた「こんなに打ち解けた話をするのは、貴君が初めてなのよ。」と、云うような、今となつては白々しい嘘^{うそ}が、彼の心を抉^{えぐ}るように思^{おも}ひ出された。

「だって奥さん！ 独歩には、いゝ芽があるかも知れません。が、然しあの方は先駆者だ
と思うのです。本当に完成した作家ではないと思うのです。」

信一郎が、何も云い出さないのを見ると、三宅と云う文科の学生が、可なり熱心な口調
でそう云った。先刻から続いて、明治末期の小説家国木田独歩を論じているらしかった。

「それに、独歩のような作品は、外国の自然派の作家には幾何でもあるのだからね。先駆
者と云うよりも、或意味では移入者だ。日本の文学に対して、ある新鮮さを寄与したこと
は確だが、それがあの人の創造であるとは云われないね。外国文学の移植なのだ。ねえ！
そうではありませんか、奥さん！」

モーニングを着た小山男爵は、自分の見識に対する夫人の賞讃を期待している
ように、自信に充ちて云った。

「でも妾、可なり独歩を買っていますのよ。明治時代の作家で、本当に人生を見ていた作
家は、独歩の外にそう沢山はないように思いますのよ。ねえ、そうじゃございませんか。
渥美さん。」

夫人は、多くの男性の中から、信一郎丈を、選んだように、信一郎の賛意を求めた。が、
信一郎は不幸にも、独歩の作品を、余り沢山読んでいなかった。四五年も前に、『運命論

者』や『牛肉と馬鈴薯』^{ばれいしょ}などを讀んだことがあるが、それが何う云う作品であつたか、もう記憶にはなかつた。が、夫人に話しかけられて、たゞ^{もうじゆうてき}盲從的に返答することも出来なかつた。その上、彼は周囲の人達に対する手前、何か彼にか自分の意見を云わねばならぬと思つた。

「そうかも知れません。が、明治文壇の第一の文豪として推すのには、少し偏しているように思ふのです。やはり、月並ですが、明治の文学は紅葉などに代表させたいと思ふのです。」

「尾崎紅葉！」小山男爵は、『クスツ』と冷笑するような口調で云つた。

「『金色夜叉』^{やしや}なんか、今讀むと全然通俗小説ですね。」

文科の学生の三宅が、その冷笑を説明するように、吐出すように云つた。

瑠璃子夫人は、三宅の思い切つた断定を嘉納^{かのう}するように、ニツと微笑^{びしょう}を洩した。信一郎は初めて、口を入れて、直ぐ横^{よこつたら}面^{たた}を叩かれたように思つた。瑠璃子夫人までが、微笑^{もつ}で以て、相手の意見を裏書したことが、更に彼の心を傷けた。彼は思わず、ムカ／＼となつて来るのを何うともすることが出来なかつた。彼は、自分の顔色が変わるのを、自分で感じながら、死身になつて口を開いた。

「『金色夜叉』を通俗小説だと云うのですか。」

彼の口調は、詰問きつもんになつていた。

「無論、それは読む者の趣味の程度に依よることだが、僕には全然通俗小説だと思われるのです。」

若い文科大学生は、何の遠慮もしないで、彼の信念を昂こうぜん然と語った。

「それは、貴君あなたが作品と時代と云うことを考えないからです。現在の文壇の標準から云えば、『金色夜叉』の題目テーマなんか、通俗小説に違ちがいなんです。が、然しそれは『金色夜叉』の書かれた明治三十五年から、現在まで二十年も経過していることを忘れてゐるからです。現在の文壇で、貴君が芸術的小説だと信じてゐるものでも、二十年も経たてば、みんな通俗小説になつてしまふのです。過去の作品を論ずるのには、時代と云うことを考えなければ駄目です。『金色夜叉』は今読めば通俗小説かも知れませんが、明治時代の文学としては、立派な代表的作品です。」

信一郎は、思ひの外に、スラ／＼と出て来る自分の雄弁に興奮してゐた。

「過去の文学を論ずるには、やはり文学史的に見なければ駄目です。」

彼は、きつぱりと断定するように云つた。

「それもそうですわね。」

瑠璃子夫人は、信一郎の素人しろうと離れした主張を、感心したように、しみ／＼そう云った。信一郎は俄ににわか勇敢になつて来た。

五

瑠璃子夫人が、新来の信一郎、殊にこと文学などの分りそうもない会社員の信一郎の言葉に、賛成したのを見ると、今度は三宅と小山男だんしゃく爵との二人が、躍氣になった。

殊に青年の三宅は、その若々しい浅黒い顔を、心持薄赤くしながら可なり興奮した調子で云った。

「時代が経てば、どんな芸術的小説でも、通俗小説になる。そんな馬鹿ばかな話があるものですか。芸術的小説は何時いつが来たつて、芸術的小説ですよ。日本の作家でも、西鶴さいかくなどの小説には、何時が来ても亡びほろない芸術的分子がありますよ。天才的な閃ひらめきがありますよ。それに比べると、尾崎紅葉なんか、徹頭徹尾通俗小説ですよ。紅葉の考え方とか物の観方みかたと云うものは、常識の範囲を、一步も出ていないのですからね。たゞ、洗煉せんれんされた常識に

過ぎないのですよ。例えば『三人妻』など云う作品だつて如何にも三人の妻の性格を描き分けてあるけれども、それが世間に有り触れた常識的型に過ぎないのですからね。紅葉を以て、明治時代の文学的常識を、代表させるのなら差支えないが、第一の文豪として、紅葉を推す位なら、むしろ露伴柳浪美妙、そんな人の方を僕は推したいね。」

三宅の語り終るのを待ち兼ねたように、小山男爵は、横から口を入れた。

「第一『金色夜叉』なんか、あんなに世間で読まれていると云うことが、通俗小説である第一の証拠だよ。万人向きの小説なんかに、碌なものがある訳はないからね。」

二人の、攻撃的な挑戦的な口調を聴いていると、信一郎もつい、ムカ／＼となつてしまつた。瑠璃子夫人はと見ると、その平静な顔に、喉かけるような微笑を湛えて、『貴君も負けないで、しっかりおやりなさい。』と、云うように信一郎の顔を見ていた。

「それは可笑しいですな。」

そう云いながら、信一郎は何処か貴族的な傲慢さが、漂うている小山男爵の顔をじつと見た。

「そんな暴論はありませんよ。広く読まれているのが、通俗小説の証拠ですつて、そんな暴論はないと思いますね。そう云う議論をすれば、沙翁の戯曲だつて、通俗戯曲だと

云うことになるじやありませんか。ホーマアの詩だって、ダンテの神曲だって、みんな広く読まれていると云う点で、通俗的作品と云うことになりそうですね。僕は、そうは思いませんよ。それと反対に、立派な芸術的作品ほど、時代が経てば、だん／＼通俗化して行くのだと思うのですね。トルストイの作品が日本などでも段々通俗化して来たように、通俗化して行かない作品こそ、却^{かえ}って何かの欠陥があると思うのですね。御覧なさい！馬琴でも西鶴でも、通俗化して行けばこそ、後代に伝わるのじやありませんか。『金色夜叉』が通俗化しているからと云って、あの小説の芸術的価値を否定することは出来ませんよ。

僕は芸術的に秀^{すぐ}れていればこそ、民衆の教養が進むに従って、段々通俗化して行つたのだと思うのです。紅葉の考え方や、観方はいかにも常識的かも知れません。が、然し作品全体の味とかその表現などにこそ、却って芸術的な価値があるのじやありませんか。あの作品の規模^{きぼ}の大ききから云つても、画面的に描き出す手腕から云つても、明治時代無二の作家と云つてもよいと思うのです。いや、あの鼈^{べつ}甲^{こう}牡丹^{ぼたん}のように、絢^{けん}爛^{らん}華麗な文章文を取つても、優に明治文学の代表者として、推す価値が十分だと思ふのです。」

信一郎は、可なり熱狂して喋^{しゃべ}った。法科に籍を置いていたが、高等学校に入学の当時には、父の反対さえなければ、欣^{よろこ}んで文科をやった筈^{はず}の信一郎は、文学に就ては自分自身の

見識を持っていた。

信一郎の意外な雄弁に、半可な文学通に過ぎない小山男爵は、もうとつくに圧倒されたと見え、その白い頬を、心持赤くしながら、不快そうに黙ってしまった。

三宅は、云い込められた口惜しさを、何うかして晴そうと、駁論ばくろんの筋道を考えているらしく口の辺りをモグ／＼させていた。

「渥美さんは、本当に立派な文芸批評家でいらつしやる。わたくし妾全く感心してしまいましたわ。」

瑠璃子夫人は、心から感心したように、賞讃しょうさんの微笑を信一郎に注いだ。

信一郎は、女王の御前仕合で、見事な勝利を獲た騎士のように、晴れがましい揚々たる気持になっていた。

「然し……」と、三宅と云う青年が、必死になつて駁論を初めようとした時だった。廊下に面した扉を、外からコツ／＼と叩く音がした。たた

六

「誰方？」
どなた

夫人は、扉を叩く音に応じてそう云った。
たた

「僕です。」

外の人は明晰な、美しい声でそう答えた。
めいせい

「あら、秋山さんなの。丁度よいところへ。」

夫人は、そう云いながら、いそぐと椅子を離れた。信一郎が、入って来たときは、夫人はたゞ椅子から、腰を浮かした丈だったのに。

夫人が、手ずから扉を開けると、『僕です。』と、名乗った男は、軽く会釈をしながら、入って来た。信一郎は、一目見たときに、何処かで見覚えのある顔だと思ったが、一寸思い出せなかった。が、一目見た丈で、作家か美術家であることは、直ぐ解った。白い面長な顔に、黒い長髪を獅子の立髪か何かのように、振り乱していた。が、頭は極端に奔放であるにも拘わらず、薩摩上布の衣物に、鉄無地の縞の薄羽織を着た姿は、可なり瀟洒たるものだった。夫人はその男とは、立ちながら話した。
ようしや
しぱら
ごぶさた

「暫く御無沙汰致しました。」

「ほんとうに長い間お見えになりませんでしたのね。箱根へお出でになったって、新聞に

出ていましたが、行らつしやらなかったの。」

「いや、何処へも行きやしません。」

「それじゃ、やつぱり例の長篇で苦しんでいらつたの。本当に、妾の家へいらつしやる道を忘れておしまいになったのかと思つていましたの。ねえ！ 三宅さん。」

夫人は、三宅と云う学生を顧みた。

「やあ！」

「やあ！」

三宅とその男とは顔を見合して挨拶した。

「本当に、暫らくお見えになりませんでしたね。貴君が、いらつしやらないと、此処の客間も淋しくていけない。」

三宅は、後輩が先輩に迎合するような、口の利き方をした。

「さあ！ 秋山さん！ 此方へお掛けなさいませ。本当によい所へ入らつたわ。今貴君に断定を下していたゞきたい問題が、起つていますのよ。」

そう云いながら、今度は夫人自ら、空いた椅子を、自分の傍へ、置き換えた。

「さあ！ お掛けなさいませ！ 貴君の御意見が、伺いたいなのよ。ねえ！ 三宅さん！」

信一郎に、説き^お圧されていた三宅は、援兵を得たように、勇み立った。

「さあ、是非秋山さんの御意見を伺いたいものです。ねえ！ 秋山さん、今明治時代の第一の小説家は、誰かと云う問題が、起っているのですがね、貴君のお考えは、何^どうでしょう。こう云う問題は、専門家でなければ駄目ですからね。」

三宅は、最後の言葉を、信一郎に当てこするように云った。瑠璃子夫人までが、その最後の言葉を説明するように信一郎に云った。

「此^この方、秋山正雄さん、御存じ！ あの赤^{あか}門^{もん}派の新進作家の。」

秋山正雄、そう云われて見れば、最初見覚えがあると思ったのは、間違っていないかったのだ。信一郎が一高の一年に入った時、その頃三年であつた秋山氏は文科の秀才として、何時^{いつ}も校友会雑誌に、詩や評論を書いていた。それが、大学を出ると、見る間に、メキノと売り出して、今では新進作家の第一人者として文壇を圧倒するような盛名を馳^はせている。その上、教養の広く多方面な点では若い小説家としては珍らしいと云われている人だった。

信一郎は、自分が有頂天になって、喋^{しゃ}べった文学論が、こうした人に依^よって、批判される結果になったかと思うと、可なりイヤな羞^{はず}かしい気がした。有頂天になっていた彼の心持

は忽ち奈落の底へまで、引きずり落された。場合に依つては、此の教養の深い文学者——しかも先輩に当っている——と、文学論を戦わせなければならぬかと思うと、彼は思わず冷汗が背中に湧いて来るのを感じた。

信一郎の心が、不快な動揺に悩まされているのを外に、秋山氏は、今火を点けた金口の煙草を燻らしながら、落着いた調子で云つた。

「それは、大問題ですな。僕の意見を述べる前に、兎に角皆様の御意見を承わろうじやありませんか。」

そう云いながら、秋山氏は額に掩いかゝる長髪を、二三度続けざまに後へ掻き上げた。

七

「大分いろいろな御意見が出たのですがね。茲にいらつしやる渥美君、確かそう仰しいましたね。」三宅は、一寸信一郎の方を振り顧つた。「大変紅葉をお説きになるのです。紅葉を措いて明治時代の文豪は、外にないだろうと、こう仰しやるのです。文章丈を取つても、鼈甲牡丹のような絢爛さがあるとか何とか仰しやるのです。」

三宅が、秋山氏に信一郎の持説を伝えている語調の中には、『此の素人が』と云った語気が、ありありと動いていた。秋山氏は、いかにも小説家らしく澄んだ眼で、信一郎の方をジロリと一瞥したが、吸いさしの金口の火を、鉄の灰皿で、擦り消しながら、「鼈甲牡丹の絢爛さ！なるほど、うまい形容だな。だが、擬の鼈甲牡丹なら三四十銭で、其処らの小間物屋に売っていいそうですね。」

瑠璃子夫人を初め、一座の人々が、秋山氏の皮肉を、どつと笑った。

「紅葉山人の絢爛さも、きいちゃん、みいちゃんの読者を欣ばせる擬の鼈甲牡丹じやありませんかね。一寸見は、光沢があつても、触って見ると、牛の骨か何かだと云うことが、直ぐ分りそうな。」

秋山氏が、文壇での論戦などでも、自分自身の溢れるような才氣に乗じて、常に相手を馬鹿にしたような、おひやかしてしまふような態度に出ることは、信一郎は予々知っていた。それが、妙な羽目から、自分一人に向けられているのだと思うと、信一郎は不愉快とも憤怒とも付かぬ氣持で、胸が一杯だった。が、こうした文学者を相手に、議論を戦わす勇氣も自信もなかった。相手の辛辣な皮肉を黙々として、聴いている外はなかった。たゞ、文壇の花形ともある秋山氏が、自分などの素人を捕えて、真向から皮肉を浴びせて

いるのが、可なり大人気ないようにも思われて、それが恨めしくも、憤^{いきどお}ろしくもあつた。

「第一『金色夜叉^{やしゃ}』なんか、今読んで見ると全然通俗小説ですね。」

秋山氏は、一刀の下に、何かを両断するように云った。

瑠璃子夫人は、『おや。』と云つたような軽い叫びを挙げながら云った。

「三宅さんも、先刻そんなことを云つたのよ。あ、分つた！ 三宅さんのは秋山さんの受売^{うり}だつたのね。」

三宅は、赤面したように、頭を搔^かいた。一座は、信一郎を除いて、皆ドツと笑つた。

秋山氏は、皮肉な微笑を浮べながら、

「いや、三宅君と期せずして意見を同じくしたのは、光栄ですな。」

一座は、秋山氏の皮肉を、又ドツと笑つた。その笑が静まるのを待ち兼ねて、三宅が云つた。

「今僕が、その『金色夜叉』通俗小説論を持ち出したのです。すると、渥美さんが云われるのです。現在の我々の標準で律すれば、『金色夜叉』は通俗小説かも知れない。が、作品を論ずるには、その時代を考えなければならぬ。文学史的に見なければならぬ。こ
う仰しやるのです。」

「文学史的に見る。それは卓見だ。」秋山氏は、ニヤ／＼と冷笑とも微笑とも付かぬ笑いを浮かべながら云った。

「だが、紅葉山人と同時代の人間が、みんな我々の眼から見て、通俗小説を書いているのなら、『金色夜叉』が通俗小説であつても、一向差支ないが、紅葉山人と同時代に生きていて、我々の眼から見ても、立派な芸術小説をかいている人が外にあるのですからね。幾何文学史的に見ても、紅葉を第一の小説家として、許すことは僕には出来ませんね。文学史的に見れば、紅葉山人などは、明治文学の代表者と云うよりも、徳川時代文学の殿将ですね。あの人の考え方にも、観方にも描き方にも、徳川時代文学の殻が、こびりついていてるじゃありませんか。」

追の信一郎も、黙っていることは出来なかつた。

「そう云う観方をすれば、明治時代の文学は、全体として徳川時代の文学の伝統を引いているじゃありませんか。何も、紅葉一人丈じゃないと思えますね。」

「いや、徳川時代文学の糟粕などを、少しも嘗めないで、明治時代独特の小説をかいている作家がありますよ。」

「そんな作家が、本当にありますか。」

信一郎も可なり激した。

「ありますとも。」

秋山氏は、水の如く冷たく云い放った。

なんばうふ
汝妖婦よ！

一

「誰です。一体その人は。」

信一郎は、可なり急ぎ込んで訊いた。

が、秋山氏は落着いたまゝ、冷然として云った。

「然し、こう云う問題は、銘々の主観の問題です。僕が、此の人がこうだと云つても、貴君にそれが分らなければ、それまでの話ですが、兎に角云つて見ましょう。それは、誰でもありません。あの樋口一葉です。」

秋山氏は、それに少しの疑問もないように、ハッキリと云い切った。

瑠璃子^{るりこ}夫人は、それを聴くと、躍り上るよう^{よろこ}にして欣んだ。

「一葉！ 妾^{わたくし}スツカリ忘れていましたわ。そう／＼一葉がいますね。妾が、今まで読んだ

小説の女主人公の中で、あの『たけくらべ』の中の美登利^{みどり}ほど好きな女性はないのですもの。」

「御尤^{ごもつと}もです。勝気で意地っ張なところが貴女^{あなた}に似ているじゃありませんか。」

秋山氏は、夫人を揶揄^{やゆ}するように云った。

「まさか。」

と、夫人は打ち消したが、其^その比較が、彼女の心持に媚^こび得たことは明かだった。

「一葉！ そう／＼あれは天才だ、夭折^{ようせつ}した天才だ！ 一葉に比べると、紅葉なんか才

気のある凡人に過ぎませんよ。」

小山男^{だんしやく}爵は、信一郎に云い伏せられた腹癒^{はらいせ}がやつと出来たように、得々として口

を挟んだ。

「そうだ！ 『たけくらべ』と『金色夜叉^{やしゃ}』とを比べて見ると、どちらが通俗小説で、ど

ちらが芸術小説だか、ハッキリと分りますね。渥美^{あつみ}さんの御意見じゃ、『金色夜叉』より

も六七年も早く書かれた『たけくらべ』の方が、もっと早く通俗小説になっている筈だが、我々が今読んでも『たけくらべ』は通俗小説じゃありませんね。決してありませんね。」

三宅も、信一郎の方を意地悪く見ながら、そう云った。

其処そこにいた多くの人々も、銘々に口を出した。

「『たけくらべ』！　ありや明治文学第一の傑作ですね。」

「ありや、僕も昔読んだことがある。ありや確にいゝ。」

「あゝそうく、吉原よしわらの附近が、光景になっている小説ですか、それなら私も読んだことがあつた。坊さんの息子か何かがいじやありませんか。」

「女主人公が、それを潜ひそかに恋している。が、勝気なので、口には云い出せない。その中うちに、一寸ちよつとした意地から不和になつてしまふ。」

「信如しんによとか何とか云う坊さんの子が、下駄げたの緒を切らして困っていると、美登利が、紅入友禅か何かの布片きれを出してやるのを、信如が妙な意地と遠慮とで使わない。あの光景なんか今でもハッキリと思ひ出せる。」

代議士の富田氏までが、そんなことを云い出した。こうした一座の迎合を、秋山氏は冷然と、聴き流しながら、最後の断案を下すように云った。

「兎に角、明治の作家の中で、本当に人間の心を描いた作家は、一葉の外にはありませんからね。硯友社けんゆうしゃの作家が、文章などに浮身を窺やっして、本当に人間が描けなかった中で、一葉丈は蕨然ざんぜんとして独自の位置を占めていますからね。一代の驕児きょうじ高山樗牛ちよぎゆうが、一葉丈には頭を下げたのも無理はありませんよ。僕は明治時代第一の文豪として一葉を推しますね。」

秋山氏は、如何いかにも芸術家らしい冷静と力とを以て、昂然こうぜんとそう云い放った。

信一郎は、もう先刻からじりじりと湧わいて来る不愉快さのために、一刻もじつとしてはられないような心持だった。凡てすべが不愉快だった。凡てが、癢しやくに触った。櫟かしの棒をでも持つて、一座の人間を片ツ端から、殴り付けてやりたいようにいらくしていた。

そうした信一郎の心持を、知つてか知らずにか、夫人は何気ないように微笑しながら、「渥美さん！　しっかり遊ばしませ。大変お旗色が悪いようでございますね。」

二

信一郎が、フラ／＼と立ち上るのを見ると、皆は彼がおお大に論ろんじ始めるのかと思っていた。

が、今彼の心には、樋口一葉も尾崎紅葉もなかった。たゞ、瑠璃子夫人に対する——夫人の移り易きこと浮草の如き不信に対する憎みと、恨みとで胸の中が燃え狂っていたのだった。

彼は一刻も早く此席を脱したかった。彼は其処に蒐まっている男性に対しても、激しい憎悪と反感とを感じずにはいられなかった。

「奥さん！ 僕は失礼します。僕は。」

彼は、感情の激しい渦巻のために、何と挨拶してよいのか分らなかった。

彼は、吃りながら、そう云ってしまうと、泳ぐような手付で、並んだ椅子の間を分けながら扉の方へ急いだ。

追に一座の者は固唾を飲んだ。今まで瑠璃子夫人を挟んで、輒当的な論戦の花が咲いたことは幾度となくあったが、そんな時に、形もなく打ち負された方でも、こんなにまで取り擾したものは一人もなかった。

真蒼な顔をして、憤然として、立ち出でて行く信一郎を、皆は呆氣に取られて見送った。

信一郎は、もう美しい瑠璃子夫人にも何の未練もなかった。後に残した華やかな客間を、

心の中で唾棄^{だき}した。夫人の艶美^{えんび}な微笑^{みづ}も蜜^{みつ}のような言葉も、今は空^{くう}の空なることを知った。否^{いな}、空の空なるか、ではなくして、その中に恐ろしい毒を持っていることを知った。それは、目的のための毒ではなくして、毒のための毒であることを知った。彼女は、目的があつて、男性を翻弄^{ほんろう}しているのではなく、たゞ翻弄することの面白さに、翻弄していることを知った。自分の男性に対する魅力^{みんり}を、楽しむために、無用に男性を魅^みしていることを知った。丁度、激しい毒薬の所有者が、その毒の効果を自慢^{みだり}して妄^{みだり}に人を毒殺するように。『汝妖婦^{なんぎょうふ}よ！』

信一郎は、心の中で、そう叫び続けた。彼は、客間から玄関までの十間に近い廊下を、電光^{でんくわ}の如^{ごと}くに歩んだ。

周章^{あわ}てゝ見送ろうとする玄関番の少年にも、彼は一瞥^{いちべつ}をも与えなかった。

彼は突き破るような勢いで、玄関の扉に手をかけた。

が、その刹那^{せつな}であつた。

信一郎の興奮した耳に、冷水を注ぐように、

「渥美さん！ 渥美さん！ 一寸^{ちよつと}お待ち下さい。」と、云う夫人の美しい言葉が聞えて

来た。信一郎はそれを船人の命を奪^{さい}う妖魚^{サイレン}の声として、そのまゝ聞き流して、戸外へ飛

び出そうと思つた。が、彼のそうした決心にも拘^かわらず、彼の右の手は、しびれたように、扉^{ハンドル}の把手にかゝつたまゝ動かなかつた。

「何^どうなすつたのです。本当にびつくりいたしましたわ。何をそんなにお腹立ち遊ばしたの。」夫人は小走りに信一郎に近づきながら、可愛^{かわい}い小さい息をはずませながら云つた。心配そうに見張つた黒い美しい眸^{ひとみ}、象牙彫^{ぞうげぼり}のように気高い鼻、端正な唇、咬^{しろ}い艶^{つや}やかな頬、こうした神々^{こうごう}しい藹^{ろう}たけた夫人の顔を見ていると、彼女の嘘、偽りが、夢にもあらうとは思われなかつた。彼女の微笑や言葉の中に、微塵^{みじん}賤^{いや}しい虚偽が、潜^{ひそ}んでいるとは思われなかつた。

「何うして、そんなに早くお帰り遊ばすの。妾^{わたくし}、皆さんがお帰りになつた後で、貴君^{あなた}と丈で、ゆっくりお話していたかつたの。秋山さんと云う方は、本当にあまんじやくよ。反対のために反対していらつしやるのですもの。それをまた、みんなが迎合するのだから、厭^{いや}になつてしまいますわね。客間^{サロ}にいらつしやるのがお厭なら、図書室^{ライブラリー}の方へ、御案内いたしますわ。あなたのお好きな『紅葉全集』でも、お読みになつて、待っていらつしやいませ。妾、もう三十分もすれば、何とか口実を見付けて、皆さんに帰っていたゞきますわ。ほんの少しの間、待っていて下さらない？」

三

『ほんの少し待っていて下さらない?』と、云う夫人の言葉を聴くと、『汝妖婦よ!』と、心の中で叫んでいた信一郎の決心も、またグラ／＼と揺／＼とした。

が、彼は揺／＼とする自分の心を、辛うじて、最後の所で、グツと引き止めることが出来た。お前はもう既に、夫人の蜜の^{みつ}ような言葉に乗ぜられて、散々な目にあったではないか。再びお前は、夫人から何を求めようとしているのだ。お前が夫人の言葉を信ずれば、信ずるほど、夫人のお前に与うるものは、幻滅^{げんめつ}と侮辱との外には、何もないのだ。男性の威厳を思え! 今日夫人から受けた幻滅と侮辱とは、まだ夫人に対するお前の幻覚を破るのに足りなかったのか。男性の威厳を思え! 夫人の言葉をスツパリと突き放してしまえ! 信一郎の心の奥に、弱いながら、そう叫ぶ声があった。

信一郎は、心の中に夫人の美しさに、抵抗し得る丈の勇気を、やっと^{あつ}蒐めながら云った。『でも、奥さん! 私、このまゝ^{いとま}お暇いたした方がいゝように思うのです。あゝした立派な方が^{あつ}蒐まっている客間には、私のような者は全く無用です。どうも、大変お邪魔しまし

た。」

信一郎は、可なりキツパリと断りながら、急いで踵を返そうとした。

「まあ！ 貴君、何をそんなにお怒り遊ばしたの、何か妾が貴君のお気に触るようなことをいたしましたの、折角いらして下すって、直ぐお帰りになるなんて、余りじやありませんか。客間に蒐まつていらつしやる方なんて、妾仕方なくお相手いたしておりますのよ。」

妾が、妾の方から求めてお友達になりたいと思つたのは、本当は貴君お一人なのですよ。」

信一郎は、そう云いながら、何事もないように、笑っている夫人の美しさに、ある凄味をさえ感じた。夫人の口吻から察すれば、夫人は周囲に集まつている男性を、蠅同様に

思っているのかも知れない。もし、そうだとすると、信一郎なども、新来の初心な蠅として、たゞ一寸した珍しさに引き止められているのかも知れない。そうした上部丈けの甘言に乗って、ウカ／＼と夫人の掌上などに、止まつている中には、あの象牙骨の華奢な扇子か何かで、ビシヤリと一打にされるのが、当然の帰結であるかも知れないと信一郎は思つた。

「でも、今日は帰らせていたゞきたいと思ひます。又改めて伺ひたいと思ひますから。」
信一郎は、可なり強くなつて、キツパリと云つた。

夫人も、さすが遺にそれ以上は、勧めなかった。

「あらそう。何どうしてもお帰りになるのじゃ仕方がありませんわ。やっぱり、妾の心持が、貴君あなたにはよく分らないのですね。じゃ、左様なら。」

夫人は、淡々として、そう云い切ると、グルリと身体を廻めくらして、客間の方へ歩き出した。

夫人から引き止められている内は、それを振切つて行く勇氣があつた。が、こうあつさりと軽く突き放されると、信一郎は何だか、拍子抜けがして淋さみしかった。

夫人と別れてしまうことに依よつて、異常な絢爛けんらんな人生の悦樂を、味う機会が、永久に失われてしまうようにも思われた。自分の人生に、明けかゝった冒険ロマンズあけぼのの曙が、またそのまゝ夜の方へ、逆戻りしたようにも思われた。

が、危険な華やかな毒草の美しさよりも、慎つつましい、しおらしい花の美しさ、今彼の心の裡うちにのみがえった。

淋しいしかし安心な、暗いしかし質素な心持で、彼は大理石の丸柱の立つた車寄を静に下つた。もう此この家を二度と訪おもうことはあるまい。あの美しい夫人の面影に、再び咫尺しせきすることもあるまい。彼がそんなことを考えながら、トボくと門の方へ歩みかけた時だつ

た。彼はふと、門への道に添う植込みの間から、左に透けて見える庭園に、語り合っている二人の男性を見たのである。彼は、その人影を見たときに、ゾツとして其処そこに立ち止まらずにはいられなかった。

四

信一郎が、駭おどろいて立ち竦すくんだのも、無理ではなかった。玄関から門への道に添う植込みから、透けて見える、キッチンと整った庭園の丁度真中に、庭石に腰かけながら、語り合っている二人の男を見たのである。

二人の男を見たことに、不思議はなかった。が、その二人の男が、両方とも、彼の心に恐ろしい激動を与えた。

彼の方へ面を向けて、腰を下している学生姿の男を見た時に、彼は思わず『アッ！』と、声を立てようとした。品のよい鼻、白皙はくせきの面、それは自分の介抱を受けながら、横死した青木淳じゅんと瓜二うりつの顔だった。それが、白昼の、かほど、けざやかな太陽の下遭遇でなかつたならば、彼はそれを不慮の死を遂げた青年の亡霊あやまと思い過つたかも知れなかった。

が、彼の理性が働いた。彼は一時は、駭いたものの直ぐその青年が、いつかの葬場で見たことのある青木淳の弟であることに、気が付いた。

然し、彼が最初の駭きから、やつと恢復した時、今度は第二の駭きが彼を待っていた。

青年と相対して語っている男は、紛れもなく海軍士官の軍服を着けている。海軍士官の軍服に気が付いたとき、信一郎の頭に、電光のように閃いたものは、村上海軍大尉という名前であった。青年が、遺して行つた手記の中に出て来る村上海軍大尉と云う名前だった。

青木淳が、烈しい忿恨を以て、ノートに書き付けた文句が、信一郎の心に、アリ／＼と甦つて来た。

『昨日自分は、村上海軍大尉と共に、彼女の家の庭園で、彼女の帰宅するのを待っていた。その時に、自分はふと、大尉がその軍服の腕を捲り上げて、腕時計を出して見ているのに気が付いた。よく見ると、その時計は、自分の時計に酷似しているのである。自分はそのとなく、一見を願った。自分が、その時計を、大尉の頑丈な手首から、取り外したときの駭きは、何んなであつたろう。若し、大尉が其処に居合せなかつたら、自分は思わず叫声を挙げたに違ない。』

信一郎は、青木淳の弟と語っている軍服姿の男を見たときに、それが手記の中の村上大尉であることに、もう何の疑もなかった。もし、それが、村上海軍大尉であるとしたならば、青木淳と大尉との双方に、同じ白金の時計を与えて、『これは、妾の貴君に対する愛の印として、貴君に差し上げますのよ。本当は、かけ替のない秘蔵の品物ですけれど。』と、云いながら二人を翻弄し去った女性が、果して何人であるかが、信一郎にはもうハッキリと分ってしまった。

『汝妖婦よ！』

彼は心の中で再びそう声高く、叫ばずにはいられなかった。

が、信一郎の心を、もっと痛めたことは、兄が恐ろしく美しい蜘蛛の糸に操られて、悲惨な横死を——形は奇禍であるが、心は自殺を——遂げたと云うことを夢にも知らないで、その肉親の弟が、又同じ蜘蛛の網に、ウカ／＼とか／＼そうになっていることだった。いや恐らくかゝっているのかも知れない。いや、兄と同じように、もう白金の時計を貰っているのかも知れない。あゝして、話している中に、相手の海軍大尉の腕時計に、気が付くのかも知れない。兄の血と同じ血を持っている筈の弟は、それを見て兄と同じように激

昂^うする。兄と同じように自殺を決心する。

そう考えて来ると、信一郎は、烈々と輝いている七月の太陽の下に、尚^な周囲^{あわたり}が暗くなるように思った。兄が陥^おつた深淵^{しんえん}へ又、弟が陥^おちかかっている。それほど、悲惨なことはない。そう思うと、信一郎は、

『おい！ 君！』と、高声に注意してやりたい希望に動かされた。が、それと同時に、血を分けた兄弟を、兄に悲惨な死を遂げしめた上に、更に弟をも近づけて、翻弄しようとする毒婦を憎まずにはいられなかつた。

『汝妖婦よ！』彼は、心の中でもう一度そう叫んだ。が、信一郎が、これほど心を痛めているにも拘^かわらず、当の青年は、何が可笑^おしいのか、軽く上品に笑っているのが、手に取るように聞えて来た。

信一郎は、見るべからざるものを見たように、面を背^{そむ}けて足早に門を駈^かけ出^いでたのである。

五

新宿行の電車に乗ってから、信一郎の心は憤怒や憎惡の烈しい渦巻で一杯だった。

瑠璃子夫人こそ、白金の時計を返すべき当の本人であることが解ると、夫人の美しさや気高さに対する讃嘆の心は、影もなくなつて、憎惡と軽い恐怖とが、信一郎の心に湧いた。

青木淳の死の原因が、直接ではなくても、間接な原因が、自分であることを知りながら、嫣然として時計を受け取った夫人の態度が、空恐しいように思い返された。『妾が預つて本当の持主に返して上げます。』と、事もなげに云い放った夫人の美しい面影が、空恐ろしいように思い返された。

『が、彼女と面と向つて、不信を詰責しようとしたとき、自分は却つて、彼女から忍びがたい恥かしめを受けた。自分は小児の如く、翻弄され、奴隸の如く卑しめられた。しかも美しい彼女の前に出ると、唾のようにたわいもなく、黙り込む自分だった。自分は憤と恨との為になく、顫えながら而も指一本彼女に触れることが出来なかつた。自分は力と勇気とが、欲しかつた。彼女の華奢な心臓を、一思いに突き刺し得る丈の力と勇気とを。……彼女を心から憎みながら、しかも片時も忘れることが出来ない。彼女が

彼女のサロンで多くの異性に取囲まれながら、あの悩ましき媚態びたいを惜しげもなく、示しているかと思うと、自分の心は、夜の如く暗くなってしまう。自分が彼女を忘れるためには、彼女の存在を無くするか、自分の存在を無くするか二つに一つだと思う。……そうだ、一層死んでやろうかしら。純真な男性の感情を弄もてあそぶことが、どんなに危険であるかを、彼女に思い知らせてやるために。そうだ、自分の真実の血で、彼女の偽の贈物を、真赤に染めてやるのだ。そして、彼女の僅わずに残っている良心を、恥しめてやるのだ。』

青木淳の遺のこして逝いった手記の言葉が、太陽の光に晒さらされたように、何の疑点もなくハッキリと解わかつて来た。彼女が、瑠璃子夫人であることに、もう何の疑いもなかった。純真な青年の感情を弄もんで彼を死に導いた彼女が、瑠璃子夫人であることに、もう何の疑いもなかった。

『汝妖婦なんぎょうふよ!』

信一郎は、十分な確信を以もつて、心の中でそう叫んだ。青年は、彼女に対して、綿々の恨を呑んで死んだのである。白金の時計を『返して呉くれ。』と云うことは、『叩たたき返して呉れ。』と云うことだったのだ。彼女の僅に残っている良心を恥かしめてやるために、叩き

返して呉れと云うことだった。

そうだ！ それを信一郎は、瑠璃子夫人のために、不得要領に捲き上げられてしまったのである。

『取り返せ。もう一度取り返せ！ 取り返してから、叩き返してやれ！』

信一郎の心に、そう叫ぶ声が起った。『それで彼女の僅に残っている良心を恥かしめてやれ。お前は死者の神聖な遺託に背いてはならない。これから取って返して、お前の義務を尽さねばならない。あれほど青年の恨の籠った時計を、不得要領に、返すなど云うことがあるものか。もう一度やり直せ。そしてお前の当然な義務を尽せ。』

信一郎の心の中の或る者が、そう叫び続けた。が、心の中の他の者は、こう呟いた。

『危きに近寄るな。お前は、あの美しい夫人と太刀打が出来ると思うのか。お前は、今の迄危く夫人に翻弄されかけていたではないか。夫人の張る網から、やっと逃れ得たばかりではないか。お前が血相を変えて駈付けても、また夫人の美しい魅力のために、手もなく丸められてしまうのだ。』

こうした硬軟二様の心持の争いの裡に、信一郎は何時の間にか、自分の家近く帰っていた。停留場からは、一町とはなかった。

電車通を、右に折れたとき、半町ばかり彼方かなたの自分の家の前あたりに、一台の自動車が、止まっているのに気が付いた。

六

信一郎の興奮していた眸ひとみには、最初その自動車が、漠然と映っている丈だった。それよりも、彼は自分の家が、近づくに従つて、『社の連中と多摩川へ行く。』などと云いう口実で、家を飛び出しながら、二時間も経たたない裡うちに、早くも帰って行くことが、心配になり出した。また早く、帰宅したことに就いて、妻を納得させる丈の、口実を考え出すことが、可なり心苦しかった。彼は、電車の中でも、何処どこか外で、ゆっくり時間を潰つぶして、夕方になつてから、帰ろうかとさえ思つた。が、彼の本当の心持は、一刻も早く家に帰りたいかつた。妻の静子の優しい温順な面影に、一刻も早く接したかつた。危険な冒険を経た者が、平和な休息を、只管ひたすら欲するように、他人との軋あつれき轢や争いに胸を傷つけられ、瑠璃子夫人に対する幻滅で心を痛めた信一郎は、家庭の持つている平和や、妻の持つている温あたたか味の裡みに、一刻も早く、浴したかつたのである。縦令たとい、もう一度妻を欺あざむく口実を考えて

も、一刻も早く家に帰りたかったのである。

が、彼が一步步、家に近づくに従って、自分の家の前に停っている自動車が、気になり出した。勿論、此の近所に自動車が、停っていることは、珍らしいことではなかった。彼の家から、つい五六軒向うに、ある実業家の愛妾が、住っているために、三日にあげず、自動車がその家の前に、永く長く停まっていた。今日の自動車も、やっぱり何時もの自動車ではないかと、信一郎は最初思っていた。が、近づくに従って、何時もとは、可なり停車の位置が違っているのに気が付いた。何うしても、彼の家を訪ねて来た訪客が、乗り捨てたものとししか見えなかった。

が、段々家に近づくに従って、恐ろしい事実が、漸く分つて来た。何だか見たことのある車台だと云う気がしたのも、無理ではなかった。それは、紛れもなくあの青色大型の、伊太利製の自動車だった。信一郎も一度乗ったことのある、あの自動車だった。そうだが、此の前の日曜の夜に、荏田夫人と同乗した自動車の、寸分も違っていなかった。

夫人が、訪ねて来たのだ！ そう思ったときに、信一郎の心は、烈しく打ち叩かれた。当惑と、ある恐怖とが、胸一杯に充ち満ちた。

出先で、妖怪に逢い這々の体で自分の家に逃げ帰ると、その恐ろしい魔物が、先廻

りして、自分の家に這入り込んである。昔の怪譚にでもありそうな、絶望的な出来事が、信一郎の心を、底から覆してしまった。瑠璃子夫人の美しい脅威に戦いて、家庭の平和の裡に隠れようとすると、相手は、先廻りして、その家庭の平和をまで、掻き擾そうとしてゐる。静かな慎しい家庭と、温和な妻の心をまでも掻き擾そうとしてゐる。

信一郎は、当惑と恐怖とのために、暫くは、道の真中に立ち竦んだまゝ、何うしてよいかわからなかった。その裡に、信一郎の絶望と、恐怖とは、夫人に対する激しい反抗に、變つて行つた。

温和おとなしい妻が、美しい、澆刺はつらつたる夫人の突然な訪問を受けて狼狽ろうばいしている有様が、あり／＼と浮んで来た。自分が、妻に内密で、ああした美しい夫人と、交りを結んでいたと云うことが、どんなに彼女を痛ましめたであらうかと思うと、信一郎は一刻も、じつとしてはいられなかった。温和しい妻が夫人のために、どんなに云いくるめられ、どんなにほんろう翻弄ほんろうされているかも知れぬと思うと、一刻も逡巡しゆんじゆんしているときではないと思つた。自分の彼女に対する不信は、後でどんなにでも、許しを乞えこばい。今は妻を、美しい夫人の圧迫から救つてやるのが第一の急務だと思つた。

それにしても、夫人は何の恨みがあつて、これほどまで、執拗しつように自分を悩ますのであ

ろう。自分を欺いて、客間へ招^よんで恥を搔かせた上に、自分の家庭をまで、搔き擾そうとするのであろうか。今は夫人の美しさに、怖^{おそ}れているときではない。戦え！ 戦つて、彼女の僅^{わず}に残っているかも知れぬ良心を恥しめてやる時だ！ そうだ！ 死んだ青木淳^{じゅん}のためにも、弔^{とむらひ}合戦を戦つてやる時だ！ そう思いながら、信一郎は必死の勇を振つて、敵の城の中へでも飛び込むような勢で、自分の家へ飛び込んだのである。

七

玄関先に立っている、もしくは客間に上り込んでいる妖艶^{ようえん}な夫人の姿を、想像しながら、それに必死に突つかゝつて行く覚悟^{ぼつこ}の臍^{はら}を固めながら、信一郎は自分の家の門を、潜った。

見覚えのある運転手と助手とが、玄関に腰を下しているのが先^まず眼に入った。信一郎は、彼等を悪魔の手先か何かを見るように、憎悪^{ぞうお}と反感とで睨^{にら}み付けた。が、夫人の姿は見えなかった。手早く眼をやった玄関の敷石の上にも、夫人の履物^{はきもの}らしい履物は脱ぎ捨て、はなかった。信一郎は、少しは救われたように、ホツとしながら、玄関へ入ろうとした。

運転手は素早く彼の姿を見付けた。

「いやあ。お帰りなさいまし。先刻さつきからお待ちしていたのです。」

彼は、馴なれくしげに、話しかけた。信一郎はそれが、可なり不愉快だった。が、運転手は信一郎を、もつと不愉快にした。彼は、無遠慮に大きい声で、奥の方へ呼びかけた。

「奥さん！ やつぱり、お帰りになりましたよ。何処どこへもお廻りにならないで、直ぐお帰りになるだろうと思つていたのです。」

運転手は、いかにも自分の予想が当たったように、得意らしく云いつた。運転手が、そう云うのを聴いて、信一郎は冷汗を流した。運転手と妻とが、どんな会話をしたかが、彼には明かに分つた。

「御主人はお帰りになりましたか。」

運転手は、最初そう訊たずねたに違いない。

「いゝえ、まだ帰りません。」

妻は、自身若もしくは女中をしてそう答えさせたに違いない。

「それじゃ、お帰りになるのをお待ちしていきましょう。」

運転手は、そう云つたに違いない。

「あの、会社の人達と一緒に、多摩川へ行きましたのですから、帰りは夕方になるだろうと思います。」

何も知らない、信一郎を信じ切っている妻は、そう答えたに違いない。それに対して、この無遠慮な運転手はこう云い切ったに違いない。

「いゝえ、直ぐお帰りになります。ただいま只今私の宅からお帰りになったのですから、外へお廻りにならないければ三十分もしない裡うちに、お帰りになります。」

初めて会った他人から、夫の背はいしん信を教えられて、妻は可なり心を傷けられながら赤面して黙つたに違いない。そう思うと、突然運転手などを寄越す瑠璃子夫人に、彼は心からなる憤怒ふんぬを感じずにはいられなかった。

信一郎は、可なり激しい、叱責しつせきするような調子で運転手に云った。

「一体何の用事があるのです？」

運転手は、ニヤ／＼気味悪く笑いながら、

「宅の奥様のお手紙を持つて参ったのです。何の御用事があるか私には分りません。返事を承わつて来い！ お帰かえりになるまで、お待して返事を承わつて来い！ と、申し付けられましたので。」

運転手は、待つていることを、云い訳するように云った。

手紙を持つて来たと聴くと、信一郎は可なり狼狽した。妻に、内密で、ある女性を訪問したことが露顕している上に、その女性から急な手紙を貰っている。そうしたことが、どんなに妻の幼い純な心を傷けるかと思うと、信一郎は顔の色が蒼くなるまで当惑した。彼は、妻に知られないように、手早く手紙を受け取ろうと思った。

「手紙！ 手紙なら、早く出したまえ！」

信一郎は、低く可なり狼狽した調子でそう云った。

運転手が、何か云おうとする時に、夫の歸りを知った妻が、急いで玄関へ出て来た。彼女は、夫の顔を見ると、ニコ／＼と嬉しそうに笑いながら、

「お手紙なら、此方にお預りしてありますのよ。」と、云いながら、薄桃色の瀟洒な封筒の手紙を差し出した。暢達な女文字が、半ば血迷っている信一郎の眼にも美しく映った。

面罵

一

妻から、莊田^{しょうだ}夫人の手紙を差し出されて見ると、信一郎は激しい羞恥^{しゆううち}と当惑とのために、顔がほてるように熱くなった。平素は、何の隔てもない妻の顔が、眩^{まぶ}しいもののように、真面^{まおも}から見る事が出来なかった。

が、静子の顔は、平素^{いづも}と寸違^{たが}わぬように穏かだった。春のように穏かだった。夫の不信を咎^{とが}めているような顔色は、少しも浮んでいなかった。見知らぬ女性から、夫へ突然舞い込んで来た手紙を、疑っているような容子は、少しも見えなかった。夫の帰宅を、いそぐと出迎えている平素^{いづも}の優しい静子だった。

信一郎は、妻の神々^{こうごう}しい迄^{まで}に、慎^{つつま}しやかな容子を見ると、却^{かえ}って心が咎^{とが}められた。これほどまでに自分を信じ切っている妻を欺^{あざむ}いて、他の女性に、好奇心を、懐^{いだ}いたことを、後悔^{ざんげ}し心の中で懺悔^{ざんげ}した。

妻が差出した夫人の手紙が、悪魔からの呪符^{じゆふ}か何かのように、厭^{いと}わしく感ぜられた。もし、人が見ていなかったら、それを、封も切らないで、寸断することも出来た。が、妻が

見て居る以上、そうすることは却つて彼女に疑惑を起させる所以^{ゆえん}だった。信一郎は、おずく^くと封を開いた。

手紙と共に封じ込められたらしい、高貴な香水の匂^{におい}が、信一郎の鼻を魅^めするよう^にに襲^{おそ}つた。が、もうそんなことに依^よつて、魅惑せらるゝ信一郎ではなかつた。

彼は敵からの手紙を見るように警戒^{けいけい}と憎悪^{ぞうお}とで、あわたゞしく貪^{むさぼ}るように読んだ。

『先刻^{あなた}は貴君^{あなた}を試したのよ。妾^{わたくし}の客間^{きやくかん}へ、妾と戯^{フライト}恋^{こひ}しに來る多くの男性と貴君が、違^{ちが}つてゐるか何^どうかを試したのですわ。妾は戯恋^{フライト}することには倦^あきくしましたのよ。本当の情熱^{じやうねつ}がなしに、恋をしてゐるよう^なな真似^{まね}をする。擬^{フライト}似^{イミテーション}恋愛^{こひ}！ 妾は、それに倦^あきくしましたのよ。身体や心は、少しも動かさないで、手先丈で、恋をしてゐるよう^なな真似^{まね}をする。恋をしてゐるよう^なな所作丈^{しやくさく}をする。恋をしてゐるよう^なな姿勢丈^{しせしや}を取る。妾は、妾の周圍^{あつ}に蒐^{あつ}まつてゐる、そうした戯^ぎ恋^{れん}者^{しや}のお相手^{かたまり}をする^{こと}には、本当に倦^あきくしましたのよ。妾は真剣^{まけん}な方が、欲しいのよ。男らしく真剣^{まけん}に振舞^{ふま}う方が欲しいのよ。凡^{すべ}ての動作^{どうさく}を手先丈^{てしやう}でなく心の底^{そこ}から、行^いう方が欲しいのよ。

貴君^{ききん}が忿^{ふん}然^{ぜん}として座^ざを立たれたとき、妾^{わたくし}が止^とめるのも、肯^きかず、憤^{ふん}然^{ぜん}として、お歸^{かへ}り

遊ばす後姿を見たとき、この方こそ、何事をも真剣になさる方だと思いましたの！何事をなさるにも手先や口先でなく、心をも身をも、打ち込む方だと思いましたの。妾が長い間、探ねあぐんでいた本当の男性だと思いましたの。

信一郎様！

貴方は妾の試に、立派に及第遊ばしたのよ。

今度は、妾が試される番ですわ、妾は進んで貴方に試されたいと思いますの。妾が、貴方のために、どんなことをしたか、どんなことをするか、それをお試しになるために、直ぐ此の自動車でいらしつて下さい！

瑠璃子』

手紙の文句を読んでいる中に、瑠璃子夫人の怪しきまでに、美しい記憶が、殺されそこなつた蛇か何かのように、また信一郎の頭の中に、ムク／＼と動いて来た。

夫人の手紙を、読んで見ると、夫人の心持が、満更虚偽ばかりでもないように、思われた。あの美しい夫人は、彼女を囲む阿諛や追従や甘言や、戯恋に倦き／＼しているのかも知れない。実際彼女は純真な男性を、心から求めているかも知れない。そう思ってい

ると、夫人の真紅の唇や、白き透き通るような頬が、信一郎の眼前に髣髴した。
が、次ぎの瞬間には青木淳の紫色の死顔や、今先刻見たばかりの、青木淳の弟の姿などが、アリアリと浮んで来た。

二

手紙を読んだ刹那の陶醉から、醒めるに従って、夫人に対する憤ろしい心持が、また信一郎の心に甦って来た。こうした、人の心に喰い込んで行くような誘惑で、青木淳を深淵へ誘ったのだ。否青木淳ばかりではない、青木淳の弟も、あの海軍大尉も、否彼女の周囲に蒐まる凡ての男性を、人生の真面目な行路から踏み外させているのだ。彼女を早くも嫌って恐れて、逃れて来た自分にさえ、尚執念深く、その蜘蛛の糸を投げようとしている。恐ろしい妖婦だ！ 男性の血を吸う吸血鬼だ。そう思つて来ると、信一郎の心に、半面血に塗れながら、

『時計を返して呉れ。』

と絶叫した青年の面影が、又歴々と浮かんで来た。そうだ！ あの時計は、不得要領

に捲上げらるべき性質の時計ではなかったのだ！ 青年の恨みを、十分に籠めて叩き返さなければならぬ時計だったのだ！ 殊に、青年の手記の中の彼女が、瑠璃子夫人であることが、ハッキリと分ってしまった以上、自分にその責任が、儼として存在しているのだ。恐ろしいものだからと云って、面を背けて逃げてはならないのだ！ 青年に代って、彼が綿々の恨みを、代言してやる必要があるのだ！ 青年に代って、彼女の僅かしか残っていないぬかも知れぬ良心を恥かしめてやる必要があるのだ！ そうだ！ 一身の安全ばかりを計って逃げてばかりいる時ではないのだ！ そうだ！ 彼女がもう一度の面会を望むのこそ、勿怪の幸である。その機会を利用して、青年の魂を慰めるために、青年の弟を、彼女の危険から救うために、否凡ての男性を彼女の危険から救うために、彼女の傲慢な心を、取りひしいでやる必要があるのだ。

信一郎の心が、こうした義憤的な興奮で、充された時だった。妻の静子は、——神の如く何事をも疑わない静子は、信一郎を促すように云った。

「急な御用でしたら、直ぐいらしては、如何でございます。」

妻のそうした純な、少しの疑惑をも、挟まない言葉に、接するに付けても、信一郎は夫人に叩き返したいものが、もう一つ殖えたことに気が付いた。それは、夫人から受けた此人に叩き返したいものが、もう一つ殖えたことに気が付いた。それは、夫人から受けた此

の誘惑の手紙である。妻に対する自分の愛を、陰ながら、妻に誓うため、夫人の面に、この誘惑の手紙を、投げ返してやらねばならない。

信一郎の心は、今最後の決心に到達した。彼は、その白い面を、薄赤く興奮させながら、妻に云うともなく、運転手に命ずるともなく叫んだ。

「じゃ直ぐ引返すことにしよう。早くやつてお呉れ！」

彼は、自分自身興奮のために、身体が軽く顫えるのを感じた。

「^{かしこ}畏まりました。七分もかゝりません。」

そう云いながら、運転手と助手とは、軽快に飛び乗った。

「じゃ、静子、行つて来るからね。ホンの一寸^{ちよつと}だ！ 直ぐ帰つて来るからね。」

信一郎は、小声で云い訳のように云いながら、妻の顔を、なるべく見ないように、車中の人となった。

が、ガソリンが爆発を始めて、^{まさ}將に動き出そうとする時だった。信一郎は、^{あわて}周章で窓から、首を出した。

「おい！ 静子！ おれの本箱の下の引き出しの、確か右だったと思うが、ノートが入ってる。それを持って来ておくれ！」

「はい。」と云つて気軽に、立ち上つた妻は、二階から大急ぎで、そのノートを持って降りて来た。

『これが、武器だ！』信一郎は、妻の手からそれを受けとりながら、心の中でそう叫んだ。爪つまぐろ黒の鹿しかの血と、疑ぎぢやく着の相ある女の生血とを塗つた横笛が、入鹿いるかを亡ほろぼす手段の一つであるように、瑠璃子夫人の急所を突くものは、青木淳の残した此のノートの外にはないと、信一郎は思つた。

三

五番町までは、一瞬の間だった。

こうした行動に出たことが、いゝか悪いか迷う暇さえなかった。信一郎の頭の中には、瑠璃子夫人の顔や、妻の静子の顔や、非業ひごうに死んだその男の顔や、今日客間サロで見たいろ／＼な人々の顔が、嵐あらしのように渦巻いている丈だった。が、その渦巻の中で彼は自ら強く決心した。『彼女の誘惑を粉碎せよ！』と。

もう再びは潜くぐるまいと決心した花崗岩かこうがんの石門に、自動車は速力を僅わずかに緩めながら進み入

った。もう再びは、足を踏むまいと思った車寄せの石段を、彼は再び昇った。が、先刻は夫人に対する讚美さんびと憧れあこがの心で、胸を躍らしながら、が、今は夫人に対する反感と憤怒ふんぬとで、心を狂わせながら。

取次ぎに出たものは、あの可愛かわいい少年の代りに、十七ばかりの少女だった。

「奥様がお待ちかねでございます。さあ、どうかお上り下さいませ。」

信一郎は、それに会釈えしやくする丈の心の余裕もなかった。彼は黙々として、少女の後に従った。

少女は先刻の客間サロンの方へ導かないで、玄関の広間ホールから、直ぐ二階へ導く階段を上って行った。

「あの、お部屋の方にお通し申すように仰しやっていましたから。」

信一郎が一寸躊躇ちよつちゆうちよするのを見ると、少女は振り返ってそう言った。

階段を昇り切った取っ付きの部屋が、夫人の居間だった。少女は軽く叩ノックしたが、内から応ずる氣勢けはいがしなかった。

「あら！　いらつしやらないのかしら。それではどうか、お入りになって、お待ち下さいませ。屹度きつと、お化粧部屋の方にいらつしやるのですから。」

そう云つて、少女は扉を開けた。

信一郎は、おそろ／＼その華麗な室内に足を踏み入れた。部屋の中には、夫人の繊細な洗煉された趣味が、隅から隅まで、行き渡っていた。敷詰めてある薄桃色の絨毯にも、水色の窓掩いにも、ピアノの上に載せてある一輪挿の花瓶にも、桃花心木の小さい書架に、並べてある美しい装幀の仏蘭西の小説にも、雪のように白い絹で張りつめられた壁にかゝっているクールベらしい風景画にも、炉棚の上の少女の青銅像にも、夫人の高雅な趣味が光っていた。凡ての装飾が、金で光っている丈ではなく、その洗煉された趣味で光っているのだった。

信一郎は、部屋の装飾に、現われている夫人の教養と趣味とに、接すると、昂めよう／＼としている反感が、何時の間にか、その鋭さを減じて行くような危険を、感ぜずにはいられなかった。

が、こうした美しい部屋も、彼女の毒の花園なのだ。彼女が、異性を惑わす魅力の一つなのだ。信一郎は、そう云う風に考え直しながら、青色の羽蒲団の敷いてある籐椅子に、腰をおろしていた。窓からは、宏大な庭園が、七月の太陽に輝いているのが見えた。

夫人は、なか／＼姿を見せなかった。小間使が氷の入った果実汁を持って来た後も、な

かゝ姿を見せなかった。

彼は、所在なさに、室内の装飾をあれからこれへと、見直していた。その裡に、ふと三尺とは離れていない卓デスクの上に、眼が付いた。其処そこには、先刻信一郎が受け取ったのと同じ色のレタアペイピアと、金飾の華やかな婦人持の万年筆とが、置かれていた。先刻の手紙は、恐らくこの桃花心木マホガニーの小さい卓で書いたのに違いない。そう思って見ている中に、ふと一枚のレタアペイピアに、英語か仏蘭西語かが書かれているのに気が付いた。彼の好奇心は、動いた。彼は、少し上体を、その方に延ばしながら、それを読んだ。

(Shinichiro)

彼は、自分の名前が書かれているのに驚いた。が、その次ぎの二字を見たときに、彼の駭おしろきは十倍した。

(Shinichiro, my love!)

『信一郎、わが恋人マイラヴよ!』

而も、その同じ句がそのレタアペイピアの上に、鮮かな筆触で幾つもゝ走り書きされているのだった。

四

『信一郎、わが恋人よ！』

信一郎の頭は、この短い文句でスツカリ揺ぎ擾されてしまった。彼は十七八の少年か何かのように、我にも非ず、頬が熱くほてるのを感じた。夫人に対して、張り詰めていた心持が、ともすれば揺ぎ始めようとする。

彼は、心の中で幾度も叫んだ。夫人の技巧の一つだ。誘惑の技巧の一つだ。自分の眼に入るように、わざとこんな文句を、書き散して置いたのだ。見え透いた技巧なのだ！が、そう云う考えの後から、又別な考えが浮んで来た。あの伶俐な聡明な夫人が、こんな露骨な趣味の悪い技巧を弄する訳はない！ やつぱり、夫人の本心から出た自然の書き散しに違いない。信一郎の心の中の男性に共通な自惚が、ムク／＼と頭を擡げようとする。あの先刻受け取った手紙も、こうして見ると、夫人の本心を語っているのかも知れない。夫人を妖婦のように思うのも、みんな自分の邪推かも知れない。彼女は、男性との恋愛ごっこに飽き／＼しているのだ。彼女の周囲に、蒐まる胡蝶のような戯恋者に、飽き／＼しているのだ。本当に、心をも身をも捨て／＼かゝる、真剣な異性の愛に飢えているのかも

知れない。世馴れた色男風の男性に、嫌たらない彼女は、自分のような初心な生真面目な男性を求めていたのかも知れない。

夫人に対する信一郎の敵意がもう半崩れかけている時だった。

「御免下さいまし。」

銀鈴に触れるような爽かな声と共に、夫人は静かに扉をあけて入って来た。

湯上りらしく、その顔は、白絹か何かのように艶々しく輝いていた。縮緬の桔梗の模様の浴衣が、そのスツキリとした身体の輪廓を、艶美に描き出していた。

わずか四五尺の間隔で、じつとその美しい眸を投げられると、信一郎の心は、催眠術にでもかゝったような、陶酔を感じるのを、何うともすることが出来なかった。

「まあ！ 本当によくいらつしやいましたこと。妾、もうあれ切りかと思いましたが。もう、あれ切り来て下さらないのかと思つていましたよ。」

信一郎が、彼女の入って来たのを見て、立ち上ろうとするのを、制しながら、信一郎と向きあつて小さい卓を隔てながら、腰を下した。

信一郎は、ともすれば後退りしそうな自分の決心に、頻りに拍車を与えながら、それでも最初の目的通、夫人と戦つて見ようと決心した。

「先刻は大変失礼しましたこと。あの方達を帰してしまつた後で、ゆっくり貴君^{あなた}とお話が出たかったのよ。差し上げました御手紙御覧下すつて？」

「見ました。」

信一郎は、自分の決心を、動かすまいと、しっかりと云い放った。

「何うお考え遊ばして？」

夫人は、追^{ついきゆう}窮するようになり、美しく笑いながら訊^きいた。信一郎は、可なりハッキリし

た口調で云った。

「貴女^{あなた}の本当のお心持が、分らないものですから、何うお答えしてよいか当惑する丈です

。」

「あれでお分りにならないの。あれで、十分分つて下すつてもいいと思ひますの。妾^{めかけ}が、貴君のことを何う考えていますか。」

夫人の顔に可なり、真剣な色が動いた。信一郎も、ある丈の力を以て^{もつ}云った。

「奥さん！ 何うか記憶して置いて下さい！ 僕には妻^{つま}がありますから、家庭がありますから、貴女の危険な戯^{たわむ}れのお相手は出来ませんから。」

信一郎は、妻の静子の面影や、青木淳の死相を心の味方として、この強敵に向つてハッ

キリと断言した。

五

その刹^{せつ}那^な、夫人の顔が、遠^さに鋭く緊張した。

「あら、貴君^{あなた}までが、そんなことを考えていらつしやるの。妾^{わたくし}が貴君の家庭を擾^{みだ}すような女だと思つていらつしやるの。貴君にも、やっぱり妾の真意が分つて下さらないのですわね。妾が、何を求めているかが、やっぱり分つて下さらないのですわね。妾は、妾の周囲の戯恋者には飽き／＼したと申しているではありませんか。妾は戯恋の相手ではなく、本当のお友達が欲しいのです。本当の男性らしい男性のお友達が欲しいのです。妾が、この方こそと思つてお選^えみした貴君からそんな誤解を受けるなんて、妾には忍びがたい恥辱ですわ。」

そう云^いっている夫人の顔には、もうあの美しい微笑は浮んでいなかった。少しく、忿怒^{ふんぬ}を帯びた顔は、振り付きたいような美しさで、輝いていた。

美しい夫人の顔に、忿怒の色が浮ぶのを見ると、信一郎は心の中で、可なりタジ／＼と

なつた。が、彼は自分のため、青木淳しゅんのため、また夫人その人のためにも、夫人の妖婦ようふ的な魂と、戦わねばならぬと決心した。彼は、夫人の美しい顔から、出来るだけ面を背けながら云つた。

「いや！ 貴女あなたのお心が、分らないのではありません。僕を、真のお友達として、多くの男性から選んで下さる。それは僕として、光栄です。が、奥さん！ 僕は貴女から選まれますと云うことが可なり危険なことであるような気がするのです。僕は、安穩あんのんな家庭の幸福で、満足している平凡な人間です。何どうか僕を、このままに残して置いて下さい！」

信一郎の語気は、可なり強かつた。

「まあ！ 何と云うことを仰おつしやるのです。妾を、爆弾が何かのように、触ることさえ、お嫌いだと云うのですね。」

夫人は、半ば冗談のように、云おうとしたが、信一郎の心の中の敵意を、アリ／＼と感じたと見え、先刻までの夫人とは、丸切違つたような鋭さが、その美しさの裏に、潜ひそみ初めていた。

「いや！ 奥さん、こんなことを申し上げては、失礼かも知れませんが、僕は貴女に選まれて飛んだ目にあつたある男性のことを知っているのです。その男も、真面目まじめな初心うぶな男

でしたから、僕が貴女に選ばれたのと、同じような意味で、貴女に選ばれたのではないかと思うのです。若し、同じような意味で選ばれたとすると、その男が飛んだ目に逢ったように、僕も何時かは、飛んだ目に逢いそうです。はゝゝゝ。」

信一郎は、懸命な勇気を以て、云い終ると調子外れの笑い方をした。彼は烈しい興奮のために、妙に上ずってしまっていたのである。

夫人の顔色が、一寸変つた。が、少しも取り擾す容子はなかった。彼女は、信一郎の顔を、じつと見詰めていたが、憫笑するような笑いを、頬の辺に浮べると、一寸腰を浮かして、傍の卓の上の呼鈴を押しながら云つた。

「貴君と妾とは、やっぱり縁なき衆生だったのですわね。やっぱりあれっ切りにして置けばよかつたのですわね。妾の思い違いよ。貴君を、スツカリ見損つていたのですわね。貴君の躊躇や、臆病を、妾反対に解釈していたのですわ。妾男性の中で臆病な方が、一等嫌いなのですわ。差し出された女の唇に、接吻を与えるほどの勇氣さえないような男性が、一等嫌いなのでございますよ。おほゝゝゝ。妾自身、御覽の通のお転婆でございますから、やっぱり強い男性の方が、一等好きなのでございますよ。」

信一郎の攻撃に対する夫人の反撃は、烈しかった。信一郎は夫人の真向からの侮辱に、

目が眩くらんだ。彼は屈辱と忿怒とのために、胸がくらくらするように煮えた。信一郎が口籠もりながら何か云おうとしたときに、呼鈴に応じて先刻の小間使が顔を出した。夫人は冷静な口調で、ハッキリと云った。

「お客様がお帰りになるそうだから、自動車の支度をするように。」

六

西洋では、厭いやな来客を追い帰すとき、又来客と喧嘩けんかしたとき、『扉ドアを指さし示す』ことが、習慣である。直ぐ出て行つて呉くれと云う意味である。客に対する絶大の侮辱であり、挑戦である。

が、来客の前で、勝手に帰り支度を、整えてやることも、『扉を指さし示す』ことと同じ程度の侮辱に違いない。

夫人は、自分の好意を、相手が跳ね返したと知ると、それを十倍もの烈はげしさで、跳ね返し得る女であつた。

信一郎は、平手で真向から顔を、ピシヤリと、叩たたかれたような侮辱を感じた。もし、相

手が女性でなかったら、立ち上りざま殴り付けてでもやりたいような激怒を感じた。それと同時に、突き放されたような淋しさが、激怒の陰に潜んでいることをも、感ぜずにはいられなかった。

信一郎の顔が、激怒のために、真赤に興奮しているのにも拘わらず、夫人はその白い面が、心持蒼んでいる丈で、冷然として彫像か何かのように動かなかった。

信一郎も、相手から受けた、余りに思いがけない侮辱の為に、暫らくは、口さえ利けなかった。

夫人も、黙々として一語も洩らさなかった。その中に、バタ／＼と廊下に軽い足音がしたかと思うと、先刻の女中が、顔を出した。

「あの、お支度が出来ましてございます。」

「そう。」と、夫人は軽く会釈して、女中を去らせると、静かに信一郎の方を振向きながら、彼女の最後の通牒を送った。

「それでは、どうかお帰り下さいませ。妾がお呼び立ていたしました罪は、幾重にもお詫いたしますわ。でも、お互に理解しない者同士が、何時まで向い会っていても、全く無意味だとも思いますわ。何うか安穩な御家庭で何時までも平和にお暮し遊ばせ！」

夫人は、一寸皮肉な微笑を浮べると、静に立つて信一郎に、扉の方を指さし示した。

信一郎の心は、激しい恥辱のために、裂けんばかりに、張り詰めていた。このまゝ、帰つてしまえば、徹頭徹尾全敗である。どんなに、相手が美しい夫人であるとは云え、男性たるものが、こうも手輕に、人形か何かのように翻弄せられることは、何うにも堪らないことだと思つた。今こそ全力を尽して彼女と、戦うべき日であると思つた。激怒のため、波立つ胸を、彼はじつと抑え付けながら云つた。

「奥さん！ 折角ですが、僕にはまだ帰られない用事があります。」

信一郎の言葉は、可なり顫えを帯びていた。

「おや！ 御用事。それじや直ぐ承わろうじやありませんか。妾、またこんな部屋には、一刻もお止まりになるお心はなくなつたのだらうと思つていました。」

夫人は、凄いほどに、落着いていた。

信一郎は、蒼白になりながら、懸命に冷静な態度を失うまいとした。

「奥さん！ 帰るときが来れば、お指図を待たなくつても帰ります。が、只今伺つたのは、貴女のお手紙の為ばかりじやないのです。僕がどんなに輕薄な人間でも、一度席を蹴つて歸つた以上、貴女のお召状丈で、ノメ／＼とやつては来ません。」

「おや！ それでは、妾はその点でも飛んだ思違いをしていましたのね。」

夫人は、針のような皮肉を含みながら、冷やかに笑った。信一郎はいらだった。

「貴女に申し上げべきこと、当然お願いすべき用事があればこそ参ったのです。それが済むまでは、貴女が幾ら帰れと仰しおつやったって、帰れません。貴女も一度僕と会った以上、自分の用事丈が、済んだと云って、そう手輕に僕を追い返す権利はありません。」

「大變御ごもつと尤もな仰せおほです。それではその用事とかを承わろうじやありませんか。」
夫人の皮肉な態度は突き刺すようなトゲくしさを帯び初めた。

七

夫人の皮肉なトゲに、突き刺されながらも、信一郎は、やっと自分自身を支えることが出来た。

「用事と云って、外ほかではありませんが、いつか貴女あなたにお預けして置いたあの白金プラチナの時計を、返していただきたいと思うのです。死んだ青木君から遺託いたくを受けたあの時計をです。」
信一郎は、一生懸命だった。彼は、身体が激昂のために、わななくこうとするのをやっと、

抑えながら喋べった。が、その声は変に咽喉にからんでしまった。

夫人の冷たさは、愈々加わった。その美しい面は、象牙で彫んだ仮面か何かのように、冷たく光っていた。『何を！』と云ったような利かぬ氣の表情が、その小さい真赤な唇のあたりに動いていた。

「あら、あれは妾にお預けして下さったのじゃないのですか。一旦お預けして下さった以上、男らしくもないじゃありませんか。また返せなどと仰しやるのは。」

信一郎を擲擽っているように、冷かしているように、夫人の語氣は、ますます辛辣になつて行つた。

「いや、お預けしたことは、お預けしました。が、それは返すべき相手が分らなかつたからです。また、何う云う心持で返すのかが、分らなかつたからです。今こそ、返すべき女性ハッキリと分つたのです。また、何う云う態度で、あの時計を返すべきかも、ハッキリと分つたのです。僕は、あの時計を貴女から返していたゞいて、その本当の持主に、一番適当な態度で、返さねばならぬ責任を青木君に対して、感じているのです。どうか直ぐお返しを願いたいと思います。」

夫人の顔は、遠に少しく動揺した。が、信一郎が予想していたように、狼狽の容子は

露ほども見せなかった。

「そんなに、面倒臭い時計なのですか、それじゃ、お預りするのではなかったわ。それじや只今直ぐお返しいたしますわ。」

夫人は、手輕に、借りていたマツチをでも返すように、手近の呼鈴べルを押した。

二人は、黙々として、暫しばらく相對している裡うちに、以前の小間使が、扉を靜に開けた。

「あのね。応接室の、確か 炉マンテルピース 棚 の上の手文庫の中だったと思うのだがね。壊れた時計がある筈はずだから持つて来て下さいね。若し手文庫の中になかったら、あの辺を探して御覧！ 確かあの近所に放り散かして置いた筈だから。」

信一郎が、あれほどまでに、心を勞していた時計を、夫人は壊れた玩具か何かのように、放りばなしにしていたのだった。青木淳じゅんが臨終にあれほどの恨うらみを籠こめた筈の時計は、夫人に依よつて、意味のない一個の壊れ時計として、炉棚の上に、信一郎から預かった時以来忘れられていたのである。

夫人から、そんなにまで手輕く扱われている品物に就いて、返すとか返さないとか、躍起ちよつとになつてゐることが、信一郎には一寸氣恥ちよつとしいことのように思われた。

が、夫人のあゝした言葉や態度は、心にもない豪語であり、擬勢ぎせいである、口先でこそあ

んなことを云いながらも、彼女にも人間らしい心が、少しでも残っている以上、心の中では可なり良心の苛責かしやくを受けているのに違ない。信一郎は、やっとそう思い返した。

小間使は、探すのに手間が取れたと見え、暫らくしてから帰つて来た。そのふつくらとした小さい手の裡には、信一郎には忘れられない時計が、薄気味のわるい光を放っていた。夫人は小間使から、無造作にそれを受取ると、信一郎の卓の上に軽く置きながら、「さあ！ どうぞ。よく検あらためてお受取り下さいませ！ お預りしたときと、寸分違っていない筈ですから。」

夫人は、毒を喰くらわば皿までと云つたように、飽くまでも皮肉であり冷淡であつた。

八

信一郎は、差し出されたその時計を見たときに、その時計の胴にうすく残っている血けっこ痕あとを見たときに、弄もてあそばれて非業ひごうの死方をした青年に対する義憤ぎふんの情が、旺然おうぜんとして胸に湧わいた。それと同時に、青年を弄もんで、間接に彼を殺しながらも平然しんとして彼の死を冷視している——神聖な遺品かたみの時計をさえ、蔑さげみ切っている夫人に対して、燃ゆるような

憎しみを、感ぜずにはいられなかった。

信一郎は、かすかに顫える手で、その時計を拾い上げながら、夫人の面を真向から見詰めた。

「いや、確にお受取りしました。お預けした品物に相違ありません。」

彼の言葉も、いつの間にか、敵意のある切口上に変っていた。

「ところが、奥さん！」信一郎は、満身の勇気を振りながら云った。

「一旦お返し下さった此時計を——改めて、そうです、青木君の意志として——私は、改めて貴女に受取っていたゞきたいのです。」

そう云つて、信一郎は、夫人の顔をじつと見た。どんなに厚顔な夫人でも、少しは狼狽するだろうと予期しながら。が、夫人の顔は、やゝ殺気を帯びているものゝ、その整った顔の筋肉一つさえ動かさなかった。

「何だか手数のかゝるお話でございますのね。子供のお客様ごっこじゃありませんまいし、お返ししたものを、また返していただくなんて、もう一度お預かりした丈で、懲々いたしましたわ。」

夫人は囁んで捨てるように云った。

信一郎は、夫人の白々しい態度に、心の底まで、憎みと憤怒とで、煮え立っていた。

「いや、此度はお預けするのではないのです。いや、最初から此の時計は貴女にお預けすべきでなくお返ししなければならぬ時計だったのです。時計の元の持主として、貴女に受取っていたゞくのです。貴女は、此の品物を当然受取るべきお心覚えがあるでしょう。ないとは、まさか仰しやれないでしょう。」

信一郎も、女性に対する凡ての遠慮を捨てゝいた。二人は男女の性別を超えて、格闘者として、相対していた。

信一郎に、そう云い切られると、夫人は暫らく黙っていた。白い瓢の種のような綺麗な歯で、下唇を二三度噛んだがやがて気を換えたように、

「それでは、貴君は此時計の元の持主を、妾だと仰しやるのですか。」

「そうです。それを確信してもよい理由があるのです。」信一郎は凜としてそう云い放った。

「おやそう！」夫人は事もなげに応けながら、「貴君が、そうお考えになりたければ、そうお考えになっても、別に差支はございませんよ。それでは、この時計もお受取りして置こうじやありませんか。どうせ一度は、お預かりした品物ですもの。」

夫人の態度は、愈逆になり、愈々毒を含んでいた。

「それで、御用事と仰しやるのはこれ丈！」

夫人は信一郎と一刻でも長く同席することが不快で堪らないように急ぎ立てるように附加えた。

信一郎は、夫人の自分に対する烈しい憎悪に傷きながら、しかも勇敢に彼の陣地を支えた。

「いや、大変お手間を取らして相済みません。が、もう一言、そうです、青木君の言伝があるのです。時計の元の持主にこう伝えて呉れと頼まれたのです。」

信一郎は、そう云って言葉を切った。

夫人は速に、緊張した。やさしく烟っている眉を、一寸顰めながら、信一郎が何を云い出すかを待っているようだった。

彼女の云分

一

遺言と云つても、信一郎は青木淳じゆんの口ずから受けているのではない。が、彼は青木淳の死前の恨うらみの籠こもったノートを受け継いでいる。

『彼女の僅わずかに残っている良心を恥かしめてやる』べき、以心伝心の遺託を、受けているのだった。

「いや、遺言と云つても、外ではありません。この時計を返すときに元の持主にこう云つて呉くれと頼まれたのです。青木君が瀕死ひんしの重傷に苦しみながら、途切れ／＼に云ったことです。ですから、ハッキリとは分りませんが、何でもこう云う意味だったと思うのです。純真な男性の感情を弄もてあそぶことがどんなに危険であるかを伝えて呉れ。弄ぶ女に取つては、それは一時の戯たわむれであるかも知れぬが、弄ばれる男に取つては、それが死であると。奥さん！ 貴女あなたは、こう云う話を御存じですか。池の中に多くの蛙かえるが浮んでいると、子供達あなたが来て石を投げ付ける、その時に蛙が何て云ったか御存じですか。蛙はこう云ったのです。貴君あなた方に取つて遊戯であることが、我々に取つては死である、と。青木君の死際しにぎわの云分も、つまりそれなのです。貴女は、青木君の死を単なる奇禍きかだと思つてはいけません。形は奇

禍ですが、心持に於いては立派な自殺です。たゞ自動車の偶然の衝突があの人^おの死を、二三日早めたのに過ぎないのです。貴女は青木君の死を奇禍だと考えることに依つて、貴女の良心を欺いてはなりません。正しく自殺です。而も池の中の蛙が、子供が戯れに投げた石に当つて死んだように、貴女が戯れに与えた白金^{ブラチナ}の時計に依つて死んだのです。蛙が若し人間としての働きがあつたならば、その石を子供に投げ返すように、僕は青木君に代つて、此の時計を貴女に投げ返すのです。そうです、貴女の良心に向つて投げ返すのです。貴女の心に僅かにでも、良心が残っているのなら、貴女はそれで此の時計を受け止めて下さい。そうしてその受け止めた痛み^きに依つて、貴女の心を浄めていたゞきたいと思うのです。そうして、男性に対する貴女の危険な戯れを、今日限り廃していたゞきたいと思うのです。それが青木君の死に対する貴女のせめてもの償い^{つぐな}です。僕が、先刻貴女のお戯れの相手をするのは危険だと云つたのはこう云う意味です。青木君の場合はまだ独身ですから、貴女の戯れの犠牲になるものは一人で済むのですが、僕のような既婚者の場合は被害者が複数ですからね。」

信一郎の興奮は、彼を可なりな雄弁家にしてしまった。夫人はと見ると、逡に彼の言葉が一々肺腑^{はいふ}を衝いてい^つると見えて、うなだれ気味に、黙々と聴いていた。信一郎は、自分

の心が、少しでも夫人の心を悔い改めしめているかと思うと、内心ある感激を感じずにはいられなかった。そうだ！ 此の美しい女性をたゞ恥かしめる丈が、能ではない。自分の言葉に依つて、夫人の心を、少しでも淨くし改めてやりたいと思つた。

「いや！ 奥さん。僕は何も貴女に恩怨おんえんがあるものではありません。恩怨がないばかりでなく、ある点では貴女を敬慕しているものです。貴女のその秀すぐれた美しさと、貴女の教養や趣味に対して、心から敬慕しているものです。が、僕は貴女がそうした天分や教養を邪道に使っているのを見ると、本当に心が暗くなるのです。僕は青木君たけの為にばかりでなく、貴女自身のために、僕の云つたことをよく玩味がんみしていたゞきたいと思うのです。」

こう信一郎が、述べ来つた時、今まで傾聴きやうしているような態度をしていた夫人は、つと頭を上げた。

「あの、お言葉中で恐れ入りますが、御忠告なら、御免を蒙こうむりたいと思います。御用事丈を承はる筈はずであつたのでございますから。」

鋼鉄りんのような凜とした冷たさが、その澄んだ声の内に響いていた。

『御忠告ならば、御免を蒙る。』と、夫人がきつぱりと云い放つのを聴くと、信一郎は夫人に対して、最後の望みを絶った。青木淳は、『僅に残っている良心』と、書いている。

が、僅に残っている良心どころか良心らしいものは、片さえ残っていない。女らしい、つましい心の代りに、そこに翼を拡げているものは、恐ろしい吸血鬼である。純真な男性の血を好んで嗜なむ怪物である。夫人の良心に訴えて、少しでも彼女を、いゝ方に改めさせてやろうと思つたのは、悪魔に基督の教を説くようなものであると思つた。

信一郎は外面如菩薩と云う古い言葉を、今更らしく感心しながら、暫らくは夫人の顔を、じつと見詰めていたが、

「いや、これは飛んだ失礼をしました。青木君の遺言丈を伝えれば、僕の責任は尽きていたのです。」

彼は、そう云つて潔く此部屋から出ようとした。が、その時に、彼は青木淳の弟の姿を思い浮べた。そうだ！あの青年を、夫人の危険から救つてやることは、自分の責任だと思つた。

「だが、奥さん！僕は僕の責任として、貴女にもう一言云わなければならぬことがある

のです。これは貴女に対するおせっかいな忠告じゃないのです。青木君に対する僕の責任の一部として、申し上げるのです。畢ひつきよう竟は青木君の遺言の延長として申し上げるのです。それは、外でもありません。貴女が如何いかなる男性の感情を、どんなに弄もてあそぼうが、それは貴女の御勝手です。いや御勝手と云うことにして置きましょう。だが、青木君の弟の感情を、弄ぶこと丈は、僕が青木君に代つて、断然お断りして置きます。まさか、貴女も少しでも人情がお有りでしたら、兄を深淵しんえんへ突き陥おとした後で、その肉親の弟をも、同じ処ところへ突き陥するような残酷なことはなさるまいとは思いますが、念のためにお願して置くのです。いやどうもお邪魔しました。」

夫人の顔が、遠さすに蒼白そうはくに転ずるのを尻目しりめにかけながら、信一郎は、素早く部屋を出ようとした。が、それを見ると、夫人は屹きつとなつて呼び止めた。

「渥美あつみさん！ お待ちなさい！」

その凜りんとした声には、女王のような威嚴いげんが備わっていた。

「貴君あなたは、自分の仰おつしやることさえ仰しやうてしまえば、それでお帰りになつてもいいとお考かんえになるのですか。貴君が、妾わたくしに御用事がある中うちは、貴君に帰る権利が、妾になつたように、妾が貴君に申上げることが残っている以上貴君はお帰りになる権利はありません

ん。妾は一言丈貴君に申上げることが残っています。」

美しい眉まゆは吊り上り、黒い眸ひとみは、血走っていた。信一郎を、屹と見詰めて立っている姿は、『怒れる天女』と云ったような、美しさと神々こうこうしさがあつた。

「貴君は、今青木さんの遺言ゆいごんとやらを、長々しく仰しやいましたが、それを妾が受けると思つていらつしやるのですか。時計こそ、お受けしましたが、そんな御遺言なんか、一言半句だつて、お受けする覚えはありません。そんなお言伝を、青木さんから承わるような覚えは、さら／＼ありません。今承わつたお言葉全部を、そのまゝ御返上します。」

夫人の声にも、憎みと怒りとが、燃えていた。が、信一郎はたじろがなかつた。

「死人に口がないと思つて、そんなことを仰しやつては困ります。貴女を、今日訪問した客に村上と云う海軍大尉たいいがあつた筈はずです。まさか、ないとは仰しやいますまいね。」

「よく御存じですね。」

夫人は、平然として答えた。

「それなら、青木君の遺言を受ける責任と義務とがあります。貴女に、もし少しでも良心が残つていらつしやるのなら、今貴女にお目にかかるものを、平然と読めるかどうか試して御覧なさい！」

そう云いながら、信一郎はポケットに曲げて入れていたノートを夫人の眼前めのまえに突き付けた。

三

信一郎が、眼の前に突き付けたノートを、夫人は事もなげに受取った。ノートの重さにも堪たえないような華奢きゃしゃな手で、それを無造作に受け取った。

鋼鉄の如ごとき心と云いうのは、恐らく今の場合の夫人の心を云うのだろう。鬼が出るか蛇が出るか分らないそのノートを、受け取りながら、一糸みだ紊れたところも、怯ひるんだところも見せなかった。

「おや、青木さんのノートでございますのね。」

夫人は、平然と云いながら、最初の頁ページから繰り初めた。繰っているその白い手は、落着きかえっている。

が、信一郎は思った。今に見ろ、どんなに白々しい夫人でも、血で書いた青木淳の忿ふんこ恨の文字に接すると、屹きつと度良心の苛責かしかくに打たれて、女らしい悲鳴を挙げる。彼女の孔くじ

雀の如き虚飾の驕りを擾されて、女らしい悔恨に打たれるに違いない。そう思いながら、頁を繰る夫人の手許と、やゝ蒼んでゐる美しい面から、一瞬も眼も放たず、じつと見詰めていた。

その裡に、夫人はハタと、青木淳が書き遺した文字を見付けたらしい。追に美しい眸は、卓の上に開かれたノートの上の頁の上に、釘付にされたように、止つてしまった。

美しい面が、最初薄赤く興奮して行つた。が、それがだんく蒼白になり、唇の辺りが軽く痙攣するように動いていた。

夫人が、深い感動を受けたことは、明かだつた。信一郎は、今にも夫人が、ノートの上に瓦破と泣き伏すことを予期してゐた。泣き伏しながら、非業に死んだ青年の許しを乞ふことを想像した。彼女の美しい目から、真珠のような涙が、ハラ／＼と迸しることを待つていた。悔恨と懺悔との美しい涙が。

が、信一郎の予期は途方もなく裏切られてしまった。一時動揺したらしい夫人の表情は、直ぐ恢復した。涙などは、一滴だつて彼女の長い睫をさえ湿さなかつた。

彼女は、一言も云わずに、ノートを信一郎の方へ押しやつた。

信一郎は、夫人の必死的な態度に圧せられて、此の上何か云う勇氣をさえ挫かれた。

二人は、二三分の間、黙々として相對していた。信一郎は、その険しい重くるしい沈黙に堪えかねた。

「如何いかにです。此のノートを読んで、貴女あなたは何ともお考えにならないのですか。」

信一郎の声の方が、却かえつてあやしい顫ふるえをさえ帯びていた。

夫人は、黙して答えなかつた。

信一郎は、畳みかけて訊きいた。

「貴女は、青木君が血を以もつて書いた、此のノートを読んで、何ともお考えにならないのですか。青木君の云い草じやないが、貴女の少しでも残っている良心は、此のノートを読んで、顫おののい戦おののかないのですか。貴女の戯たわむれの作つた恐ろしい結果に戦せんりつ慄りつしないのですか。」

信一郎は、可なり興奮して突きかゝつた。

が、夫人は冷然として、氷の如く冷かに黙っていた。

「奥さん！ 黙つていらしつては分りません。貴女は！ 貴女は此ノートを讀んで何ともお考えにならないのですか。」

信一郎は、いらだつて叫んだ。

「考えないことはありませんわ。」

彼女の沈黙が冷かな如く言葉そのものも冷かであつた。

「お考えになるのなら、そのお考えを承わろうじやありませんか。」

信一郎は益々ますますいらだつた。

「でも、死んだ方に悪いのですもの。」

「死んだ方に悪い！ 貴女はまだ死者を蔑さげすもうとなさるのですか。死者を誣しいようとなさ

るのですか。」

信一郎は火の如く激昂した。

その激昂に、水を浴びせるように夫人は云つた。

「でも、妾わたくし、此ノートを読んで考えましたことは、青木さんも普通の男性と同じように、
自惚うぬぼれが強くて我儘わがままであると云うこと丈ですもの。」

四

夫人の言葉は、信一郎を哑然あぜんたらしめた。彼は呆氣に取られて、夫人の美しい冷かな顔を見詰めていた。どんな妖婦ようふでも、昔の毒婦伝に出て来るような恐ろしい女でも、自分を

恨んで死んだ男の遺書^{かきおき}を、こうまで冷酷に評し去る勇氣はないだろう。自分を恨んでい
る、血に滲^{にじ}んだ言葉を自惚^{うぬぼ}れと我儘^{わがまま}だと云^いつて評し去る女はないだろう。

が、一時の驚きが去ると共に、信一郎の心に残ったものは、夫人に対する激しい憎悪^{ぞうお}だ
った。女ではない。人間ではない。女らしさと、人間らしさを失った美しい怪物である。
その人を少しでも人間らしく考えた自分が、間違^{まちが}つていたのだ。彼は心の中の憎悪を吐き
捨てるように云った。

「いやもう、なにも言いたくありません。貴女^{あなた}は、貴女のお考えで、男性^{もてあそ}を弄^{もてあそ}ぶことをお
つづけなさい！ その中に、純真な男性の怒が、貴女を粉微塵^{こなみじん}に砕く日が来るでしょう
。」

信一郎は、床を踏み鳴らさんばかりに、激昂しながら、叫んだ。

が、信一郎が激すれば、激するほど、夫人は冷静になって行^いった。彼女は、冷たい冷笑
をさえ頬の辺りに、浮べながら、落着き返^{かえ}つて云った。

「男性を弄^{あな}ぶ！ 貴君^{あなた}は、女性が男性を弄^{あな}ぶことを、そんなに恐ろしい罪惡のように考え
ていらつしやるのですか。だから、妾^{わたくし}が男性の我儘^{わがまま}だと云うのですわ。若^もし、男性を弄^{あな}ぶ
女性を、純真な男性の怒りが、粉微塵に砕くとしたなら、今の世間の大抵の男性は、純真

な女性の怒りに依^よつて、粉微塵に碎かれる資格があるでしょう、貴君だって、貴君の純真な奥さんのお心の前に、少しも、恥かしいと思うことはありませんか、貴君が妾の良心にお訴えになったように、妾も貴君の良心に、それを伺いたいと思いますの。」

夫人の態度は、明^{あきつ}に熱していた。赤く熱すると云うよりも、白く冷たく而^{しか}も極度に熱していた。

「女性が男性を弄ぶと貴君方男性は、直^すぐ妖婦だとか毒婦だとか、あらん限りの悪名を浴びせかける。貴君などは、眼の色を変えてまで、叱^{しつ}責^{せき}なさろうとする。が、御覧なさい！ 世間の男性がどんなに女性を弄んでいるかを。女性が男性を弄ぶに致しましたところで、それは男性の浮動し易^{やす}い心を、弄ぶのに過ぎないじゃありませんか。男性が女性を弄ぶ場合は、心も肉体も、名誉も節操も、蹂^{じゅう}躪^{りん}し尽すじやありませんか。眼にこそ見えませんが、この世間には男性に弄ばれた女性の生きた惨^{むご}たらしい死骸^{しかい}が、幾つ転がっているかも分りません。貴君の眼の前にいる女性なども、案外にもそうした生きた死骸の一つだ分りませんよ。」

夫人の美しい眸^{ひとみ}は爛^{らん}々と輝いた。その美しい声は、烈^{はげ}しい熱のために、顫^{ふる}えていた。

「男性は女性を弄んでよいもの、女性は男性を弄んでは悪いもの、そんな間違った男性本

位の道德に、妾は一身を賭^としても、反抗したいと思っていますの。今の世の中では、国家までが、国家の法律までが、社会のいろ／＼な組織までが、そうした間違^{まちが}った考え方を、助けているのでございますもの。御覧なさい！ 世の中には、お女郎屋だとか待合だとかお茶屋だとか、男性が女性を公然と弄^もぶ機関が存在しているのですもの。そう云うものを国家が許し、法律が認めているのですもの。また、そう云うものが存在している世の中に、住みながら、教育家とか思想家などと云う人達が、晏^{あんぜん}然として手を拱^{こまぬ}いているのですもの。女性ばかりに、貞淑であれ！ 節操を守れ！ 男性を弄^もぶな！ そんなことを、幾何^{いくご}口を酸^すくして説いても、妾はそれを男性の得手勝手だと思ひますの。男性の我儘^{ごう}だと思ひます。丁度此^この青木さんのノートが、男性の我儘^{ごう}を示しているように。」

虐^{しいた}げられたる女性全体の、反抗の化身であるように、夫人の態度は、跳ね返る竹^{たけ}の如^{ごと}き鋭^{えい}さを持つていた。

五

夫人は、心の中に抑えに抑えていた女性としての平生の鬱^{うつ}憤^{ぶん}を、一時に晴してしまふ

ように、烈しく迸る火花のように喋り続けた。

「人が虎を殺すと狩猟と云い、紳士的な高尚な娯楽としながら、虎が偶々人を殺すと、兇暴とか残酷とかあらゆる悪名を負わせるのは、人間の得手勝手です。我儘です。

丁度それと同じように、男性が女性を弄ぶことを、当然な普通なことにながら、社会的にも妾だとか、芸妓だとか、女優だとか娼婦だとか、弄ぶための特殊な女性を作りながら、反対に偶々一人か二人かの女性が男性を弄ぶと妖婦だとか毒婦だとか、あらゆる悪名を負わせようとする。それは男性の得手勝手です。我儘です。妾は、そうした男性の我儘に、一身を賭して反抗してやろうと思つていますの。」

彼女は、一寸言葉を途切らせてから、

「青木さんとの事だつて、そうでございますわ。貴君などは、凡ての責任を妾に負わせようと遊ばす。妾が、清浄無垢な青木さんを迷わしたようなことをお云いになる。が、あの時計だつて、妾が青木さんに、どうかお受け取りになって下さいと云つて、差し出したものじゃあございせんわ。青木さんが、幾度も呉れくと仰しやつたから差し上げたのよ。自分がおねだりなすつたことなどは、ちつとも書いておありにならないのですもの。だから、自惚れが強くて我儘だと申したのですわ。またあの方が、幾何自殺をすると書

いておありになつても、それはあの方の詠嘆に過ぎませんわ。もし、自動車が転覆しなかつたら、あの方は今日あたりは、妾の客間へお見えになったかも知れませんよ。また縦令自殺の決心が、本当でおありになつたとしても、それを妾一人の責任のように、御解釈なさることは、御免蒙りたいと思いますわ。だつて、あの方の性格の弱さに対してまで、妾は責任を持ちたくありませんもの。妾との戯恋の一寸した幻滅で、自殺をなさるような方は、男子としての生存的意志を、持つていないと申上げてほしいのですもの。妾のいきさつで、自殺なさらなくつても、又なにか別なことで、直ぐ自殺してしまう方ですもの。

信一郎は、夫人の言葉を聴いている中に、それを夫人の捨鉢な不貞腐の言葉ばかりだとは、聞きながされなかつた。彼は、その美しい夫人の裡に、如何なる男性にも劣らないような、鋭い理智と批判とを持つた一個の新しい女性、如何なる男性とも、精神的に戦い得るような新しい強い女性を認めたのである。

彼の夫人に対する憎悪は、三度四度目に、又ある尊敬に変わっていた。旧道德の殻を踏み躪っている夫人を、古い道德の立場から、非難していた自分が、可なり馬鹿らしいことに気が付いた。

夫人の男性に対する態度は、彼女の淫蕩な動機からでもなく、彼女の妖婦的な性格からでもなく、もつと根本的な主義から思想から、萌きんぎしているのだと思った。

「妾、男性がしてもよいことは、女性がしてもよいと云うことを、男性に思い知らしてやりたいと思いますの。男性が平気で女性を弄ぶのなら、女性も平気で男性を弄び得ることを示してやりたいと思いますの。妾一身を賭して男性の暴虐ぼうぎやくと我儘ごころとを懲こしてやりたいと思いますの。男性に弄ばれて、綿々の恨みを懷いだいている女性の生きた死骸しがいのために復讐くしゅうをしてやりたいと思いますの。本当に妾だつて、生きた死骸のお仲間かも知れませんですもの。」

そう云いながら、夫人は一寸頭をうなだれた。緊張し切つていた夫人の顔に、悲しみの色が、サツと流れた。

六

物凄ものすごいいと云つてよいか、死身と云つてよいか、兎とに角かく、烈々たる夫人の態度は、信一郎の心を可なり振盪しんとうした。

これほどまで、深い根柢から根ざしている夫人の生活を、慣習的な道德の立場から、非難しようとした自分の愚かさを、信一郎はしみじみと悟ることが出来た。夫人をして彼女の道を行かしめる外はない。縦令たとい、その道が彼女を、どんな深淵しんえんに導こうとも、それは彼女に取って覚悟の前の事に違いない。多くの男性を翻弄ほんろうした報いのために、縦令彼女自身を亡ぼすほろとも、それは、彼女としては、主義に殉ずることであり、男性に対する女性の反抗の犠牲となることなのだ。

「いや！ 奥さん、僕は貴女あなたのお心が、始めて解わかつたように思います。僕はそのお心に賛成することは出来ませんが、理解することは出来ます。貴女に忠告がましいことを言つたのを、お詫わびします。貴女が、一身を賭として、貴女の思い通り、生活なさることを、他ほかからかれこれ云うことの愚さに気が付きました。が、奥さん、僕は、今お暇いとまする前に、たった一つ丈お願いがあるのです。聴いて下さるでしょうか。」

「どんなお願いでございましょうか。妾わたくしにも出来ることでございましたら。」

信一郎が夫人の本心を知ってから、可なり妥協的な心持になっているのにも拘かかわらず、夫人の態度の陰しきは、少しも緩ゆるんでいなかった。

「外でもありません。先刻も申しました通り、青木君の弟丈を、貴女の目指す男性から除

外していたゞきたいと思うのです。青木君の死をまぎくと知っている丈、あの方の弟までが、貴女の客間に出入することは、僕の心を暗くするのです。青木君の死の責任が孰ら（どち）にありましようとも、青木君が貴女を恨んで死んだ以上、青木君の弟に対して丈は、慎んでいたゞきたいと思うのです。」

「貴君は、御忠告をなさらないと云う口の下から、またそう云うことを仰（おつ）しやるのですね。」そう云いながら、逡（さす）に夫人は一寸苦笑ともなく微笑ともなく笑った。「自分の生活丈を自分の思い通（どおり）にしようとするものは、利己主義ではない、他人の生活まで、自分の思い通にしようとするものこそ、本当の利己主義だと、ある人が申しましたが、貴君などこそ、本当の利己主義でいらつしやいますわね。青木さんの弟が妾（めかけ）を慕（した）っていらつしやるとする。そう仮定したとしても、それがあの方としては、一番本当の生活じやございませんでしょうか。それが、あの方として一番本当の生き方じやございませんか。そう云う他人の真剣な生活を、貴君が傍から心配なさることは少しもないと思いますわ。妾のために、あの方が、一身を犠牲にするような事があつたとしても、あの方としては一番本当の生き方をしたと云う事になりは致しませんでしょうか。」

夫人の考え方は、凡（すべ）ての妥協と慣習とを踏み躪（にじ）っていた。

「果してそんなものでしょうか。僕は断じてそうは思いません。」

信一郎は可なり激しく、抗議せずにはいられなかった。

「それは、銘々の考え方の違いですわ。妾は、妾の考え方に依^よつて生きる自由を持っています。」

夫人は、この長い激論を打ち切るように云った。

「そうです。それはそうかも知れません。が、貴女が貴女の考えに依つて生きる自由があるように、僕も僕の考えを実行する自由を主張するのです。奥さん！ 青木君の弟を、あなたの脅^{きよう}威^いから救うことに、僕は相当の力を尽すつもりです。それは死んだ青木君に対する僕の神聖な義務だと思ふのです。」

「どうか、御随意に。」夫人は、冷然と云った。

「青木さんの弟に取つては、本当に有難迷惑だとは思いますが、然^{しか}し止^やむを得ませんわ。貴君が躍起になった御忠告が、あの方の妾に対するお心を、どの位醒^{さま}させるか、ゆつくり拝見したいと思いますわ。」

夫人は、最後の止^{とど}めを刺すように、高飛車に冷然と笑いながら、云い放った。

初恋

一

瑠璃子夫人を、あの太陽に向つて、豪然と咲き誇っている向日葵に譬えたならば、それとは全く反対に、鉢の中の尺寸の地の上に、楚楚として慎やかに花を付けるあの可憐な雛粟の花のような女性が、夫人の手近にいることを、人々は忘れはしまい。それは云うまでもなく、彼的美奈子である。

父の勝平が死んだとき十七であつた美奈子は、今年十九になっていた。その丸顔のสีขาวの面は、処女そのものの象徴のような、淨さと無邪氣とを以て輝いていた。

男性に対しては、何の真情をも残していないような瑠璃子夫人ではあつたが、彼女は美奈子に対しては母のような慈愛と姉のような親しさとを持っていた。

美奈子も亦、彼女の若き母を慕っていた。殊に、兄の勝彦が父に対する暴行の結果として、警察の注意のため、葉山の別荘の一室に閉じ込められたために、彼女の親しい肉親の人

々を凡て彼女の周囲から、奪われてしまった寂しい美奈子の心は、自然若い義母に向つていた。若き母も、美奈子を心の底から愛した。

二人は、過去の苦い記憶を悉く忘れて、本当の姉妹のように愛し合つた。瑠璃子が、勝平の死んだ後も、莊田家に止まっているのは、一つは、美奈子に対する愛のためであると云つてもよかつた。この可憐な少女と、その少女の当然受け継ぐべき財産とを、守つてやろうと云う心も、無意識の裡に働いていたと云つてもよかつた。

従つて瑠璃子は、美奈子を処女らしく、女らしく慎しやかに育て、行くために、可なり心を砕いていた。彼女は彼女自身の放縦な生活には、決して美奈子を近づけなかつた。

彼女を追う男性が、蠅のように蒐まつて来る客間には、決して美奈子を近づけなかつた。従つて、美奈子は母の客間に、どんな男性が蒐まつて来るのか、顔丈も知らなかつた。

無論紹介されたことなどは、一度もなかつた。たゞ門の出入などに、そうした男性と、擦れ違ふことなどはあつたが、たゞ軽い黙礼の外は口一つ利かなかつた。

母が日曜の午後を、華麗な客間で、多くの男性に囲まれて、女王のように振舞っているのを外に、美奈子は自分の離れの居間に、日本室の居間に、氣入りの女中を相手に、お琴や挿花のお復習に静かな半日を送るのが常だつた。

時々、客間に於ける男性の華やかな笑い声が、遠く彼女の居間にまで、響いて来ることがあったが、彼女の心は、そのために微動だにもしなかった。そうした折など、女中達が、瑠璃子夫人の奔放な、放恣な生活を非難するように、

「まあ！ 大変お賑かでございますわね。奥様もお若くていらつしやいますから。」などと、美奈子の心を察するように、忠勤ぶつた蔭口を利く時などには、美奈子は、その女中をそれとなく窘めるのが常だった。

が、日曜の午後を、彼女はもつと有意義に過すこともあった。それは、青山に在る父と母とのお墓にお参りすることであつた。

彼女は、女中を一人連れて、晴れた日曜の午後などを、わざと自動車などに乗らないで、青山に父母の墓を訪ねた。

彼女は夢のような幼い時の思出などに耽りながら、一時間にも近い間、父母の墓石の辺に低徊していることがあった。

六月の終りの日曜の午後だった。その日は死んだ母の命日に当たっていた。彼女は、女中を伴って、何時ものようにお墓参りをした。

墓地には、初夏の日光が、やゝ暑くると思われるほど、輝かしく照っていた。墓地

を劃^{しき}っている生籬^{いけがき}の若葉が、スイ〜と勢いよく延びていた。美奈子は裏の庭園で、切つて来た美しい白百合^{しらゆり}の花を、右手^{めて}に持ちながら、懐^{なつか}しい人にでも会うような心持で、墓地の中の小道を幾度も折れながら、父母の墓の方へ近づいて行つた。

二

晴れた日曜の午後の青山墓地は、其処^{そこ}の墓石の辺にも、彼処^{かしこ}の生籬^{いけがき}の裡^{うち}にも、お墓詣^{まい}りの人影が、チラホラ見えた。

清々^{すがすが}しく水が注がれて、線香の煙が、白くかすかに立ち昇っているお墓なども多かつた。

小さい子供を連れて、亡き夫^なのお墓に詣るらしい若い未亡人や、珠数^{じゆず}を手にかけた大家の老夫人らしい人にも、行き違つた。

莊田家の墓地は、あの有名なN大將の墓から十間と離れていないところにあつた。美奈子の母が死んだ時、父は貧乏時代を世帯^{しよたい}の苦勞に苦しみ抜いて、碌々^{ろくろく}夫の榮華の日にも会わずに、死んで行つた糟糠^{そうこう}の妻に対する、せめてもの心やりとして、此処^{ここ}に広大な

墓地を営んだ。無論、自分自身も、妻の後を追うて、直ぐ其処に埋められると云うことは夢にも知らないで。

亡き父の豪奢は、周囲を巡っている鉄柵にも、四辺の墓石を圧しているような、一丈に近い墓石にも偲ばれた。

美奈子は、女中が水を汲みに行っている間、父母の墓の前に、じつと蹲りながら、心の裡で父母の懐しい面影を描き出していた。世間からは、いろ／＼に悪評も立てられ、成金に対する攻撃を、一身に受けていたような父ではあったが、自分に対しては、世にかけ替のない優しい父であったことを思い出すと、何時ものように、追慕の涙が、ホロ／＼と止めどもなく、二つの頬を流れ落ちるのだった。

女中が、水を汲んで来ると、美奈子は、その花筒の古い汚れた水を、浚乾してから、新しい水を、なみなみと注ぎ入れて、剪り取ったまゝに、まだ香の高い白百合の花を、挿入れた。こうしたことをしていると、何時の間にか、心が清浄に澄んで来て、父母の霊が、遠い／＼天の一角から、自分のしていることを、微笑みながら、見ていて呉れるような、頼もしいような懐しいような、清々しい気持になつていた。

美奈子は、花を供えた後も、じつと蹲まつたまゝ、心の中で父母の冥福を祈っていた。

微風が、そよ／＼と、向うの杉垣の間から吹いて来た。

「ほんとうに、よく晴れた日ね。」

美奈子は、やつと立ち上りながら、女中を見返つてそう云つた。

「左様でございます。ほんとうに、雲の片かけ一つだつてございませんわ。」

そう云いながら、女中は眩まぶしそうに、晴れ渡つた夏の天空を仰いでいた。

「そんなことないわ。ほら、彼処あそこにかすつたような白い雲があるでしょう。」

美奈子も、空を仰ぎながら、晴々しい氣持になつてそう云つた。が、美奈子の見附けたその白いかすかな雲の一片を除いた外は、空はほがらかに何処どこまでも晴れ続いていた。

「今日は余りいゝお天気だから直ぐ帰るのは惜しいわ。ぶら／＼散歩しながら、帰りましょう。」

そう云いながら、美奈子は女中うながを促して、懐しい父母の墓を離れた。

何時いつもは、歩き馴なれた道を、青山三丁目の停留場に出るのであつたが、其日そのは清い墓地内を、当あてもなくぶら／＼歩くために、わざと道を別な方向に選んだ。

自分の家の墓地から、三十間ばかり来たときに、美奈子はふと、美しく刈り込まれた生籬に囲まれた墓地の中に、若い二人の兄きょうだい妹らしい男女が、お詣りしているのに氣が付

いた。

美奈子は、軽い好奇心から、二人の容子を可なり注意して見た。兄の方は、二十三四だろう。銘仙らしい白い飛白^{かすり}に、袴^{はかま}を穿いて麦藁^{むぎわら}の帽子を被^{かぶ}つた、スラリとした姿が、何処となく上品な氣品を持っていた。妹はと見ると、まだ十五か十六だろう、青味がかった棒^{ぼう}縞^{しま}のお召にカシミヤの袴を穿いた姿が、質素な周囲と反映してあざやかに美しかった。美奈子達が、段々近づいてその墓地の前を通り過ぎようとしたとき、ふと振り返った妹は、美奈子の顔を見ると、微笑を含みながら軽く会^え釈^{しゃく}した。

三

妹らしい方から会釈されて、美奈子も周章^{あわ}てながら、それに応じた。が、相手が誰だか、容易に思い出せなかった。長い睫^{まつげ}に掩^{おお}われたその黒い眸^{ひとみ}を、何処^{どこ}かで見たことのあるように思った。が、それが何^どうしても美奈子には思い出せなかった。

「人違いじゃないのかしら。」

そう思って、美奈子は一寸^{ちよつと}顔を赤くした。

が、美奈子がその墓地の前を通り過ぎようとして、^{ふたたび}一度その兄妹らしい男女を見返ったとき、今度は兄の方が、美奈子の方を振り返っていた。恐らく妹が、^{あいさつ}挨拶したので、一寸した興味を持った^{ため}為だろう。美奈子の眸は、当然その青年の顔を、正面から見た。その^{せつな}刹那美奈子は、若い男性と、^{とつき}咄嗟に顔を見合わせた恥かしさに、^{はじ}弾かれたように、顔を元に返した。

それはホンの一瞬の間だった。が、その一瞬の間に一目見た青年の顔は、美奈子の心に、^{のみ}名工が鑿を振ったかのように、ハッキリと刻み付けられてしまった。

彼女は、今まで異性の顔に、自分から注意を向けたことなどは、^{ほどん}殆どなかった。が、今見た青年の顔は、彼女の注意の^{すべ}凡てを、支配するような不思議な魅力を持っていた。

白いくつきりとした顔、妹によく似た黒い眸、^{りり}凜々しく引きしまった唇、顔全体を包んでいる上品な^{におい}匂い。

お墓参りの後の、澄み渡ったような美奈子の心持は、^{たちま}忽ち^{みだ}掻き擾されてしまった。彼女ののんびりとしていた歩調は、急に早くなった。彼女の心は、強い力で後へ引かれながら、身体丈けは彼女の意志とは反対に、前へへと急いでいた。丁度、恐ろしいものからでも逃れるように。

彼女の擾みだれていた心が、だん／＼和なごんで来るのに従って、先刻の妹の方から受けた挨拶のことを、考えていた。先方は、自分を知っているに違ない。少くとも、妹の方丈は、自分を知っていて呉くれるに違ない。が、そうは思つて見るものの、妹が誰であるか何うしても思ひ出されなかつた。

が、通り過ぎた時に、チラと見た所に依ると、二人が、つい近く失つたばかりの肉親のお墓詣まいりをしていたこと丈は、明かだつた。幾本も立っている卒都婆そとばが、どれもこれも墨の匂が新しかつた。

美奈子は、知人の家で、最近に不幸のあつた家を、それからそれと数えて見た。が、何うしても兄妹の所属は判わからなかつた。

妹の方が、人違をしたのかも知れない。そう思うことは美奈子は、何だか淋さみしかつた。やつぱり、此方こちらが思い出せないのだ。その中には、また屹度きつとあの人達と顔を合せる機会があるに違いない。屹度機会が来るに違いない。

「お嬢様！ 何方どっちへ行らつしやるのでございます？」

そう云いつて呼び止める女中の声に驚いて、美奈子が我に帰ると、美奈子は右に折れるベき道を、ズン／＼前へ、出口のない小径こみちの方へと、進んでいるところだつた。

「其方へいらつしやいますと突き当りでございますよ。」

そう言いながら、女中は笑った。

「おや！ おや！ 妾わたしほんやりしていたわ。」

美奈子も、てれかくしに笑った。

二人は何時の間にか霞町かすみちょうの方へ近づいていた。

「霞町から乗つて、青山一丁目で乗換えすることにいたしましたでしょうか。」

女中の発議に委まかしたように、美奈子は黙つて霞町の方へ、だら／＼した坂を降くだっていた。心の中では、まだ一心に、その妹の顔と兄の顔とを等分に考えながら。

塩町行の電車の昇降台しやうこうだいの棒に、美奈子が手をかけたとき、彼女は低く、

「あゝそう／＼！」と、自分自身に言った。

彼女は、やつと妹を思い出した。お茶の水で確か三年か二年か下の級にいた人だ。そう／＼！ 先刻見たときバンドをしていたのをスツカリ忘れていた。向うでは此方こつちの顔丈わを覚えていて呉れたのだ。そう思うと、美奈子は兄妹に対して一入ひとしおなつかしい心が湧いて来た。

四

少女の顔丈は、やつと思ひ出したけれども、名前は何うしても思ひ出せなかった。家へ歸つてからも、美奈子は、お茶の水にいた頃の校友会雑誌の『校報』などを拵^{ひろ}げて、それらしい名前を、思ひ出そうとしたけれども、やつぱり徒爾^{むだ}だった。

自分ながら、何うしてあの兄妹に、不思議に心を惹^ひかされるのか、美奈子には分らなかった。が、兄の方の白い横顔や、妹の会^え釈^{しゃく}した時の微笑などが何うしても忘れられなかった。自分にも、あんなに親しい兄があつたら、兄の勝彦が、もう少し普通の人間であつたら、などとり止めもないことを、考えながら、やつぱり忘れられないのは、一目顔を見合わせた丈の兄妹だった。否^{いな}、本当に忘れられないのは、兄の方一人丈だったかも知れない。たゞ兄を想^{おも}ひ出すごとに、妹は影の形に伴うごとく、彼女の記憶^{うち}の裡^{よみ}に、甦^{よみがえ}つて来るのかも知れなかった。異性の兄の方丈を考えることは、彼女の憤^つましい処女性^{じょせい}が、彼女自身にそれを許さなかった。彼女は、自身でも兄妹のことを考えているように、言訳しながら、本当は兄丈のことを考えていたのかも知れなかった。

美奈子は、兄の方の美しい凜^り々しい姿を、心の裡で、じっと嚙^かみしめるように、想ひ出

しているとほの／＼と夜の明けるように、心の裡に新しい望^{のぞみ}や、新しい世界が開けて行くように思った。今まで夢にも知らなかったような、美しい世界が開けて行くように思った。

が、それと一緒に、兄妹の名前が、ハッキリと知れないことが、寂しかった。あの時に、偶然逢^あつたばかりで、今後永く、否一生逢わずに終るのではないかと思ったりすると、淡い掴^{つか}みどころのないような寂しさが、彼女の心を暗くしてしまうのだった。

彼女は、新しい望みと、寂しさを一緒に知ったと云^いつてもよかった。否彼女の心の少女らしい平和は、永久に破られたと云つてもよかった。

美奈子は、以前よりも温和^{おとな}しい、以前よりも慎しい少女になっていた。

その裡に、彼女の心にも、少女らしい計画^{プラン}が考えられていた。そうだ！此^この次の日曜にも、お墓詣^{まい}りをして見よう。もし、あの新しい墓の主が、兄妹に取って親しい父か母かであつたならば、此次の日曜にも二人は屹^{きつと}度、お詣りをしているのに違ない。

そう考えて来ると、美奈子には次の日曜が廻^{まわ}つて来るのが、一日千秋のように、もどかしく待たれた。

が、待たれたその日曜が来て見ると、昨夜^{ゆうべ}からの梅雨^{つゆ}らしい雨が、じめ／＼と降つてい

るのだった。

「今日はお墓詣りに行こうと思つていたのですけれども。」

美奈子は、朝母と顔を見合すと、運動会の日を雨に降られた少女か何かのように、滾すように言つた。瑠璃子には美奈子の失望が分らなかつた。

「だつて！ 美奈さんは、前の日曜にもお参りしたのじゃないの。」

「でも、今日も何だか行きたかつたの。妾^{わたくし}楽しみにしていたのです。」

「そう！ じゃ、自動車^{くるま}で行つて来てはどう。自動車を降りてから、三十間も歩けばいいのですもの。」

瑠璃子は、優しく言つた。

「でも！」そう言つて、美奈子は口籠^{くちごも}つた。

雨を衝^ついてでも、風を衝^ついてでも、自分は行つてもいい。が、先方^{むこう}は？ そう思うと、美奈子は寂しかった。普通にお墓詣りをする人が、こんな雨降りの日に出かけて来る訳はない。そう思つて来ると、雨降りにでも行こうと云う自分の心、否お墓詣りと云うことを、ダシに使おうとしている自分の心が、美奈子は急に恥かしくなつた。彼女は、われにも非^{あら}ず顔を赤くした。

「おや！ 美奈さん。何がそんなに恥しいの。お墓詣りするのが、そんなに恥しいの？」
明敏な瑠璃子は、美奈子の表情を見逃さなかった。

「あら！ そうではありませんわ。」

と、美奈子は周章^{あわ}てゝ、打ち消したが、彼女の素絹^{しらぎぬ}のように白い頬は、耳の附根まで赤くなっていた。

五

その次の日曜は、珍らしい快晴だった。洗い出したような紺青^{ウルトラマリン}色の空に、眩^{まぶ}しい夏の太陽が輝かしい光を、一杯に漲^{みなぎ}らしていた。

美奈子は、朝眼が覚めると、寢床^{ベッド}の白いシーツの上に、緑色の窓掩^{カーテン}を透して、朝の朗かな光が、戯^{たわむ}れているのを見ると、急に幸福な感じで、胸が一杯になった。今日は何だか、楽しい嬉^{うれ}しい出来事に出逢^{であ}いそうな気がした。彼女は、いそぐとして、床を離れた。

午前中は、いろ／＼な事が手に付かなかった。母に勧められて、母のピアノにヴァイオリンを合せたけれども、美奈子は何時^{いつ}になく幾度も幾度も弾^ひき違えた。

「美奈さんは、今日は何うかしているじゃないの？」と、母から心の裡の動揺を、見透されると、美奈子の心は、愈々掻き擾されて、到頭中途で合奏を止めてしまった。

午後になるのを待ち兼ねたように、美奈子はお墓詣りに行くための許しを、母に乞うた。何時もはあんなに気軽に、口に出せることが、今日は何だか、云いにくかった。

墓地は、何時ものように静かだった。時候がもうスツカリ夏になった為か、此の前來たときのように、お墓詣りの人達は多くはなかった。が、周囲は、静寂であるのにも拘わらず、墓地に一步踏み入れると同時に、美奈子の心は、ときめいた。何だか、そわ／＼として、足が地に付かなかった。恐いような怖ろしいような、それでいて浮き立つような唆られるような心地がした。

父母のお墓の前に、じつと蹲まったけれども、心持はいつものように、しんみりとはしなかった。こんな心持で、お墓に向つてはならないと、心で咎めながらも、妙に心が落着かなかった。

彼女は、平素とは違つて、何かに周章たように、父母の墓前から立ち上った。

「すみや、今日も霞町の方へ出て見ない！」

美奈子は、一寸顔を赤めながら何気ないように女中に云った。女中は黙つて従いて来

た。

美奈子の心は、一步毎にその動揺を増して行つた。彼女は墓石と墓石との間から、今にも麦藁帽の端か、妹の方のあざやかな着物が、チラリとでも見えはせぬかと、幾度も透して見た。が、その辺は妙に静まり返つて、人氣さえしなかつた。

彼女が、決心して足を早めて、心覚えの墓地に近づいて行つたとき、彼女の希望は、今朝からの興奮と幸福とは、煙のようにムザ／＼と、夏の大空に消えてしまった。

心覚えの墓地は、空しかった。新しい墓の前には、燃え尽きた線香の灰が残っている丈であつた。供えた花が、凋れてゐる丈であつた。美奈子の心を、寂しい失望が一面に塞しってしまった。

せめて墓に彫り付けてある姓名から、兄妹の姓名を知りたいと思つた。が、生籬越に見た丈では、それが何うしても、確められなかつた。それかと云つて、女中を連れてゐる手前、それを確かめるために、墓地の廻りを歩いたりすることも出来なかつた。

美奈子は、満されざる空虚を、心の裡に残しながら、寂しくその墓地の前を通り過ぎた。彼女は、その途端ふと学校で習つた『株を守つて兎を待つ』と、云う熟語を思い出した。約束もしない人が、何うして一定の時日に、一定の場所に来ることがあるだろう。そう思

つて来ると、自分の子供らしさが、恥しいと同時に、寂しい頼りない気がした。或は、あれ切りもう一生逢われない人かも知れない。

彼女は、怏々^{おうおう}として、暗いむすぼれた心持で電車に乗った。今までは楽しく明るい世の中が、何だか急に翳^{かげ}つて来たようにさえ思われた。

が、美奈子の乗った九段両国行の電車が、三宅坂^{みやけさか}に止まったとき、運転手台の方から、乗って来る人を見たとき、美奈子は思わずその美しい目を睥^{みは}つた。

六

美奈子が、駭^{おどろ}いて目を睥^{みは}つたのも、無理ではなかった。車内へツカくと、這入^{はい}つて来て、彼女の直ぐ斜前^すへ腰を降ろしたのは、紛れもない、墓地で見た彼の青年であつた。美奈子が二週間もの間、外^{よそ}ながらも一度見たいと思つていたあの青年であつた。彼女は、一目見たばかりではあつたが、上品なその目鼻立を見ると、直ぐそれと気が付いた。

その青年に、つい目と鼻の位置に坐^{すわ}られると、美奈子は顔を赧^{あから}めて、じつと俯^{うつ}むいてしまふ女だつた。が、心の裡^{うち}では思つた、何と云^いう不思議な偶然^{チャンス}だろう。その人に逢^あえる

と思つた場所では、逢えないで、悄然しょうぜんと歸つて来る電車の中で、ヒョックリ乗り合はす。何と云う不思議な偶然だろう。そう思うと同時に、不思議な偶然の向うには、思いがけない幸福でもが、潜んでいるように思われて、先刻まで凋しおれかえつていた美奈子の心は、別人のように晴れやかに、弾んで来た。が、美奈子は顔を上げて、相手の顔を、じつと見詰める丈の勇氣はなかつた。車台の床に投げられている彼女の視線には、青年が持つてゐる細身の籐とうのステッキの尖端はしだけしか映つていなかった。

あの方は、自分の顔を覚えていてくれるかしら。美奈子はそんなことを、わく／＼する胸で、取り止めもなく考えていた。兎とに角かく、妹が挨拶あいさつをした以上、自分の顔丈位は、覚えていて呉くれるかしら。覚えていて呉れ／＼ば、どんなに幸福であろうかなどと思つたりした。

電車は、直ぐ半蔵門で止つた。もう、自分の家までは二分か三分かの間である。動き出せば直ぐ止る、わずかの距離であつた。美奈子は、もつと／＼此この電車に乗つていたかつた。そうだ！ 青年の乗つてゐる限り、此の電車に乗つていたいと思つた。

彼女は、女中をそれとなく先へ降して、神田辺に買物があると云つて、此のまゝずっと乗り続けていようかと思つたりした。が、そうした大胆な計画をなすべく、彼女はあまり

に純だった。

その内に、電車はもう半蔵門の停留場を離れていた。英国大使館の前の桜青葉の間を、勢よく走っていた。美奈子は電車が、平素の二倍もの速力で走っているように思った。彼女は、最後の「警」を得ようとして、思い切つて顔を持ち上げた。青年は、此の前見たときと同じような白い飛白の着物に紹セルらしい袴を穿いていた。近く見れば見るほど、貴公子らしい凜々しい面影が、美奈子の小さい胸を押し付けるように、迫つて来るのだった。美奈子は、此の青年と向い合つて坐りながら、もつともつと九段までも両国までも、いなくもつと遙かに遙かに遠い処まで、一緒に乗つて行きたいような、切ない情熱が、胸に湧いて来るのを何うすることも出来なかった。このまゝ別れてしまうと、また何時会われるか分らない。二年も三年も、いな一生もう二度と会わないのではあるまいかなど思つたりすると、美奈子は、何うしても座席が離れられなかった。が、女中のすみやは、そんなことは少しも頓着しなかった。

五番町の停留場の赤い柱が見え出すと、主人よりも先きに立ち上つた。

「参りましたよ。」

彼女は主人を促すように云つた。美奈子がそれに促されて、不承々に席を離れようと

したときだった。降りそうな氣勢^{けはい}などは、少しも見せなかった青年が、突然立ち上ると男らしい活潑^{かつぱく}さで、素早く車掌台へ出ると、まだ惰力^{だりよく}で動いている電車から、軽くヒラリと飛び降りた。

『おや！』女中が、傍にいなかったら、彼女は駭^{おどろ}いて声を出したかも知れなかった。

『御近所の方かしら。』そう思った美奈子は、電車を降りながら美しい眸^{ひとみ}を凝^{こら}して、その後姿を見失うまいと、眼も放たず見詰めていた。

七

美奈子より先に、電車を飛び降りた青年は、その後姿を、じつと彼女から見詰められていたとは少しも気が付かないように、籐^{とう}の細身のステッキを、眩^{まぶ}しい日の光の裡^{うち}に、軽く打ち振りながら、グン／＼急ぎ足で歩いた。

美奈子は、一体此^この青年が、近所のどの家に入るのかと、わざと自分の歩調を緩めながら、青年の後姿を眼で追っていた。

その時に、彼女を駭^{おどろ}かすような思いがけないことが、起った。

「おや！ あの方、家へいらつしやるのじやないかしら。」

美奈子は、思わずそう口走らずにはいられなかった。

九段の方へグン／＼歩いて行くように見えた青年は、美奈子の家の前まで行くと、だん／＼その門に吸い付けられるように歩み寄るのであった。

青年は、門の前で、ホンの一瞬間の間、佇^{ちよりつ}立した。美奈子は、やっぱり通りがかりに、

一寸^{ちよつと}邸内の容子を軽い好奇心から覗^{のぞ}くのではないかと思った。が、佇^{たた}ずんで一寸何か考えたらしい青年は、思い切ったように、グン／＼家の中へ入って行つた。ステッキを元気に打ち振りながら。

「お客様ですわ、奥様の。」

女中は、美奈子の前の言葉に答えるように言つた。

いかにも、女中の言う通^{とお}り、母の客間^{サロン}を訪^{おも}つた青年の一人に違いないことが美奈子にも、もう明かだった。

「お前、あの方知っているの？」

美奈子は、心の裡の動揺を押しかくすようにしながら、何気なく訊^きいた。

「いゝえ！ 存じませんわ。^{わたくし}妾はお客間の方の御用をしたことが、一度もないのでござい

ますもの。きくやなら、きつと存じておりますわ。」

きくやと云うのは、母に従っている小間使の一人だった。

美奈子は、兎に角その青年が、自分の家に入りに入っていると云うことを知ったことが、可なり大きい欣びだった。自分の家に入りに入っている以上、会う機会、知己になる機会が、幾何でも得られると思うと、彼女の小さい胸は、歓喜のために烈しく波立って行くのだった。が、それと同時に、母が前から、その青年と知り合っていること、その青年とお友達であることが、不思議に気になり出した。今までは、母が幾何若い男性を、その周囲に惹き付けていようと、それは美奈子に取って、何の関係もないことだった。が、この青年まで、母の周囲に惹き付けられているのを知ると、美奈子は平気ではいらなかった。かすかではあるが、母に対する美奈子の純な濁らない心持が、揺ぎ初めた。

美奈子が、心持足を早めて、玄関の方へ近づいて見ると、青年は取次が帰って来るのを待っているのだろう。其処に、ボンヤリ立っていた。

彼は不思議そうに、美奈子をジロ／＼と見たが、美奈子が此の家の家人であることに、やつと気が付いたと見え、少し周章気味に会釈した。

美奈子も周章で、頭を下げた。彼女の白いふっくりとした頬は、見る／＼染めたように

真赤になった。その時に丁度、取次の少年が帰つて来た。青年は待ち兼ねたようにその後に従いて入った。

美奈子が、玄関から上つて、奥の離れへ行こうとして客間の前を通つたとき、一頻りにぎや賑かな笑い声が、美奈子の耳を衝いて起つた。今までは、そうした笑い声が、美奈子の心を擦りもしなかった。本当に平氣に聞き流すことが出来た。が、今日はそうではなかった。その笑い声が、妙に美奈子の神経を衝き刺した。美奈子の心を不安にし、悩ました。あの青年と、自由に談笑している母に対して、羨望に似た心持が、彼女の心に起つて来るのを何うともすることも出来なかった。

八

その日曜の残りを、美奈子はそわ／＼した少しも落着かない氣持の裡に過ぎねばならなかった。かの青年が、自分の家の一室にすることが、彼女の心を掻き擾してしまつたのだ。今までは、一度も心に止めたことのない客間の方が、絶えず心にかゝつた。青年が母に對してどんな話をしているのか、母が青年にどんな答をしているかと云つたようなことを、

想像することが、彼女を益々不安にさせ、いら／＼させた。

彼女は、到頭部屋の中に、じつと坐つていられないようになって、広い庭へ降りて行つた。気を紛らすために、庭の中を歩いて見たい為だった。が、庭の中を彼方此方と歩いている裡に、彼女の足は何時の間にか、だん／＼洋館の方へ吸い付けられて行くのだった。彼女の眸は、時々我にもあらず、客間の縁側の方へ走るのを、何うともすることが出来なかった。その縁側からは、時々思ひ出したように、華やかな笑い声が外へ洩れた。若い男性の影が、チラホラ動くのが見えた。が、その人らしい姿は、到頭見えなかった。

大抵は、その日の訪問客を引き止めて、華美に晩餐を振舞う瑠璃子であったが、その日は何うしたのか、夕方が近づくのと皆客を帰してしまつて、美奈子とたった二人限り、小さい食堂で、平日のように差し向いに食卓に就いた。

その夜の瑠璃子は、これまでの通り、美奈子に取つて母のような優しさと姉のような親しみとを持っていた。が、美奈子は母に、ホンのかすかではあるが、今までに持たなかったような感情を持ち初めていた。母の若々しい神々しいほどの美貌が、何となく羨ましかった。母が男性と、殊にあの青年と、自由に交際しているのが、何となく羨ましいように、妬ましいように思われて仕方がなかった。が、美奈子はそうしたはしたない感情を、

グツと抑え付けることが出来た。彼女は平素の初々しい温和しい美奈子だった。

順々に運ばれる皿数の最後に出た独活アスパラガスを、瑠璃子夫人がその白魚のような華奢きやしやな指先で、摘み上げたとき、彼女は思い出したように美奈子に云った。

「あゝそうく！ 美奈さんに相談しようと思つていたの。貴女此夏は何処へ行きましようね。四五日の裡に、何処かへ行こうと思つてゐるの。今日なんかもう可なり暑いのですもの。」

「妾わたし、何処だつていゝわ。貴女のお好きなどころなら何処だつていゝわ。」美奈子は、慎重つづらしくそう云った。

「軽井沢は去年行つたし、妾今年は箱根へ行こうかしらと思つてゐるの。今年は電車が強羅うらまで開通したそうだし、便利でいゝわ。」

「妾箱根へはまだ行つたことがありますの。」

「それだと尚なおいゝわ。妾温泉では箱根が一番いゝと思うの。東京には近いし景色はいゝし。じややつぱり箱根にしましょうね。明日でも、富士屋ホテルへ電話をかけて部屋の都合を訊きき合せましょうね。」

そう云つて、瑠璃子は言葉を切つたが、直ぐ何か思い出したように、

「そうく、まだ貴女にお許しを願わなければならぬことがあるの。女手ばかりだと何かに付けて心細いから、男のお友達の方に、一人一緒に行っていたぐころと思うの。貴女、介意^{かま}わなくなつて？」

「介意いませんとも。」美奈子はそう答えた。もし、昨日の美奈子であつたら、それをもつと自由に快活に答えることが出来たであろう。が、今の美奈子はそう答えると共に、胸が怪しく擾れるのを、何うともすることが出来なかつた。

「温和しい学生の方なの。いろくな用事をして貰^{もら}うのにいゝわ。」

瑠璃子は、いかにもその学生を子供扱いにでもしているような口調で云つた。

学生と聴くと、美奈子の胸は更に烈^{はげ}しく波立った。押え切れぬ希望と妙な不安とが、胸一杯に充^みち満ちた。

箱根行

「御機嫌よく行つてらっしゃいませ。」

玄関に並んだ召使達が、口を揃えて見送りの言葉を述べるのを後にして、美奈子達の乗った自動車は、門の中から街頭へ、滑かにすべり出した。

乾燥した暑い日が、四五日も続いた七月の十日の朝だった。自動車の窓に吹き入ってくる風は、それでも稍涼しかったが、空には午後からの暑気を思わせるような白い雲が、彼方此方にムク／＼と湧き出していた。

美奈子は、母と並んで腰をかけていた。前には、母の氣に入りの小間使と自分の附添の女中とが、窮屈そうに腰をかけていた。

美奈子は、母から箱根行のことを訊かされてから、母と一緒に伴って行くと云う青年のことが、絶えず心にかゝっていた。が、母の方からはそれ以来、青年のことは何とも口に出さなかった。母が口に出さない以上、美奈子の方から切り出して訊くことは、内気な彼女には出来なかった。

出立の朝になつても、青年の姿は見えなかった。美奈子は、母が青年を連れて行くことを中止したのではないかとさえ思った。そう思うと美奈子は、失望したような、何と

なく物足りないような心持になった。

自動車が、日比谷公園の傍のお濠端^{ほりばた}を走っている時だった。美奈子は、やっと思い切
つて母に訊いて見た。

「あの、学生の方とかをお連れするのじやなかったの？」

瑠璃子は、初めて気が付いたように云った。

「そうく。あの方を美奈さんに紹介して置くのだったわ。貴女^{あなた}まだ御存じないのでし
う。」

「はい！ 存じませんわ。」

「学習院の方よ。時々制服を着ていらつしやることがあつてよ。気が付かない？」

「いゝえ！ 一度もお目にかゝったことありませんわ。」

「青木さんと云う方よ。」

母は何気ないように云った。

「青木さん！」美奈子は一寸^{ちよつと}駭いたように云った。「その方は此間^{この}、亡^なくなられたので
はございませんの。」

美奈子も、母の男性のお友達の一人なる青木某^{なにがし}が、横死したと云うことは、薄々知つて

いた。

「いゝえ！　あの方の弟さんよ。兄さんは、帝大の文科にいらしたのよ。」

茲^{ここ}まで聴いたとき美奈子にはもう凡^{すべ}てが、判^{わか}つていた。此の旅^{なんびと}行の同伴者が、何人であるかがもうハッキリと判つた。新しく兄を失つた青木と云う青年が、彼女が青山墓地で見たその人であることに、もう何の疑^{うたがい}も残つていなかった。

美奈子の心は、嵐^{あらし}の下の海のように乱れ立つた。かの青年と、少くとも向う一箇月間一緒に暮すと云うことが、彼女の心を、取り乱させるのに十分だった。それは嬉^{うれ}しいことだった。が、それは同時に怖^{おそ}しいことだった。それは、楽しいことだった。が、それは同時に烈^{はげ}しい不安を伴つた。

美奈子の心の大きな動揺を、夢にも知らない瑠璃^{るり}子夫人は、その真白な腕首に喰い入っている時計を、チラリと見ながら独^{ひとりごと}言^{きつと}のように呟^{つぶや}いた。

「もう、九時だから、青木さんは屹^{きつと}度来ていらつしやるに違いないわ。」

そうだ！　青年は、停車場で待ち合わせる約束だったのだ。もう、二三分の後にその人と面と向つて立たねばならぬかと思うと、美奈子の心は、とりとめもなく乱れて行くのだつた。

が、美奈子は少女らしい勇氣を振り起して、自分の心持を纏めようとした。あの青年と会つても、取り乱すことのないように、出来る丈自分の心持を纏めて置こうと思った。美奈子の心持などに、何の容赦もない自動車は、彼女の心が少しも纏まらない内に、もう彼女を東京駅の赤煉瓦^{あかれんが}の大きい建物の前に下していた。

二

美奈子等の自動車の着くのを、先刻^{さつき}から待ち受けていたかのように、駅の群集の間から、五六人の青年紳士が、自動車から降り立つたばかりの、瑠璃子夫人の周囲を取り囲むのであつた。

「お見送りに来たのですよ。」

皆は、口を揃えて^{そろ}云つた。

夫人は軽い快い^{おどろ}驚きを、顔に表しながら云つた。

「おや！ 何うして御存じ？」

「はゝゝ、お驚きになつたでしょう。お隠しになつたつて駄目ですよ。我々の諜報^{ちようほうきよ}

局^くには、奥さんのなさることは、スツカリ判^{わか}っているのですからね。」

外交官らしい、霜降りのモーニングを着た三十に近い紳士が、冗談半分にそう云った。

「それは驚きましたね、小山さん！ 貴君^{あなた}間諜^{スパイ}でも使っているのじゃないの？ おっほ、

ゝ。」

夫人も華やかに笑った。

「使っておりますとも。女中さんなんかに、氣を許しちやいけませんよ。」

「じゃ！ 行先も判^{わか}つて？」

「判^{わか}つていますとも。箱根でしょう。而^{しか}も、お泊りになる宿屋まで、ちゃんと判^{わか}つているのです。」

今度は、長髪に黒のアルパカの上着を着て、ボヘミアンネクタイをした、画家らしい男が、そう附け加えた。

「おや！ おや！ 誰が内通したのかしら？」

夫人は、当惑^{とうわく}したらしい、その実は少しも当惑しないらしい表情でそう答えた。

若い男性に囲まれながら、彼等を軽く扱^{あし}らっている夫人の今日の姿は、又なく鮮かだった。青磁色の洋装が、そのスラリとした長身に、ピッタリ合っていた。極楽鳥の翼で飾つ

た帽子が、その漆のように匂う黒髪を掩うていた。大粒の真珠の頸飾りが、彼女自身の象徴シボルのように、その白い滑らかな豊かな胸に、垂れ下っていた。

平素見馴いつもみなれている美奈子にさえ、今日の母の姿は一段と美しく見えた。駅の広間ホールに渦巻いている群衆の眼も、一度は必ず夫人の上に注がれて、彼等が切符を買ったり手荷物を預けたりする忙がしい手を緩めさせた。

美奈子は、母を囲む若い男性を避けて、一間ばかりも離れて立っていた。彼女は、最初その男達の間に、あの青年のいないのを知った。一寸期待が外れたような、安心してやうな気持ちになっていた。その内に、母を見送りの男性は、一人増え二人加った。が、かの青年は何時いつまで待っても見えなかった。その男性達は、美奈子の方には、殆ど注意を向けなかった。たゞ美奈子の顔を、外よそながら知っている二三人が軽く会釈えしやくした丈だった。

「奥さん！ まだ判わっていることがあるのですがね。」

暫しばらくしてから、紺の背広を着た会社員らしい男が、おず／＼そう云った。

「何です？ 仰おつしゃって御覧なさい。」

夫人は、微笑しながら、しかも言葉丈は、命令するように云った。

「云つても介意かまいませんか。」

「介意いせんとも。」

夫人は、ニコ／＼と絶えず、微笑を絶たなかった。

「じゃ申上げますがね。」彼は、夫人の顔色を窺いながら云った。「青木君を、お連れになると云うじやありませんか。」

それに附け加えて、皆は口を揃えるように云った。

「何うです、奥さん。当ったでしょう。」

皆の顔には、六分の冗談と四分の嫉妬しつとが混じっていた。

「奥さん、いけませんね。貴女あなたは、皆に機会均等だと云いながら、青木君兄弟にばかり、いやに好意を持ち過ぎますね。」

小山と云う外交官らしい男が、冗談半分に抗議を云った。

美奈子は、母が何と答えるか、じつと聞耳を立てゝいた。

三

「まあ！ 青木さんを連れて行くつて。嘘うそばかり。青木さんなんか、まだ兄さんの忌いみも

明けていない位じやありませんか。」

瑠璃子夫人は、事もなげに打消した。美奈子は、母が先刻自分に肯定したことを、こ
うも安々と、打ち消しているのを聴いたとき、内心少からず驚いた。自分に対しては可
なり親切な、誠意のある母が、こうも男性に向つては白々しく出来ることが、可なり異様に
聞えた。

「忌もまだ明けないだろうって。奥さんにも似合わない旧弊なことを仰しやるのですね。
忌位明けなくつたって、いゝじやありませんか。殊に、奥さんと一緒に行くんだつたら、
死んだ兄さんだつて、冥土で満足しているかも知れませんよ。死んだ青木淳君の瑠璃子夫
人崇拜は人一倍だつたのですからね。あの男の貴女に対する態度は、狂信に近かつたので
すからね。」

長髪の画家が、一寸皮肉らしく言つた。

夫人は、美しい顔を、少し曇らせたようだったが、直ぐ元の微笑に帰つて、

「まあ！ 何とでも仰しやいよ。でも青木さんのいらつしやらないのは本当よ。論より証
拠青木さんは、お見えにならないじやありませんか。」

「奥さん！ そんなことは、証拠になりませんよ。発車間際に姿を現して、我々がアツと

云つてゐる間に、汽笛一声発車してしまうのじやありませんか。貴女のなさることは、大抵そんなことですからね。」

此の内で、一番年配らしい三十三の夏の外套がいとうを着た紳士が、始めて口を入れた。

「御冗談でございましょう！ 富田さん。青木さんをお連れするのだしたら、そうコソ／＼とはいたしませんよ。まさか、貴君あなたが赤坂の誰かを湯治に連れていらつしやるのとは違つていますから。」

瑠璃子夫人の巧みな逆襲ぎやくしゅうに、みんなは声を揃そろえて哄笑こうしょうした。富田と呼ばれた紳士は苦笑しながら言つた。

「まあ、青木君の問題は、別として、僕も、近々箱根へ行こうと思つてゐるのですが、彼あ方ちやうでお訪ねしても、介意かまいませんか。」

瑠璃子夫人は、微笑を含みながら、而も乱麻しかを断つように答えた。

「いゝえ！ いけませんよ。此の夏は男禁制！ 誰かの歌に、こんなのが、あるじやありませんか。『大方の恋をば追わず此の夏は真白草花白きこそよけれ』妾わたくしも、そうなのよ、此の夏は、本當に對人間の生活から、少し離れていたいと思ひますの。」

「ところが、奥さん。その真白草花と云うのが、案外にも青木弟ジュニヨルだったりするのじやあり

ませんか。」

小山と呼ばれた外交官らしい紳士が、突込んだ。

「まあ！ 執念深い！ 発車するまでに、青木さんが、お見えになったら、その償^{つぐない}として、皆さんを箱根へ御招待しますわ。御覧なさい、もう切符を切りかけたのに、青木さんはお見えにならないじゃありませんか。」

夫人はそう言いながら、美奈子達を促^{うなが}して改札口の方へ進んだ。若い紳士達は、蟻^{あり}の甘きに従^つくように、夫人の後から、ゾロ／＼と続いた。

夫人が、汽車に乗った後も、青木と呼ばれる青年は姿を現さなかった。若い男達は、やと夫人の言葉を信じ初めた。

「向うから、お呼び寄せになるか何^どうかは別として、今日同行なさらないこと丈は、信じましたよ。は／＼／＼／＼。」

小山と云う男が、発車間際になつて、そう言った。

「まだそんな負惜しみを、言つていらつしやるの！」

夫人は、そう言いながら、嬌^{にっこり}然と笑つて見せた。

美奈子は、何が何だったか、判^{わか}らなくなつた。母の自動車の中の言葉では、青木と云う

青年が——墓地で逢った彼の人に相違ない青年が——東京駅で待っているようだった。而も母は、今そのことをきっぱり打ち消している。

美奈子は安心したような、而も失望したような妙な心持の混乱に悩んでいた。

汽車が出るまで、到頭青木は姿を、見せなかった。

四

汽車が動き初めても、青木の姿は、到頭見えなかった。

「それ御覧なさい！ 疑いはお晴れになったでしょう！」

夫人は、車窓から、その纖細な上半身を現しながら、見送っている人達に、そうした捨台辞すてげりふを投げた。

男性達が、銘々いろ／＼な別辞を返している裡に、汽車は見る／＼駅頭を離れてしまった。

「まあ！ うるさいたらありはしないわ。こんな小旅行トリップの出発を、わざ／＼見送って呉れたりなどして。」

夫人は美奈子に対する言い訳のように呟きながら席に着いた。

母を囲む男性達が、青木の同行を気にかけている以上に、もつと気にかけていたのは美奈子だった。その人と一緒に汽車に乗ったり、一緒に宿屋に宿つたり、同じ食卓に着いたりすることを考えると、彼女の小さい心は、戦^{おの}いていたと云つてもよかった。それは恐ろしいことであり、同時に、限りなき歓喜でもあったのだ。が、その人は到頭姿を現わさない。母も前言を打ち消すような事を言っている。美奈子の心配はなくなった。それと同時に、彼女の歓喜も消えた。たゞ白々しい寂しさ丈が、彼女の胸に残っていた。

美奈子の心持を少しも知らない瑠璃子は、美奈子が沈んだ顔をしているのを慰めるように言つた。

「美奈さんなんか、何^どうお考えになつて。妾^{わたし}達女性を追うているあゝ云う男性を。あゝ云う女性追求者と云つたような人達を。」

美奈子は黙つて答をしなかつた。母が交際^{つきあ}っている人達を、厭^{いや}だとも言えなかつた。それかと言つて、決して好きではなかつた。

「あんな人達と結婚しようなどは、夢にも考えないでしょうね。男性は男性らしく、女性なんかに屈服しないでいる人が、頼もしいわね。」

美奈子も、ついそれに賛成したかった。が、青木と呼ばれるらしい青年も、やっぱりそうした男性らしくない女性追求者の一人かと思うと、美奈子はやっぱり黙っている外はなかった。

「妾達を、追うて来る人でも、身体と心との凡てを投じて、来る人はまだいゝのよ。あの人達なんか遊び半分なのですもの。狼の散歩旁々人の後から従いて行くようなものなのよ。つい、蹉いたら、飛びかゝってやろう位にしか思っていないのですもの。」

美奈子は、母の辛辣な思い切った言葉に、つい笑ってしまった。男性のことを話すと、敵か何かのように罵倒する母が、何故多くの男性を近づけているかが、美奈子にはたゞ一つの疑問だった。

「青木さんと云う方、一緒にいらつしやるのじやないの？」

美奈子は、やっと、心に懸っていたことを訊いてみた。母は、意味ありげに笑いながら言った。

「いらつしやるのよ。」

「後からいらつしやるの？」

「いゝえ！」母は笑いながら、打ち消した。

「じゃ、先にいらつしやったの？」

「いゝえ！」母は、やっぱり笑いながら打ち消した。

「じゃ何時？」

母は笑つたまゝ返事をしなかつた。

丁度その時に、汽車が品川駅に停車した。四五人の乗客が、ドヤ／＼と入つて来た。

丁度その乗客の一番後から、麻の背広を着た長身白^{はくせき}皙の美青年が、姿を現わした。瑠璃子夫人の姿を見ると、ニツコリ笑いながら、近づいた。右の手には旅行用のトランクを持っていた。

「おや！ いらつしやい！」

夫人は、溢^{あふ}れる微笑を青年に浴びせながら言つた。

「さあ！ おかけなさい！」

夫人はその青年のために、座席^{シート}を取つて置いたかのように、自分の右に置いてあつた小さいトランクを取り除^のけた。

五

美奈子は、^{おどろ}駭きに目を^{みは}睨りながら、それでもそつと青年の顔を^{ぬす}窺み見た。それは、紛れもなく彼の青年であつた。墓地で見、電車に乗り合ひ、自分の家を訪ねるのを見た彼の青年に違いなかつた。

美奈子は、胸を不意に打たれたように、息苦しくなつて、じつと面を伏せていた。が、美奈子のそうした態度を、処女に普通の^{しゅうち}羞恥だと、解釈したらしい瑠璃子は、事もなげに^い云つた。

「これが先刻お話した青木さんなの。」

紹介された青年は、美奈子の方を見ながら、丁寧^{ていねい}に頭を下げた。

「お嬢様でしたか。いつか一度、お目にかゝつたことがありますね。」

そう云われて、『はい。』と答えることも、美奈子には出来なかつた。彼女はそれを肯^こ定する^{うてい}ように、丁寧に頭を下げた丈^{だけ}だつたが、青年が自分を覚えていて呉^くれたことが、彼女をどんなに^{よろこ}欣ばしたか分らなかつた。

青年は、瑠璃子の右側近く腰を降した。

「貴君^{あなた}、大変だつたのよ。今東京駅でね。皆知^わつていらつしやるのよ。妾^{わたし}が今日立つと云

うことを。そればかりでなく貴君が一緒だと云うこと迄^{まで}知っていらつしやるのよ。だから、極力打ち消して置いたのよ。若^もし青木さんが一緒だったら、その償^{つぐ}いとして皆さんを箱根へ御招待しますつて。それでも皆善人ばかりなのよ、おしまいには妾の云うことを信じてしまったのですもの。だから、妾が云わないことじゃないでしょう。品川か新橋^{どち}かでお乗りなさいと。妾、貴君が妾の云うことを聴かないで、ひょつくり東京駅へ来やしないかと思つて、ビク／＼してしましたの。」

夫人は、弟にでも話すように、馴^{なれ}々しかった。青年は姉の言葉をでも、聴いているように、一言一句に、微笑しながら肯いた。

それを、黙つて聴いている美奈子の心の中に、不思議な不愉快さが、ムラ／＼と湧^わいて来た。それは彼女自身にも、一度も経験したことのないような、不快な氣持だった。彼女は、母に対して、不快を感じているのでなく、青年に対して、不快を感じているのでなく、たゞ母と青年とが、馴^{なれ}々しく話あつていることが、不思議に、彼女の心に苦い滓^{おり}を搔^かき乱すのであつた。殊^{こと}に青年が人目を忍ぶように、品川からたゞ一人、コッソリと乗つたことが、美奈子の心を、可なり傷けた。母と青年との間に、何か後暗い翳^{かげ}でもあるように、思われて仕方がなかつた。

「何^どうして、僕が奥さんと一緒に行くことが分つたのでしょう。僕は誰にも云つたことはないのですがね。」

青年は一寸^{ちよつと}云い訳のように云つた。

「何分つていてもいゝのですよ。薄々分つている位が、丁度いゝのですよ。貴君となら、分つていてもいゝのですよ。」

夫人は、軽い媚^{こび}を含みながら云つた。

「光榮です。本当に光榮です。」

青年は冗談でなく、本当に心から感激しているように云つた。

母と青年との会話は、自由に快活に馴々しく進んで行つた。美奈子は、なるべくそれを聴くまいとした。が、母が声を低めて云つてゐることまでが、神経のいらだつてゐる美奈子の耳には、轟々^{ごうごう}たる車輪の、響にも消されずに、ハッキリと響いて来るのだった。

母と青年との一問一答に、小さい美奈子の胸は、益々^{ますます}傷けられて行くのだった。時々母が、

「美奈さん！ 貴女^{あなた}は何う思つて？」

などと黙つてゐる彼女を、会話の圈^{けんない}内に入れようとする毎^{ごと}に、美奈子は淋^{さみ}しい微笑を

洩す丈だつた。

美奈子は、青年の姿を見ない前までは、青年の同行することは、恐ろしいが同時に限らない歓喜がその中に潜んでいるように思われた。が、それが実現して見ると、それは恐ろしく、寂しく、苦しい丈であることが、ハッキリと分つた。此先^{この}一月も、こうした寂しさ苦しさを、味わっていないければならぬかと思うと、美奈子の心は、墨を流したように真暗になつてしまつた。

六

汽車は、美奈子の心の、恋を知り初めた処女の苦しみと悩みとを運びながら、グン／＼東京を離れて行つた。

夫人と青年との親しそうな、しめやかな、会話は続いた。夫人は久し振に逢つた弟をでも、愛撫^{あいぶ}するように、耳近く口を寄せて囁いたり、軽く叱^{しつ}するように言つたりした。青年は青年で、姉にでも甘えるように、姉から引き廻されるのを欣ぶように、柔順に温和に夫人の言葉を、一々微笑しながら肯^きいていた。

美奈子は、母と青年との会話を、余り気にしている自分が、何だか恥しくなつて来た。

彼女は、成るべく聞くまいと思つた。が、そう努めれば努めるほど、青年の言葉やその白^{はく}皙^{せき}の面に浮ぶ微笑が、悩ましく耳に付いたり、眼についたりした。

青年の面には、歡喜と満足とが充^みち溢^{あふ}れているのが、美奈子にも感ぜられた。彼の眼中には、瑠璃子夫人以外のものが、何も映つていないことが、美奈子にもあり／＼と感ぜられた。母の傍にいる自分などは、恐らく青年の眼には、塵^{ちり}ほどにも、芥^{あくた}ほどにも、感ぜられてはいまいと思うと、美奈子は烈^{はげ}しい淋^{さみ}しさで胸が搔^かき擾^{みだ}された。

が、それよりも、もつと美奈子を寂しくしたことは、今迄^{いままで}愛情の唯^{ゆい}一^{いつ}の抛^より処^{どころ}としていた母が、たとい一時ではあろうとも、自分よりも青年の方へ、親しんでいることだった。

大船を汽車が出たとき、美奈子は何^どうにも、堪^{たま}らなくなつて、向う側の座席が空いたのを幸に、景色を見るような風をして、其^{そこ}処^へ席を移した。

母と青年との会話は、もう聞えて来なくなつた。が、一度搔^かき擾^{みだ}された胸は、たやすく元^{もと}のようには癒^いえなかつた。

彼女は、こうした苦しみを味わいながら、此^{この}先一月も過ぎねばならぬかと思うと、どう

にも堪らないように思われ出した。そうだ！ 箱根へ着いて二三日したら、何か口実を見付けて自分丈け帰つて来よう。美奈子は、小さい胸の中でそう決心した。

丁度、そう考えていたときに、

「美奈子さん！ 一寸ちよつといらつしやい！」

と、母から何気なく呼ばれた。美奈子は淋しい心を、じつと抑えながら、元の座席へ帰つて行つた。顔丈には、強いて微笑びしょうを浮べながら。

「貴女あなた！ 青木さんと、青山墓地で、会つたことがあるでしょう！」

母は、美奈子が坐すわるのを待つてそう言つた。青年の顔を、チラリと見ると、彼もニコ／＼笑つていた。美奈子は、何か秘密にしていたことを母に見付けられたかのように、顔を真赤にした。

「貴女は覚えていないの？」

母は、美奈子をもつとドギマギさせるように言つた。

「いゝえ！ 覚えていますの。」

美奈子は周章あわててそう言つた。

美奈子は、青年が自分を覚えていて呉くれたことが、何よりも嬉うれしかった。

「青木さんの妹さんが、よく貴女を知っていらつしやるのですって。ねえ！ 青木さん。」
夫人は賛成を求めるように、青木の方を振り顧つた。

「そうです。たしか美奈子さんより二三年下なのですが、お顔なんかよく知っているのです。此間も『あれが莊田しやうださんのお嬢さんだ』と言うものですから一寸驚いたのです。僕の妹を御存じありませんか。」

青年は、初めて親しそうに、美奈子に口を利きいた。

「はい、お顔丈は存じていますの。」

美奈子は、口の裡でうちつぶや呟くように答えた。が、青年から親しく口を利かれて見ると、美奈子の寂しく傷いていた心は、緩和バルサム薬をでも、塗られたようになごんでいた。今まで、恐ろしく寂しく考えられていた避暑地生活に、一道の微光が漂つて来たように思われた。

七

それから汽車が、国府津こうづへ着くまで、青年は美奈子に、幾度も言葉をかけた。平素いつも妹を相手にしていると見えて、その言葉には、女性——殊ことに年下の女性に対する親しみが、自

然に籠こもっていた。青年の一言々は、美奈子のこじれかかろうとした胸を春風のように、撫なでさするのであった。美奈子は最初陥なっていた不快な感情から、いつの間にか、救われていた。自分が、妙にひがんで、嫉妬しとに似た感情を持っていたことを、はしらないとさえ思い始めていた。

国府津へ着いたとき、もう美奈子は、また元の処女らしい、感情と表情とを取り返していた。

国府津のプラットフォームに降り立った時、瑠璃子は駆け寄った赤帽の一人に、命令した。

「あの、自動車を用意させておくれ！——そう、一台じゃ、窮屈だから——二台ね、宮の下まで行って呉くれるように。」

赤帽が命を受けて馳かけ去ったときだった。今まで他の赤帽を指図して手荷物を下させていた青年が驚いて瑠璃子の方を振り顧った。

「奥さん！ 自動車ですか。」

青年の語気は可なり真面目まじめだった。

「そうです。いけないのですか。」

瑠璃子は、軽く揶揄^{やゆ}するように反問した。

「あんなにお願いしてあったのに聴いて下さらないのですか。」

温和^{おとな}しい青年は、可なり当惑したように、暗い表情をした。

瑠璃子は、華やかに笑った。

「あら！ まだ、あんなことを気にしていらいしやるの。妾貴君^{わたあな}が冗談^いに云つていらしたのかと思つたのですよ。兄さんが、自動車で死なれたからと云つて、自動車を恐^{こわ}がるなんて、迷信じゃありませんか。男らしくもない。自動車が衝^{しょうとつ}突するなんて、一年に一度あるかないかの事件じゃありませんか。そんなことを恐れて、自動車に乗らないなんて。」

夫人は、子供の臆^{おくびよう}病^{びょう}をでも叱^{しつ}するように云つた。

「でも、奥さん。」青年は、可なり懸命になつて云つた。「兄が、やつぱり此^この国府津から自動車に乗つてやられたのでしょうか。それからまだ一月も経^たつていないのです。殊^{とと}に、今度箱根へ行くと云うと、父と母とが可なり止めるのです。で、やつと、説破^{せつぱ}して、自動車には乗らないと云う条件で、許しが出たのです。だから、奥さんにも、自動車には乗らないと云つてあれほど申上げて置いたじゃありませんか。」

「お父様やお母様が、そうした御心配をなさるのは、尤もつともと思いますわ。でも貴君迄まで、それに感化かぶれると云うことはないじゃありませんか。縁起などと、云う言葉は、現代人の辞書にはない字ですわね。」

「でも、奥さん！ 肉親の者が、命を殞おとした殆ど同じ自動車に、まだ一月も経つか経たないかに乗ると云うことは、縁起だとか何とか云う問題以上ですね。貴女あなただって、もし近い方が、自動車であつた奇禍にお逢あいになると、屹度きつと自動車がお嫌いになりますよ。」

「そうかしら。妾は、そうは思いませんわ。だつてお兄さんだつて妾には可なり近い方だつたのですもの。」

そう云つて夫人は淋さみしく笑つた。

「でも、いゝじやありませんか。妾と一緒にですもの。それでもお嫌ですか。」

そう云つて、嬌えんぜん然と笑いながら、青年の顔を覗のぞき込む瑠璃子夫人の顔には、女王のような威厳と媚婦しやうふのような媚こびとが、二つながら交つていた。

瑠璃子の前には、小姓か何かのように、力のないらしい青年は、極度の当惑に口を噤つぶんだまま、その秀ひいでた眉まゆを、ふかく顰ひそめていた。背丈こそ高く、容子こそ大人びているが、名門に育つた此の青年が对人的にはホンの子供であることが、瑠璃子にも、マザ／＼と分

った。

ある三角関係

一

その裡うちに、美奈子達みなこの一行は改札口を出ていた。駅前駅前の広場には、赤帽が命じたらしい自動車自動車が二台、美奈子達みなこの一行を待っていた。

青年は、瑠璃子夫人るりこの力に、グイグイ引きずられながらも、自動車に乘ることは、可なり気が進んでいないらしかった。

彼は哀願するように、オズ／＼と夫人に云いった。

「何どうです？　奥さん。僕お願いなのですが、電車で行って下さることは出来ないでしょう。兄の惨死さんしの記憶が、僕にはまだマザ／＼と残っているのです。兄を襲った運命が、肉親の僕に、何だか糸を引いているように、不吉な胸騒ぎがするのです。何だか、兄と同

じ惨禍に僕が知らず識らず近づいているような、不安な心持がするのです。」

青年は、可なり一生懸命らしかった。が、瑠璃子は青年の哀願に耳を傾けるような容子も見せなかった。彼女は、意志の弱い男性を、グン／＼自分の思い通りに、引き廻すことが、彼女の快樂の一つであるかのように云った。

「まあ！ 貴君あなたのように、そうセンチメンタルになると、いやになってしましますよ。妾わたしは運命だとか胸騒ぎだとか云うような言葉は、大嫌いですよ。妾は徹底した物質主義者マテリアリストです。電車なんか、あんなに混んでいるじゃございませんか。さあ、乗りましょう。いゝじやございませんの。自動車が崖がけから落おちても、死なば諸共もろともですわ。貴君、妾と一緒に死んでも本望じゃなくて？ おほ／＼／＼／＼。」

夫人は、奔放にそう云い放つと、青年が何う返事するかも待たないで、美奈子を促うながしながら、一台の自動車に、ズン／＼乗ってしまった。

此この時の青年は、可なりみじめだった。瑠璃子夫人の前では、手も足も出ない青年の容子が、美奈子にも、可なりみじめに、寧ろむし気の毒に思われた。

彼は、泣き出しそうな硬こわばった微笑を、強いて作りながら、美奈子達の後から乗った。

「そんなにクヨ／＼なさるのなら、連れて行って上げませんよ。」

夫人は、子供をでも叱るように、愛撫の微笑を目元に湛えながら云った。

青年は、黙っていた。彼は、夫人の至上命令のため、止むなく自動車に乗ったものの、内心の不安と苦痛と嫌悪とは、その蒼白い顔にハッキリと現われていた。臆病など云うことではなくして、兄の自動車での惨死が、善良な純な彼の心に、自動車に対する、殊に箱根の——唱歌にもある峻しい山や、壑の間を縫う自動車に対する不安を、植え付けているのであった。

美奈子は、心の中から青年が、気の毒だった。

母が故意に、青年の心持に、逆らっていることが、可なり気の毒に思われた。

自動車が、小田原の町を出はずれた時だった。美奈子は何気ないように云った。

「お母様。湯本から登山電車に乗って御覧にならない。此間の新聞に、日本には初めての登山電車で瑞西の登山鉄道に乗っているような感じがするとか云って、出ていましたのよ。」

美奈子には、優しい母だった。

「そうですね。でも、荷物なんか邪魔じゃない？」

「荷物は、このまゝ自動車で届けさえすればいいわ。特等室へ乗れば自動車よりも、楽だ

と思いますわ。」

「そうね。じゃ、乗り換えて見ましようか。青木さんは、無論御賛成でしょうね。」

瑠璃子は、青年の顔を見て、皮肉に笑った。青年は、黙って苦笑した。が、チラリと美奈子の顔を見た眼には美奈子の少女らしい優しい好意に対する感謝の情が、歴々^{ありあり}と動いていた。

二

富士屋ホテルの華麗な家庭部屋の一つの裡^{うち}で、美奈子達の避暑地生活は始まった。

『暮^{すた}したし木賀底倉に夏三月』それは昔の人々の、夏の箱根に対する憧憬^{あこがれ}であつた。閑所^{すた}は廃^{すた}れ、街道には草蒸し、交通の要衝としての箱根には、昔の面影はなかったけれども、温泉^{いづゆ}は滾々^{こんこん}として湧^わいて尽きなかった。青葉に掩^{おお}われた谿^{けい}壑^{がく}から吹き起る涼風は、昔ながらに水^{みづ}の如^{ごと}き冷たさを帯びていた。

殊^{こと}に、美奈子達の占めた一室は、ホテルの建物の右の翼^{はす}の端^{はすれ}にあつた。開け放たれた窓には、早川の対岸明神岳明星岳の翠微^{すいび}が、手に取るごとく迫つていた。東方、早川の谿^{けい}谷^こ

谷が、群峰の間にたゞ一筋、開かれている末^{はるか}遙に、地平線に雲のいぬ晴れた日の折節には、いぶした銀の如く、ほのかに、雲とも付かず空とも付かず、光っている相模灘^{さがみなた}が見えた。

設備の整ったホテル生活に、女中達が不用なため、東京へ帰してからは、美奈子達三人の生活は、もつと密接になった。

美奈子は、最初青年に対して、口も碌々^{ろくろくき}利けなかった。たゞ、折々母を介して簡単な二言三言を交える丈だった。

母が青年と話しているときには、よく自分一人その場を外して、縁側^{ヴェランダ}に出て、其処^{そこ}にある籐椅子^{とういす}に何時^{いつ}までも何時までも、坐^{すわ}っていることが、多かった。

又何かの拍子で、青年とたゞ二人、部屋の中に残り残されると、美奈子はまた、じつとしていることが出来なかった。青年の存在が、息苦しいほどに、身体全体に感ぜられた。そうした折にも、美奈子は、やつぱりそつと部屋を外して、縁側に出るのが常だった。とにかく、彼女の小さい胸は、息^{やすらいとま}う暇もない水鳥の脚のように動いていた。

彼女に一番楽しいのは、夕暮の散歩かも知れなかった。晩餐^{ばんさん}が終ってから、美奈子は母と青年との三人で、よく散歩した。早川の断崖^{だんがい}に添うた道を、底倉から木賀へ、時に

は宮城野^{みやぎの}まで、岩に咽^{むせ}ぶ早川の水声に、夏を忘れながら。

箱根へ来てから、五日ばかり経^たつたある日の夕方だった。美奈子達が、晚餐が終つてから、食堂を出ようとしたとき、瑠璃子はふとその入口で、その日来たばかりの知合の仏蘭^{フラ}西大使の令嬢と出会つた。日本好^{すき}の此^この令嬢は、瑠璃子とは可なり親しい間柄だった。彼女は思いがけない処^{ところ}で、瑠璃子に会つたのを可なり欣^{よろこ}んだ。瑠璃子は誘われるまゝに、大使令嬢の部屋を訪ねて行つた。

美奈子と、青年とは部屋に歸つたものの、手持無沙汰^{ぶさた}に、ボンヤリとして、暮れて行く夕暮の空に對していた。

二人は、心の中では銘々に、瑠璃子の歸るのを待つていた。が、二十分経つても三十分経つても、瑠璃子は歸りそうにも見えなかった。

青年は平素^{いつも}のように、散歩に出たいと見え、ステッキを持ったり、帽子を手にしたりしながら、瑠璃子の歸るのを待つてゐるらしかった。が、瑠璃子は却^{なかなか}々歸つて来なかった。青年はやゝ待ちあぐみかけたらしなかった。彼はもう明るく電燈^{でんとう}の点いた部屋の中を、四五歩宛行^{ずつ}つたり来たりしていたが、半独語^{なかば}のように美奈子に云^いつた。

「お母様は、却々お歸りになりませんね。」

「はい。」

窓に倚^よつて輝き初めた星の光をボンヤリ見詰めていた美奈子は、低い声で聞えるか聞えないかのように答えた。青年は、自分一人で行きたいらしかったが、美奈子を一人ぼっちにして置くことが、気が咎^{とが}めるらしかった。彼は、到頭云い憎くそうに云った。

「美奈子さん。如何^{いかに}です、一緒に散歩をなさいませんか。お母様をお待ちしていても、なかなかお帰りになりそうじやありませんから。」

青年は、口籠^{くちごも}りながらそう云った。

「えゝっ!」

美奈子は彼女自身の耳を疑っているかのように、つぶらなる目を刮^{みは}った。

三

美奈子に取つては、青年から散歩に誘われたことが、かなり大きな駭^{おどろ}きであつた。四五日一緒に生活して来たと云^いうものの、二人向い合つては、短い会話一つ交したことがなかった。

その相手から、突然散歩に誘われたのであるから、彼女が駭きの目を刮つたまゝ、わく／＼する胸を抑えたまゝ、何とも返事が出来なかったのも、無理ではなかった。

青年は、美奈子の返事が遅いのを、彼女が内心当惑している為だと思つたのであろう。彼は、自分の突然な申出の無^{ぶしつけ}稽さを恥じるように云つた。

「いらつしやいませんか。じゃ、僕一人行つて来ますから。僕は、日の暮方には、どうも室^{へや}の中にじつとしていられないのです。」

青年は、弁解のように、そう云いながら室を出て行こうとした。

美奈子は、胸の内で、青年の勧誘に、どれほど心を躍らしたか分らなかつた。青年とたつた二人切りで、散歩すると云うことが、彼女にとってどんな駭きであり欣^{よろこ}びであつただろう。彼女は、駭きの余りに、青年の初めの勧誘に、つい返事をし損じたのであつた。彼女は、どんなに青年が、もう一度勧めて呉^くれるのを待つたであらう。もう一度、勧めてさえ呉れゝば、美奈子は心も空に、青年の後から従^ついて行くのであつたのだ。

が、青年には美奈子の心は、分らなかつた。彼には、美奈子が返事をしないのが、処女らしい恥しさと後退^{しりごみ}のためだとして、思われなかつた。彼は、最初から誘わなければよかつたと思ひながら、一寸^{ちよつと}気まずい思ひで、部屋を出た。

青年が、部屋を出る後姿を見ると、美奈子は取返しが付かないことをしたように思った。もう再びとは、得がたい黄金の如き機会を、永久に失うような心持がした。その上、青年の勧めに、返事さえしなかったことが、彼女の心を咎め初めた。それに依つて、相手の心を少しでも傷けはしなかったかと思うと、彼女は立つても坐つても、いられないような心持がし初めた。

一二分、考えた末、彼女は到頭堪らなくなつて部屋を出た。長い廊下を急ぎ足に駆けすぎた。ホテルの玄関で、草履を穿くと、夏の宵闇の戸外へ、走り出でた。

玄関前の広場にある噴水のほとりを、透して見たけれども、その人らしい影は見えなかった。彼女は、到頭宮の下に通に出た。

青年の行く道は、分つていた。彼女は、胸を躍らしながら、底倉の方へと急いだ。

温泉町の夏の夕は、可なり人通が多かつた。その人かと思つて近づいて行くと、見知らない若い人であつたりした。

が、美奈子が宮の下の賑やかな通を出はずれて、段々淋しい崖上の道へ来かゝったとき、丁度道の左側にある理髪店の軒端に佇みながら、若い衆が指している将棋を見ている青年の横顔を見付けたのである。

青年に近づく前に、彼女の小さい胸は、どんなに顫えたか分らなかった。でも、彼女はあり丈の勇気で、近づいて行つた。

「茲にいらつしたのですか。^{わたくし}妾も、散歩にお伴いたしますわ。母は、帰りそうにもありませんですから。」

彼女は、低い小さい声で、途切れ／＼に言つた。青年は、駭いて彼女を振り返つた。投げた礫が忘れた頃に激しい水音を立てたように、青年は自分の一寸した勧誘が、少女の心を、こんなに動かしていることに、駭いた。が、それは決して不快な駭きではなかつた。

「じゃ、お伴しましょうか。」

そう言いながら、青年は歩き初めた。美奈子は二三尺も間隔を置きながら従つた。夢のような幸福な感じが、彼女の胸に充ち満ちて、踏む足も地に付かないように思つた。

四

初め、連れ立つてから、半町ばかりの間、二人とも一言も、口を利かなかつた。初めて、若い男性、しかも心の奥深く想つている若い男性とたゞ二人、歩いている美奈子の心には、

散歩をしていると云つたような、のんきな心持は少しもなかった。胸が絶えず、わく／＼して、息は抑えても／＼弾むのであった。

青年も、黙っていた。たゞ、黙つてグン／＼歩いていった。二人は、散歩とは思われないほどの早さで、歩いていった。何処へ行くと云う当もなしに。

早川の谿谷の底遥かに、岩に激している水は、夕闇を透してほのじろく見えていた。その水から湧き上つて来る涼気は、浴衣を着ている美奈子には、肌寒く感ぜられるほどだった。

青年が、何時までも黙っているの、美奈子の心は、妙に不安になった。美奈子は自分が後を追つて来たはしたなさを、相手が不愉快に思っているのではないかと、心配し始めた。自分が思い切つて後を追つて来たことが、軽率ではなかったかと、後悔し初めた。

が、二人が丁度、底倉と木賀との間を流れている、蛇骨川の橋の上まで、来たときに、青年は初めて口を利いた。立ち止つて空を仰ぎながら、

「御覧なさい！ 月が、出かゝっています。」

そう云われて、今迄俯きがちに歩いて来た美奈子も、立ち止つて空を振り仰いだ。

早川の対岸に、空を劃つて聳えている、連山の輪廓を、ほの／＼とした月魄が、

くつきりと浮き立たせているのであった。

相模灘さがみなたを、渡つて来た月の光が今丁度箱根の山々を、照し初めようとしている所だった。

「まあ！ 綺麗きれいですこと。」

美奈子もつい感嘆の声を洩もらした。

「旧の十六日ですね、きつと。いゝ月でしょう。空が、あんなによく晴れています。東京の、濁つたような空と比べると何どうです。これが本当に緑エメラルド玉と云う空ですね。」

青年は、心ゆくように空を見ながら云つた。美奈子も、青年の眸ひとみを追うて、大空を見た。夏の宵の箱根の空は、磨いたように澄み切っていた。

「本当に美しい空でございますこと。」

美奈子も、しみ／＼とした気持でそう云つた。丁度、今までかけられていた沈黙のろいの呪のろいが解かれたように。

「やっぱり空気がいゝのですね。東京の空と違って、塵埃じんあいや煤煙ばいえんがないのですね。」

「山の緑が映っているような空でございますこと。」

美奈子も、つい気軽になつてそう云つた。

「そうです。本当に山の緑が映っているような空です。」

青年は、美奈子の云った言葉を噛みしめるように繰り返した。

二人は、また暫らく黙つて歩いた。が、もう先刻のようなギゴちなさは、取り除かれていた。美しい自然に対する讚美の心持が、二人の間の、心の垣を、ある程度まで取り除けていた。美奈子は、青年ともっと親しい話が出来ると云う自信を得た。青年も、美奈子に対してある親しみを感じ初めたようだった。

四五尺も離れて歩いていった二人は、何時の間にか、孰らからともなく寄添うて歩いていた。

美奈子は、相手に話したいことが、山ほどもあるようで、しかもそれを考えに纏めようとすると、何も纏まらなかつた。唾が、大切な機会に喋べろうとするように、たゞいら／＼焦り立っているばかりだった。

「そう／＼、貴女に申上げたいことがあつたのです。つい、此間中から機会がなくて。」

青年は、大切なことをでも、話すように言葉を改めた。動き易い少女の心は、そんなことにまで烈しく波立つのだった。

五

相手がどんなことを云い出すのかと、美奈子は、胸を躍らしながら待っていた。

青年は、一寸ちよつと云い憎そうに、口籠くちごもっていたが、やつと思ひ切ったように云った。

「此間中から、お礼を申し上げよう申上げようと思ひながら、ついその儘ままになっていたのです。此間はどうも有難うございました。」

夕闇ゆうやみに透いて見える彼の白い頬が、思ひ倣なしか少し赤らんでいるように思われた。美奈子も相手から、思ひがけもない感謝の言葉を受けて、我にもあらず、顔がほてるように熱くなった。彼女は、青年から礼を云われるような心覚えが、少しもなかったのである。

「まあ！ 何でございますの！ わたくし！」

美奈子は、当惑の目を刮みはった。

「お忘れになったのですか。お忘れになっているとすれば、僕は愈々いよいよ感謝しなければならぬ必要があるのです。お忘れになりましたですか。来る道で僕があんなに自動車に乗ることを厭いやがったのを。はゝゝゝゝ。自分ながら、今から考えると、余り臆おくびよう病になり過ぎていたようです。お母様から後で散々冷かされたのも無理はありません。が、あの時

は本当に恐こわかったのです。妙に気になってしまったのです。ベソを掻かきそうな顔をしていたと、後でお母様に冷かされたのですが、本当にあの時は、そんな気持がしていたのです。それに、莊しょうだ田夫人と来ては、極端に意地がわるいのですからね。僕が恐がれば恐がるほど、しつこく苛いじめようとするのですからね。本当にあの時の、貴女あなたのお言葉は地獄に仏だつたのです。はゝゝゝ。考えて見れば、僕も余り臆病すぎたな。とんだ所を貴女方に見せてしまった！」

青年は、冗談のように云いながらも、美奈子に対する感謝の心だけは、可なり真面目まじめであるらしかった。

「まあ！ あんなことなんか。妾、本当に電車に乗りたかつたのでございますわ。」

美奈子は、顔を真赤にしながら、青年の言葉を打ち消した。が、心の中はこみ上げて来る嬉うれしさで一杯だつた。

「あの時、僕は本当に貴女の態度に、感心したのです。あの時、露骨に僕の味方をして下さると、僕も恥しいし、お母様も意地になつて、あゝうまくは行かなかつたのでしようが、貴女の自然な無邪気な申出には、遺さすがの莊田夫人も、直すぐ賛成しましたからね。僕は、今まで莊田夫人を、女性の中で最も聡明そうめいな人だと思つていましたが、貴女のあの時の態度を

見て、世の中には莊田夫人の聰明さとは又別な本当に女性らしい聰明さを持った方があるのを知りました。」

「まあ！ あんなことを。妾お恥かしゆうございますわ。」

そう云つて、美奈子は本当に浴衣ゆかたの袖そでで顔を掩おほうた。処女らしい嬌きよう羞しゆうが、その身体全体に溢あふれていた。が、彼女の心は、憎からず思っている青年からの讃辞さんじを聴いて、張り裂けるばかりの歓びよろこで躍っていた。

山の端はを離れた月は、此の峡谷に添うている道へも、その朗かな光を投げていた。美奈子はいく二三尺離れて、月光の中に匂におうている青年の白晳はくせきの面を見ることが出来た。青年の黒い眸ひとみが、時々自分の方へ向つて輝くのを見た。

二人は、もう一時間前の二人ではなかった。今まで、遠く離れていた二人の心は、今可なり強い速力で、相求め合っているのは確かだった。

二人は、また黙ったまゝ、歩いた。が、前のような固くるしい沈黙ではなかった。黙つていても心持丈は通っていた。

「もつと歩いて、大丈夫ですか。」

木賀を過ぎて宮城野みやぎの近くなつたとき、青年は再び沈黙を破った。

「はい。」

美奈子は、慎しく答えた。が、心の裡では、『何処までも』と云う積であつたのだ。

六

木賀から、宮城野まで、六七町の間、早川の谿谷に沿うた道を歩いている裡に、二人は漸く打ち解けて、いろ／＼な問を訊いたり訊かれたりした。

美奈子の処女らしい無邪気な慎しやかさが、青年の心を可なり動かしたようだった。それと同時に青年の上品な素直な優しい態度が、美奈子の心に、深く／＼喰い入ってしまった。

宮城野の橋まで来ると、谿は段々浅くなっている。橋下の水には水車が懸っていて、銀の月光を砕きながら、コト／＼と廻り続けていた。

月は、もう可なり高く上つていた。水のように澄んだ光は、山や水や森や樹木を、しつとり濡していた。二人は、夏の夜の清浄な箱根に酔いながら、可なり長い間橋の欄干に寄り添いながら、佇んでいた。

美奈子の心の中には、青年に対する熱情が、刻一刻潮のように満ちわたって来るのだつた。今までは、どんな男性に対しても感じたことのないような、信頼と愛慕との心が、胸一杯にヒシ／＼とこみ上げて来るのだつた。

話は、何時の間にか、美奈子の一身の上にも及んでいた。美奈子は到頭、兄の悲しい状態まで話してしまった。

「そう／＼、そんな噂は、薄々聴いていましたが、お兄さんがそんなじや、貴女には本当の肉親と云つたようなものは、一人もないのと同じですね。」

青年は悵然としてそう云つた。心の中の同情が、言葉の端々に溢れていた。そう云われると、美奈子も、自分の寂しい孤独の身の上が顧みられて、涙ぐましくなる心持を、抑えることが出来なかった。

「母が、本当によくして呉れますの。実の母のように、実の姉のように、本当によくして呉れますの。でも、やっぱり本当の兄か姉かが一人あれば、どんなに頼もしいか分らないと思いますの。」

美奈子は、つい誰にも云わなかった本心を云ってしまった。

「御尤もです。」青年は可なり感動したように答えた。「僕なども、兄弟の愛などは、

今までそんな感じなかったのですが、兄を不慮に失ってから、肉親と云うものの尊さが、分つたように思うのです。でも、貴女なんか……」そう云つて、青年は一寸云い淀んだが、

「今に御結婚でもなされば、今のような寂しさは、自然無くなるだろうと思います。」

「あら、あんなことを、結婚なんて、まだ考えて見たこともございせんわ。」

美奈子は、恥かしそうに周章あわてで打ち消した。

「じゃ、当分御結婚はなさらない訳ですね。」

青年は、何故なぜだか執拗しつように再びそう訊いた。

「まだ、本当に考えて見たこともございせんもの。」

美奈子は、益々ますます狼狽ろうばいしながらも、ハッキリと口では、打ち消した。が、青年が何う

してそうした問題を繰り返して訊くのかと思うと、彼女の顔は焼けるように熱くなった。

胸が何とも云えず、わくわくした。彼女は、相手が何うして自分の結婚をそんなに気にす

るのか分らなかつた。が、彼女がある原因を想像したとき、彼女の頭は狂うように熱した。

彼女は、熱にでも浮されたように、平生の慎みも忘れて云つた。

「結婚なんて申しまして、妾わたくしのようなものと、妾のような、何の取りどころもないよう

なものと。」

彼女の声は、恥かしさに顫ふるえていた。彼女の身体も恥かしさに顫ふるえていた。

七

美奈子の声は、恥かしさに打ち顫ふるえていたけれども、青年は可なり落着いていた。余裕よゆうのある声だった。

「貴女あなたなんか、そんな謙遜けんそんをなさつては困りますね。貴女のような方が結婚の資格がないとすれば、誰が、どんな女性が結婚の資格があるでしょう。貴女ほど——そう貴女ほどの……」

そう云いかけて、青年は口を噤つぶんでしまった。が、口の中では、美奈子の慎つつましさや美しさに対する讚美さんびの言葉を、噛かみ潰つぶしたのに違いなかった。

美奈子は、青年が此この次に、何を言い出すかと云う期待で、身体全体が焼けるようであった。心が波濤はとうのように動揺した。小説で読んだ若い男女の恋ラヴシーンの場が、熱病患者の見る幻覚のように、頭の中に頻しきりに浮んで来た。

が、美奈子のもしやと云う期待を裏切るように、青年は黙っていた。月の光に透いて見える白い頬が、やゝ興奮しているようには見えるけれども、美奈子の半分も熱していないことは明かだった。

美奈子も裏切られたように、かすかな失望を感じながら、黙ってしまった。

沈黙が五分ばかりも続いた。

「もう、そろ／＼帰りましょうか。まるで秋のような冷気を感じますね。着物が、しつとりして来たような気がします。」

青年は、そう言いながら欄干らんかんを離れた。青年の態度は、平生の通りだった。優しいけれども、冷静だった。

美奈子は夢から覚めたように、続いて欄干を離れた。自分だけが、興奮したことが、恥しくて堪たまらなかった。自分の独合点ひとりがてんの興奮を、相手が気付かなかったかと思うと、恥しさで地の中へでも隠れたいような気がした。

が、丁度二三町も帰りかけたときだった。青年は思い出したように訊きいた。

「お母様は何時いつまで、あゝして未亡人でいらつしやるのでしょうか。」

青年の問は、美奈子が何と答えてよいか分らないほど、唐突だしぬけだった。彼女は、一寸ちよつと

答に窮した。

「いや、実はこんな噂うわさがあるのです。莊田夫人は、本当はまだ処女なのだ。そして、将来は屹度きつと再婚せられる。屹度再婚せられる。僕の死んだ兄などは、夫人の口から直接聴いたらしいのです。が、世間にはいろ／＼な噂があるものですから、貴女にでも伺って見れば本当の事が分りやしないかと思つたのです。」

「妾わたくし、ちつとも存じませんわ。」

美奈子はそう答えるより外はなかつた。

「こんなことを言っている者もあるのです。夫人が結婚しないのは、莊田家の令嬢に対して母としての責任を尽したいからなのだ。だから、令嬢が結婚すれば、夫人も当然再婚せられるだろう。こう言っている者もあるのです。」

青年は、ホンの噂話のようにそう言つた。が、青年の言葉を、囁かみしめている中に、美奈子は傍の溪間たにまへでも突落されたような烈はげしい打撃を感じずにはいられなかつた。

青年が、自分の結婚のことなどを、訊いた原因が、今ハッキリと分つた。自分の結婚などは、青年にはどうでもよかったのだ。たゞ、自分が結婚した後はすに起る筈はずの、母の再婚を確めるために、自分の結婚を、口にしたのに過ぎないのだ。それとは知らずに、興奮した

自分が、恥しくて恥しくて堪らなかった。彼女の処女らしい興奮と羞恥しゆうちとは、物の見事に裏切られてしまったのだ。

彼女は、照っている月が、忽ち暗くなつてしまったような思おもひがした。青年と並んで歩くことが堪らなかった。彼女の幸福の夢は、忽ちにして恐ろしい悪夢と變じていた。

彼女はそれでも、碎かれた心をやつと纏まとめながら返事だけした。

「妾、母のことはちつとも存じませんわ。」

彼女の低い声には、綿々たる恨うらみが籠こもっていた。

夜の密語

一

青年との散歩が、悲しい幻滅げんめつに終つてから、避暑地生活は、美奈子みなこに取つて、喰わねばならぬ苦い苦い葎にらになった。

開きかけた蕾つぼみが、そうだ！ 周囲の暖かさを信じて開きかけた蕾が、周囲から裏切られて思いがけない寒気に逢あつたように、傷つき易やすい少女の心は、深く傷を負ってしまつた。

それでも、温和おとなしい彼女は、東京へ一人で帰るとは云わなかった。自分ばかり、何の理由も示さずに、先きへ帰ることなどは、温和しい彼女には思いも及ばないことだった。彼女は止とどまつて、而そうして忍ぶべく決心した。彼女の苦しい辛つらい境遇に堪たえようと決心した。

青年の心が、美奈子にハッキリと解わかつてからは、彼女は同じ部屋に住みながら、自分一人いつも片隅にかくれるような生活をした。

青年と母とが、向い合っているときなどは、彼女は、そつと席を外した。その人から、想おもわれていない以上、せめてその人の恋の邪魔になるまいと思う、美奈子の心は悲しかった。

そう気が付いて見ると、青年の母に対する眸ひとみが、日一日輝きを増して来るのが、美奈子にもありありと判わかつた。母の一顰いつびん一笑いっしょうに、青年が欣よろこんだり悲しんだりすることが、美奈子にもありありと判つた。

が、それが判れば判るほど、美奈子は悲しかった。寂しかった。苦しかった。

一人の男に、二人の女、或^{ある}は一人の女に、二人の男、恋愛に於^おける三角関係の悲劇は、昔から今まで、数限りもなく、人生に演ぜられたかも知判らない。が、瑠璃子^{るりこ}と青年と美奈子との三人が作る三角関係では、美奈子丈が一番苦しかった。可憐^{かれん}な優しい美奈子丈が苦しんでいた。

「美奈さん！ 何^どうかしたのじやないの？」

美奈子が、黙^{もく}つたまゝ、露^{バルコニー}台の欄干に、長く長く倚^よつているときなど、母は心配そうに、やさしく訊^{たず}ねた。が、そんなとき、

「いゝえ！ どうもしないの。」

寂しく笑いながら答える、小さい胸の内に、堪えられない、苦しみがあることは、明敏な瑠璃子にさえ判らなかつた。

青年も、美奈子が、——一度あんなに彼に親しくした美奈子が、また掌^{てのひらかえ}を翻^ひすように、急に再び疎^{うとうと}々しくなつたことが、彼の責任であることに、彼も氣が付いていなかった。夕暮の楽しみにしていた散歩にも、もう美奈子は楽しんでは、行かなかつた。少くとも、青年は美奈子が同行することを、厭^{いや}がつてはいないまでも、決して欣んではいないだろう

と思うと、彼女はいつも二の足を踏んだ。が、そんなとき、母はどうしても、美奈子一人残しては行かなかった。彼女が二度も断ると母は屹度云った。

「じゃ、妾達も行くのを廃しましうね。」

そう云われると、美奈子も不承々に、承諾した。

「まあ！ そんなに、おつしやるのなら参りますわ。」

美奈子は口丈は機嫌よく云つて、重い／＼鉛のような心を、持ちながら、母の後から、従いて行くのだった。

が、ある晩、それは丁度箱根へ来てから、半月も経った頃だが、美奈子の心は、何時になく滅入ってしまった。

母が、どんなに云つても、美奈子と一緒に出る気にはならなかった。その上、平素は、青年も口先丈では、母と一緒に勧めて呉れるのが、その晩に限って、たった一言も勧めて呉れなかった。

「妾、今夜はお友達に手紙を書こうと思つていますの。」

美奈子は、到頭そんな口実を考えた。

「まあ！ 手紙なんか、明日の朝書くといゝわ。ね、いらつしやい。二人丈じゃつまらな

いのですもの！　ねえ、青木さん！」

そう云われて、青年は不服そうに肯いた。青年のそうした表情を見ると、美奈子は何うしても断ろうと決心した。

二

「でも、妾^{わたくし}、今晚だけは失礼させて、いたゞきますわ。一人でゆつくり、お手紙をかきたいと思いますの。」

美奈子が、可なり思い切つて、断るのを見ると、母はさまでとは、云い兼ねたらしかつた。

「じゃ、美奈さんを残して置きましょうか。」

母は青年に相談するように云つた。

そう聴いた青年の面に、ある喜悦^{きえつ}の表情が、浮んでいるのが、美奈子は気が付かずにはいられなかった。その表情が、美奈子の心を、むごたらしく傷けてしまった。

「じゃ、美奈さん！　一寸^{ちよつと}行つて来ますわ。寂しくない？」

母は、平素の^{いつも}ように、優しい母だった。

「いゝえ、大丈夫ですわ。」

口丈は、元氣らしく答えたが、彼女の心には、口とは丸切り反対に、大きい大きい寂しさ^さが、暗い翼を^{ひろ}拡げて、一杯にわだかまっていたのだ。

母と青年との姿が、廊下の端^{はすれ}に消えたとき、扉^{ドア}の所に立って見送っていた美奈子は、自分の部屋へ駈^かけ込むと、床に崩れるように、蹲^{うずく}まって、安樂椅子^{いす}の蒲団^{クシヨン}に顔を埋めたまゝ、暫^{しば}らくは顔を上げなかった。熱いゝ涙が、止め度もなく流れた。自分丈^{この}が、此世の中に、生き甲斐^{がい}のないみじめな人間のように、思われた。誰からも見捨てられたと云ったような寂しさが、心の隅々を搔^かき乱した。

友達にでも、手紙を書けば、少しでも寂しさが紛^{まぎ}らせるかと思つて、机の前に坐^{すわ}つて見たけれども纏^{まと}つた文句は、一行だつて、ペンの先には、出て来なかった。母と青年とが、いつもの散歩路^{みち}を、寄り添いながら、親しそうに歩いている姿だけが、頭の中にこびり付いて離れなかった。

その中に、寂しさと、彼女自身には気が付いていなかったが、人間の心に免れがたい嫉妬^{つと}とが、彼女を立つても坐つても、いられないように、苛^{さい}み初めていた。彼女は、高い山

の頂きにでも立つて、思うさま泣きたかった。彼女は、到頭じつとしてはいられないような、いら／＼した気持ちになつていた。彼女は、フラ／＼と自分の部屋を出た。的^{あて}もなしに、戸外に出たかつた。暗い道を何処^{どこ}までも何処までも、歩いて行きたいような心持になつていた。が、母に對して、散歩に出ないと云つた以上、ホテルの外へ出ることは出来なかつた。彼女は、ふとホテルの裏庭へ、出て見ようと思つた。其処^{そこ}は可なり広い庭園で、昼ならば、遙^{はるか}に相模灘^{さがみだ}を見渡す美しい眺^{ちようぼう}望^{ぼう}を持つていた。

美奈子が、廊下から、そつとその庭へ降り立つたとき、西洋人の夫妻が、腕を組合いながら、芝生の小路を、逍遙^{しやうよう}している外は、人影は更に見えなかつた。

美奈子は、ホテルの部屋々々からの灯影^{ほかげ}で、明るく照し出された明るい方を避けて出来る丈、庭の奥の闇^{やみ}の方へと進んでいた。

樹木の茂つた蔭^{かげ}にある椅子^{ベンチ}を、探し当て、美奈子は腰を降した。

部屋々々の窓から洩^もれる灯影も、茲^{ここ}までは届いて来なかつた。周囲は人里離れた山林のように、静かだつた。止宿している西洋の婦人の手すさびらしい、ヴァイオリンの弾奏が、ほのかにほのかに聞えて来る外は、人声も聞えて来なかつた。

闇の中に、たつた一人坐っていると、いら／＼した、寂しみも、だん／＼落着いて来る

ように思った。殊にヴァイオリンのほのかな音が、彼女の傷いた胸を、撫でるように、かすかにかすかに聞えて来るのだった。それに、耳を澄している中に、彼女の心持は、だん／＼和らいで行った。

母が帰らない中に、早く帰っていないかならぬと思いながらも、美奈子は腰を上げかねた。三十分、四十分、一時間近くも、美奈子は、其処に坐り続けていた。その時、彼女は、ふと近づいて来る人の足音を聴いたのである。

三

美奈子は、最初その足音をあまり気にならなかった。先刻ちらりと見た西洋人の夫妻たちが通り過ぎているのだろうと思った。

が、その足音は不思議に、だん／＼近づいて来た。二言三言、話声さえ聞えて来た。それはまさしく、外国語でなく日本語であつた。しかも、何だか聞きなれたような声だった。彼女は『オヤ!』と思いながら、振り返つて闇の中を透して見た。

闇の中に、人影が動いた。一人でなく二人連だった。二人とも、白い浴衣を着ているた

めに、闇の中でも、割合ハッキリと見えた。美奈子は、じつと二人が近よつて来るのを見詰めていた。十秒、二十秒、その裡うちにそれが何人なんびとであるかが分ると、彼女は全身に、水を浴びせられたように、ゾツとなつた。それは、夜の目にも紛れなく青年と母の瑠璃子るりことであつたからである。而もしか、二人は、彼等が恋人同志であることを、明かに示すように、身体が触れ合はんばかりに、寄り添うて歩いているのである。闇の中で、しかとは判らないが、母の左の手と、青年の右の手とが、堅く握り合せられているように、美奈子には感ぜられた。

美奈子は、恐ろしいものを見たように、身体がゾク／＼と顫ふるえた。彼女は、地が口を開いて、自分の身体を此このまゝ呑のんで呉くれ／＼とさえ思った。悲鳴を揚げながら、逃げ出したいような氣持だつた。が、身体を動かすと母達に氣付かれはしないかと思うと、彼女は、動くことさえ出来なかつた。彼女は、そのまゝ椅子に凍り付いたように、身体を小さくしながら、息を潜めて、母達が行き過ぎるのを待つていようと思つた。が、あゝそれが何と云う悪魔の悪戯いたずらだろう！母達は、だん／＼美奈子のいる方へ歩み寄つて来るのであつた。彼女の心は当惑のために張り裂けるようだつた。母と青年とが、若し自分を見付けたらと思うと、彼女の身体全体は、益々ますます顫え立つて來た。

が、母と青年とは、闇の中の樹蔭こかげの椅子ベンチに、美奈子がたった一人蹲うずくまっていた。夢にも思わないと見え、美奈子のいる方へ、益々近づいて来た。美奈子は、絶体絶命だった。母達が気の付かない内に、自分の方から声をかけようと思つたが、声が咽喉にからんでしまつて、何うしても出て来なかつた。が、美奈子の当惑が、最後の所まで行つた時だつた。今まで、美奈子の方へ真直まっすぐに進んで来ていた母達は、つと右の方へ外れたかと思うと、其処そこに茂つてゐる樹木の向う側に、樹木を隔て、美奈子とは、背中合せの椅子に、腰を下してしまつた。

美奈子は、苦しい境遇から、一步を逃れてホツと一息した。が、また直すぐ、母と青年とが、話し初める会話を、何うしても立聞かねばならぬかと思うと、彼女はまた新しい当惑に陥おちていた。彼女は母と青年とが、話し初めることを聞きたくなかつた。それは、彼女にとつて余りに恐ろしいことだつた。殊ことに、母と青年とが、ああまで寄り添うて歩いてゐるところを見ると、それが世間並の話でないことは、余りに判りすぎた。彼女は、自分の母の秘密を知りたくなかつた。今まで、信賴し愛してゐる母の秘密を知りたくなかつた。美奈子は、自分の眼が直ぐ盲になり、耳が直ぐ聾ろうすることを、どれほど望んでいたか判らなかつた。若し、それが出来なければ、一目散に逃げたかつた。若し、それも出来なかつ

たら、両手で二つの耳を堅く／＼おほ掩うていたかった。

が、彼女がどんなに聴くことを、厭いやがつても、聞えて来るものは、聞えて来ずには、い
なかつたのである。夜の静かなる闇には、彼等の話声を妨げる少しの物音もなかつたので
ある。

四

夜は静だった。母と青年との話声は、二間ばかり隔つていたけれども、手に取るごとく
美奈子の耳——その話声を、毒のように嫌っている美奈子の耳に、ハッキリと聞えて来た。
「稔みのるさん！ 一体何なの？ 改まつて、話したいことがあるなんて、妾わたしをわざ／＼こんな
暗い処ところへ連れて来て？」

そう言っている母の言葉や、アクセントは、平生いっしょの母とは思えないほど、下卑げびていて媚し
婦ようつふか何かのように艶なまめかしかった。而しかも、美奈子のいるところでは、一度も呼んだこと
ない青年の名を、馴なれなれ々しく呼んでいるのだった。こうした母の言葉を聞いたとき、美奈
子の心は、止めとどめの一太刀を受けたと云いつてもよかった。今まで、あんなに信賴しんらいしていた母

にまで裏切られた寂しさと不快とが、彼女の心を滅茶々めっちゃめっちゃ々に引き裂いた。

瑠璃子に、そう言われても、青年は却々なかなか話し出そうとはしなかった。沈黙が、二三分間彼等の間に在った。

母は、もどかしげに青年を促した。

「早く、おっしゃいよ！ 何をそんなに考えていらつしやるの。早く帰らないといけませんわ。美奈子が、淋さみしがっているのですもの。歩きながらでは、話せないなんて、一体どんな話なの！ 早く言つて御覧なさい！ まあ、自烈じれつたい人ですこと。」

美奈子は、自分の名を呼ばれて、ヒヤリとした。それと同時に、母の言葉が、蓮葉はすはに乱暴ますますなのを聴いて、益々心が暗くなつた。

青年は、それでも却々話し出そうとはしなかった。が、母の気持が可なり浮いているのにも拘わらず、青年が一生懸命であることが、美奈子にも、それとなく感ぜられた。

「さあ！ 早くおっしゃいよ。一体何の話なの？」

母は、子供をでも、すかすように、なまめいた口調で、三度催みたびさいそく促した。

「じゃ、申上げますが、いつものように、はぐらかして下さつては困りますよ。僕は真面まじ目で申しあげるのです。」

青年の口調は、可なり重々しい口調だった。一生懸命な態度が、美奈子にさえ、アリノと感ぜられた。

「まあ！ 憎らしい。妾が、何時いつ貴君を、はぐらかしたのです。厭いやな稔ねさんだこと。何時だつて、貴方あなたのおつしやることは、真面目で聴いているではありませんか。」

そう言っている母の言葉に、娼婦のような技巧があることが、美奈子にも感ぜられた。
「貴女あなたは、何時もそうなのです。貴女は、何時も僕にそうした態度しか見せて下さらないのです。僕が一生懸命に言うことを、何時もそんな風にはぐらかしてしまうのです。」

青年は、恨みがましくそう言った。

「まあ、そんなに怒らなくつてもいゝわ。じゃ、妾貴君の好きなように、聴いて上げるから言つて御覽なさい！」

母は、子供を操るように言った。

母の態度は、心にもない立聞をしている美奈子にさえ恥しかった。

青年は、また黙ってしまった。

「さあ！ 早くおつしやいよ。妾こんなに待っているのよ。」

母が、青年の類近く口を寄せて、促うながしている有様が、美奈子にも直ぐ感ぜられた。

「瑠璃子さん！ 貴女には、僕の今申し上げようと思っていることが、大抵お解りになつてはいませんか。」

青年は、到頭必死な声でそう云つた。美奈子は、予期したものを、到頭聴いたように思うと、今までの緊張が緩むのと同時に、暗い絶望の気持が、心の裡一杯になった。それでも彼女は母が、一体どう答えるかと、じつと耳を澄していた。

五

瑠璃子は青年をじらすように、落着いた言葉で云つた。
「解つてゐるかつて？ 何がです。」

ある空々しさが、美奈子にさえ感ぜられた。瑠璃子の言葉を聴くと、青年は、可なり激してしまつた。烈しい熱情が、彼の言葉を、顫わした。

「お解りになりませんか。お解りにならないと云うのですか。僕の心持、僕の貴女に対する心持が、僕が貴女をこんなに慕つてゐる心持が。」

青年は、もどかしげに、叫ぶように云うのだった。陰で聞いている美奈子は、胸を発矢

と打たれたように思った。青年の本当の心持ちが、自分が心私ひそかに思っていた青年の心が、母の方へ向っていることを知ると、彼女は死刑囚が、その最後の判決を聴いた時のように、身体も心も、ブル／＼顫えるのを、抑えることが出来なかった。が、母が青年の言葉に何と答えるかが、彼女には、もっと大事なことであった。彼女は、碎かれた胸を抑えて、母が何と云い出すかを、一心に耳を澄せていた。

が、母は容易に返事をしなかった。母が、返事をしない内に、青年の方が急せき立ってしまった。

「お解りになりませんか。僕の心持が、お解りにならない筈はないと思うのですが、僕がどんなに貴女を思っているか。貴女のためには、何物をも犠牲にしようと思っている僕の心持を。」

青年は、必死に母に迫っているらしかった。顫える声が、変に途切れて、傍聞わきぎきしている美奈子までが、胸に迫るような声だった。

が、母は平素いつものように落着いた声で云った。

「解っていますわ。」

母の冷静な答に、青年が満足していないことは明かだった。

「解っています。そうです、貴女は何時いつでも、そう云われるのです。僕が、何時か貴女に申上げたときにも、貴女は解っていると仰おつしやったのです。が、貴女が解っていると仰しやるのと、解っていないと仰しやるのと、何処どこが違うのです。恐らく、貴女は、貴女の周囲に集まっている多くの男性に、皆一様に『解っている』『解っている』と仰しやっているのではありませんか。『解っている』程度のお返事なら、お返事していたゞかなくても同じ事です。解っているのなら、本当に解っているように、していたゞきたいと思うのです。」

青年が、一句一語に、興奮して行く有様が、目を閉じて、じつと聴きすましている美奈子にさえ、アリ／＼と感ぜられた。

が、母は、何と云う冷静さだろうと美奈子でさえ、青年の言葉を、陰で聴いている美奈子でさえ、胸が裂けるような息苦しさを感じているのに、面と向って聴いている当人の母は、息一つ弾はすませてもないのだった。青年が、興奮すればするほど、興奮して行く有様を、じつと楽しんででもいるかのように、落着いている母だった。

「解っているようにするなんて？ 何どうすればいゝの？」

言葉丈はなまめかしく馴なれなれ々しかった。

母の取り済した言葉を、聴くと、青年は火のように激してしまった。

「何うすればいいの？　なんて、そんなことを、貴女は僕にお聞きになるのですか。」青年は、恨めし気に云った。「貴女は僕を、最初から、僕を玩具おもちゃにしていらつしやるのですか。僕の感情を、最初から弄もてあそんでいらつしやるのですか。僕が折に触れ、事に臨んで、貴女に申上げたことを、貴女は何と聴いていらつしやるのです。」

青年の若い熱情が——、恋の炎が、今烈々と迸ほとばしっているのであった。

六

青年が、段々激して来るのを、聴いていると、美奈子はもう此この上、隠れて聴いているのが、堪たまらなかった。

彼女の小さい胸は、いろ／＼な烈はげしい感情で、張り裂けるように一杯だった。青年の心を知ったための大きい絶望もあった、が、それと同時に、青年の烈しい恋に対する優しい同情もあった。母の不誠意な、薄情な態度を悲しむ心も交っていた。どの一つの感情でも、彼女の心を底から覆くつがえすのに十分だった。

その上、他人の秘密、他人の一生懸命な秘密を、窃み聴きしていることが、一番彼女の心を苦しめた。彼女は、もう一刻も、坐っていることが出来なかった。その椅子が針の藪か、何かでもあるように、幾度も腰を上げようとした。が、距離は、わずかに二間位しかない。草を踏む音でも聞えるかも知れない。殊に樹木の蔭を離れると、如何なる機みで母達の眼に触れるかも知れない。母達が、自分がいたことに気が付いたときの、駭きと当惑を思うと、美奈子の立ち上ろうとする足は、そのまゝすくんでしまうのだった。美奈子が、退つ引きならぬ境遇に苦しんでいることを、夢にも知らない瑠璃子は、前のように落着いた声で静に云った。

「だから、解つていると云っているのじゃないの。貴君のお心は、よく解つていると云っているのじゃないの。」

青年の声は、前よりももっと迫っていた。

「本当ですか。本当ですか。本心でそう仰しやっていますのですか。まさか、口先丈で云っていらつしやるのじやありませんまいね。」

青年が、そう訊き詰めても母は、黙っていた。青年は、愈々焦った。

「本心ならば、証拠を見せて下さい。貴女のお言葉丈は、もう幾度聴いたか分らない。」

貴女は、それと同じような言葉を、僕に幾度繰返したか分らない。僕は言葉丈ではなく、証拠を見せて貰もらいたいのです。本心ならば、本心らしい証拠を見せていたゞきたいのです。」

青年が、焦あせつても激しても、動かない母だった。

「証拠なんて！ 妾わたくしの言葉を信じて下さらなければ、それまでよ。お女郎じゃあるまいし、まさか、起き請しょうを書くわけにも行かないじゃないの。」

母の貴婦人レディらしからぬ言葉遣いが、美奈子の心を傷いたましめた。

「証拠と云つて、品物を下さいと云うのじゃありません。僕が、先日云つたことに、ハッキリと返事をしていたゞきたいのです。たゞ『待っている』ばかりじゃ僕はもう堪らないのです。」

「先日云つたことつて、何？」

母は、相手を益ます々ますじらすように、しかもなまめかしい口調で云つた。

「あれを、お忘れになつたのですか、貴女は？」

青年は憤ふん然ぜんとしたらしかった。

「あんな重大なことを、僕があんなに一生懸命にお願いしたのを、貴女はもう忘れて、い

らつしやるのですか。じゃ、繰り返してもう一度、申上げましょう。瑠璃子さん、貴女は僕と結婚して下さいませんか。」

結婚と云う思いがけない言葉を聴くと、美奈子は、最後の打撃を受けたように思った。青年の母に対する決心が、これほど堅く進んでいようとは夢にも思っていないことだった。

「あのお話！ あれには貴君、ハッキリとお答えしてあるじゃないの。」

母は、青年の必死な言葉を軽く受け流すように答えた。

「あのお答えには、もう満足出来なくなつたのです。」

母のハッキリした答えと云うのは、どんな内容だろうと思うと、美奈子は悪い〜と思ひながらじつと耳を澄まさずにはいられなかった。

七

「あんなお答には、僕はもう満足出来なくなつたのです。あんな生ぬるいお答には、もう満足出来なくなつたのです。貴女は、美奈子さんが、結婚してしまふまで、この返事は待つて呉れと仰しやる。が、貴女のお心丈をお定めになるのなら、美奈子さんの結婚などは、

何の関係もないことではありませんか。僕に約束をして下さって、たゞ、時期を待てと仰しやるのなら僕は何時いつまでも待ちます。五年でも十年でも、二十い年でも、否いな生しょう涯がい待ち続けても僕は悔いなくもります。貴女のはたゞ『返事を待て』と仰しやるのです、お返事丈ならば、美奈子さんが結婚しようがしまいが、それとは少しも関係なしに、貴女のお心一つで、何どうともお定めになることが、出来ることじゃありませんか。僕に約束さえして下されば、僕は欣よろこんで五年でも七年でも待つてゐる積りです。―

青年の声は、だん／＼低くなつて来た。が、その声に含まれてゐる熱情は、だん／＼高くなつて行くらしかった。しんみりとした調子の中に、人の心に触れる力が籠こもつていた。自分の名が、青年の口に上る度に、美奈子は胸をとゞろかせながら、息を潜ひそめて聞いていた。

母が何とも答えないので、青年は又言葉が続けた。

「返事を待て、返事を待つて呉れと、仰しやる。が、その返事がいゝ返事に定まつていれば、五年七年でも待ちます。が、もし五年も七年も待つて、その返事が悪い返事だったら、一体何どうなるのです。僕は青春の感情を、貴女に散々弄もてあそばれて、揚句あげくの端はてに、突き離はなされることになるのじゃありませんか。貴女は、僕を何どちらとも付かない迷いの裡うちに、釣つて

置いて、何時までも何時までも、僕の感情を弄ぼうとするのではありませんか。僕は、貴女のなさることから考えると、そう思うより外はないのです。」

「まさか、妾^{わたし}そんな悪人ではないわ。貴君^{あなた}のお心は、十分お受けしているのよ。でも、結婚となると妾考^いえるわ。一度あゝ云^いう恐ろしい結婚をしているのでしよう。妾結婚となると、何か恐ろしい淵^{ふち}の前にも立っているようで、足が竦^{すく}んでしまうのです。無論、美奈子が結婚してしまえば、妾の責任は無くなってしまうのよ。結婚しようと思えば、出来ないことはないわ。が、その時になって、本当に結婚したいと思うか、したくないか、今の妾には分らないのよ。」

母は、初めて本心の一部を打ち明けたように云った。

「が、それは貴女の結婚に対するお考えです。僕が訊^ききたいと思うのは、僕に対する貴女のお考えです。貴女が結婚するかしないかよりも、貴女が僕と結婚するかしないかが、僕には大問題なのです。言葉を換えて云えば、僕を、結婚してもいゝと思うほど、愛して下さるか何うかが、僕には大問題なのです。」

青年の言葉は、一句々々一生懸命だった。

「つまり、こう云うことをお尋ねしたのです。貴女が、もし、将来結婚なさらないで終る

のなら、是非もないことです。が、もし結婚なさるならば、何人^{なんびと}を措^おいても、僕と結婚して下さるかどうかを訊いているのです。時期などは、何時でもいゝ、五年後でも、十年後でも、介意^{かま}わないのです、たゞ、若し^も貴女が結婚しようと決心なさったときに、夫として僕を選んで下さるか何うかをお訊^{たず}ねしているのです。」

青年の静かな言葉の裡には、彼の熾烈^{しれつ}な恋が、火花を発していると云つてもよかつた。事理^との徹^{とお}つた退^の引^つならぬ青年の間に、母が何と答えるか、美奈子は胸を顫^{ふる}わしながら待つていた。

母は、暫^{しば}らく返事をしなかつた。夜は、もう十時に近かつた。やゝ欠けた月が、箱根の山々に、青白い夢のような光を落していた。

約束の夜に

「そのお返事は、出来ないことはないと思うのです。否か^{いな}応か^{どち}、孰^{どち}らかの返事をして下さればいゝのです。貴女^{あなた}が、今まで僕に示して下さったいろ／＼な愛の表情に、たゞ裏書をさえて下さればいゝのです。貴女の将来のお心を訊^きいていのではないのです。現在の、貴女のお心を訊^きいているのです。現在の、貴女自身のお心が、貴女に分らない筈^{はず}はないと思うのです。たゞ、現在の貴女のお心をハッキリお返事して下さればいゝのです。将来、結婚と云^いう問題が貴女のお考えの裡^{うち}に起ったときには、僕を夫として選ぼうと現在思っているかどうかを訊かしていたゞきたいのです。」

青年の間には、ハッキリとした条理が立っていた。詭弁^{きべん}を弄^{ろう}しがちな瑠璃子^{るりこ}にも、もう云い逃れる術^{すべ}は、ないように見えた。

「妾^{わたし}、貴君^{あなた}を愛していることは愛しているわ。妾^{この}が、此間中から云っていることは、決して嘘^{うそ}ではないわ。が、貴君を愛していると云うことは、必ずしも貴君と結婚したいと云うことを意味していないわ。けれど、貴君に、結婚したいと云う希望が、本当におありになるのなら、妾は又別に考えて見たいと思うの。」

瑠璃子の、少しも熱しない返事を訊くと、青年は又激してしまった。

「考えて見るなんて、貴女のそう云うお返事はもう沢山です。『考えて見る』『解^{わか}つてい

る』そう云う一時逃れのお返事には、もうあき／＼しました。僕は、全か若しくは無を欲するのです。徹底的なお返事が欲しいのです。貴女が、若し『否』と仰しやれば、僕も男です。失恋の苦しみと男らしく戦つて、貴女に決して未練がましいことは云わないつもりです、僕は貴女に、承諾して呉れとは云わないのです。孰らでも、ハッキリとしたお返事が欲しいのです。こんな中途半端な気持の中に、いつまでも苦しんでいたくないのです。僕は、貴女の全部を掴みたいのです。でなければ僕はむしろ、貴女の全部を失いたいです、恋は暴君です、相手の占有を望んで止まないのです。」

青年は、男らしく強くは云っているものの、彼が瑠璃子に対して、どんなに微弱であるかは、その顫えている語気で明かに分った。

「一体考えて見るなんて、何時まで考えて御覧になるのです。五六年も考えて見るお積りのですか。」

青年は、恨がましくやゝ皮肉らしく、そう云った。

「いゝえ。明後日まで。」

瑠璃子の答は、一生懸命に突つ掛つて来た相手を、軽く外したような意地悪さと軽快さを持つていた。

青年は、手軽く外されたために、ムツとして黙ったらしかったが、然し、答そのものは、手答があるので、彼は暫くしてから、口を開いた。

「明後日！ 本当に明後日までですか。」

「嘘は云いませんわ。」

瑠璃子の返事は、殊勝だった。

「じゃ、そのお返事は何時聴けるのです。」

青年の言葉に、やつと嬉しそうな響きがあつた。

「明後日の晩ですわ。」

瑠璃子の本心は知らず、言葉丈にはある誠意があつた。

「明後日の晩、やつぱり二人切りで、散歩に出て下さいますか。貴女は、何時でも、美奈子さんをお誘いになる。美奈子さんが、進まない時でも、貴女は美奈子さんを、いろいろ勧めてお連れになる。僕がどんなに貴女と二人切の時間を持ちたいと思っている時でも、貴女は美奈子さんを無理にお勧めになるのですもの。」

聴いている美奈子は、もう立つ瀬がなかった。彼女の頬には、涙がほろ／＼と流れ出した。

二

美奈子さんを連れ過ぎると、青年が母に対して恨んでゐるのを聴くと、もう美奈子は、一刻も辛抱が出来なかつた。口惜しさと、恨めしさと、絶望との涙が、止めどもなく頬を伝つて流れ落ちた。自分が、心私かに想を寄せていた青年から、邪魔物扱いされていたことは、彼女の魂を蹂み躪つてしまふのに、十分だった。もう一刻も、止まつてゐることは出来なかつた。逃げ出すために、母達に、見付けられようが、見付けられまいが、もうそんなことは問題ではなかつた。そんなことは、もう氣にならないほど、彼女の心は狂つていた。彼女は、どんなことがあるうとも、もう一秒も止まつてゐることは出来なかつた。彼女は、それでも物音を立てないように、そつと椅子から、立ち上つた。立ち上つた刹那から、脚がわな／＼と顫えた。一步踏み出そうとすると、全身の血が、悉く逆流を初めたように、身体がフラ／＼とした。倒れようとするのをやつと支えた。最後の力を、振り起した。わな／＼足を支えて、芝生の上を、静に／＼踏み占め、椅子から、十間ばかり離れた。彼女は、そこまでは、這うように、身体を沈ませながら辿つたが、其処に茂つてい

る、夜の目には何とも付かない若い樹木の疎林^{そりん}へまで、辿り付くと、もう最後の辛抱をし尽したように、疎林の中を縫うように、母達のいる位置を、遠廻りしながら、ホテルの建物の方へと足を早めた。否^{いな}馳^かけ始めた。恐ろしい悪夢から逃げるように。恐ろしい罪と恥とから逃げるように。彼女は、凡^{すべ}てを忘れて、若い牝鹿^{めしか}のように、逃げた。

夢中に、庭園を馳^かけぬけ、夢中に階段を馳^かけ上り、夢中に廊下を走って、自分の寝室へ馳^かけ込むと彼女は寢台へ身体を瓦破^{がば}と投げ付けたまゝ、泣き伏した。

涙は、幾何^{いくわ}流れても尽きなかった。悲しみは、幾何泣いても、薄らがなかった。

凡ては失われた。凡ては、彼女の心から奪われた。新しく得ようとした恋人と一緒に、古くから持っていたたゞ一人の母を。彼女の愛情生活の唯一^{ゆいいつ}の相手であつた母を。

春の花園のように、光と愛と美しさとに、充^みちていた美奈子の心は、此^この嵐^{あらし}のために、吹き荒^{こう}されて、跡には荒^{こうりよう}寥^{りよう}たる暗黒と悲哀の外は、何も残っていないかった。

恋人から、邪魔物扱いされていることが、悲しかった。が、それと同じに、母が——あれほど、自分には優しく、清^{しやうじやう}浄^{じやう}である母が、男に対して、娼^{しやうふ}婦^ふのように、なまめかしく、不誠実であることが、一番悲しかった。自分の頼み切つた母が、夜そつと眼を覺しで見ると、自分の傍には、いないで、有明^{あんどん}の行燈^なを嘗^なめているのを発見した古い怪譚^{かいだん}

の中の少女のように、美奈子の心は、あさましい^{おどろ}駭きで一杯だった。

自分に、優しい母を考えると、彼女は母を恨むことは出来なかった。が、あさましかつた。恥かしかつた。恨めしかつた。

母と青年とから、逃れて来たものの、美奈子は本当に逃れているのではなかった。山中で、怪物に会って、馳け込んだ家が、丁度怪物の棲家^{すみか}であるように、母と青年とから逃れて来ても、彼等は相つづいて、同じ此の部屋に帰って来るのだった。

そう思うと、いつそ美奈子は、此の部屋から逃げ出したかった。遠くく^{なんびと}何人にも見^み出^{いだ}されない、山の中へ入って、此の悲しみを何時^{いつ}までも何時までも泣き明したかった。いな、少くとも此夜丈^いけでも、母と青年との顔を見たくなかった。母と青年とが、並んで帰って来るのを見たくなかった。いな、青年から邪魔物扱いされている以上、もう部屋に止まりたくなかった。が、此の部屋を離れて、いな母を離れて、彼女は一人何処^{どこ}へ行くところがあるう。たゞ一人、縋^{すが}り付く由縁^{よすが}とした母を離れて何処^{いそこ}へ行くとところがあるう。そう思うと、美奈子の頭には、死んだ父母の面影が、アリくと浮んで来た。

死んだ父母の面影が、浮んで来ると、美奈子は懷しきで、胸がピッタリと閉された。

今の彼女の悲しみと、苦しみを、撫でさすつて呉れる者は、死んだ父母の外には、広い世の中に誰一人ないように思われた。

そう思うと、亡き父が、あの強い腕を差し伸べて、自分を招いていて呉れるように思われた。その手は世の人々には、どんなに薄情に働いたかも知れないが、自分に対しては限らない慈愛が含まれていた。美奈子は、父の腕が、恋しかった。父の、その強い腕に抱かれたかった。そう思うと、自分一人世の中に取り残されて、悲しく情ない目に会っていることが、味気なかった。

が、それよりも、彼女はこの部屋に止まっていて、母と青年とが、何知らぬ顔をして、帰って来るのを迎えるのに堪えなかった。何処でもいゝ、山でもいゝ、海でもいゝ、母と青年とのいないところへ逃れたかった。彼女は、泣き伏していた顔を、上げた。フラフラと寝台を離れた。浴衣を脱いで、明石縮の単衣に換えた。手提を取り上げた。彼女の小さい心は、今狂っていた。もう何の思慮も、分別も残っていなかった。たゞ、突き詰めた一途な少女心が、張り切っていた丈である。

彼女が、着物を着換えてしまう間、幸に母と青年とは帰つて来なかった。

彼女は、部屋を馳^かけ出そうとしたとき、咄^{とつ}嗟に兄のことを考えた。兄は、白痴の身を、監禁同様に葉山の別荘に閉じ込められている。が、他の世間の人々に対しては、愚かなあさましい兄であるが、その愚かさの裡^{うち}にも、肉親に対する愛だけは、残っている。彼女は、彼女が時々兄を訪^{おも}うときに、兄がどんなに嬉^{うれ}しそうな表情をするかを、覚えてゐる。縦令^{たとい}、自分の現在の苦しみや、悲しみを理解し得る兄ではないにしろ、兄の愚かな、然^{しか}しながら純な態度は、屹^{きつ}度自分を慰めて呉れるに違ない。少くとも、あの愚かな兄丈は、何時^{いつ}行つても屹^{きつ}度、自分に、あの人のよい、愚かしいが然し淨^{きよ}い親愛の情を表して呉れるに違ない。そう思うと、美奈子は急に、兄に会いたくなつた。夜は十時に近かつたがまだ湯本行の電車はあるように思つた。もし、横須賀^{よこすか}行の汽車に間に合わなかつたら、国府津^{こうづ}か小田原かで、一泊してもいゝとさえ思つた。

部屋の扉^{ドア}を、そつと開けて、彼女は廊下を窺^{うかが}つた。西洋人の少年少女が二人連れ立つて、自分の部屋へ、帰つて行くらしいのを除いた外には人影はなかつた。

彼女は、廊下を左へ取つた。その廊下を突き当つて左へ降りると、ホテルの玄関を通らないで、広場へ出ることを知つていた。

彼女は、廊下を駆け過ぎた。階段を、一気に駆け降りた。そして、階段の突き当りにある、扉を押し開いて、夜の戸外へ、走り出ようとした。

が、その扉を押し開いた刹那であつた。

「おや！」戸外に、叫ぶ声があった。戸外からも、扉を開けようとした人が、思わず内部から開いたので、駭いて発した声だつた。美奈子は、直ぐ、そう叫んだ人と、顔を面して立たなければならなかつた。それは、正しく母だつた。母の後に、寄り添うように立っているのは、もとより彼の青年だつた。

「美奈さんじゃないの！」

母は、可なり駭いていた。狼狽していたと云つてもよかつた。美奈子は、全身の血が、凍つてしまったように、じつと身体を縮ませながら、立っていた。

「何うしたの？　こんなに遅く？」

青年との会話には、あんな冷静を保っていた母が、別人ではないかと思うほど、色を変えていた。

美奈子が、黙っていると、母は益々氣遣わしげに云つた。

「一体何うしたの、こんなに遅く、着物を着換えて、手提なんか持つて。」

四

母に問い詰められて、美奈子は、漸くその重い唇を開いた。

「あの、手紙を出しに、郵便局まで行こうと思っていましたの。」

彼女は、生れて最初の嘘を、ついてしまった。彼女の、蒼い顫いを帯びた顔色を見れば、誰が彼女が郵便局へ行くことを、信ずることが出来よう。

「郵便局！」瑠璃子は、反射的にそう繰返したが、その美しい眉は、深い憂慮のために、暗くなってしまった。「こんなに遅く郵便局へ！」

瑠璃子は、呟くように云った。が、それは美奈子を咎めていると云うよりも、自分自身を咎めているような声だった。

母子の間に、暫らくは沈黙が在った。美奈子は、たゞ黙って立っている外は、何うすることも出来なかった。

「郵便局！ 郵便局なら、僕が行って来て上げましょう。」

母の後に立っていた青年は、此の沈黙を救おうとしてそう云った。

美奈子は、一寸狼狽ちよつとろうばいした。託すべき手紙などは持つていなかったからである。

「いゝえ。結構でございますの。」

美奈子は、平素いつもに似ず、きつぱりと答えた。その拒絶には、彼女の、芽にして、蹂み躪ふみにじられた恋の千万無量の恨が、籠こもつていたと云つてもよかつた。

聡明そうめいな瑠璃子には、美奈子の心持が、可なり判わかつたらしかつた。彼女は、涙がにじんではいぬかと思われるほどの、やさしい眸ひとみで、美奈子を、じつと見詰めながら云つた。

「ねえ！ 美奈さん。今晚は、よして呉くれない。もう十時ですもの、あした早く入れに行くといゝわ。ねえ美奈さん！ いゝでしょう。」

彼女は、美奈子を抱きしめるように、掩おおいながら、耳許みみもと近く、子供でもすかすように云つた。

平素いつもなら、母の一言半句にも背かない美奈子であるが、その夜の彼女の心は、妙にこじれていた。彼女は、黙つて返事をしなかつた。

「何うしても、行くのなら、妾わたしも一緒に行くわ。青木さんは、部屋で待つていて下さいね。ねえ！ 美奈さん、それでいいでしょう。」

そう云いながら、瑠璃子は早くも、先に立つて歩もうとした。

美奈子は、一寸進退に窮した。母と一緒に郵便局へ行っても、出すべき手紙がなかった。それかと云つて、今まで黙つていながら、今更行くことをよすとも、言い出しかねた。

その裡に、青年は此の場を避けることが、彼にとつて、一番適當なことだと思つたのだろう。何の挨拶もしないで、建物の中へ入ると、階段を勢よく駆け上つてしまった。

母一人になると、美奈子の張り詰めていた心は、弛んでしまつて、新しい涙が、頬を伝い出したかと思うと、どんなに止めようとしても止まらなかつた。到頭、しく／＼と声を立てゝしまった。

美奈子が泣き始めるのを見ると、瑠璃子は、心から駭いたらしかつた。美奈子の身体を抱えながら叫ぶように云つた。

「美奈さん！ 何うしたの、一体何うしたの。何が悲しいの。貴女一人残して置いて済まなかつたわ。御免なさいね、御免なさいね。」

青年に対しては、あれほど冷静であつた母が、本当に二十前後の若い女に帰つたように、狼狽うろたえているのであつた。

「貴女、泣いたりなんかしたら、厭いやですわ。今迄貴女の泣き顔は、一度だって、見たことがないのですもの。妾、貴女の泣き顔を見るのが、何よりも辛いわ。一体何うしたの。」

妾が、悪かったのなら、どんなにでもあやまるわ。ねえ、後生だから、訳を云って下さいね。」

そう云っている母の声に、^{はげ}烈しい愛と熱情とが、籠っていることを、疑うことは出来なかった。

五

その夜は、美奈子も強いて争いかねて、重い足を返しながら、部屋へ帰って来た。

翌日になると、夜が明けるのを待ち兼ねていたように、美奈子は母に云^いった。

「お母様、妾^{わたし}葉山へ行つて来ようかと思つているの。兄さんにも、随分会わないから、どんな容子^{わがこ}だか、妾見て来たいと思うの。」

が、母は許さなかった。美奈子の容子が、何となく氣にかゝっているらしかった。

「もう二三日してから行つて下さいね。それだと、妾も一緒に行くかも知れないわ。箱根も妾何だか飽^あき／＼して来たから。」

その日一杯、平素^{いつも}は快活な瑠璃子は、妙に沈んでしまっていた。青年には、口一つ利^きか

なかつた。美奈子にも、用事の外は、殆ど口を利かなかつた。たゞ一人、縁側ヴェランダにある籐椅子とうすに、腰を降しながら、一時間も二時間も、石のように黙っていた。

瑠璃子の態度が、直ぐ青年に反射していた。瑠璃子から、口一つ利かれない青年は、所在なさそうに、主人から嫌われた犬のように、部屋の中をウロ／＼歩いてゐた。彼のオド／＼した眼は、燃ゆるような熱を帯びながら、瑠璃子の上に、注がれてゐた。美奈子は、青年の容子に、抑え切れぬ嫉妬しつとを感じながらも、然し何となく氣の毒であつた。犬のように、母を追うている、母の一挙一動に悲しんだり欣よろこんだりする青年の容子が、氣の毒であつた。

その日は、事もなく暮れた。平素いつものように、夕方の散歩にも行かなかつた。食堂から歸つて来ると三人は氣まづく三十分ばかり向い合つてゐた後に、銘々自分の寢室に、まだ九時にもならない内に、退いてしまつた。

翌あくる日が来ても、瑠璃子の容子は前日と少しも変らなかつた。美奈子には、時々優しい言葉をかけたけれども、青年には一言も言わなかつた。青年の顔に、絶望の色が、段々濃くなつて行つた。彼の眼は、恨めしげうらに光り初めた。

到頭、夜が来た。瑠璃子と青年との間に、交された約束の夜が来た。

美奈子は、夜が近づくに従って、青年が自分の存在を、どんなに呪^{のろ}っているかも知れないと思うと部屋にすることが、何^どうにも苦痛になって来た。

晩^{ばん}餐^{さん}の食堂から、帰るときに、美奈子は、そつと母達から離れて、自分一人ホテルの図書室へでも行こうと思った。そうすれば、青年は彼の希望通り、母とたった二人限^きりで、散歩に行くことが出来るだろう。母も、自分に何の気兼ねなしに青年とたった二人、散歩に出ることが出来るだろう。

美奈子は、そう思いながら、そつと母達から離れる機会を待っていた。が、母は故意にやっているとされるほど、美奈子から眼を離さなかった。美奈子は、仕方なしに、一緒に部屋へ帰って来た。

部屋に帰ってから、暫^{しば}くの間、瑠璃子は黙っていた。五十分経^たつに連れて、青年がじり／＼し初めたことが、美奈子の眼にも、ハッキリと判^{わか}った。而^{しか}も、青年がいら／＼していることが、自分がいるためであると思うと、美奈子は何うにも、辛^{しん}抱^{ぼう}が出来なかった。自分が、青年の大事なく、機会の邪魔をしていると思うと、美奈子は何うにも、辛抱が出来なかった。

「妾、お母様、図書室へ行つて来ますわ。一寸^{ちよつと}本が読みたくなりましたから。」

美奈子は、そう云つて、母の返事をも待たず、つか／＼と部屋を出ようとした。

母は、^{おどろ}駭いたように呼び止めた。

「図書室へ行くのなんかおよしなさいね。昨夕^{ゆうべ}は出なかつたから、今日は散歩に出ようじやありませんか。」

美奈子は、一寸駭いて足を止めた。ふと気が付くと、青年の顔は^{はげ}烈しい怒りのために、黒くなつていた。

六

美奈子は、母の真意を^{はか}測りかねた。

母も、確に青年とたつた二人限^{きり}、散歩する約束をした筈^{はず}である。そして、あの大切な返事を青年に与える約束をした筈である。それなのに、なぜ自分呼び止めるのであろう。そうした機会を、彼等に与えようとして、席を外そうとする、自分呼び止めるとは。

「えゝっ！」美奈子は、つい返事とも、^{おどろ}駭きとも何とも付かぬ言葉を出してしまった。

「ねえ！ 図書室なんか、明日いらつしやればいゝのに。今夜は強羅公園^{べいろう}へ行こうと思う

の。ねえ！ いゝでしょう。」

母はいつもよりも、もつと熱心に美奈子に勧めた。

「でも。」

美奈子は、躊躇ちゆうちよした。彼女は、そうためらいながらも、青年の顔を見ずにはいられなかったのである。彼は、部屋の一隅の籐椅子とういすに腰を下していたが、その白い顔は、烈はげしい憤怒ふんぬのために、充血していた。彼は、爛らんらん々たる眸ひとみを、恨めしげに母の上に投げていたのである。美奈子は、そうした青年の容子を見ることが、心苦しかった。彼女は、青年のために、心の動顛どうてんしている青年のためにも、母の勧めに、おいそれと従うことは出来なかった。

「いゝじやありませんの。図書室なんか、今晚に限ったことはないでしょう。ねえ！ いらつしやい。妾わたしお願いしますから。」

母は、余儀ないように云いった。そう云われゝば、美奈子は、同行を強いて断るほどの口実は何もなかった。たゞ彼女には、自分を極力同行せしめようとする母の真意が、何どうしても分らなかつた。

「ねえ！ 青木さん！ 美奈さんと、三人でなければ面白くありませんわねえ。二人限きりじ

や淋^{さみ}しいし張合がありませんわねえ！」

母は、青年に同意を求めた。

何もかも知っている美奈子は、母のやり方が、恐ろしかった。青年が、嫌いだと云うものを、グン／＼咽喉^{のど}に押し込むような、母の意地の悪い逆な態度が、恐ろしかった。美奈子は、ハラ／＼した。青年が、母の言葉を、何う取るかと思うと、ハラ／＼せずにはいられなかった。青年は、果してカツとなったらしかった。それかと云って、美奈子の前では、何の抗議を云うことも出来ないらしかった。

「僕！　僕！　僕は、今日は散歩に行きたくありません。失礼します、失礼します。」

それが、青年の精一杯の反抗であつた。青年の顔は、今蒼白^{そうはく}に変じ、彼の言葉は、激昂^{げき}のために、顫^{ふる}えた。

「何故^{なぜ}？」瑠璃子は詰問^{きつもん}するように云つた。

「何故いらつしやらない。だって、貴君^{あなた}は先刻^{さつき}食堂で、今夜は強羅まで行こうと仰^{おつ}しやつたのじやないの。今になって、よそうなんて、それじや故意に、妾達の感情を害しようとなさっているのだわ。」

青年は、唇をブル／＼顫^{ふる}わした。が、美奈子の前では、彼は一言も、本当の抗議は云え

なかった。

『貴女あなたは約束と違うじゃありませんか。なぜ、美奈子さんをお連れになるのです。』それが、青年の心に、沸ふつ々と湧わき立っている云い分であつた。が、それを、何うして美奈子の前で口にすることが出来るだろう。

青年の、籐椅子の腕に置いている手が、わなわな顫えるのが、美奈子は、先刻から気が付いていた。

母の皮肉な逆な態度が、どんなに青年の心を虐しいたげているかが、美奈子にもよく判わかつた。美奈子は、もう一度、青年を救つてやりたいと思つた。

「妾わたくしやつぱり、図書室へ参りますわ。今日急に、お関所の歴史が知りたくなりましたの。」

七

「お関所の歴史なんか、今夜じゃなくてもいゝじゃないの。」

瑠璃子は、美奈子が、再度図書室へ行こうと云いうのを聴くと、少しじれたように、そう云つた。

「何うして妾と一緒に行くのが、お嫌いな。美奈さんも、青木さんも、今夜に限って何うしてそんなに煮え切らないの。」

瑠璃子は、青年の火のような憤怒も、美奈子の苦衷も、何も分らないように、平然と云った。

「ねえ！ 美奈さん、お願いだから行つて下さいね。貴女が、行きたがらないものだから、青木さんまでが、出渋るのですわ。ねえ！ そうでしょう、青木さん！」

弱い兎を、苛責める牝豹か何かのように、瑠璃子は何処までも、皮肉に逆に逆に出るのであった。美奈子は、青年の顔を見るのに堪えなかった。青年がどんなに怒っているか、また美奈子がいるために、その怒を少しも洩すことが出来ない苦しさを察すると、美奈子は気の毒で、顔を背けずにはいられなかった。

瑠璃子には、青年の憤怒などは、眼中にないようだった。それでも、暫くしてから、青年をなだめるように云った。

「さあ！ 三人で機嫌よく行こうじゃありませんか。ねえ！ 青木さん。何をそんなに、気にかけていらつしやるの。」

そう、可なり優しく云つてから、彼女は意味ありげに附け加えた。

「妾^{わたくし}此間中から、考えていることがあつて、くさくさしてしまったの。散歩でもして、気を晴らしてから、もつとよく考えて見たいと思うの。」

それは、暗に青年に対する云い訳のようであつた。まだ、十分に考えが纏^{まと}つていないこと、従つて今夜の返事を待つて呉^くれと云う意味が、言外に含まれているようだった。

それを聴くと、青年の怒りは幾分、解けたらしかった。彼は不承々に椅子^{いす}から、腰を離した。

美奈子も、やつと安心した。やつぱり、母は、真面目^{まじめ}に、此二三日口も利^きかずに、青年の申出を、考えたに違いない。それが、到頭纏^{まと}りが付かないために、返事の延期を、青年にそれとなく求めたに違いない。それを、青年が不承々々ではあるが、承諾した以上、今夜の約束は延ばされたのだ。そう思うと、自分が母達に同伴することが、必ずしも青年の恋の機会の邪魔をすることではないと思うと彼女は漸^{ようや}く同伴する気になった。

三人は、それ／＼に、いつもよりは、少しく身^み拵^{ごしらえ}を丁寧にした。

「往^ゆきと歸りは、電車にしましょうね。歩くと大変だから。」

瑠璃子は、そう云いながら、一番に部屋を出た。青年も美奈子も、黙つてそれに続いた。三人が、ホテルの玄関に出て、ボーイに送られながら、その階段を降りようとしたとき

だった。暮れなやむ夏の夕暮のまだほの明るい暗を、煌々たるヘッドライトで、照し分けながら、一台の自動車が、烈しい勢で駈け込んで来た。

美奈子は、塔の沢か湯本あたりから、上つて来た外人客であろうと思ったので、あまり注意もしなかった。

が、美奈子と一緒に歩いていた母は、自動車の中から、立ち現われた人を見ると、急に立ち竦んだように目を睥った。いつもは、冷然と澄している母の態度に、明かな狼狽が見えていた。夕暗の中ではあつたが、美しい眼が、異様に光っているのが、美奈子にも気が付いた。

美奈子も、駭いて相手を見た。母をこんなに駭かせる相手は、一体何だろうかと思いがら。

一条の光

相手は、まだ三十になるかならない紳士だった。金縁の眼鏡が、その色白の面に光っていた。純白な背広が、可なりよく似合っていた。彼は一人ではなかった。直ぐその後から、丸顔の可愛い二十ばかりの夫人らしい女が、自動車から降りた。

美奈子は、夫婦とも全然見覚えがなかった。

瑠璃子が、相手の顔を見ると、ハッと駭いたように、紳士も瑠璃子の顔を見ると、ハッと顔色を変えながら、立竦んでしまった。

紳士と瑠璃子とは、互に敵意のある眼付を交しながら、十秒二十秒三十秒ばかり、相対して立っていた。それでも、紳士の方は、挨拶しようかしまいかと、一寸躊躇っているらしかったが、瑠璃子が黙って顔を背けてしまうと、それに対抗するように、また黙って顔を背けてしまった。

が、瑠璃子から顔を背けた相手は、彼女の右に立っている青年の顔を見ずにはいなかった。青年の顔を見たときに、紳士の顔は、前よりも、もっと動揺した。彼の駭きは、前よりも、もっと烈しかった。彼は、声こそ出さなかったが、殆んど叫び出しでもするような表情をした。

彼は、狼狽^{あわて}たように瑠璃子の顔を見直した。再び青年の顔を見た。そして、青年の顔と瑠璃子の顔とを見比べると、何か汚^{けが}らしいものをでも見たような表情をしながら、妻を促^{うなが}して、足早に階段を上つてしまった。

美奈子は、何だかその不^{ストレンジャー}知人が、氣になつたが、母に訊^きくことが、悪いように思つて、何^どうしても口に出せなかつた。すると、ホテルの門を出た頃に、先刻から黙つていた青年が初めて瑠璃子に口を利^きいた。

「一体今の人は誰です。御存じじやありませんか。」

「いゝえ！ ちつとも、心当りのない方ですわ。でも、可笑^{おか}しな人ですわね。妾^{わたし}達^{たち}を、じつと見詰めたりなんかして。」

瑠璃子は、何気なく云^いつたらしかつた。が、声が平素^{いつも}のように、澄んだ自信の充^みち満ちた声ではなかつた。

「そうですか、御存じないのですか。でも、先方は、僕達のことをよく知っているようですよ。え。」

青年は、不審^{いぶか}しげにそう云つた。が、瑠璃子は、聞えないように返事をしなかつた。

三人は、底氣味の悪い沈黙を、お互の間に醸^{かも}しながら、宮の下の停留場から、強羅^{ごうら}行の

電車に乗った。

が、電車に乗っても、三人は散歩に行くと言ったような気持は少しもなかった。美奈子は、人身御供にでもなったような心持で、たゞ母の意志に従っていると云うのに過ぎなかった。

青年は、無論最初から滅入っていた。大事な返事を体よく延ばされたことが、彼にとつては、何よりの打撃であつたのだ。彼が楽しんでゐる筈はなかつた。

瑠璃子も、最初は二人を促して、散歩に出たのであつたが、玄関で紳士に逢つてからは、隠し切れぬ暗い翳が、彼女の美しい顔の何処かに潜んでゐるようだった。

夜の箱根の緑の暗を、明るい頭光を照しながら、電車は静かな山腹の空気を顫して、轟々と走りつゞけたかと思うと直ぐ終点の強羅に着いていた。

電車を去ってから、可なり勾配の急な坂を二三町上ると、もう強羅公園の表門に來た。電車が、強羅まで開通してからは、急に別荘の数が増し、今年の避暑客は可なり多いらしいかった。

公園の表門の突き当りにある西洋料理店の窓から、明るい光が洩れ、玉を突いているらしい避暑客の高笑いが、絶え間なく聞えていた。

夜の公園にも、涼を求めているらしい人影が、彼方にも此方にもチラホラ見えた。

二

三人は、西洋料理店の左から、コンクリートで堅めた水泳場の傍を通って、段々上の方に登って行つた。

公園は、山の傾斜に作られた洋風の庭園であつた。箱根の山の大自然の中に、茲ばかり一寸人間が細工をしたと云つたような、こましやくれた、しかし、厭味のない小公園だつた。

園の中央には、山上から引いたらしい水が、噴水となつて迸つて、肌寒いほどの涼味を放つていた。

三人は、黙つたまゝ園内を、彼方此方と歩いた。誰も口を利かなかつた。皆が、舌を封ぜられたかのように、黙々としてたゞ歩き廻つていた。

三人が、少し歩き疲れて、片陰の大きい櫓の樹の下の自然石の上に、腰を降した時だつた。先刻から一言も、口を利かなかつた瑠璃子が、突然青年に向つて話し出した。しか

も可なり真剣な声で。

「青木さん！ 此間のお話ね。」

青年は、瑠璃子は何を云っているのか、丸切り見当が付かないらしかった。

「えっ！ えっ！」彼は可なり狼狽ろうばいしたように焦っていた。

「此間のお話ね。」

瑠璃子は、再びそう繰り返した。彼女の言葉には、鋼鉄のような冷たさと堅さがあつた。

「此間の話？」

青年は、如何にも腑ふに落ちないと云つたように、首を傾かしげた。

丁度その時、美奈子は母と青年との真中に坐すわっていた。自分を、中央にして、自分を隔てゝ母と青年とが、何だかわだかまりのある話を始めたので、彼女は可なり当惑したが、彼女にも母が、一体何を話し出すのか皆目見当が付かなかつた。

「お忘れになつたの。先夜のお話ですよ。」

瑠璃子の声は、冗談などを少しも意味していないように真面目まじめだった。

「先夜つて、何時いつのことです。」青年の声が、だんく緊張した。

「お忘れになつたの？ 一昨日おとといの晩のことですよ。」

青年が色を変えて駭いたことが、美奈子にもハッキリと感ぜられた。美奈子でさえ、あまりの駭きのために、胸が潰れてしまった。母は、果して一昨日の夜のことを、美奈子の前で話そうとしているのかしら、そう思った丈で、美奈子の心は戦った。

「一昨日の晩！」青年の声は、必死であつた。彼は一生懸命の努力で続けて云つた。

「一昨日の晩？ 何か特別に貴女とお話をしたでしょうか。」

必死に、逃路を求めているような青年の様子が、可なり悲惨だつた。美奈子は、他人事ならず、胸が張り裂けるばかりに、母が何と云い出すかと待っていた。

「お忘れになつたの。」

瑠璃子は、静に冷たく云つた。冗談を云っているでもないければ、揶揄っているでもないければ、じらしているのでもなかつた。彼女も、今夜は別人のように真面目であつた。「忘れる？ 一昨日の晩！」青年は首を傾げる様子をしながら、彼の態度は如何にも苦しうであつた。「僕には、ちつとも解りません。一昨日の晩、僕が何か申上げたでしょうか。」

青年の声は、わな／＼と顫えた。彼はその言葉を、瑠璃子に投げ付けるように云つた。が、その投げ付けたつもりの言葉の裡に、みじめな哀願の調子が、アリ／＼と響いてい

た。

青年の哀願の調子を跳ね付けるように、瑠璃子の言葉は、冷たく無情だった。

「一昨日の晩のお話のお返事を、妾わたし今夜致そうと思ひますの。」

風が、少し出た故せいだろう、冷たい噴水の飛沫ひまつが三人の上に降りかゝつて来た。

三

瑠璃子の言葉は、これから判決文を読み上げようとする裁判長の言葉のように、峻しゅん厳げんであつた。

青年は瑠璃子の言葉を聴くと、もう黙つてはいられなかった。『抜く抜く』と云う冗談が、本当の白刃になつたように、彼はもうそれを真正面から受止める外はなかった。

「奥さん、貴女あなたは何を仰おつしやるのです。貴女は、お約束をお忘れになつたのですか。あれほど僕がお願いしたお約束をお忘れになつたのですか。」

美奈子が、真中にいることも、もうスツカリ忘れたように、青年は我を忘れて激昂げきこうした。興奮に湧わき立つた温かい呼吸いきが、美奈子の冷い頬に、吐き付けられた。

「お約束？　お約束を忘れないからこそ、今夜お返事すると云っているのじゃありませんか。」

「何！　何！　何と仰しやるのです。」

青年はスツクと立ち上った。もう美奈子を隔て、話をするほどの余裕もなくなったのであろう、彼は、激しく瑠璃子の前に詰めよった。

美奈子は、浅ましい恐ろしい物を見たように、面を伏せてしまった。

「奥さん！　貴女は、貴女は何を仰しやるのです。僕！　僕！　僕が、一昨夜申上げたこと、あのお返事を今、なさろうとするのですか。あの、あのお返事を！」

激しい興奮のために、彼の身体は顫え、彼の声は裂け、彼の言葉は咽喉にからんで、容易には出て来なかった。

「まあ！　お坐りなさい！　そう、貴君のように興奮なさっては、話が、ちつとも分らなくなりますわ。まあ！　坐ってお話しなさいませ。妾、今夜はよくお話ししたいと思いますから。」

瑠璃子の態度は、水の如く冷たく澄んでいた。たしなめられて、青年は不承々に元の席に復したが、彼の興奮は容易には去らない。彼は火のように、熱い息を吐いていた。

「坐ります。坐ります。が、あのお話を、今茲（こゝに）でなさるなんて、あんまりではありませんか。あれは、僕丈の私事です。私事的（プライベート）な事です。それを今茲でお話しになるなんて、あんまりではありませんか。あの晩、僕が何と申上げたのです。あの晩申上げた事を、貴女は覚えていて下さらないのですか。」

青年は、美奈子が聴いていることなどは、もう介意（かま）つていられないように、熱狂して来た。

美奈子は、真中でじつと聴いているのに堪（た）えられなくなつて来た。彼女は、勇気を鼓舞しながら、口を開いた。

「あのう、お母様！ 妾（わたくし）は一寸失礼させていたゞきたいと思ひますわ。お話が、お済みになつた頃に歸つて参りますから。」

美奈子は、皮肉でなく真面目（まじめ）にそう云わずにはいられなかった。

溺（おぼ）れる者は、藁（わら）をでも掴（つか）むように、青年はもう夢中だった。

「そうです。奥さん！ もし貴女が、あの晩の話のお返事をして下さるのなら、失礼ですが、美奈子さんに、一寸失礼させていたゞきたいのです。あれは、僕の私事です。あのお返事なら、僕一人の時に承わりたいのです。」

興奮した青年に、水を浴せるように、瑠璃子は云った。

「いゝえ！ 妾、美奈さんにも、是非とも聞いていたゞきたいのですわ。一昨夜も、あんなお話なら美奈さんに立ち合っていたゞきたいと思つたのです。あんなお話は、二人切りで、すべきものではないと思いますもの。たゞさえ、妾色々な風評の的になって、困つてゐるのですもの。あゝいうお話はなるべく陰翳いんえいの残らないように、ハッキリと片を付けて置きたいと思ひますの。ねえ、美奈さん、貴女このお話の、証人ウイットネスになつて下さるでしょうねえ。」

「あ！ 奥さん！ 貴女は！ 貴女は！」

青年は、狂したように叫びながら立ち上ると、続けざまに、地を踏み鳴らした。

四

青年が、狂氣したように、叫び出したのにも拘かかわらず、瑠璃子は、冷然として、語りつづけた。

「美奈さん、貴女あなたには、お話しなかつたけれども、妾わたし青木さんから、一昨日の晩、突然結

婚の申込を受けたのです。そうして、それに対する諸たくひ否のお返事を、今晚しようと言いう約束をしたのです。結婚の申込を直接受けたことを、妾本當に心苦しく思っているのです。せめて、お返事をするとき丈でも貴女に立ち合っていただきたいと思いいましたの。」

美奈子は、何と返事をしてよいか、皆目分らなかった。たゞ、彼女にも、ボンヤリ分つたことは、美奈子が母と青年の密語を、立ち聴いたきしたことを、母が気付いていると云うことだった。美奈子が、居いた堪たまれなくなつて逃げ出したときの後姿を、母が気付いたに違ちがひないと言いうことだった。

そう思うと、自分の心持が、明敏な母に、すっかり悟さとられているように思おもわれて、美奈子は一言も返事することさえ出来なかつた。

青年の顔は、真まつ蒼さおになつていた。眼まなこばかりが、爛らん々らんと暗やみの中に光ひつていた。

「ねえ！ 青木さん。それでは、よく心を落ち着けて聴きいて下さいませ！ 妾、あの、大變お氣の毒ではございますけれども、よく／＼考かんえて見みましたところ、貴君あなたのお申もうし出でに應こたへることが出来ないでございます。」

瑠璃子の言葉に、鬪牛とろうが、止とどめの一撃を受けたように、青年の細長い身体が、タジ／＼と後へよろめいた。

彼は、両手で頭を抱えた。身体を左右に悶えた。眩きとも呻きとも付かないものが口から洩れた。

美奈子は、見ているのに堪えなかった。もし、母が傍にいなかったら、走り寄って、青年の身体を抱えて、思うさま慰めてやりたかった。

二分ばかり、青年の苦悶が続いた。が、彼はやっと、その苦悶から這い上って来た。母から受けた恥辱のために、彼の眼は血走り、彼の背は裂けていた。

「あなたのは、お断りになるのではなくて、僕を恥しめるのです。僕がそつとお願いしたことを、美奈子さんの前で、貴女にはお子さんかも知れないが、僕には他人です、その方の前で、恥しめるのです。拒絶ではなくして、侮辱です。僕は生れてから、こんな辱しめを受けたことはありません。」

青年は、血を吐くように叫んだ。青年の言葉は、恨みと忿のために狂い始めていた。

「貴女は、妖婦です、僕は敢て、そう申上げるのです。貴女を、貴婦人だと思って、近づいたのは、僕の誤りでした。僕に、下さった貴女の愛の言葉を、貴女の真実だと思ったのが、僕の誤りでした。真実の愛を以て、貴女の真実な愛を購うことが出来ると思つたのは、僕の間違でした。奥さん！ 貴女は、あらゆる手段や甘言で、僕を誘惑して置きながら、

僕が堪らなくなつて、結婚を申し込むと、それを恐ろしい侮辱で、突き返したのです。此^{この}恨みは、屹^{きつと}度晴らしますから、覚えていて下さい。覚えていて下さい。」

青年は、狂つたように、瑠璃子を罵^{ののし}りつづけた。

瑠璃子は、青年の罵倒^{ばとう}を、冷然と聞き流していたが、青年の声^{こゑ}が、漸^{ようや}く絶えた頃に、やつと口を開いた。

「青木さん！ 貴君のように、そう怒るものじゃなくつてよ。妾の貴君に対する愛が、丸切り嘘^{うそ}だと云うのは、余りヒドいと思いますわ。妾が、貴君を愛していることは本当ですわ。たゞ、その愛は夫に対するような愛ではなくて、弟に対するような愛なのです。妾、昨日今日考えて、やつとそれが分つたのです。妾、貴君を弟に持ちたいと思うわ。が、貴君を夫にしようとは、夢にも思つたことはいわ。が、夫以外が一番親しいものとして、妾貴君に何時^{いつ}までも、何時までも、交際^{つきあ}つていたゞきたいと思うのよ。ねえ！ 美奈さん。貴女に妾の心持は分らない！」

瑠璃子は、意味ありげに、美奈子を顧みた。今まで少しも、分らなかつた今夜の瑠璃子の心持が、闇^{やみ}の中に、一条の光が生れたように、美奈子にもほの／＼と分つて来たように思えた。

五

美奈子には、母の心持が、朝霧の野に、日の昇るように、ようやく明かになって来た。

母は自分の心持をスツカリ気付いたのだ。青年に対する自分の心持をスツカリ知つて了^{しま}つたのだ。

母が、自分の面前で、何のにべもないように、青年を斥^{しりぞ}けたのも、みんな自分に対する義理なのだ。自分に対する母の好意なのだ。自分に対する母の心づくしなのだ。そう思うと、烈^{はげ}しい恥かしさを感じながら、母に対する感謝の心が、しみ／＼と、胸の底深くにじん で 出た。

母は、やっぱり自分を愛して呉れる、自分のためには、どんなことでも、しかねないのだ。そう思うと、美奈子は、母に対して昨日今日、少しでも慊^{あきた}らなく思ったことが、深く悔いられた。

母の心持は、もつと露骨になって来た。

「青木さん。貴君^{あなた}が、妾^{わたし}と結婚なさろうなんて、それは一時の迷いです。貴君のお若い心

の一時の出来心ウイムです。貴君には妾の心が少しも分っていないのです。いゝえ、妾の本体が少しも分っていないのです。妾の心が、どんなに荒すさんでいるかそれが貴君には、少しも分っていないのです。妾が、貴君を本当に愛しているかどうかさえ、貴君には分らないのです。そうく、ワイルドの警句に、『結婚の適当なる基礎は相方の誤解なり。』と云いう皮肉な言葉がありますが、貴君の妾に対する、結婚申込なんか、本当に貴君の誤解から出ているのです。」

青年には、瑠璃子の言葉などは、少しも耳に入っていないようだった。彼は、烈しい怒のために、口が利きけなくなつたように、たゞ身体を顫ふるわせている丈だった。

が、そんなことは少しも意に介せないように、瑠璃子は落着いた口調で、話しつゞけた。「貴君は、妾の心持が分らないばかりでなく、貴君に対する誰の心持も分っていないのです。貴君には、まだ、本当に人の心が分らないのです。真珠のような美しい——いゝえ、どんな宝石にも換えがたいような、美しい心を持った処女が、貴君に恋しても、貴君には、それが分らないのです。貴君はもつと足を地上に降して、しっかり物を見なければならな

いと思います。」

美奈子は、母の言葉を聴くと、地の中へでも消えてしまいたいような恥かしさと、母の

自分に対する真剣な心づくしに対する有難さとして、心の中が一杯になってしまった。

が、茲^{ここ}まで黙って聴いていた青年は、憤^{ふんぜん}然として、立ち上った。

「奥さん！ もう沢山です。貴女^{あなた}は、僕を散々恥しめて置きながら、此^この上何を仰^{おつ}しやろうと云うのです。男として、堪^たえられないような恥辱を僕に与えて置きながら、此上何を云おうと仰しやるのです。貴女に対する僕の要求は、全か無かです。弟に対する愛、そんな子供だましのようなお言葉で、いつまで僕を操^{あやつ}ろうとなさるのです。奥さん、僕はこれで失礼します。二度と貴女には、お目にかゝらない心算^{つもり}です。男性に対する貴女の態度が、何時^{いつ}まで天罰を受けずにいるか外^{よそ}ながら拝見しているつもりです。僕の貴女に対する恋、それは、僕に取っては初恋です。大切な懸命な初恋でした、凡^{すべ}てを犠牲にしてもいゝと思つた初恋です。が、それが……」

青年は、茲^{ここ}まで云うと、自分自身で、こみ上げて来る口惜しさに堪え切れなくなつたように、ハラ／＼と涙を落した。

「……それが貴女のために、ムザ／＼と蹂^ふみ躪^{にじ}られてしまったのだ。覚えていらつしやい！ 奥さん。」

彼は、自分の感情を抑え切れなくなつたように、こう叫んだ。

立っている華奢な長身が、いたましくわなわなと顫えて、男泣きの涙が、幾条となく地に落ちた。先刻から美奈子は、青年の容子を見ているのに、堪えないように、目を伏せていたが何と思つたのか此時ふと顔を上げた。

「お母様！」

彼女はかすれたような声で、初めて口を開いた。

六

「お母様！」

そう叫んだ美奈子の言葉には、思い切つた処女の真剣さが、籠っていた。

「お母様、あのう、もう一度、どうぞもう一度、ゆっくりお考え下さいませ。青木さんが何う仰しやつたのか知りませんが、もう一度考え直して下さいませ。妾、妾……」

美奈子は、もつと何か云いたそうだったが、烈しい興奮のために、胸が迫つたのだろう、そのまゝ口籠つてしまった。

去りかけようとした青年は、美奈子の言葉を聴くと、一寸ためらいながら、美奈子の

方を振り返った。

「美奈子さん。貴女あなたの御厚意は、大変有難うございます。が、もう凡てすべては終ったのです。僕の心は、蹂みふ躪にじられたのです。僕の心には、今悲みと怨みうらとがあるばかりです。さようなら、貴女には、いろ／＼失礼しました。」

そう云い捨てると、青年は弾はじかれたように、身体を翻ひるがえすと、緩い勾配こうばいの芝生の道を、一気に二十間ばかり、馳かけ降りると、その白い浴衣ゆかたを着た長身で、公園の闇やみを切る姿を見せていたが、直ぐ樹立こたちの蔭かげに見えなくなった。

美奈子は、淋しみとも悲しみとも、あきらめとも付かぬ心で、消えて行く青年の姿を追っていた。

瑠璃子も、一寸青年の後姿を見ていたようだったが、直ぐ思い返したように立ち上ると、美奈子の傍に寄つて来て、すれ／＼に腰をかけた。

「美奈子さん！ 駭おどろいて？」

軽く左の手を、美奈子の肩にかけながら、優しく訊きいた。

「はい。青木さんが、お気の毒でございますわ。」

美奈子は、消え入るような声で云った。彼女は暫くしばらく考えていたが、

「青木さんなんかよりも、妾美奈さんに済まないと思つていますの。どうぞ、堪忍かんにんして下さい。どうぞ。」

母の声には、深い本心が、アリ／＼と動いていた。美奈子でさえ、一度も聴いたことのないようなしんみりとした、心の底からにじみ出たような声だった。

「美奈さん。間違つていたら、御免なさい。妾、貴女のお心が分つたの。青木さんに対する貴女のお心が。」

そう、心の底を見抜かれると、美奈子は、サツと色を変えながら、うつ伏してしまった。「美奈さん、貴女は、一昨日の晩、妾と青木さんとが、話したことをすっかり、お聴きになつたのでしょう。いゝえ、貴女がお聴きになつたのではなく、貴女がいらしやるとは知らずに、妾達がいろ／＼なことを話しましたでしょう。妾、あの晩部屋へ帰ろうとして、外出なさろうとする貴女のお顔を見たときに、もう凡てすべてが分つたような気がしたのです。絶望その物のような貴女のお顔を見て、妾は、凡てが分つたような気がしたのです。妾は、それまでもしやと思つたことが、一二度あつたのです。そのもしやが、本当だと云うことが分ると、妾は、大変なことが起つたと思つたのです。妾の犯おかした失策が、取り返しつかないものだと言ふことを知つたのです。」

母の言葉が、ますく真剣な悲痛な響を帯びて来た。

美奈子は、俎^{そじょう}上に上ったような心持で、母の言葉をじっと聴いている外はなかった。恥かしさと悲しさで、裂けるような胸を持ちながら。

「妾、今度のことで、妾の生活が全然破産したことを知ったのです。男性に向って吐いた唾^{つばき}が、自分に飛び返って来たことを知ったのです。どうか、美奈さん。妾の懺悔^{ざんげ}を聴いて下さい。」

快活な、泣き言などは、ちつとも云ったことのない母の声が、悲しみに湿^{うる}んでいた。

七

「青木さんなんかに、妾^{わたし}初めから、何の興味も持っていなかったのです。青木さんを箱根へ連れて来たのなども、妾のホンの意地からなのです。ある別な男の方に対する妾の意地からなのです。ある男の方が、妾に、青木さん丈^{だけ}は、誘惑して呉^くれては困ると言ったよな、おせっかいなことを言ったものですから、妾はつい反抗的に、意地であの方を箱根へ連れて来たくなつたのです。外^{よそ}ながら、そのおせっかいな人に思い知らせて、やりたく

なつたのです。美奈子さん、それが妾の性分なのです。今までの妾の生活、貴女のお家へ来たことなども、みんな妾のそう云った性分が、妾を動かしたのです。」

母は何時になく、しんみりとした沈んだ調子になっていた。短い沈黙の後で、母は再び口を開いた。

「それは、自分でも何うともすることが出来ない性分です。誰かから抑えられると、その二倍も三倍もの烈しさで、跳返したいような気になるのです。それが、妾の性格の致命的な欠陥かも知れません。妾は自分のそうした性分のために、自分の一生を犠牲にしたのではないかとさえ、此頃考えているのです。」

母は、こう言つて悵然としたが、また直ぐ言葉を続けた。

「子供が、触つてはいけないと言われた草花に、却つて触りたくなるような心持で、青木さんを、わざと箱根へ連れて来たのです。あの人に何の興味があつたと云う訳でもないのです、おせっかいなことを言つた人に対する意地で、ついそんなことをしてしまつたのです。それから、恐ろしい罰を受けようとは夢にも知らなかつたのです。」

母の言葉は、沈み切つていた。強い悔が、彼女の心を苛んでいることを示していた。

「妾の想像が違つたら、御免下さい。貴女の清浄な純な心に映つた男性を妾が奪うと

云う恐ろしいことをしていたのです。美奈さん！許して下さい。美奈さん。」

涙などは、今まで一度も流したことのない母の聲が、うる湿んでいた。

「貴女に対して、何とお詫びしていゝか分らないのです。貴女の心に萌おもんだ美しい想おもの芽を妾が蹂躪じゆうりんしていようとは、妾が！貴女を何物よりも愛している妾が。」

瑠璃子の眼に、始めて涙が光った。

「取り返しの付かない、恐ろしいことです。妾が、たゞホンの悪戯いたずらのために、ホンの意地の為めに、宝石にも換えがたい貴女の純な感情を蹂躪ふ躪にじつていようとは、思い出す丈でも、妾の心は張り裂けるようです。美奈さん！許して下さい。どうぞ、妾の罪を許して下さい！」

瑠璃子は苛責かしゃくに堪たえないように、面を伏せて終った。

「まあ！お母様、何を仰おつしやるのです。許して呉れなんて、妾、何も……」

美奈子は、烈しい恥しさに堪えながら、母を慰めようとした。

「こんなことは、許しを願えるようなものではないかも知れません。本当に、許しがたいことです。『許イントレランスし難いこと』です。貴女が許して下さいても、妾の心は何時までも、何時までも苦しむのです。妾が、世の中で一番愛している貴女に、恐ろしい不幸を浴びせてい

ようとは恐ろしいことです。恐ろしいことです。」

冷静な母の態度も、心の烈しい其の苛責の為めに、だん／＼乱れて行つた。

美奈子は、最初自分の心を母からマザ／＼と指摘された恥しきで、動乱していたが、それが静まるに連れて、母の自分に対する愛、誠意にだん／＼動かされ初めた。

八

「妾が、男性に対する意地と反感とでしたことが、男性を傷けないで、却つて女性、しかも妾には、一番親しい、一番愛している貴女を傷けようとは、夢にも思わなかつたのです。何と云う皮肉でしょう。何と云う恐ろしい皮肉でしょう。」

母の心の悶えは、益々烈しくなつて行くようだった。

「妾の生活が、破産する日が、到頭来たのです。妾の生活の罰が、妾の最も愛する貴女の上に振りかかつて来ようとは。」

瑠璃子の声はかすかに顫えていた。

「妾は、今までどんな人から、どんなに妾の生活を非難されても、ビクともしなかつたの

です。妾の生活態度のために、犠牲者が出ようともしなかったのです。妾は、孔雀くじやくのように勝ち誇すべっていたのです。凡すべての男性を蹂ふみ躪にじっていたのです。が、男性ばかりを蹂ふみ躪にじっているつもりで、得意になっていると、その男性に交まじって、女性！ しかも妾には一番親しい女性を蹂ふみ躪にじっていたのです。」

瑠璃子は、そう云い切ると、じつと面を垂れたまゝ黙もくってしまった。

美奈子は、母の真剣な言葉に依よつて、胸をヒタ／＼と打たれるように思った。母が、自分のために何物をも犠牲にしようと云う心持、自分を傷きずけたために、母が感じている苦悶くもん、そうしたものが美奈子に、ヒシ／＼と感ぜられた、自分をこれほど迄まで、愛あいして呉くれる母には、自分も凡てを犠牲にしてもい／＼と思おもった。

「お母様！ もう何も、仰おつしやつて下さいますな、妾、青木さんのことなんか、ほんとうに何でもないのでございます。」

美奈子は、白い頬を夜目よめにも、分るほど真赤にしながら、恥かしげにそう云った。

「いゝえ！ 何でもないことはありません。処女の初恋は、もう二度とは得うがたい宝玉です。初恋を破られた処女は、人生の半なかばを蹂ふみ潰つぶされたのです。美奈さん、妾にはその覚えがあります。その覚えがあります。」

そう云つたかと思うと、あれほど気丈な凛々しい瑠璃子も、顔に袖を掩うたまゝ、しばらく咽び入ってしまった。

「妾には、その覚えがありますから、貴女のお心が分るのです。身に比べてしみ／＼と分るのです。」

母にそう云われると、今まで抑えていた美奈子の悲しみは、堤をきられた水のように、彼女の身体を浸した。彼女の烈しいすゝり泣きが、瑠璃子の低いそれを圧してしまった。

瑠璃子までが、昔の彼女に帰つたように、二人はいつまでも泣いていた。が、先に涙を拭つたのは、美奈子だった。

「お母様！ 貴女は、決して妾にお詫をなさるには、当りませんわ。本当に悪いのは、お母様ではありません。妾の父です。お母様の初恋を蹂躪した父の罪が、妾に報いて来たのです。父の犯した罪が子の妾に報いて来たのです。お母様の故では決してありませんわ。」そう云いながら、美奈子はしく／＼と泣きつけていたが、「が、妾今晚、お母様の妾に対するお心を知つてつく／＼」思つたのです。お母様さえ、それほど妾を愛して下されば、世の中の凡ての人を失つても妾は淋しくありませんわ。」

そう云いながら、美奈子は母に対する本当の愛で燃えながら、母の傍にすり寄つた。瑠

璃子は、彼女の柔いふつくりとした撫肩なでかたを、白い手で抱きながら云った。

「本当にそう思つて下さるの。美奈さん！ 妾もそうなのよ。美奈さんさえ、妾を愛して下されば、世の中の凡ての人を敵にしても、妾は寂しくないのです。」

二人は淨い愛きよの火に焼かれながら、夏の夜の宵闇よいやみに、その白い頬と白い頬とを触れ合せた。

火を煽あおる者

一

青年の身体は、燃えた。

烈はげしい憤怒ふんぬと恨みとのために、火の如く燃え狂った。

彼は、その燃え狂う身体を、何物かに打ち突きたいような気持で走った。闇やみの中を、滅茶苦茶ちやくちやに走った。闇の中を、礫つぶてのように走った。滅茶苦茶に、走りでもする外、彼の嵐あらし

のような心を抑える方法は何もなかった。樹^きにでも、石にでも、当れば当れ、川にでも溪^{たに}にでも陥^{おち}らば陥れ、彼はそうした必死的^{デスベレエト}な気持で、獣のように風のように、たゞ走りに走った。

強羅^{げいろうら}の電車停留場まで、一気に馳^かけ降りたけれども、其処^{そこ}には電車の影は、なかった。彼は、そこに二三分間待ったが、心の底から沸^{ふつ}々と湧^わき上っている感情の嵐は、彼を一分もじつとさせていなかった。電車を待つているような心の落着は、少しもなかった。彼は、宮の下まで、走りつゞけようと決心した。そう決心すると、前よりは、もっと烈しい勢で、別荘が両方に立ち並んだ道を、一散に馳^かけ始めた。

初め馳^かけている間、彼の頭には、何もなかった。たゞ、彼をあんなに恥しめた瑠璃子^{るりこ}の顔が、彼の頭の中で、大きくなったり、小さくなったり、幾つにも分れて、巴^{ともえ}のように渦巻いたりした。

が、だん／＼走りつゞけて、早川の岸に出たときには、彼の身体が、疲れるのと一緒に、疲労^{ひろう}から来る落着が、彼の狂いかけていた頭を、だん／＼冷静にしていた。

彼の走る速力が緩むのと同時に、彼の頭は、だん／＼いろいろな事を考え始めていた。

彼が、死んだ兄と一緒に、莊田^{しょうだ}の家へ、出入し初めた頃のことなどが、ぼんやりと頭

の中に浮んで来た。

莊田夫人の美しい端麗な容貌や、その澹刺として華やかな動作や、その秀れた教養や趣味に、兄も自分も、若い心を、引き寄せられて行つた頃の思い出が、後から／＼頭の中に浮んで来た。

夫人が、多くの男性の友達の中から、特に自分達兄弟を愛して呉れたこと、従つて自分達も、頻りに夫人の愛を求めたこと、その中に、兄が夫人に熱狂してしまったこと、兄が夫人の愛を独占しようとしたこと、自分が兄に対して軽い嫉妬を感じたこと、そうしたことが、とりとめもなく、彼の頭の中に浮んだ。

實際、自分の兄が、夫人に対して、熱愛を懷いていることを知ったとき、彼は兄に対する遠慮から心ならずも、夫人に対する愛を抑えていた。

突然な兄の死は、彼を悲しませた。が、それと同時に、彼の心の裡の兄に対する遠慮を取り去つた。彼は、兄に対する遠慮から、抑えていた心を、自由に夫人に向つて放つた。

夫人は、それを待ち受けていたように、手をさし延べて呉れた。兄の偶然な死は、夫人と彼とを忽ち接近せしめてしまった。

彼は、夫人から、蜜のような甘い言葉を、幾度となく聴いた。彼は、夫人が自分を愛し

ていて呉れることを、疑う余地は、少しもなかった。

彼は直截ちよくさいに夫人に結婚を求めた。

「妾わたしも、ぜひそうしていただきたいのよ。でも、もう少し考えさせて下さいよ。貴君あなた、箱根へ一緒に行つて下さらない。妾、此この夏は、箱根で暮そうと思つていますのよ。箱根へ行つてから、ゆつくり考えてお答えしますわ。」

夫人は、美しい微笑でそう云いつた。

箱根へ同行を誘つて呉れる！ それは、もう九分までの承諾しょうだくであると彼は思つた。箱根に於おける避暑生活は、彼に取つて地上の極楽である筈はずであつた。

思いきや、其処に地獄の口が開かれていようとは。

「裏切者め！」

青年は、走りながら、思わず右の手のステッキを握りしめた。

二

ホテルの門に辿り着いたときにも、長い道を馳かけ続けたために、身体こそやゝ疲れてい

たものの、彼の憤怒は少しも緩んではいなかった。部屋へ飛び込めば、直ぐ鞆の中へ、凡てのものを投げ込むのだ。もう、こんな土地には一分だつていたくない。彼女が、帰つて来ない裡に、一刻も早く去つてしまふのだ。

彼は心の裡で、そうした決心を堅めながら、烈しい勢で、玄関へ駈け上つた。其処に立つていたボーイが、彼の面色を見ると、駭いて目を睥つた。それも、無理はなかった。彼の眼は血走り、色は蒼ざめ、広い白い額に、一条の殺氣が迸つて、温和な上品な平素の彼とは、別人のような、血相を示していたからである。が、ボーイが、駭こうが駭くまいが、そんなことはどうでもよかった。彼は駭いたボーイを尻目にかけてながら、廊下を走るように駆け過ぎて、廊下の端にある二階への階段を、烈しく駆け上ろうとしたときだった。彼は余りに急いだため、余りに夢中であつたため、丁度その時、上から降りようとした人に、烈しく打つ衝突してしまった。

余りに強く衝き当たつたため、彼の疲れていた身体は、ひよろ／＼として、二三段よろけ落ちた。

「いやあ。失礼！」

相手の人は、駭いて彼を支えた。が、衝突の責任は、無論此方にあつた。

「いゝえ。僕こそ。」

彼は、そう答えると、軽く会釈えしやくしたまゝで、相手の顔も、碌々ろくろく見ないで、そのまゝ階段を駆け上った。

が、彼が六七段も、駆け上ったときだった。まだ立ち止まって、じつと彼の後姿を見ていた相手の男が、急に声をかけた。

「青木君！ 青木君じゃありませんか。」

不意に、自分の名を呼ばれて、青年は駭いた。彼は、思わず階段の中途に、立ち竦すくんでしまった。

「えゝっ！」

青年は、返事とも驚きとも分らないような声を出した。

「間違っていたら御免下さい！ 貴君あなたは、青木君じゃありませんか。あの、青木淳君じゆんの弟さんの。」

相手は、階段の下から、上を見上げながら、落着いた声でそう訊きいた。青年は、やゝほの暗い電燈の光で、振り上げた相手の顔を見た。意外にも、それは先刻散歩へ出るときに、玄関で逢あった、彼の見知らない紳士であった。彼は、どうして此の男が、自分の名前を知

つているのだろうか、不審に思いながら答えた。

「そうです。青木です。ですが、貴君は……」

青年は、一寸^{ちよつと}相手が、無作法に呼び止めたことを咎^{とが}めるように訊き返した。

「いや、御存じないのは、尤^{もつと}です。」

そう云いながら、紳士は階段を二三段上りながら、青年に近づいた。

「お兄さんの知人と云つても、ホンのお知合になつたと云う丈けに過ぎないのですが、然^{しか}しその……」

紳士は、一寸云い^{よど}澱んだ。青年は、自分がいらくし切つているときに、何の差^{せま}し迫つた用もなさそうな人から、たゞ兄の知人であると云つた理由丈で、呼び止められるのに堪^たえなかつた。

「そうですか。それでは、又いづれ、ゆつくりとお話しましょう。一寸只^{ただいま}今は、急いでいますから。」

そう云い捨てると、青年は振り切るように、残つた階段を馳け上ろうとした。すると、紳士は意外にも、しつこく青年を呼び止めた。

「あゝ一寸お待ち下さい。私も急に、貴君にお話したいことがあるのです。」

三

「急に話したいことがある。」未知の男からしつこく云いわれると、青年はむっとした。何と云う執しつ拗ような男だろう。何と云う無礼な男だろうと腹立たしかった。

「いや、どんな急なお話かも知れませんが、僕はこうしてはいられないのです。」

青年は、そう云い切ると、相手を振り払うように、階段を馳かけ上ろうとした。が、相手はまだ諦あきらめなかった。

「青木君！ 一寸ちよつとお待ちなさい。貴君あなたは、お兄さんからの言伝ことづてを聴こうとは思わないですか。そうです、貴君に対する言伝です。特に、現在の貴君に対する言伝です。」

そう云われると、青年は遺さすに足を止めずにはいられなかった。

「言伝！ 死んだ兄から、そんな馬鹿ばかな話があるものですか。」

青年は嘲あざけるように、云い放った。

「いや、あるのです。それがあるのです。私は、貴君のお顔の色を見ると、それを云わずにはいられなかったのです。貴君は、今可なり危険な深淵しんえんの前に立っている。私は貴君

がムザ／＼その中へ陥^{おちい}るのを見るに忍びないのです。お兄さんに対する私の義務として、どうしても一言だけ、注意をせずにはいられないのです。」

そう云いながら、相手は青年と同じ階段のところまで上つて来た。

「危険な深淵！　そうです。貴君のお兄さんが、誤つて陥^おつた深淵へ貴君までが、同じように陥^おちようとしているのです。」

青年は、改めて相手の顔を見直した。相手が可なり真面目^{まじめ}で、自分に対して好意を持つていて呉^くれることが、直^すぐ分つた。が、相手が妙に、意味ありげな云い廻しをすることが、彼のいら／＼している神経を、更にいら立たせた。

「それが一体何^どう云うことなのです。僕には少しも分りませんが。」

青年は、腹立たしげに、相手を叱^{しつ}するように云つた。

「それでは、もっと具体的に云いましょう。青木君！　貴君は、一日も早く、莊田^{しょうだ}夫人から遠ざかる必要があるのです。そうです。一日も早くです。あの夫人は、貴君の身体を呑んでしまう恐ろしい深淵です。貴君のお兄さんは、それに吞まれてしまったのです。」

紳士は、そう云つて、じつと青年の顔を見詰めた。

「貴君は、兄さんの誤を再び繰り返してはなりません。これは、私の忠告ではありません、

死んだ兄さんのお言伝です。よくお心に止めて置いて下さい！」

そう云うかと思うと、紳士は一寸青年に会釈したまゝ、階段をスタ／＼と降りかけた、もう云う丈けのことは、スツカリ云つてしまつたと云う風に。

今度は、青年の方が、狼狽して呼び止めた。

「待つて下さい！ 待つて下さい！ そんなことを本当に兄が云つたのですか。」

紳士は顔丈けを振り向けた。

「文字通に、そう云われたとは云いません。が、それと同じことを私に云われたのです。」

「何時！ 何処で？」

青年は、可なり焦つて訊いた。

「お兄さんが死なれる直ぐ前です。」

そう云つて、紳士は淋しい微笑を洩した。

「死ぬ直ぐ前？ それでは貴君は、兄の臨終に居合したと云うのですか。」

青年は、可なり緊張して訊いた。

「そうです。貴君のお兄さんの臨終に居合したたつた一人の人間は私です。お兄さんの遺言を聴いたたつた一人の人間も私です。」

紳士は落着いて、静に答えた。

「えゝっ！ 兄の遺言を。一体兄は何と云ったのです。何と云ったのです。その遺言を貴君が、今まで遺族の者に、隠しているなんて！」

青年は、相手を詰問するように云った。

「いや、決して隠してはいません。現在貴君に、その遺言を伝えているじゃありませんか。」

四

紳士の言葉は、もう青年の心の底まで、喰い入ってしまった。

「本当に、貴君は兄の臨終に居合したのですか。それで、兄は何と云いました。兄は死しにぎ際わに何と云いました？」

青年は、昂奮こうふんし焦あせった。

「いや、それに就いて、貴君にゆっくりお話したいと思っていたのです。茲ここじゃ、どうもお話しにくいですが、いかゞです僕の部屋へ。」

紳士は可なり落着いていた。

「貴君さえお差支えなければ。」

「じゃ、僕の部屋へ来て下さい。丁度妻は、湯に入っていますので誰もいませんから。」

紳士の部屋は、階段を上ってから、左へ二番目の部屋だった。

紳士は、青年を自分の部屋に導くと、彼に椅子を勧めて、自分も青年と二尺と隔らずに
相對して腰を降した。

「申し遅れました。僕は渥美と云うものですが。」

そう云つて紳士は、改めて挨拶した。

「いや、実は避暑に出る前に、貴君に一度是非お目にかゝりたいと思つていたのです。貴君にお目にかけたいもの、貴君に申上げたいこともあつたのです。それで、それとなく貴君のお宅へ電話をかけて、貴君の在否を探つて見ると、意外にも宮の下へ来ていられると云うのです。それで、実は私は小涌谷の方へ行くつもりであつたのですが、貴君にお目にかかれはしないかと云う希望があつたものですから、二三日、此処へ宿つて見る氣になつたのです。それが、意外にもホテルの玄関で貴君にお目にかゝろうとは、貴君ばかりでなく莊田夫人にお目にかゝろうとは。」

紳士は一寸意味ありげな微笑を洩しながら、

「実は、お兄さんが遭難されたとき、同乗していたと云う一人の旅客は私なのです。」

「えゝっ！」

思わず、青年は、駭きの目を睥つた。

「お兄さんの死は、形は奇禍のようですが、心持は自殺です。私は、そう断言したいのです。お兄さんは、死場所を求めて、三保から豆相の間を彷徨っていたのです。奇禍が偶然にお兄さんの自殺を早めたのです。」

紳士の表情は、可なり嚴肅であつた。彼が、いゝ加減なことを云っているとは、どうしても思われなかつた。

「自殺！ 兄はそんな意志があつたのですか。」

青年は駭きながら訊いた。

「ありましたとも。それは、貴君にも直ぐ判りますが。」

「自殺！ 自殺の意志。もしあつたとすれば、それは何のための自殺でしょう。」

「ある婦人のために、弄ばれたのです。」

紳士は苦々しげに云つた。

「婦人のために、弄ばれる。」

そう繰り返した青年の顔は、見る／＼色を変えた。彼は、心の中で、ある恐ろしい事実
にハツと思い当つたのである。

「それは本当でしょうか。貴君は、それを断言する証拠がありますか。」

青年の眼は、興奮のために爛々らんらんと輝いた。

「ありますとも。お兄さんの遺言と云うのも、お兄さんを弄んだ婦人に対して、お兄さん
の恨みを伝えて呉れと云うことだったのです。」

「うゝむ！」

青年は、低く呻うなるように答えた。

「実は、私はその恨みを伝えようとしたのです。が、その婦人は、恨を物の見事に跳ねつ
けてしまったのです。そればかりでなく、死んだお兄さんを辱はづかしめるようなことまでも云つ
たのです。その婦人はお兄さんを弄んで、間接に殺しながら、その責任までも逃れようと
しているのです。青木さんが、自殺の決心をしたとしても、それは私の故せいではありません、
あの方の弱い性格の故せいだと、その婦人は云っているのです。そればかりではありません……
…」

紳士も、自分自身の言葉に可なり興奮してしまった。

五

紳士は興奮して叫び続けた。

「そればかりではありません。青木君を弄んで間接に殺しながらまだそれにも懲りないで、青木君の弟である……」

「あゝもう沢山です。」青年は、相手に縫^{すが}り付くような手付をして云^いった。「判^{わか}りました、よく判りました。が、証拠がありますか？ 兄が弄ばれて、自殺を決心したと云う証拠がありますか？」

青年の眸^{ひとみ}は必死の色を浮べていた。

「ありますとも。お見せしましょう。が、そう興奮しないで、ゆっくり気を落着けて下さい。」

そう云いながら、紳士は椅子^{いす}を離れると、部屋の片隅に置いてある大きな鞆^{トラנק}に近づいて、それを開きながら、中から一冊のノートを取り出した。

「これです。此の筆蹟には覚えがあるでしょう。」

そう云いながら、相手はノートを、籐の卓子の上に置いた。青年は、焼き付くような眼で、それをじつと見詰めた。表紙の青木淳と云う字が、いかにも懐しい兄の筆蹟だった。

「じゃ、拝見します。」

彼はかすかに、顫える手付で、そのノートを取り上げた。

恐ろしい沈黙が部屋の中に在った。ノートの頁のめくられる音が、時々気味悪くその沈黙を破った。

二分三分、青年は、だまって読みつづけた。その中に、青年の腰かけている椅子が、かすかな音を立て初めた。見ると、青年の身体が、怒のために激しく顫えていたのである。

「何うです！　これほど、確な証拠はないでしょう。遭難当時のお兄さんの心持が、ハッキリ解っているでしょう。途中で、奇禍に逢われなかったら、お兄さんは屹度、熱海かどこかで、自殺をしておられる筈です。」

紳士は、ノートを覗き込むようにしながら云った。

青年の顔は、恐ろしい感情の激発のために、紫色にふくらんでいた。

紳士は、青年の感情をもっと狂わすように云った。

「其処に白金の時計のことが、書いてあるでしょう。お兄さんは、死なれる間際に、その時計を返して呉れと云われたのです。偶然にも、その時計は、その偽りの贈物は、お兄さんの血で、真赤に染められていたのです。衝突のときに、硝子が壊れたと見え、血が時計の胴に浸んでいたのです。」

「それを何うしました。それを何うしました。」

青年は、激情のために、半狂つていた。

「無論、それを返したのです。私は、お兄さんの心持を酌んで、それを叩き返してやろうと思つたのです。それを返しながら、お兄さんの怨みを、知らせてやろうと思つたのです。ところが、残念にも、私はそれを、手もなく捲き上げられてしまったのです。あの方は、妖婦です。僕達には、とても真面に太刀打は出来ない人です。」

「妖婦！ 妖婦！」

青年は狂つたように、口走つた。

「いや、その点で私はお兄さんの、委託に背いてしまったのです。取返しの付かないことをしてしまつたのです。が、その代り、私は貴君を何うかして、救いたいと思つたのです。お兄さんに対する僕の責任として、貴君が同じ過ちを犯すのを、何うかして救いたいと思

ったのです。私は、そのために、あの方に頼んだのです。青木君に対する貴女あなたの後悔として、青木君の弟丈は弄わんで呉れるな。弟さん丈は何うか、誘惑して呉れるな。私は、そう云つて事を別わけて頼んだのです。それなのに、彼女はそれを冷然と跳付けたのです。いや、跳付けたばかりではありません。私のそうした依頼あざけを嘲あざけるように、いやそれに対する意地のように、わざと貴君と一緒に連れて来ているのです。」

六

青年の面が、火のような激憤で、埋まるのを見ると、紳士はそれを宥なだめるように云いつた。「いや、貴君あなたが怒りになり、お駭おどろきになるのも尤もつともです。が、あゝした人には、近よらないのが万全の策です。貴君が怒つて先方あなにぶつかつて行くと、いよく相手の術策に陥つてしまうのです。あの方の張こつてゐる蜘蛛くもの網の中で手も足も出なくなつてしまうのです。たゞ、一刻も早く茲ここを去られるのが得策です。いや、茲ばかりではありません。夫人の周囲から、絶対に去られるのが得策です。触らぬ神に祟たたりなしと云う言葉があります。まして、相手は特別、恐ろしい女神ですから。はゝゝゝゝゝゝゝゝ。」

紳士は軽く笑った、話が、余り緊張して来たのを、わざと緩めようとして。

「然し、兎に角私としては、これでお兄さんに対する責任を少しは尽したように思うのです。そう云う意味で、貴君が僕の云うことを、よく聴いて下さったのを有難く思うのです。いや、私が一步遅かったら、貴君もどんな目に逢つて（あ）いるかも知れなかったのです。」

紳士は、自分の忠告が間に合つたことを、欣ぶ（よろこ）ような顔色を示した。が、彼の忠告は間に合つただろうか。いな、彼の忠告は、後の祭（ツレート）だった。一時間だけ、遅れ過ぎた。

彼の忠告は、災禍の火を未然に消す風とならずして、却つて（かえ）その火を煽（あお）り立てた。彼が、夫人の危険を説いたときに、青年はもう、夫人から弄（もてあそ）ばれていたのだ。否（いな）、弄（もてあそ）ばれたと思つていたのだ。夫人から、弄（もてあそ）ばれた恨（いきどお）り（い）と憤（いきどお）りに、燃えていた青年の心を、彼はいやが上に煽（あ）つた。

『お前ばかりではない、お前の肉親の兄も、あの女に弄（もてあそ）ばれて、身を過（あやま）つたのだ！ 身を亡（ほろ）ぼしたのだ！』と。

「いや！ 御忠告ありがとう！ 御忠告ありがとう！」

青年は、そう云いながら立ち上つた。が、あまり興奮（た）めた（め）た為（た）めだろう、彼は、眼（く）が眩（くら）んだように、よろめいた。

紳士は、周章^{あわて}で、青年の身体を支えた。

「いや、あまりに興奮なさつては困りますよ。お心を落着けて、気を静めて！」
が、青年はそれを振切った。

「いや、捨てゝ置いて下さい！ 大丈夫です、大丈夫です！」

そう云いながら、青年は廊下へよろめきながら出た。『大丈夫です！』と、口では云つたものの、彼はもう決して、大丈夫ではなかった。

彼の頭の中には、激情の嵐^{あらし}が吹き荒れた。怒と恨との洪水^{こうずい}が漲^{みなぎ}った。理性の燈火は、もうふツつりと消えてしまつていた。

「兄を弄んだ上に、この俺を！」

そう思うと、彼の全身の血は、怒のためにぐんぐと煮え返った。

「兄を弄んで間接に、殺して置きながら、まだ二月と経^たたない今、この俺を！ 箱根まで誘い出して、謂^いわれのない恥辱を与える！」

そう考えると、彼の頭の裡^{うち}は、燃えた。身体中^{からだじゅう}の筋肉が、異様に痙攣^{けいれん}した。

もう世の中の他の凡^{すべ}ては、彼の頭から消え去った。国家も社会も法律も、父も母も妹も、恐怖も羞恥^{しゆうち}も、愛も同情も。たゞ恐ろしい憎^{にく}み丈が残った。その憎みは、爆発薬のよう

な烈^{はげ}しさで、彼の胸の裡を縦横にのたうった。

そうした彼の心の裡に、焼き付いたように残っているのは、先刻^{さつき}読んだ兄の手記中の一節だった。

『そうだ、一層^{いっそう}死んでやろうかしら。純真な男性の感情を弄ぶことが、どんなに危険であるかを、彼女に思い知らせるために。』

が、兄が死んでも彼女は、少しも思い知ろうとはしなかった。兄の死を冷眼視するほど、彼女が厚顔無恥であるとしたならば、彼女を思い知らせるには、そうだ！ 彼女を思い知らせるには。

そう考えたとき、彼の全身の血は、海嘯^{つなみ}のように、彼の狂いかけた頭へ逆上して来た。

破裂点

強羅公園で、お互の心からなる淨い愛に、溶け合つた美奈子と瑠璃子とが、其処に一時間以上も費して、宮の下へ歸つて來たのは、夜の十時を廻つた頃だった。

二人とも、心の裡では、青年のことが氣になつていたけれども、それを口に出すことを避け合つた。

が、部屋へ入つたとき、瑠璃子は追に青年の寢室の扉に立ち寄つて、そつと容子を窺つた。

「もう、青木さんは寢たのかしら。」

そう云つて、彼女は扉に手をかけて見た。それは平素になく内部から、鍵が、かけられたと見え、ビクリとも動かなかつた。

「あゝ。もう、寢ていらつしやる！」

瑠璃子は、やつと安堵したように云つた。

美奈子と瑠璃子とが、同じ寢室に入つて、寢台の中に横わつたのは、もう十一時を廻つた頃だった。

電燈を消してからも、美奈子は母と暫らくの間、言葉を交えた。その裡に、十二時が鳴つた。彼女は、駭いて眠に入ろうとした。が、その夜の烈しい経験は、——彼女が生れて

以来初めて出会ったような複雑な、烈しい出来事は、彼女の神経を、極度に掻き擾していった。彼女が、いくら眠ろうとあせっても、意識は冴え返って、先刻の恐ろしい情景が、頭の中で幾度も幾度も、繰り返された。青年の凄^{すこ}いほど、緊張した顔が、彼女の頭の中を、^{ともえ}巴のように馳け廻った。

眠ろう眠ろうとあせればあせるほど、神経が益々^{ますます}いらだって来た。記憶が、異常に興奮して、自分の生い立ちや、母の死や父の死や、兄の事などが、頭の中に次ぎ次ぎに思い浮んで来た。

その裡に一時が鳴った。

瑠璃子も、寢台^{ベッド}の中で、暫らくの間は、眠り悩んでいたようだったが、その裡に、おだやかな^{いびき}鼾の聲が聞え初めた。

母が、眠に就いたのを知ると、美奈子は益々あせていた。口の中で、数を算^{かぞ}えて見たり、深呼吸をして気持を落ち着けようと試みたりした。が、それもこれも無駄だった。先刻聴いたばかりの青年の怨^{うら}みの聲が、落ち着こうとする美奈子の心の裡に、幾度も^{よみがえ}甦って来た。

その裡に、二時が鳴った。

烈しい興奮のために、頭脳あたまも眼も、疲れ切つていながら、それが妙にいらくして、眠は何うしても来なかつた。

その裡に、到頭三時が鳴つた。

追さに、彼女の意識は疲れてしまった。不快な、重くしい眠が、彼女のぐたぐたになつた頭脳むしはを蝕み始めていた。現うつともなく夢ともないような、いやな半睡半醒はんすいはんせいの状態が、暫らく続いた。彼女はとろとろとしたかと思うと、ハツと気が付いたり、気が付いたかと思うと、深い泥沼の中に、引きずり込まれるように、いやな眠りの中に、陥つて行つたりした。

彼女が、砂を噛むかような現と、胸ぐるしい悪夢との間に、さまよつていたときだつた。彼女は、何者かが自分を襲おそつて来るような、無気味な感じがした。寢室の扉が、かすかに動いているような感じがした。自分に襲いかゝっている人の足音を聴くような気がした。が、それが夢であるか現であるか確める気にもなれないほど、彼女の意識は混沌こんとんとしていた。

到頭、悪夢が、彼女を囚とらえてしまった。彼女は母と一緒に田舎路みちを歩いていた。それが、死んだ母のようでもあり、現在の母であるようにも思われた。ふと、地平の端に白い何物

かが現れた。それが矢のような勢いで、彼女達の方へ向つて来た。つい、目の前の小川を飛び越したとき、それが白い牝牛おうしであることが、判わかった。狼狽ろうばいしている美奈子達を目がけて激しい勢いで殺到した。美奈子は悲鳴を挙げながら、逃げた。牝牛は、逃げ遅れた母に迫った。美奈子が、アツと思う間もなく、牝牛の鉄のような角は、母の脇腹わきばらを抉えぐつていた。母の、恐ろしい呻り声うなが美奈子の魂を戦かしたが、母の呻き声うめを聴いた途端に、悪夢は断きれた。が、不思議に呻き声のみは、尚なほ続いていた。

二

悪夢の裡うちに聴いた呻き声を、美奈子は夢現ゆめうつの間に聞き続けていた。

「うゝむ！ うゝむ！」

腸はらわたを断つような呻き声が、段々彼女の耳の近くに聞え初めた。彼女の意識が、醒さめかゝるに連れてその呻き声は段々高くなつた。

「うゝむ！ うゝむ！」

彼女は、到頭寢台の上に醒めた。醒めたと同時に、彼女は冷水を浴びたような悪寒おかんを感じ

じた。

「うゝむ！ うゝむ！」

ひきしぼるような悲鳴は、彼女の身边からマザ／＼と起っているのであった。

「お母様！」

それは、悲鳴だった。

「お母様！ お母様！」

美奈子は、つゞけ様に、^{すが}継り付くような悲鳴を揚げた。

母の答はなかった。

低い、しぼり出るような悲鳴が、^{ものすご}物凄く闇の中に起っているだけだった。

「あ！ お母様！」

美奈子は、^{たま}堪らなくなつて、寝台から^{まろ}転び落ちた。

母の寝台は、二尺とは離れていなかった。彼女が、^{ふる}震える手を、寝台の一端にかけたと
き、生あたたかい液体が、彼女の手にはベツトリと、触れた。

「お母様！」彼女の声は、わな／＼と顫えていた。

彼女の手は、母の胸に触れた。母の^{きゃしゃ}華奢な肉体が、手の下でかすかにうごめいた。

「お母様！ お母様！ 何う遊ばしたのです。」彼女は、懸命の声を揚げた。
低い呻き声うめが、しばらく続いていた。

「お母様！ お母様！ 氣を確になさいませ。」美奈子は、狂ったように叫んだ。

母は、烈しい苦悩の下から、しぼり出すように答えた。

「燈火あかりを！ 燈火を！」

傷ける者、死なんとする者が、第一に求めるものは光明だった。

美奈子は立上つて電燈を探し求めた。狼狽あわてている故せいか、電燈がなか／＼手に触れなかつた。

が、ようやくスイッチを捻ひねつたとき、明るい光は、痛ましい光景を、マザ／＼と照し出した。母の白い寝衣ねまき、白いシャツ、白い毛布に、夜目には赤黒く見える血潮が、ベタ／＼と一面に浸にじんでいる。

「あつ！」

美奈子は、一眼見ると床の上に、よろめきながら打ち倒れた。が、母を氣遣う心が、直すぐ彼女を起たち上らせた。

「お母様！ しつかりなさいませ！」

彼女は、そう叫びながら、母に縋り付いた。致命の傷を負いながら、彼女は少しも取り乱した様子はなかった。右の脇腹わきばらの傷口を、両手でじっと押えながら、全身を掻きむしるほどの苦痛を、その利かぬ気で、その凜々りりしい気性で、じっと堪こらえているのだった。

彼女のかよわい肉体の血は、彼女が抑えている両手の間から、惜しげもなく流れ出しているのだった。

美奈子も一生懸命だった。自分の寝台のシーツを取ると、それを小さく引き裂いて、母の傷口を幾重にも幾重にもくゝった。

「お母様！ 氣を確になさいませ。直ぐ医者を呼びますから。」

彼女は、母の耳元に口を寄せて、必死に呼んだ。それが、耳に入っただろう、母は、かすかに頭を動かした。大理石のように、光沢のあつた白い頬は、蒼あおざめて、美しい眼は、にぶい光を放ち、眉まゆは釣り上がり、唇くちびるは刻一刻紫色に変わっていた。

美奈子が、寝室を出て、居間の方にある卓上の電話を取り上げたときだった。彼女は、青年の寝室の扉ドアが開かれて、其処そこに寝台むなが空しく横たわっているのを知った。

恐しい悲劇の実相が、彼女に判然と判わかった。

三

医者が来るまで、瑠璃子は恐ろしい苦痛に悶^{もだ}えていた。が、彼女はその苦痛を、じつと堪^{きや}えていた。華奢^{きゃしゃ}な身体に、致命の傷を負いながら、彼女は悲鳴一つ揚げなかった。たゞ抑え切れない苦痛を、低いうめき声に洩^{もら}しているだけであつた。

美奈子の方が、却^{かえ}つて逆上していた。彼女は、母の胸に縋^{すが}りながら、

「お母様！　しつかりして下さい。しつかりして下さい！」と、おろ／＼叫んでいるだけだつた。

その裡^{うち}に、瑠璃子は、ふと閉^ふじていた眼を開いた。そして、異様な光を帯び初^{ひと}めた眸^みで、じつと美奈子を見詰めた。

「お母様！　お母様！　しつかりして下さい！」

美奈子は、泣き声で叫んだ。

「美奈さん！」

瑠璃子は、身体に残っている力を、振りしぼつたような声を出した。

「わーたーし、わたし今度は、もう——駄目かも知れないわ。」

一語二語、腸はらわたから、しぼり出るような声だった。

「お母様！ そんなことを！ 大丈夫でございますわ、大丈夫でございますわ。」

「いゝえ！ わたし、覚悟していますの。美奈さんには、すみませんわね。」

そう云いった母の顔は、苦痛のために、ピク／＼と痙攣けいれんした。

美奈子は、わあっ！ と泣き出さずにはいられなかった。

「それで、わたし貴女あなたに、お願いがあるの。あの、電報を打つときに、神戸へも打っていったきたいの！」

瑠璃子は、恐ろしい苦痛に堪えながら、途切れ／＼に話しつづけた。

「神戸！ 神戸って、何方どなたにです？」

美奈子は、怪しみながら訊きいた。

「あの、あの。」瑠璃子は苦痛のために、云い澱よどんだようだったが、「あの、杉野直也なおやです。わたし、新聞で見たのです。月初に、ボルネオから帰って、神戸の南洋貿易会社にいる筈はずです。死ぬ前に一度逢あえればと思うのです。」

瑠璃子は、やっと喘あえぎながら云い終ると、精根が全く尽きたように、ガクリとくずおれてしまった。

二年の間、恋人のことを忘れてたように見せながらも、真は心の底深く思い続けているのであろう。恋人の消息を、外^{よそ}ながら、貪^{むさぼ}り求めていたのであろう。

医者^{いしや}が、来たのは夏の夜が、はや白々とあけ初める頃であつた。

一時間近くもかゝつたために、瑠璃子は、多量の出血のために、昏^{こんこん}々として人事不省の裡にあつた。

内科専門のまだ年若い医者^{いしや}は、覺^{おぼつか}束^{つか}ない手付で、瑠璃子の負傷を見た。

それは、可なり鋭い洋刀^{ナイフ}で、右の脇腹^{わきばら}を一突き突いたものだつた。傷口は小さかつたが、深さは三寸を越していた。

「重傷です。私は応急の手当をしますから、直ぐ東京から、専門の方をお呼び下さい。今のところ生命には、別条ないと思いますが、然^{しか}し最も余病を併発^{やす}し易い個所ですから、何とも申せません。」

医者^{いしや}の眉は、憂^{うれ}わしげに曇つた。

いたいけな美奈子には、背負い切れないような、大切な仕事を、彼女は烈^{はげ}しい悲嘆と驚きとの裡に処理せねばならなかつた。その中で、一番厭^{いや}だつたのは、医者^{いしや}が去るのと、入れ違いに入つて来た巡査との応答だつた。

「加害者は、逃げたのですか。」

美奈子は、何とも答えられなかった。

「その青木と云う学生と、貴女のお母様は何う云う御関係があつたのです。」

美奈子は、何とも答えられなかった。

「何か兇^{きようこう}行^{ぎやう}をするに就て、最近の動機ともなつたような事件がありましたでしょうか。」

美奈子は、何とも答えられなかった。たゞ、彼女自身、恐ろしい罪の審問^{しんもん}を受けているように、心が千々に苛^{さい}なまれた。

四

夜は明け放れた。今日も真夏の、明るい太陽が、箱根の山々を輝^き々として、照し初めた。が、人事不省^{うち}の裡に眠っている瑠璃子は、昏々^{こんこん}として覚めなかった。生と死の間の懸^{けん}崖^がに、彼女の細き命は一縷^{いちる}の糸に依^よつて懸^{けん}つていた。

その日の二時過ぐる頃、美奈子の打つた急電に依^よつて、予^{かね}て美奈子の傷を治療したこと

のある外科の泰斗^{たいと}近藤博士が、馳^かけ付けた。が、博士に依^よつて、あらゆる手当^{ほどこ}が施^ほされた後も、瑠璃子の意識は返^{かへ}つて来^こなかつた。

その前後から、烈^{はげ}しい高熱に襲^{おそ}われ初^{はじ}めた瑠璃子は、取りとめもない囈言^{うわごと}を云^いいつづけた。その囈言の中にも、美奈子は、母が直也と呼^よぶのを幾度となく聴^きいた。

夕暮になつて、瑠璃子の父の老男^{だんしゃく}爵^{きやく}が馳^かけ付けた。瑠璃子の近來の行状を快く思^{おも}つてはいなかつた男爵は、その娘と一年近くも会^あつていなかつた。が、死相を帯^おびながら、瀕死^{ひんし}の床に横^{よこ}わつてゐる瑠璃子を見ると、老いた男爵の眼からは、涙^{なみだ}が、濟然^{さんぜん}としてほ^おうり落^おちた。娘のこうした運命^{うんめい}が、九分までは自分の責任だと思^{おも}うと、娘の額^{ぬく}に手^てをやつた男爵の手は、わな／＼顫^{ふる}えずにはい^いなかつた。

美奈子は、母の兄なる光一にも、電報を打^うつたけれども、恐^{おそ}らく彼は東京を離^{はな}れていたのだらう、夜になつても姿を見^みせなかつた。

東京から急を聴^きいて馳^かけ付けた女中や、執事^{しつじ}などで、瑠璃子の床は賑^{にぎ}やかに取巻^とかれた。が、母を――肉親^{つな}は繋^{つな}がつていなくとも心の内では母とも姉とも思^{おも}う瑠璃子を、失^うおうとする美奈子の心細^こさは、時の経^たつと共に、段々^つ募^もつて行^いつた。

丁度夜の十時に近い頃^{ころ}だつた。母はやゝ安眠に入^いつたと見^みえ、囈言^{うわごと}が、暫^{しば}らく杜絶^{とだ}えて、

いやな静けさが、部屋の裡に、漂っていたときだった。廊下に面した扉^{ドア}を、低く、聞えるか聞えないかに、トン／＼と打つ音がした。女中が立ってそれを開いたが、直^すぐ美奈子の所へ歸つて来た。

「あの、お嬢さま。ホテルの支配人の方が、一寸^{ちよつと}お目にかゝりたいと申しております。」
美奈子は、立ち上つて扉の所へ行つた。

「どうか、一寸こちらへ。」

支配人は、美奈子に廊下へ出ることを求めた。美奈子が、一寸不安な気持ちに襲われながら、続いて廊下へ出ると、支配人は声をひそめた。

「お取込みの中を、大変恐れ入りますが、今箱根町から電話がかゝっているのです。実は蘆^{あし}の湖で今夕水死人の死体が上つたと云うのですが、それが二十三四の学生風の方で、舟の中に残して置いた数通の遺書で見ると、富士屋ホテルにて、青木、と書いてあったと云うのです。」

そこまで、聴いたとき、美奈子は自分の立っている廊下の床が、ズーツと陥^{おちこ}込むような感じがしたかと思うと、支配人が駭^{おどろ}いて彼女の右の肩口を捕えていた。

「あゝ危い！ しっかりして下さい！」

彼女は、最後の力で、自分のよろめく足を支えた。が、暫らくの間、天井と床とがグルグル廻るような気がした。

「いや、お駭かせしてすみません、たゞ青木さんの東京のお処^{ところ}だけが承りたかったのです。」

美奈子が、顫える声で、それに答えると、支配人は幾度も詫^わびながら、倉卒^{そうそつ}として去った。

もう、美奈子の弱い心は、人生の恐ろしさに、打ち砕かれてしまっていた。彼女が部屋へ帰って来たとき、彼女の顔色は、傷^{きず}いている瑠璃子のそれと少しも変っていないかった。が、丁度その時に、瑠璃子は長い昏睡^{こんすい}から覚めていた。美奈子の顔を見ると、彼女は懷^{なつか}しげな眸で物を云いたそうにした。

「お母様！ お気が付きましたか。」

少し明るい気持になりながら、美奈子は母の耳許^{みみもと}で叫んだ。

「あゝ、美奈さん。まだ？ まだ？」

五

消えかゝる灯ともしびのように、瑠璃子の命は、絶えんとして、又続いた。

翌日になつて、彼女の熱は段々下つて行つた。傷の痛みも、段々薄らいで行くようだった。が、衰弱が、いたましい衰弱が、彼女の凄せい艶えんな面に、刻一刻深く刻まれて行つた。彼女の枕頭ちんとうに、殆どほとん付き切つてゐる近藤博士の顔は、それにつれて、憂うれわしげに曇つて行つた。

「何どうでしょう、助かりましょうか。」

父の男だんしやく爵は、傍に誰もいないのを見計みはからつて、囁ささやくように訊きいた。

「希望はあります。けれど……」

そう答えたまゝ、博士の口は重く嚙つぐまれてしまった。

美奈子は、そうした問を発することが、恐ろしかった。彼女はたゞ、力一杯、心と身体との力一杯消え行こうとする母の魂に、縋すがり付いてゐる外はなかった。昨夜中、眠らなかつた美奈子の身体は綿のように疲れてゐた。が、彼女は誰が何と勧めても母の病床を去ろうとはしなかつた。

瑠璃子は、昏睡こんすいから覚める度に、美奈子の耳許近く、同一の問を繰返してゐた。が、

その人は容易に、来なかった。電報が運よく届いているかどうかさえ、判然しなかった。午後三時頃だった。瑠璃子は、その衰えた視力で、美奈子をじっと見詰めていたが、ふと気が付いたように云った。

「青木さんは？」

美奈子は愕然とした。彼女は、暫らくは返事が出来なかった。

「青木さんは？」

母は、繰り返した。美奈子は、顫える声で答えた。

「何処へ行かれたか分りませんの。あの晩からずっと分りませんの。」

が、瑠璃子は、美奈子の表情で凡てを悟つたらしかった。寂しい微笑らしい影が、その唇のほとりに浮んだ。

「美奈さん、本当を云つて下さい。妾覚悟していますから。どうせ助からないのですから。」

美奈子は、何とも口が利けなかった。

「自首したの？」

美奈子は、首を振った。瑠璃子の衰えた顔に、絶望的な色が動いた。

「じゃ、自殺？」

美奈子は、黙ってしまった。彼女の舌は、釘付け^{くぎづ}られたように動かなかった。

「そう！ 妾、そうだと思っていたの。でも今度丈は、妾悪意はなかったの。」

そう云いながら、瑠璃子は目を閉じた。美奈子に凡^{すべ}てが判^{わか}っていた。母は、美奈子に対する義理として、青年をあれほど、露骨^{しりぞ}に斥けたのだった。美奈子に対する彼女の真心が、彼女を、この恐ろしい結果に導いたのだと云つてもよかつた。そう思うと、美奈子は身も世もないような心持がした。

日暮に近づくに従つて、瑠璃子の容態は、險悪になった。熱が、反対にぐんぐん下つて行つた。呼吸が——それも何の力もない——愈々^{いよいよ}せわしくなつて行つた。

博士は、到頭今夜中が危険だと云うことを、宣言した。

瑠璃子に対して、死の判決文が読まれたときだった。ホテルの玄関に、横着^{よこづけ}になった一台の自動車があつた。それは昔の恋人の危急^{おどろ}に駭^{おどろ}いて、瀕死^{ひんし}の床を見舞うべく駈^かけ付けて来た直也だった。熱帯地に於^おける二年の奮闘は、彼の容貌^{ようぼう}をも変えていた。一個白面の貴公子であつた彼は、今や赭^{あかくろ}い男性的な顔色と、隆々たる筋肉を持っていた。見るからに、颯爽^{さつそう}たる風采^{ふうさい}と面魂^{つらだまし}とを持っていた。その昔ながらに美しい眸^{ひとみ}は、自信と希

望とに燃えていた。

六

直也が瑠璃子の部屋に入つて来たとき、瑠璃子は夢ともなく現うつともないように眠つていた。

生命そのもの、活動そのものと云つたような直也の姿と、死そのもの、衰弱そのものと云つたような瑠璃子の蒼あおざめた瀕死ひんしの姿とは、何と云う不思議な、しかしあわれな、対照をしただろう。青春の美しさと、希望とに輝きながら、肩をならべて歩いた二年前の恋人同士として、其処そこに何と云うおそろしい隔へだたりが出来たことだろう。

美奈子は、看護婦達を遠ざけた。そして、母の耳みみもと許に口を寄せて叫んだ。

「お母さま、あの、直也様がいらつしやいました。」

段々、衰えかけている瑠璃子の聴覚には、それが容易には聞えなかった。美奈子は再び叫んだ。

「お母さま、直也様がいらつしやいました。」

瑠璃子の土のように蒼い面の筋肉が、かすかに、動いたように思った。美奈子の声が漸く聞えたのである。美奈子は、三度目に力を籠めて叫んだ。

「お母様、直也様がいらつしやいました。」

ふと母の頬が、——二日の間に青白く萎びてしまった頬が、ほのかにはあるがうす赤く染まつて行つたかと思うと、その落窪んだ二つの眼から、大粒の涙がほろ／＼と、止めどもなく湧き出でた。と、今まで毅然として立っていた、直也の男性的な顔が、妙にひきつツたかと思うと、彼の赭い頬を、涙が、滂沱として流れ落ちた。

美奈子は、恋人同士に、二人限りの久し振りの、やがて最後になるかも知れない会見を与えようと思つた。

「お母様！ それでは、妾はお次ぎへ行つておりますから。」

そう云つて、美奈子は次ぎの部屋に去ろうとした。すると、意外にも瑠璃子は、瀕死の声を揚げて云つた。

「美奈さん！ あなたも——どうか／＼いて下さい。」

それは、かすかな、僅に唇を洩る／＼ような声だった。

「お母様、妾もいるのですか。妾もいるのですか。」美奈子は、再び訊いた。母は、肯い

た。いな肯くように、その重い頭を、動かそうとしたのだ。

やがて、瑠璃子は、その衰えはてた眸ひとみを持ち上げながら、何かを探るような眼付をした。「瑠璃さん！ 僕です、僕です。分りますか。杉野ですよ。」

直也も、激して来る感情に堪たえないように叫びながら、瑠璃子に掩おおいかぶさるように、その赭い顔を、瑠璃子の顔に触れるような近くへ持つて行った。

瀕死の眼にも恋人の顔が分つたのだろう、彼女の衰えた顔にも嬉うれしげな微笑の影が動いた。それは本当に影に過ぎなかった。微笑ほほえむ丈の力も、彼女にはもう残っていないかったのだ。

「直也さん！」

瑠璃子は、消えんとする命の最後の力を、ふりしぼつたのだろう、が、しかし、それはかすかな、うめくような声として、唇を洩れたのに過ぎなかった。

「何です？ 何です？」

直也は、瑠璃子の去らんとする魂に、縋すがり付くように云った。

「わ——た——し、あなたには何も云いませぬわ。たゞお願いがあるのです。」
それだけ続けるのが、彼女には精一杯だった。

「願いつて何ですか？」

「聴いてくれますか。」

「聴きますとも。」

直也は、心の底から叫んだ。

「あの——あの——美奈さんを、貴君^{あなた}にお頼みしたいのです。美奈さんは——美奈さんは

——みなし——みなし——みなしご……」

そこまで、云ったとき、彼女の張り詰めた氣力の糸が、ぶつりと切れたように、彼女はぐつたりとなつてしまった。

母が、直也を呼んだことが、彼女自身のためではなく、母が一番信賴する直也に、自分の将来を頼む^{ため}為であつたかと思うと、美奈子は母の真心に、その死よりも強き愛に、よゝとばかり、泣き伏してしまった。

その夜、瑠璃子の魂は、美しかりし彼女の肉体を永久に離れた。烈々たる炎の如き^{ごと}感情の動くまゝに、その短生を、火花の如く散らし去つた彼女の勝氣な魂は、恐らく何の悔^くをも懷^{いだ}くことなく、縹^{ひようびよう}渺として天外に飛び去つたことだろう。

七

母を失った美奈子の悲嘆は、限りもなかった。彼女は、世の中の凡てを失うとも、母さえ永らえて呉れ、ぼと、嘆き悲しんだ。

母の亡骸^{なきがら}が、棺に納められた後、彼女は涙の裡^{うち}に母の身邊のものを、片づけにかゝっていた。そして、最後に、母が刺されたその夜に、身に付けていた、白い肌襦袢^{はだじゅばん}に、手を触れなければならなかった。それには、所々血が滲^{にじ}んでいた。美奈子は、それに手を触れるのが恐ろしかった。が、母が身に付けたものを、他人の手にかけるのは、厭^{いや}だった。彼女は、恐るゝそれを手に取り上げた。そのときに、彼女はふとその襦袢の胴のところ、布類とは違った堅い手触りを感じた。彼女は駭^{おどろ}いて見直した。其処^{そこ}には何か紙片^{かみきれ}のようなものが、軽く裏側から別に布を掩^{おほ}うて、縫い付けられていた。彼女はそれを見ようか見まいかと思いまどった。母の秘密を、死後に暴^{あば}くことになりはしないかと恐れたが、彼女はそれが母の大切な遺書か、何かのようにも思われた。彼女は、思い切つて、おそるゝそれを取り出して見た。意外にも、それは台紙を剥^はがした一葉の写真だったのである。写真は、絶えず母の肌と触れていたために、薄れてはいたけれども、まぎれもなく直也^{ちや}が、

学生時代の姿だった。

美奈子は、その写真を見たときに、母の本当の心が判ったように思った。母が、黄金の力のために偽の結婚をしたときも、美しき妖婦として、群がる男性を翻弄していたときにも、彼女の心の底深く、初恋の男性に対する美しき操は、汚れなき真珠の如く燦然として輝いていたのであった。いな、彼女は初恋の人に対する心と肉体との操を守りながら、初恋を蹂み躪られた恨を、多くの男性に報いていたと云ってもよかった。

美奈子は、母に対する新しい感激の涙に咽びながら、隣室にいた直也を呼ぶと、黙ってその写真と肌襦袢とを示した。

暫らく、それを見詰めていた直也は、溢れ出ずる涙が、美奈子の手前一寸は支えていたが、到頭堪えきれなくなつたと見え、男泣きに泣き出してしまった。

*

*

*

青木稔と瑠璃子との死に就いて、都下の新聞紙は、その社会部面の過半を割いて、いろいろに書き立てた。が、そのどれもが、瑠璃子夫人を男の血を吸う、美しき吸血魔とすることに一致した。中には、夫人の死を、妖婦カルメンの死に比しているものもあった。夫人の華麗奔放、放縱不羈の生活を伝聞していた人々は、新聞の報道を少しも疑わなか

った。夫人の美しさを^{たた}頌えると同時に、夫人の態度を非難する嵐^{あらし}のような世評の中に在つて、夫人の本当の心、その本当の姿を知っているものは、美奈子と直也の外にはなかった。が、世の中の千万人から非難されようとも、彼女がこの世の中で愛した、たった二人の男性と女性とから、理解されていることは、大輪の^{ひばたん}緋牡丹の崩るゝ如く散り去つた彼女に取つて、さぞ本望であつただろう。

*

*

*

記憶のよい読者は、去年の二科会に展覽された『真珠夫人』と題した肖像画が、秋の季節^{シーズン}を通じての傑作として、美術批評家達の讃辞^{さんじ}を浴びたことを記憶しているだろう。

それは、清麗高雅、真珠の如き美貌^{びぼう}を持った若き夫人の立姿であつた。而も^{しか}、この肖像画の成功はその顔に巧みに現わされた自覚した近代的女性に特有な、理智^{りち}的な、精神的な、表情の輝きであると云われていた。その絵を親しく見た人は、画面の右の端に、**ス**と署名^{サイン}されているのに気が付いただろう。それは、妹の保護のもとに、芸術の道に精進していた唐沢光一が、妹の横死を悼^{いた}む涙の裡に完成した力作で、彼女に対する彼が、唯一^{ゆいいつ}の手向^{たむけ}であつたのであろう。

*

*

*

瑠璃子を失った美奈子の運命が、此先何うなつて行くか、それは未来のことであるから、此の小説の作者にも分らない。が、われ／＼は彼女を安心して、直也の手に委まかせて置いてもいゝだろうと思う。

青空文庫情報

底本：「真珠夫人（上）」新潮文庫、新潮社

2002（平成14）年8月1日発行

「真珠夫人（下）」新潮文庫、新潮社

2002（平成14）年8月1日発行

初出：「大阪毎日新聞」、「東京日々新聞」

1920（大正9年）6月9日～12月22日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「甲斐々々《かいがい》しく」と「甲斐甲斐《かいがい》しく」の混在は、底本通りです。

入力：kompass

校正：トレンドイースト、門田裕志、Juki

2014年5月14日作成

2016年9月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

真珠夫人

菊池寛

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>